THE CENTRAL REVIEW

中央公論

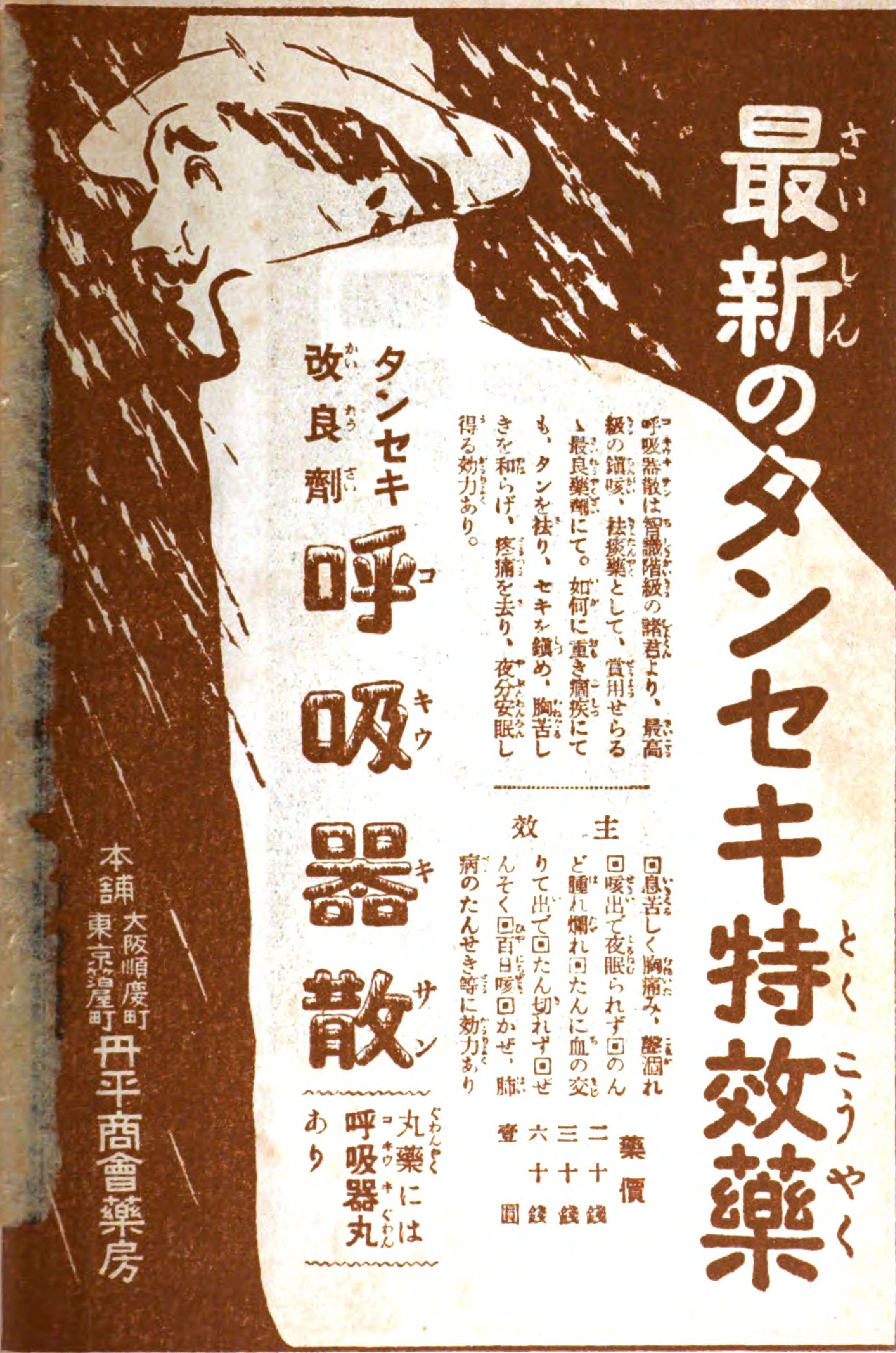
12-1921

十二月號

13 36

第三十六年 第十三號 第四百三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



独逸 ショーペンハウエル著
増富平藏譯
四版

處世哲學

偉大なる哲學者『人間を知れる者』としての著者が晩年に於ける深遠なる觀察と老熟の思想を擧げて人間處世の妙諦を說き、人生に於ける明暗、幸不幸、安危、得失等の根源を論じて一大秦鏡を懸くるが如く、眞に類書中の最傑である。

四六判總洋布製 紙數四百七十頁 定價貳圓八拾錢 郵稅十二錢

英國 ラスキン著

◇永久の歡び 三版 栗原古城譯 壹圓八拾錢 郵稅八錢

◇二ツの道 再版 小林一郎譯 貳圓參拾錢 郵稅十錢

◇塵の倫理 三版 小林一郎譯 貳圓四拾錢 郵稅十錢

◇胡麻と百合 三版 栗原古城譯 貳圓 郵稅十錢

◎原書一名「王者の寶庫」(讀書論)と「女王の花園」(婦人論)

◎死後は如何 メーテルリンク著 文學士 栗原古城譯 (十八版) 附錄「交靈術とは何ぞや」 壹圓九拾錢 郵稅十錢

◎靈智と運命 メーテルリンク著 文學士 栗原古城譯 (七版) 貳圓貳拾錢 郵稅十錢

◎死後の生存 ロッヂ博士著 高橋五郎譯 (六版) 附錄「靈怪實在論」 參圓 郵稅十二錢

新刊・大好評 再版・出來

安岡正篤著

支那思想及び人物講話

◎東洋精神の擧揚

令名ある新人が其卓拔なる識見を披瀝した名著で、內容と行文と相待つて如何に世の識者を動かしたかは既に諸新聞雜誌に於て定評がある

四六判總洋布製 紙數四百七十頁 定價貳圓六拾錢 郵稅十二錢

東京市本鄉區西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す

香水カスケット

冬に放せぬ化粧水はオイデルミン

おしろい下にはスムーシンクリーム

お顔の荒れにはコールドクリームとテスアリンカンフアアイス

白粉には練、水、粉の七色

お髪には昔ながらの花椿……

お遣物用には組合箱十數種の用意も出來ました

東京銀座　資生堂化粧品部

大阪市東區南久寶寺町四丁目支店



純品質主義

鷹印帽子

株式會社 高橋製帽所 大阪

衣服は飾り
ダイヤの徽章は
輝いても

矛盾紳士鷹印

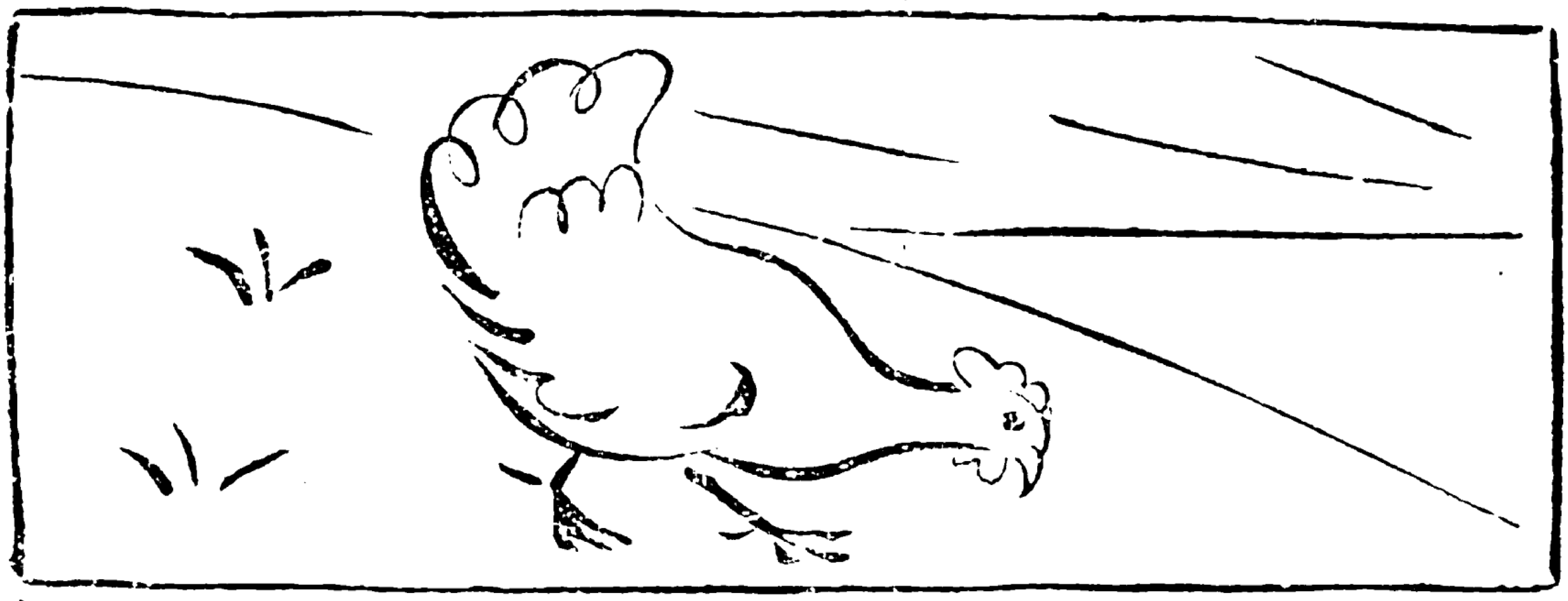
垢はにじみ型は崩れた見るからに不快と、その人の性格を窺はれる様な、不體裁な帽子を被つて居られるのは、何たる趣味の矛盾でありませう？

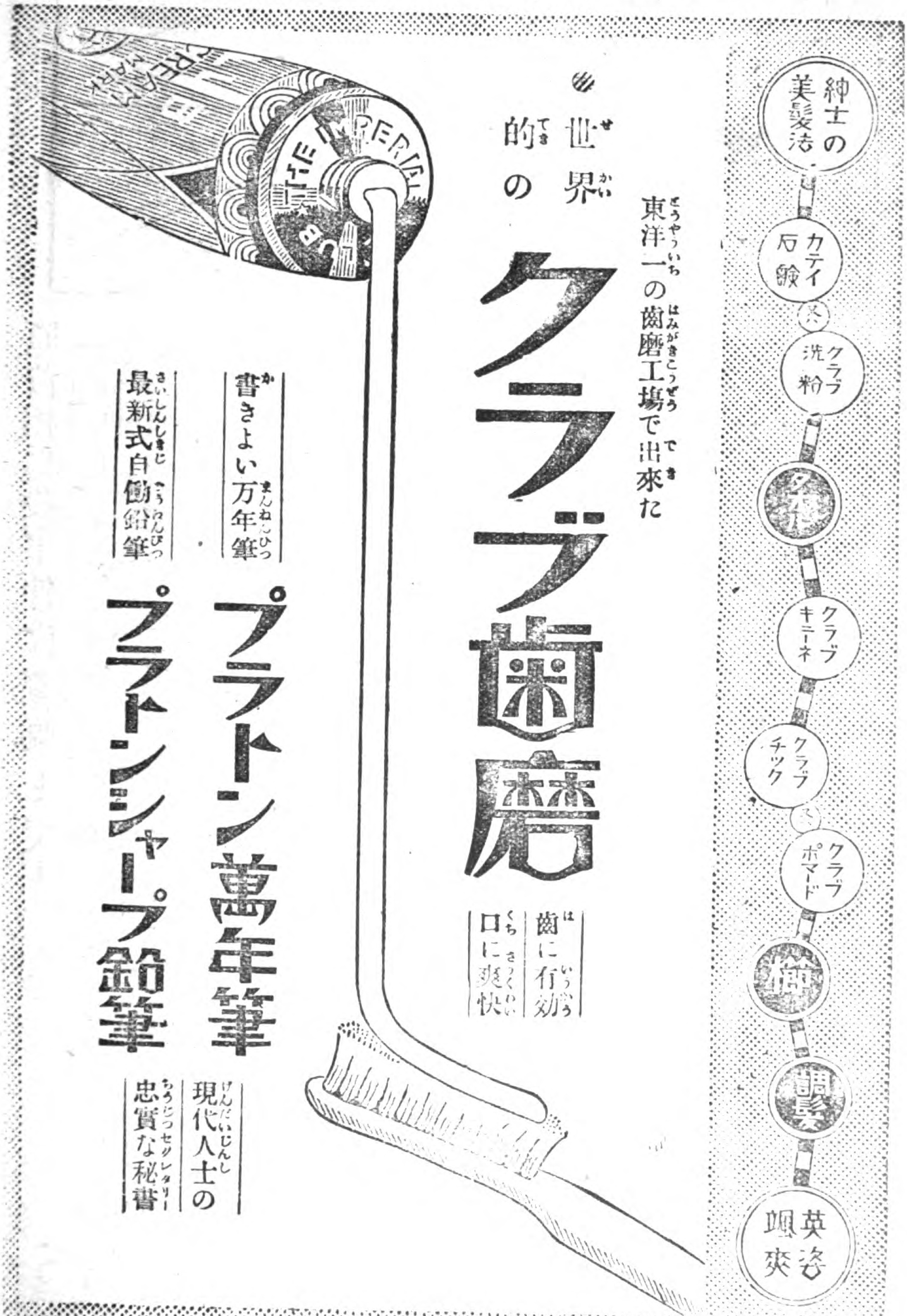
アナタの爲に…新年、宴會、訪問等には中山帽を、通勤に、遊散等に中折帽を、狩獵に鳥打帽をと、云ふ様にそれぞれ帽子の用途は決まつてあります。

社會生活上の必需品として、弊所が輸入防遏と國家奉仕の一念から發賣して居りますこの帽子、偏に諸賢の御愛用を仰ぎます。



中央公論第卅六年十二月號目次




紳士の美髪法
カテイ石鹸
クラブ洗粉
クラブキニーネ
クラブチック
クラブポマード
英姿颯爽
世界的の
東洋一の歯磨工場で出來た
クラブ歯磨
歯に有効
口に爽快
書きよい万年筆
最新式自働鉛筆
プラトン萬年筆
プラトンシャープ鉛筆
現代人士の
忠實な秘書



SKY AND TREES CONSTABLE.

大正十年

中央公論

十二月一日發行

十二月號

第卅六年第十三號

第四百三號

高橋內閣の成立に際して

十一月十三日高橋內閣の成立を以て政局は漸く少康を得んとして居る。原前首相の暗殺に依つて一大渦紋を描かれた政界が結局之によつて收まるかどうかは疑問だが、高橋氏が不得要領の風貌の中に驚くべき聰明と手腕とを藏して居るとの評判もあるから、或は案外うまく纏りがつくかも知れぬ。併しそんな目前の事はどうでもいゝ。吾人は夫よりもモツト深い意味を這般の變化の裡に認むべきを一言して置きたい。

原前首相の兇手に殪るゝや、全閣員は何にうろたへてや、蒼皇として辭職の意を決した。其處に彼等が斯の決意をせねばならぬ何う云ふ理由を見出したか判らぬが、重要政客の間には之を當然と認めたものもあり、又少くとも深く之を咎めざらんとするの風があつた樣だ。此處に予輩は一つの疑問を挿まざるを得ない。そは何かと曰ふに、政界の一角には今仍ほ所謂大權內閣の迷想が強く根を下ろして居るのではないかといふ問題是である。

原內閣を通俗には政友會內閣と謂ふ。而かも大權內閣主義の立場から云へば、之は政友會が政黨の資格に於て作れるに非ずして、大命一個の原敬に降り、原が政友を語らつて組織したものと觀るべきである。此點に於て原內閣は桂內閣や昔の山縣內閣などゝ何の異る所がないのだと云ふ。果して然らば、內閣の命脈は原敬一個人と終始すべく、原敬亡んば他の閣員は直に辭表を呈すべきの道理であつて、無意識にもせよ、斯の思想が潜在して居る以上今次の總辭職を世間が深く怪まぬ譯も分る。

が、大權內閣主義の是非は寺內內閣の時代に既に論じ盡されて居る。少しく政治公法の事に通じて居る程の者は、今頃復這般の問題に停滯して居ない筈だ。併し實際の社會にはまだ可なり舊式の思想も殘つて居る。機會ある每に之等の點に警戒するを怠る可らざる所以である。現に今度の問題に付ても、總辭職をするは憲政の常道に反すと論じた者も少しはあつた。之を否とするは蓋し他の反面に大權內閣主義の盛り返しを恐れたからでもあらう。內閣任命の法律上の大權は飽くまで君主に在る。此點は政黨內閣の本場たる英國も同じ事だ。唯此の任命權の揮ふ所を政治上何處に指定すべきかに付て議論があり、而して現代の通說は所謂大權內閣主義を否とするに一致して居る。大權內閣主義は大權の名に隱れて貴族專制の弊を開致するからである。此見地からすれば、今度の

兇變に際しても政友會は直に黨員中より其人を物色して遅滞なく原氏の後釜に据ゑべきであつた。

然るに肝腎の政友會幹部は誰よりも先きに這の當然の順序を踏むことを躊躇した。是れ彼等が憲政の常道そのものに就て特異の定見を有するが爲に非ず、専ら政權永續の希望を貫かんとするの便宜に支配された爲であらう。意氣地ない話であるが、政友會としては亦怪むに當らない。

政界に於て事實は常に理論よりも有力である。理論の事實を指導することも無論であるが、事實が理論を左右するの顯著なるに眼を掩うことは出來ない。折角定論となつた政黨内閣主義も、今度の兇變を機とし、又もや事實の上に更に試練を受けねばならなかつたのは已むを得ない。

併し政友會幹部の疑惧した如く政界の現實は政黨内閣主義を貫くに夫れ程不便であつたらうか。政界の一部には政黨政治の此上にも固まるを憂ふべしと考へたものもあらう。形式丈は大權直接の任命に依つて首相が選るゝ事にしたいと希つた人もあつたらう。現に現在の黨員中には其人なしと爲して、彼れか此れかと白羽の矢を立てゝは見たが、併し何れも物にならなかつた。物にならないのは、畢竟政黨の勢力ばかりはどうにもなりさうで而かも他流の者の如何とも爲し能はざる所たる關係が明になつたからである。左すれば、落ち付く所は矢張り黨員中に首相を求むるといふ所である。斯くて政界實際の必數は最早政客彼自身の觀て居つた様なものでなくなつた事が更めてまた立證された譯である。

事實が理論と矛盾する時に混亂がある。政局の安定は畧々此二者の調和するまでは期せられない。之から先きの政界は混亂か安定か私共は知らない。只疑のない一事は最近の政界には明に一つの抗す可らざる大きな流れがあるといふ點である。

但し、日本の政界は之丈で前途の光明を保證せられるのではない。少數閥族の壟斷から政權を解放し得ても、之を完全に國民的のものとするには、之から先きまだ〳〵いろ〳〵な問題がある。而して之から先きは國民彼自身の仕事だ。吾人は今後讀者と共に更に之等の點に論究を進めたい。政論の時代は去つたなどゝいふ新奇を衒ふの言說は吾人の斷じて執らざる所である。

中央公論



第卅六年第十三號
十二月號
第四百三號

現下に於ける神話化の源流を究明す

田中王堂

一　序言

神話は三千年、四千年の昔に於て人間に工夫され、利用された生活の一つの道具であると歴史家は信じ、且つ、書いて居る。然し、人間は歴史家が信じ、且つ、書いて居るやうに、さう容易に神話創造の本能を脱しなかつた、脱することが出來なかつた。現に、この二十世紀の初頭に於ても、或る個人が、若しくは、或る國民が或る環境に置かれ、生活

の材料として或る刺激を供給される時に、彼れとしては、若しくは、彼等としては、其等を化して生活の道具と爲すの外に、其等に對して一種の考慮と取扱ひとしか施し得ないのである。其れは、其等を化して神話と爲すことである。そして、わたくしの見るところでは、わたくし共日本人は、さうして居ることは意識すると、せさると、又、承認すると、せさるとに拘はらず、實にかゝる個人であり、國民である。

今日に至るまで幾多の辛苦を甞め、幾多の曲折を經、幾多の失敗と成功とを閲して、漸く啓發したわたくし共の理智、漸く著想し得たわたくし共の理想を標準とするならば、神話に依る生活の、(例へば、藝術、若しくは、科學に依る生活に比して、)其れの短所が其れの長所に千百倍することは多言を要するまでもないが、わが同胞は個人として、又、國民として、生活の道具として神話を保有し、更に、日々に新らしい神話を沈澱して居るのである。

解放といふこと、改造といふこと、文化といふことが荐りに新聞や雜誌を通して宣傳されて居る。然しながら、之れあるがために、個人はどれだけ解放されて居るか、社會はどれだけ改造されて居るか、そして、生活はどれだけ文化の道程に進んで居るか。わたくしからすれば、是等の聲句はたゞに黎明なる理會を以て說かれ、輕浮なる衝動を以て受け取られて居るに過ぎない。既に指導者も神話として其等を說き、民衆も神話として其等を受け取つて居るのである。解放も個人に取つて一種の桎梏となり、改造も社會に取つて一種の偏執となり、文化も生活に取つて偏狹にして稚弱なる一種の非文化となるのに、何等の不思議もない。こゝに至つて、解放や、改造や、文化や、その他の何物やが說かるゝに先だち、其等をして神話たらしめる、たらしめなければ止まない雰圍氣を日夜醞釀しつゝあるわが同胞の情操と統覺とを融解し、啓發することの極めて急務なるをわたくしは知るのである。

わたくしは、この文章に於て、如何にして、一度或る文化の機關がわが同胞の手に委ねられた時に、其等は悉

の神話と化せらるるに至るかの經過と、其等がさう化せられた後、現に如何なる障礙を彼等の活動の上に及ぼして居るかの事由とを說明し、併せて、如何にせば其等の神話をして、當初、其等に課せられた志向を發揮することに依つて、復び生活の道具たるの機能を全からしめるかの方法と、向後、わが同胞にしてあらゆる文化の機關を採用するにしても、苟くも其等をして永遠に神話と化せしめまいとするには、平常、如何なる覺悟を涵養すべきかの工夫とを暗示して見たいとおもふ。

わたくしは、如何なる意味に於てわたくし共の生活の機關は悉く神話の形を取つて居ると見、如何なる理由に依つて、わたくし共の生活のはたらき振りは神話的であると見るかを明瞭にする手順として、わたくしは、先づ、神話そのものの由來と本質とを釋明して置かねばならぬ。

二　神話の由來と價値

人間の理性の役目は、彼れの中に起る欲望と、彼れを襲ひ來たる刺激とを出來るだけ善く整齊して、彼れの生活を支持し、發展し行くことに限られて居る。こゝに、理想が作られ、法則が作られるのである。欲望にも或る程度にまでは、內具の性質があり、刺激にも或る程度にまでは、內具の性質があつて、是等は、兩方を適當に整齊しようとして、長い間の『試みと失錯』とを經て、始めてだんだんに發見されるのである。然し、人間は如何なる境遇に置かれ、如何に疎漏な方便を、如何に貧弱にしか所持しない時に於てゞも、彼れが幸福を追窮する思念は無限に旺盛であるから、其の時、その時に應じて、ある風に欲望と刺激とを整齊して居るのである。兩者の性質を究めた上で、之れが整齊を圖るのは、優れた仕方であるに相違ないが、さうすることの出來ない場合には、兩者の性質を究めるのを待たないで、之れが整齊を

企てる。(假りに、知力と想像力とを相對的に區別出來るものと觀て、)前の方法は主として知力に依つてなさるゝのであるが、後の方法は主として想像力に依つてなさるゝのである。科學とは前の方法に與へられた名稱であり、神話とは後の方法に與へられた名稱である。

から見て來ると、神話と科學とは同じであるとも言へるし、又、異なるとも言へる。是等が同じであるのは、志向と作用とに於てであつて、是等が異なるのは、機構と形態とに於てである。神話と科學との間には、かゝる微妙な關係があるがために、神話を割義して、『原始人の科學』とし、科學を割義して、『近世人の神話』とした者がある。この割義は一見したところ、如何にも無雜作に爲されたもののやうに想はれるかも知れぬが、一度、親切に、忠實に、彼れの經驗を統一する方法に就いて、人間の容智の進化の跡を考察する時、わたくし共は驚くべき眞理のこの割義の中に含まれて居るのを見出だすのである。今日、わたくし共に依つて神話と見做されるものは過去に於て科學であつたならば、わたくし共の科學が後人に依つて神話と見做される時期の早晩來たることは容易に逆睹し得ることである。確かに、神話は粗硬の科學であつて、科學は洗練された神話であるに過ぎない。然し、わたくし共にして、機構と形態とに關して、相違を神話と科學との間に見出だす以上は、一體、この相違はどこから生じ來たるのであるか。

この世の中には、唯一種の實在しかない。其れは作用である。實在たる事實は、無數であるが、其等は個々の作用としてのみ、わたくし共に依つて經驗される。然し、通例には、先づそれぞれ固有の性質を有つた『物』があり、其等の『物』が實在の單位であると考へられて居る。そして、この考へ方は長い間の生活に依つて訓練され、醇化された思索の若しくは、實行のエコノミイより來たつたものであるから、そこには無論相當の根柢はある。然し、是等の『物』は、其の實、千變する關係に從ひ萬化して生ずる作用より抽象されて出來た項(terms)に過ぎない。項は決して實在ではな

い。論理的假設である。この理を明らかにするために、わたくしは一つの例を言語より取ることにする。

言語の最小單位は一つの完結せる思想を表はす一つの命題であつて、其れを組織する單語ではない。されば、一つの單語は未來に於て、或る特定の命題の組織に入りて、一つの意義を構成する可能性は有つて居るが、さうするまでは、嚴密に言へば、何等の意義をも有たぬものである。然しながら、これまで或るコンヴェンションの範圍で、種々の命題を構成するに用ゐられ來たつたものであるから、實際は、其の時々に應じて異なつた意義に於て用ゐられたのであるが、辭書には其等のアベレイヂを取つて、恰も其れが固定の意義であるが如く制義されて居るのである。されば、辭書に於て、或る單語に賦せられた意義は、ほんの準備的のものであつて、其れの事實的の意義は、其れが實際に或る命題を構成する要素として用ゐられた時に、始めて生ずるのである。そして、單語は其の時始めて、十分な意味に於て、實在となるのである。

是れに類似する、然し、一層複雜なる抽象化と物化とのはたらきが、生活全體に亙りて行はれ、固定の性質を有つたと想像される無數の『物』が製造されるのである。例へば、こゝに呼吸といふ一つの作用があれば、其の性質は勝手に分割されてその作用を構成する二つの項なる空氣と肺との各獨立した二つの物となされると云ふ風に。わたくし共はこの理を推擴して、如何にしてわたくし共が現に常識に於て實在と想像するものの存在の觀念が完正されたかを理會することが出來る。

神話も、科學も、等しく常識の不備を完成し、不足を充塡するために、常識を組織する材料より工夫されたものである。隨つて、思索の、若しくは、實行のエコノミイより常識の假定した實在は、大體に於て、神話も、科學も共に實在として承認する。項が常識に取つて實在である如く、神話に取つても、科學に取つても、實在である。然し、其等を取

り扱ふ方法に至つては、神話と科學とは大いに其の趣を異にする。

生活を改良することは、經驗に入り來たる作用を改造することに依つて、始めて實現せられるのであるが、作用の改造の手掛りとしては、たゞ、其等を組織する項の改整あるのみである。事實として、項の聯結には、眞實のものと、たゞ外觀上のものとがあつて、其等が知覺に現はれたところだけでは、是等のものの差別は見分からない。顯著に現はれるものが、ほんの外觀上の聯結、即ち、近接に過ぎないで、眞の聯結、即ち、結合が反つて深く潛んで容易に發覺され得ない場合も尠なくない。されば、項の改整を圖るには先づ其等の眞實の聯結を見出だすことを第一條件とする。然し、さうするためには、一旦其等を分析して概念的の樣式に引き直し、さうすることに依つて、偶然的のものと內具的のものとを識別した上、內具的のものだけを捕捉して、其等のはたらき振りを觀察することが大切である。そして、是れは知力を乘輿とする科學の獨り能くするところのものである。想像力を其れの乘輿とする神話は、そんな手數を盡す忍耐を有たない。項を經驗に入り來たるまゝに受け取り、どこまでも知覺的のレヴェルに立つて、直ちに、全體として、其等のはたらき振りを觀察しようとする。この結果として、どんな事をしても、神話に依つては內具的のものが偶然的ののより識別される術はない。

わたくしは、尙ほ進んで、更に詳しく神話と科學との相違を考慮せねばならぬ。

わたくし共にして知覺を諦視する時、わたくし共は、其等が或る傾向に從つてはたらくことを發見する。其れの抽出され、醇化されたものが概念である。この事由よりして、知覺は項の材料であり、概念は項の意義である。知覺には濃厚の色彩が含まれるが、其れの性質は分子的である。概念になると其れに含まれる色彩は稀薄となるが、其れの性質は有機的となる。『生活は綠色であるが、理論は灰色である』と云ふ見解に據れば、知覺は概念より一層生活に近いもので

あり、随つて、知覺をたゞ知覺として其れを支配しようとする神話は、知覺を一度概念に引き直し、さうして後其れを支配しようとする科學よりも、一層生活に親切なもののやうに想はれるであらう。然し、事實は反對である。知覺を概念に引き直して其れを支配する場合には、たゞ、其れが正しく行はれさへすれば、知覺そのものから發展して來た意義によつて其れを統一することであるから、そこにはたらく原理は内的であり、この活動は自由である。然し、知覺として其れを支配しようとする場合には、正しいにも、正しくないにも、手掛りとすべき何等の意義は一つもない譯であるから、勢ひ、一つの知覺を支配するのに、偶然、其れと近接の空間に置かれた、若しくは、類似の形態を取つた他の知覺を拉し來たり、想像に依つて前の知覺と、後の知覺との間に意義の存在を捏造することになる。そこにはたらく原理の如何に外的であつて、その活動の如何に無細工であるかは、誰れにでも一目の下に看取し得られることである。

今、わたくしは一つの實例をポンプに依つて引き起される水の作用から取つて、其れに關する神話の説明と、科學の説明との間の優劣を商較して見よう。ピストンがはたらいて、そこに眞空が出來、水がポンプの筒の中に昇つて行くと、神話はそれを説明して、ポンプが水を吸ひ上げるからであるとか、自然は眞空を嫌ふからであるとか言つて、一つの知覺的事實を説明するのに、其れと全然何等の關係のない他の知覺的事實を以てしようとするのである。之れに反して、科學は眼前に横はる一つの知覺的事實を分析して、其れを組織する項を見出だし、其等の各の交渉だけに依つて其れを説明して、其れは空氣の重さが水面を壓することより生ずる現象であるとするのである。

かういふ風に、神話の特徴と科學の特徴とを對叙して來ると『節約の法則』に依つてはたらく人間の生活の道具として、神話の價値の科學の其れに遠く及ばないことをわたくし共は容易に覺るのである。わたくしは、神話の缺陷を次ぎやうに畧約し、再記して置く。

生活するとは、生活を持續し行くとは、絶へず、其れを構成する作用の成分、卽ち、項を改整して行くことである。項の改整は、其等の間に潜在する意義の捕捉を其れに必須の條件とする。然し、この意義は、單に項を知覺として取り扱ふことに依つては看得されないで、獨り其等を、一且、概念にまで醇化することに依つてのみ發見されるのである。神話はさう云ふことを爲さず、又、爲し得ないから、畢竟、神話は生活を統一するの原理を缺き、其れを改良する可能性を缺いて居る。

三　一次的の神話と二次的の神話

わたくし共が、こゝで、して居る如く、神話といふものを最廣義に、若しくは、最深義に取る場合には、わたくし共は、神話の中に一次的のものと、二次的のものとを區別しなければならない。一次的のものは、緩かに、粗漫な常識だけの行はれて居た生活に於て、沒反省的に揑造されたものであり、二次的のものは、既に、或る程度にまで、常識の洗練された結果として、藝術と科學とが出現し、常識と並んで、或は、其れと交渉して、其等がはたらいて居る生活に於て、藝術、科學、若しくは、其等の精神に依つて工夫された、或は、運用されて居る諸の機關の當初の意義と志向とが不用意のために沒却される結果として、沒批判的に布置されるに至るものである。されば、一次的のものと二次的のものとを通じて、神話化の動機は、無論、同じであるが、其れの經過に至つては、おのづから異なるところなければならない。

一次的の神話と、二次的の神話との關係には、本能と習慣との關係に酷似するものがある。否、大した無理をしないで、一次的の神話は本能のはたらきそのものの内容であると見られ得、二次的の神話は習慣のはたらきそのものの内容

であると見られ得るのであるから、一次的の神話と、二次的の神話との關係は、卽、本能と習慣との關係である。一次的の神話は粗朴な氣分を以て作られ、二次的の神話は苦しき、そして、彌縫の詭智を以て作られる。原始人が彼等の生活を統一するに方り、常識の不備と不足とに慊らず、彼等の有てるありたけの智慧を盡して工夫したものが、一次的の神話である。既に、常識と並んで、或は、其れの上に、藝術と、科學と、其等の所產の一切とを機關として居る文明人が、彼等の有てる智慧を十分にはたらかせず、彼等の欲求と、彼等の制度、學術、乃至、信仰との間に矛盾を生ぜしめるに拘はらず、其等の機關の改造を圖らないで、纔かに、其等の墨守と補綴とのみを事として居るために、知らず、識らず、彼等の生活の中に沈澱させるものが、第二次的の神話である。この意味からして、アポロの神は一次的の神話の產物であり、トレミイの天文學は二次的の神話の產物である。そして、わたくしがこの文章に於て取り扱はうと志すものは、主として、如今、わが國民生活に依つて沈澱され、其れの潑溂たる活動を妨げ、其れの必要なる改整を遮りつゝある諸の種の二次的の神話と神話化の傾向である。

四　國民性と神話化との關係

わたくし共、日本人は實行的の國民であると謂はれて居る。わたくしも、或る意味に於て、この見解に同意する。然し、それであるから、わが國民性と神話化の傾向とは、背馳するものであると俗人が速了するならば、わたくしは、彼等の速了の全然謬れるものであることを指摘しなければならない。わたくしの考へるところでは、この世の中に於て、極端に瞑想的の國民と、極端に實行的の國民とが、等しく、最も多く、神話を作り、最も著しく、神話化の傾向に墮するのである。印度人は前の事實の一例であり、日本人は後の事實の一例である。獨り、正當な意味に於て理論的な國民だ

けが、神話を作らず、神話化の傾向に墮せずして生活し得るのである。英國人や、佛蘭西人はやゝかゝる國民たるに近い。事實は確かにさうである。それならば、この事實は、如何なる理由より生ずるのであるか。

原始人は、一方に於て、非常に實行を急いで居たと同時に、他の一方に於て、非常に空想に耽つて居た。つまり、彼等が、一方に於て、非常に實行を急いで居た事實は、他の一方に於て、彼等をして、非常に空想に耽らしめるに至つたのである。是れは、決して、矛盾ではなくして、極めて自然の成り行きであつたのである。

様式だけに就いて言へば、生活の要義は、其れの幸福を保障する目的を以て、其れの資料たる外來の刺激を利用する一事に限られるのである。然し、さうするためには、二段の工夫が必要となる。前段の工夫は、出來るだけ正確にその刺激の性質を認識するやうに、其れを受納することである。後段の工夫は、出來るだけ深厚に其れの價値を發揚するやうに、其れに反應することである。然し、前段の工夫をわたくし共は觀念化と呼び、後段の工夫をわたくし共は理想化と呼ぶ。然し、事實として、理智のはたらきと見做される觀念化も、情意のはたらきと見做される理想化も、等しく、外來の刺激を利用する經過の中の二つの異なれる段階に過ぎないのであるから、何時でも、おのれの幸福の獲得を欲求して止まざる人間が、實行を急ぐがために、其れの觀念化に餘裕を與へざる結果として、其れの理想化をして焦燥にはたらかしめ、總に徒らに空想に耽ることになるのは、極めて自然の成り行きである。

人間に固有するこの二元的傾向は、觀念化と理想化とを調攝し、一擧にして、前者をして正確ならしめ、後者をして深厚ならしめる一つの能力、卽ち、希臘人の謂ふところの知見の缺けるところから來たるのであるから、今日に至るまで、人類の大部分に依つて紹繼された傾向である。されば、或る國民が瞑想的であり、他の或る國民が實行的であるならば、其れは全然、同一原理より派出して居るのであつて、たゞ、この同一原理が、たまたま、異なる氣質を通して體現する

時、一方は瞑想的となり、他の一方は實行的となるのである。そして、どちらの國民にも共通の特性は、其れが、神話を製造するところにあるのである。が、然し、是等の異なる氣質を通して製造される神話の性質に至つては自づから異ならざるを得ない。瞑想的國民の製造する神話は、人格的存在の形を取り、實行的國民の製造する神話は非人格的存在の形を取る。印度人の間に見出だされる神話は前種に屬するものであり、わたくし共、日本人の間に見出だされる神話は後種に屬するものである。然し、孰づれの種に屬するにしても、其れの意義から言へば、全然同一である。傳來の、若しくは、舶載の或る制度、或る習慣、或る學說、乃至、或る信仰を利用するに方つて、其等を柔軟なる內的の計畫と觀、概念的に改造して、間接に其等を運用しようとせず、纔かに、其等を硬化した外的の存在と觀、知覺的に攝取して、直接に其等を使用するならば、さうする人々が、事實を知ると、知らざると、認めると、認めざるとに拘らず、其等は神話となるのである。已に神話として彼等の生活の中にはたらいて居るのである。

さうして見ると、わたくし共が實行的の國民であるといふ單純な理由から現に神話を作らず、神話を有たないと云ふのは事實に齟齬した想像である。わたくし共は、實行的の國民であればこそ、神話を作り、神話を有つて居るのである。

五　わが國民生活に於ける神話化の遠緣、近緣

現にわが國民生活の中に見出だされる神話化の傾向を馴致したものに、遠緣と近緣とがある。わたくしは（こゝに一部の文化史を書いて居るわけでないから）遠緣には稍かに管見を與へることに止めて、近緣に關してや、詳說することにする。

一つの國民が他の國民と交通を開始すると、其れがその國民の文化の發展に有利となるとは、歴史家や哲學者が信じ、且つ敎へるところである。無論、わたくしは、事實の光に憑つて、大體に於て彼等の所說を受認する。然し、其れの結果を精細に點檢すれば、其れを受け取る國民の特性と、兩方の國民の有てる文化の程度の懸隔とに隨つて、其の結果の性質に至つては、多少の相違のあるのを免れない。特に、わたくし共にして、文化の標準を、現在に於て、如何に複雜なる機關を有つて居るかといふことよりも、將來に向つて、如何に善美な機關を造り出す能力を、如何に富贍に貯へるかといふところに置くならば、其の結果の性質に至つては、甚大の相違のあることを免れない。そして、この相違は、主として、神話化の傾向を增大するか、或は、其れを減殺するかの形に於て現はれるのである。神話化の傾向を多く藏する國民が、おのれの文化よりも、遙かに優れた文化を攝取する時は、其れの結果は神話化の傾向を增大することになる。之れに反して、既に神話化の傾向を脫した國民が、おのれの文化と對等の、若しくは、其れに劣れる文化を採用する時は、其れの結果は神話化の傾向を減殺することになる。事實、さうなるのは極めて覩易き道理である。前者に在つては、其の文化を組織する刺激を分解して、おのれの生活の要求を標準として、其れを概念にまで改造し、さうして後、其れを採用する。後者に在つては、さうする餘裕と知見とを缺くがために、其の刺激を單に知覺として攝取するからである。

わが國民は、二度までも他の國民が總べての場合に於て、殆んど全く經驗しない様式と範圍とに於て、外國の文化を移殖した、先きには三韓と支那の文化を、後には西洋のそれを。そして、いづれの場合に於ても、(わたくしが本論に於て確く執つて居る見解よりすれば、不幸にして)まだわが同胞が全く神話化の傾向を脫しない時代に於て、移植され、そして、其等は彼等の文化に比して、遙かに優越したものであつた。

三韓と支那の文化が攝取された時代に於ては、わが國の文化は幼稚なものであつた。既に一つの社會であり、散漫な意味に於ては、一つの國家さへも構成して居たのであるから、無論、社會に於て自然に發達し、國家を維持するために必然に工夫されなければならない諸の機關は、或る程度にまでは、或る様式を以て備はつて居つたことは事實である。然し、是等は極めて粗野なものであり、生硬なものであつた。言語、習慣より産業、政治に至るまで、悉く、猶、原始的の域に停回して居た。かゝる時代に方つて、始めには、三韓を通して、次には、直接に支那より完成された、寧ろ、爛熟に近い文化は將來されたのであつた。わたくし共の祖先が、微弱な、保守主義者よりの抵抗あるに拘はらず、鋭意、殖産、工藝、文學より、政治、法律、宗教に至るまで、範を彼れに取つて、我れの短を補はうとしたことに、決して何の不思議もない。この手輕な、さうして、便利な方法に依つて、わが國の文化は一躍して燦然たる光輝を添えることになつた。然し、其れは、自發の文化ではなくして、韓裝したる、隋裝したる、若しくは、唐裝したる文化であつた。

わが國民性の特徴は、摸倣に巧にして、創造に拙だと謂はれて居る。そして、この事實はわたくし共日本人に取つて、誇でなくして辱であることは明らかであるが、是れは、獨りわが同胞に限られたことではない。幼稚な文明を有てる國民が、優越せる文明を、たゞ、一時の便宜に任して、無雜作に、手當り次第に、拾ひ集めた時にいつでも起る普通の現象である。如何なる機關と雖も、久しく其れをはたらかせなければ、終には、其れが畸形のものとなり、不具のものとなることは、生物の法則である。わが國民性が、初めに於て、如何なる量に、質に、獨立の文化の可能性を蘊んで居たかは、何人にも今日より的確に遡測することを許されて居らぬ。然し、平原に在る亭々たる松樹も、一度、猛風吹きしきる沍寒なる高山の巓に移植さるれば、倏ち、彎桓たる形を取る事實よりして、緣が因の組織を變更することを知悉するわたくしは、わが同胞をして長く徒らに摸倣にのみ跼蹐せしめたのは、三韓と支那との文化の大規模な、そして、沒批判的

の輸入に依つて、彼等の自發性の機會を無くし、彼等の創造性を窒殺した當然の結果である。

斯くして、わが同胞が（わたくしの說明して居る意味に於て）、科學の基礎の上に立つべき生活の道具を神話として了つたことは、如何にも悲しい事であるが、更に悲むべき事は、生活の回轉し推移するに隨つて、其等より、さうして、其等の外に更に多くの神話を沈澱し行く神話化の習慣を馴致したことである。

かういふ事實からと、かういふ理由からとして、神話を保留するのみならず、新らしく、其等を增加し、神話化の傾向を傳承するのみならず、新らしく、其れを擴大し來たつたわが國民性は、全くあんな風に、あんな具合に、三韓の文化と支那の文化とを輸入した惡影響であると、わたくしは斷言するに躊躇しない者である。

斯くして馴致された國民性を以て、わが同胞は、復び西洋の文化を輸入することになつた。その結果が如何なるものになつて居るか。如何なるものにならなければならなかつたかは、讀者の容易に推察し得るところであらう。

然し、一層適切に、事由に卽して觀察するならば、三韓と支那の文化とを輸入した場合の動機と、西洋の文化を輸入して居る場合の動機との間には、わたくし共の見逃がしてはならぬ相違がある。其れは、切言すれば、前の場合に於ては、其れは、主として、自國の文化の粉飾のためであつたが、後の場合に於ては、其れは、主として、自國の存在を保障するためであつた。わたくし共の造つて居る神話及び神話化の傾向と、わたくし共の祖先が創めた神話及び神話化の傾向との間に存する多大の相違は、兩方の場合にはたらいた動機の相違より發して居るのである。

今を距ること約五十年の前に當つて、わが祖國は西方二三の雄邦に依りて其の存在を威嚇されたのであつた。この威嚇の意味を約すると、其れは、『汝の取るべき途は二つきりない。在來の文化を固執して滅亡に赴くか、若しくは、吾々の文化を採用して滅亡を免かれるかである。汝の選擇はこの外に一つでもあり得ない。』といふのであつた。この提言は

いづれの國民に取つても一つのヂレンマである。特に、保守を以て生活の信條とする國民に取つては、實に苦しきヂレンマであらねばならぬ。わたくし共の父老はこのヂレンマのいづれの岐角を擇んだか。

生は何人に取つても尊い。然し、時としては鴻毛よりも輕い場合がある。特に自尊心に富める個人と國民とに取つては、かゝる場合が多い。そして、わたくし共日本人は世界に於て、其の匹儔なきまでに自尊心に富める個人であり、國民である。彼等は決して死を怖れなかつた。彼等の怖れたのは、(たとひ其れが精神的の意味のものであつたにもせよ)敵手に依つて與へられた死より生ずる屈辱であつたのである。彼等父老は何事を措いても、かゝる屈辱を免かれねばならぬと考へた。彼等の考へに依れば、そこには唯一つの方法しか有り得ないのであつた。其れは、是等の雄邦と戰ふことであつた。當時に於ては不聰明者も聰明者も悉く主戰論者であつたのである。たゞ、如何なる手段に依りて戰ふかと云ふことに至つて、不聰明者と聰明者との間に意見の異なるところがあつただけである。不聰明者は何等の準備なく赤手、空拳を以て戰はうとし、聰明者は十分に大艦、巨砲を準備して、而る後、戰はうとしたのであつた。前者は謂ふところの攘夷論者であり、後者は謂ふところの開國論者であつたのである。さうして、何よりも賢き教師である經驗は、事實に於て不聰明者が不聰明であつて、聰明者が聰明であることを、彼等に證據立てたのである。つまり、赤手、空拳を以てしては、戰つて勝を制し得ざるのみならず、戰ふことさへも出來ない。苟くも戰ふには、大艦、巨砲の利器を以てしなければならないことを敎へたのであつた。

一度、大艦巨砲主義が勝を占めるに及んで、こゝに、秋水が百里の堤防を決する勢を以て、西洋の文明は澎湃としてわが國に押し寄せたのである。手始めとして、敵と戰ふに大艦と巨砲とが必要であるとしたところで、如何にして其等を造り得るか。先づ其の技の傳授を西洋に仰がねばならぬ。そして、其れの資を得るには國が富まねばならず、巧みに其

れを使ふには、兵が強くなければならぬが、國を富まし、兵を強くするのにも、其の範を西洋に求むることが捷徑のやうに見えた。然し、西洋に於て、富國、强兵は、其れ自づからで自存して得るものではない。其れは、其等の憑つて繫か丶るところがある。其れは產業の發達である。然し、產業の發達と雖も、自存し得るものではない。其れも、亦、憑つて繫るところがある。其れは機械の發明である、鐵道の普及である、郵便制度の完備である。それでは、是等のものは、各、自存して居るか、自存し得るものであるか。否。一層近寄つて事實を諦視すると、是等のものも、それ、ぞれ憑つて繫るところのもののあることが知れる。そして、其等は、わが國に於ける在來のものに比すると、極めて異なつた、そして、一層優れた政治と、教育と、衞生と、道德と、學術とであることを彼等は見出だしたのである。か丶る勢に乘じて、彼等の中でも極端なる者になると、わが國の言語を英語にし、わが國の信仰を基督敎にし、更に進んで、わが國の人種を半白晳にしなければ、富國强兵の實は上らないと信じ、且つ、說いたものである。

かういふ意見から、西洋の文明諸國に於て見出ださるる生活の機關とし言へば、彼等は勝手に、無雜作に、手當たり次第に、之れが輸入と、附植と、宣布とに努めたのであつた。さうすることに於て、彼等は確かに十分なる勇氣を有つて居た、熱心を有つて居た。然し、（わたくし共の現に立てる高地より俯瞰する時、さういふのも勘しく酷に失するが、）彼等に缺けたものがあつた。其れは知識であり、理會であり、識見であつた。わたくしは彼等が實行に長じて居た人々であつたことを、容認するに吝なる者ではない。同時に、わたくしは、彼等の實行は單に衝動に依つて挑發された實行であつて、徐に概念に依つて醇化された實行でなかつたことを指摘せざるを得ざる者である。英國の才人ウオルタア・バジェオットは甞て言つた。『英國人の陷る過失の十中の八九は彼等が行ふ前に先づ坐つて考へることをしない事から來たる』と。バジェオットが英國人の所爲に就いてかういふことを言ふならば、若し彼れをして維新當時に於けるわたくし共の

父老の所爲を見せしめたならば、彼れは果して何んと言ふであらうか。勿論、彼等父老としたならば十分の申譯のあることをわたくしは知つて居る。彼等を言ふであらう『行ふことが急務であつて、考へて居る餘裕がなかつた』と。この彼等の（想像上の）答には相應な理由と智慧とが含まれて居る。誰れにしても、人間として、一時にさう氣が付き、さう手の廻るものではない。それであるから、わたくしは、彼等が實行を急いだために、思想に缺くるところがあつたのを一徹に非難しない、非難しようとも思はない。然し、事實は事實として的確に其れを認識し、其れに含まれた缺陷を親切に匡正することは、彼等の事業を繼紹し、完成することの神聖なる天職を托されたわたくし共、後進者の第一の義務であらねばならぬとわたくしは信ずる者である。

彼等が西洋に於ける總べての文化の機關を輸入し、附植し、宣布するに方つて、其等のものの起原と歴史との智識を缺き、隨つて、其等の相互の關係の理會を缺いたために、如何なる精神と、如何なる方法とに依つて、其等を醇化し、採擇すべきかの識見を彼等は有ち得なかつたのである。換言すれば、彼等は其等を徒らに知覺として使用するに止まり、わが同胞の性情と、文化と、要求とを標準として、其等を概念と化し、而して後、其等を運用することを試みなかつたために、其等のものは遂に個々の神話となり、其等の神話は、彼等の生活の中に神話化の傾向を擴大したのである。

如何なる事實と、理由とに基いて、わたくしは是等のものが神話となり、其れがわが同胞の生活の中に神話化の傾向を擴大したと言ふのであるか。

わたくしが斯く言ふには十分の、否、十二分の證據がある。が、其等を概括して是等の機關が相互に救濟されず、是等の機關とわたくし共の生活とが一體として組織されて居らないのが何よりの證據である。一層適切に言へば、西洋の文化と在來の文化とが、纔かに、淺薄なる功利の考慮に依つて、物理的に混合されて居て、また、雄渾なる氣魄と、澄

明なる志向とに依つて、化學的に融和されて居らないのが何よりの證據である。

謂ふところの新文化の性質に關するわたくし共の理會は、或は多きに過ぎ、或は少きに失して、未だ、一度と雖も、其の正を得たことはない。

新文化の建設の方法に關して、わたくし共は、明治初年より大正の今日に至るまで、三度その態度を變更して居る。その第一期は純模倣時代とも稱せらるべきものであつた。其れの特徴にわたくし共の素質と要求とを等閑に附し、其等を近世化することなく、一向に、其等をそのまゝにして置いて、西洋の文化の接木を圖つたところにある。是れが明治初年より同十二三年まで續いた。その第二期は反動時代とも稱せらるべきものであつた。其れの特徴は、其れまで、啓發されることなく、たゞ、壓迫されて來たわたくし共の本能と傳說とが、其の無法な、無理解な壓迫に堪へ得ず、新來の制度や文物を假裝であり、借り物であるとして其等に反抗を企てたところにある。是れが、大略、明治十四五年より同三十年頃まで續いた。その第三期として、その後に起つて、今日まで續いて居るものは對立時代とも稱せらるべきものである。其れの特徴は、新來の文化も、在來の文化も、刻下のわたくし共の生活に必要なものであることを認めて居るがために、どちらの一方をしても、他の一方を無視させたり、壓迫させたりするといふことはないが、兩者は、猶ほ、二つの原理として隱然、公然、若しくは對立せしめて居るところにあるのである。わたくし共が現に見るやうに、政治や、教育や、信仰や、その他に於ける矛盾と、消耗とは悉くこの不幸な對立時代の產物に他ならない。

わたくしのこの叙述にして、明治の初年より大正の今日に至るまでの、わが同胞の（最廣義と、最深義とに於ける）思想の推移に關して、眞相に觸れて居るものとするならば、かゝる憐れむべき、事態の連續は、畢竟するに、彼等の生活の道具を神話とし、さうすることに依つて、彼等の生活に於ける神話化の傾向を保留して來て居る當然の結果である

と、何人にしても容易に首肯し得らるるであらう。

世界大戰の後を承けて、わが同胞の生活に關する思想と情操とは、非常に動搖して居るやうに見える。固より、動搖する方が動搖しないよりも遙かに勝つて居る。それがために、俗人の謂ふところの思想問題、社會問題、勞働問題、等が發出した。是等の一々は、協同生活を營む各個人が、おのれの生活の尊嚴と、他人の生活に對する義務との自覺より自然に發生したものであるから、本來の性質上、是等の問題が正しく攻究され、正しく解決される時、其れが、わが同胞を聰明にし、自由にすることに與つて多大の效果のあることを、わたくしは疑はない。然し、わたくし共にして、其れから多大の效果を得ようとするならば、是等の問題が『正しく攻究され、正しく解決されるならば、』といふ嚴密なる約束の下に於てのであることを篤と知らねばならぬ。其れには、尠なくとも、一度、ルネサンスの、及び啓蒙の、若しくは、其等に等しき物の洗禮に依りて、各個人は過去より繼紹した、若しくは、自分の工夫した生活の道具は、どんな場合に於ても、其等をして、神話にまで墮せしめないのみならず、其等の道具の媒介に依つて、だん、だんに彼れが尙ほ本能として享受して居る神話化の傾向を減却し行くだけの實力を所持することが肝要である。然し、わが、同胞の爲體よりしてわたくしの推測し得る限り、是等の問題に關して說く者も、聽く者も、等しくこの實力を缺いて居るやうである。說く者も神話として說き、聽く者も神話として聽くがために、既に其の煩に堪へざる神話化の傾向に加ふるに、更に新しき煩を以てしようとして居るのである。

或る生活の道具が（前にわたくしが反覆、絮說した意味に於て）科學としてはたらいて居るか、若しくは、神話としてはたらいて居るかを識別するに、極めて簡單なる標準が一つある。其れがfighting weightを以てはたらいて居れば、其れは科學である。之れに反して、其れがdead weightを以てはたらいて居れば、其れは神話であらねばならぬ。わ

たくしは如何なる文化の利器でも、一度、わたくし共の手に委ねられた時は、其れが神話ゝ化せられる、神話と化せられなければ止まないことを日常、わたくし共の耳目に觸れる事實に依つて證明せねばならぬ。わたくしに之れが實例を供給するものは、教育の現狀であり、政治の現狀であり、産業の現狀であり、學問の現狀であり、宗教の現狀であり、思想界の現狀であり、乃至、一般に運動と呼ばれて居るものゝ、現狀である。わたくしは、こゝに、時間が許す限り、是等のものゝ現狀を分析して、如何なる樣式と意義とに於て神話となつて居るかを釋明して見よう。

六　神話としての教育

若し教育の種を區別して發生したものと、作爲したものとの二つとなされ得るものたらば、現に、わが國に行はれて居る教育は、卓越した意味に於て、作爲された種に屬するものである。其れの基礎は、維新當時に於て、其れの發祥の地たる歐米より、全體的に移植されることに依つて据え付けられたものである。其の後、記述を通じて、若しくは、觀察を通じて、苟くも當初に於て取り殘されたと氣づいたものは、一つでも取り逃がさじと、何んの取捨するところもなく何んの醇化を施すこともなく、その上に、その上にと附け加へて行つて、終に、一つの寄木細工のやうなものが出來上つたのが、わたくし共、日本人が現に有つて居る教育制度といふものである。

西洋に在つては、教育は十分な意味に於て生長したものであると言へる。實に、彼の土にあつては、教育は國民の生活の理想の結晶であり、同時に、準備である。彼の土にあつては、其の時代、時代に於て、社會生活と教育制度との間は、常に、密切なる有機關係があつた。其れにも拘はらず、現に教育の體系を形造つて居る幼稚園や、小學校や、實業學校や、師範學校や、大學校といふものを個々に點檢すれば、各、異なつた時代に於て、異なつた要求に應ずるために

計畫されたものであるから、其等の各がそれの様式と精神とに於て、互に杆格し、齟齬するところのあるのを免れない。そこで、彼の土に在つては、學者も、教育家も、現代の社會生活の要求と理想とを標準として、是等のものの様式と、理想とを引き直し、一つの計畫を以て貫かれたる一つの完全なる組織體としようと努めて居るのである。

わが國に於ては、當初、衝動に依つて、是等のものを、亂雜に、勝手に、手當り次第に、掻き集め、拾ひ上げながら、一度でもわが社會生活を支配する理想と要求とに準據して、其等の間の整齊と、統一とを企てたことはない、又、企てるだけの見識と、實力とを備へたものの一人でもあつたことを聞かない。文敎の當局者は――文部大臣を始めとして、小學校敎師に至るまで――わが國の教育に關して何を考へ、何を爲して來たのであらうか。彼等の考へ、或は、爲して來たことは、纔かに義務敎育の年限の延長に關してであつた。單に、年數短縮の一點からしての學校系統の改正に關してであつた。高等學校の增設に關してであつた。教育費の增加、若しくは、分配の方法に關してであつた。そして、是の人々は、是等の事件を、彼等の最善と考へる風に決定しさへすれば、たゞ、それだけで、わが國の教育は、わが同胞が、彼等の生活の改善と幸福とのために、眞に要求して居るところのものを滿たし得ると考へて居るやうである。

是等の事件も、或る範圍に於て、或る重要さを有つて居るのであるから、無論、其れが愚に決せらるるよりも、賢く決せられる方が有利であるに相違ない。然しながら、是等の事件は、如何やうに決せられるとも、わたくしの懷抱する敎育の改造に對しては、極めて微少な影響しか有ち得ぬものである。わたくしの第一義として居るものは、教育の精神である。他に第一義あるを氣付かぬために、彼等が第一義として居るものは、其れの舞臺である、先づ正しい精神が捉へられた上は、其れの自由なはたらきのために、出來るだけ、善い舞臺を其れに與へることに十分の意味はあるが、尠しも正しい精神を捕へることを努めず、捕へて居るか、どうかをも吟味しないで、徒らに、其れのはたらく舞臺の善惡の

詮議にのみ没頭して居るといふことは、價値の轉倒の甚だしきものではあるまいか。彼等がわが國の教育の精神の改造を不問に附して、獨り其れの鍊磨の改良のみを圖つて居るところを見ると、彼等は、多分、わが國の教育の精神はわが同胞の要求と理想とを滿たすのに十分適切なものとなつて居て、些しも間然するところはないと想像するのであらう。事實、果してさうであるならば、わたくしはたゞ、たゞ、彼等の不明に驚かざるを得ない者である。

わが國の教育は其の始め没反省的に施設され、其の後、臨時、衝動の發作と功利の思惑とに依つて、没批判的に加增されて來たものではないか。『智者作法愚者制焉。賢者更禮不肖者拘焉。』とは商鞅の意見であつた。して見ると、あんな風に施設され、あんな風に加增された結果、自然に推積し、沈澱して出來た擬似體系の價値を吟味し、そこに、如何なる改革の餘地と必要とが、如何なる程度に於て存在するかを考察した者の一人でも出現したことのないのを見ると、わが教育界にはよくよく智者と賢者との數は極めて寥々であつて、愚者と不肖者との數は餘りに多きに過ぐるやうに思はれる。

わが國の教育に含まれた病根を、一口に言つて見れば、其れが學科と生活とを分離して居ることである。大觀すれば、この病根は其の貧寒、粗硬なる實質に愧ぢずして、徒らに最高學府などと高言して晏如たる大學より小學校に至るまでに共通する病根である。この事實あるに由り、大學より小學校に至るまで、教育は、多くの場合に於て、人物を作るよりも、寧ろ其れを壞すことに努めて居るやうに見える。極言すれば、されば、若し今日に於て相當の人物が世に出現するならば、其れは、かゝる教育あるがためではなくして、あるに拘はらず、出現するのである。さうして、一層悪いことには、わが同胞の要求と理想とを標準として、現行の教育が如何にして病根を含むか、如何なる邊に、如何なる形を以て含むかを識別する見識を具へた人士の教育界の内にと等しく、其れの外にも乏しきがために、其れが些しも動きの取れ

やうに固定され、固定されたまゝ其れが咒文の如く、年々歳々、其れの行事が繰り返へされて居ることである。

徴候は學校の程度と種類との異なるに隨つて、おのづから異ならざるを得ない。然しながら、病根は一つである。既に病根にして一つである以上は、其れが證例は如何なる種の學校より取るも同一の意義を有し、同一の目的は達せらるゝ譯である。わたくしは、わが國の教育に含まれた缺陷を最も明瞭に曝露して居るのと、それがわたくし共に取つて最も重大なる問題を構成して居るとの故を以て、一つ證例を小學校の教育より取ることにする。

わが國に於ては、總べての種の學校の教育もさうであるが、時代の要求に順應して行かなければならない民衆の生活を標準とすれば、小學校の教育ほど久しい間文教の當局者の手に依つて、無理會に虐待されて來たものはない。嘗て、澤柳博士は、何かの折に、日本の初等教育は世界に於て最も進歩したものである、といふやうな意見を述べて居つたと記憶する。わたくしは、彼れのこの意見を讀んで、物を批判する標準も隨分人に依つて違ふものだと、つくづく、感に入つたのである。わたくしは、苟くも近世教育の洗禮を受けた文明國の中で、わが國の初等教育ほど劣惡のものは尠ないと平常考へて居る者である。如何なる事實に據つて、わたくしはかくは斷言するか。

初等教育を組織する總べての學課の中より、市民としての品性を養成するに最も重大なる意義を有する修身と理科との關係を取つて考察すれば、修身は理科の精神であり、總合であつて、理科は修身の系體であり、方便である。されば、修身と理科とは同一精神に依つて兒童に教へられねばならぬ。然るに、修身と理科との間には截然たる二元觀に依つて教へられて居る。修身は教權主義を以て教へられ、理科は實驗主義を以て教へられて居る。然し、理科の精神たり、總合たるべき精神が教權主義の上に教へられて居る以上は、實驗主義の名の下に教へられて居る理科も、纔かに文字の末を暗記するに止まる記誦の學科に墮するのは、極めて自然ではないか。若し實驗主義が現代に生活して行く上に最便の

利器であるために採用されて居るものならば、何故に修身も等しく實驗主義に基づくものと改造しないのであるか。理科も修身も同一精神を通じて敎へられて、始めて互に塡補的に、照應的に、各の効果を顯はして來るといふものである。この見易き道理がどうして理會されず、實行されて居らないのであるか。畢竟するに、これと云ふのも、わが國に於て、初等敎育は他の階級にある總べての敎育と等しく、神話と化せられ、一つの神話として徒らに傳承　れて居るからである。

初等敎育が、そして、同巧異曲に他のあらゆる階級にある敎育が悉く是れに類した二元觀の上に立つてゐる間は、苟くもデモクラシイの隆興を其れの信條としなければならぬ政黨に依つて始めて內閣が組織せられたならば、わたくし共がそこに班を列する文部大臣たる者より、彼れの第一の、そして最大の役目として、何より先きに、この二元觀の上に立つ敎育に彼れの改革の手を觸れることを期待したのは、極めて當然であつた。然し、この期待は美事に裏切られた。彼れは、毫しも、さういふことを企てずして、高等學校の增設を企てたり、專門學校の昇格を企てたりすることを彼れの職分の一切のものと心得たのであつた。彼れも、亦、わが國の敎育を神話として保留して、わが同胞の生活を支配する神話化の傾向を增加しようとする平凡人の一人であつたのである。

七　神話としての政治

人間は其の社會生活の目的に關して、數千年間、さまざまの迷路に彷徨して居たが、終に、最近に至つて一つの公道を見出したやうに思はれる。現代生活は其れをして容易に古代生活より、若しくは、中世生活より識別せしめる一つの特徵を有つて居る。其れは、一、各人は自己の完成を目的として行くべきものである、といふことと、（必然にこの理想と

關聯して）二、各人は自己と協同生活にある總べての他人の完成を目的として行くべきである、といふことである。然し、畢竟するに、是等は一つの目的の表裏に過ぎないから、是等を總括して各人は一つの道德體系を形造る總べての個人の品性の發展のために、均等の機會を與へる社會の實現に努むべきである、といふことになる。たとひ、他の點に於て、古代生活と中世生活とがどんなに現代生活に優れて居たにしても、この一點に於てだけは、確かに、現代生活は古代生活と中世生活とに遙かに優れて居ると言はなければならぬ。わたくし共にして、一度、人間の性情の根本義に到徹する時、かゝる理想の上に築かれ、營まれる生活のみが、わたくし共に取つて、獨り、眞の生活であるが、不思議なことには、この眞理は現代に至つて始めて發見されたもの、現代に至るまでは到底發見され得なかつたものである。

人間が協同生活を營む唯一の目的、其れより期待し得る最高の利益は、相互の幸福のために、そこに入り來たつて一つの道德體系を形造る總べての個人の品性の平等の發展を標的として、彼等に均等の機會を與へる環境を實現する一事に限られることを知悉し得た今日に於ては、如何なるものにしても、苟くも其れが生活の機關として工夫せられ、はたらいて居るものである限り、其れはこの最後の目的のためにはたらいて居ると解釋すること、又、出來得る限り、其れをしてさうはたらかせるやうに、其れの精神と樣式とを改造して行くことは、極めて必要であり、大切である。

して見ると、政治の機能も、この範疇を脱する筈はなく、又、脱することは、出來ない。隨つて、或る國に於て行はれて居る政治が正しきものであるか、或は、謬れるものであるか、善きものと見做さるべきものであるか、或は、惡しきものと見做さるべきものであるかを批判する標準は一つであつて、其れは極めて簡單である。其の政治は、果して、この最後の目的を達するに役立つて居るか、どうかといふことが即ち其れである。

わが國の政治が、この標準を以て批判された時に、其れは善きものと見做さるべきであるか、或は惡しきものと見做

さるべきであるか。正しき方向に進んで居るか、或は誤つた經路に墮して居るか。

わたくし共の父老が一圖に國を富まし、兵を强くする目的を以て、頻りに、西洋に於て行はれて居た生活のあらゆる機關を全體的に取り入れた時に、彼等は、たま、たま、尠くとも、其等の國の中で最も進步したものの政體が、代議政治の形を取つて居つたのを見て、其らの國の隆々たる國運と、其等の國の政體たる代議政治との間には、何等かの密接の關係があるならんと推し、其等の國に於て、代議政體が如何なる事情の下に著想されたか、如何なる歷史を經過して、其れが現在取つて居る樣式を取るに至つたか、及び、其れが如何なる機構に依つて、其れの機能を發揮して居るかを、大して研究することも、考慮することもなく、極めて無雜作に、そして、極めて樂天的に、取り上げたのであつた。若し彼等が其れに對して一層の研究と、一層の考慮とを費やす勞を吝まなかつたならば、他に一層優れた取り上げ法もあつたに相違ない。然し、彼等の有つて居た、有つことの出來た知識と知見とを會得するわたくしは、必らずしも、彼等の取り上げ法に對して、今、改めて批判を下さうとは思はない。たゞ、一旦、其れがわが國に移植せられ、數十年に亙つて、實驗せられて、今日に至つては、容易に、當初の取り上げ法が、如何にして誤まれるものであつたか、その誤りは如何なる點に於て存したかの十分に證明され居るに拘らず、當初、其の性質上、暫定のものでなければならなかつた生硬な、そして、親しみなき計畫を、鄭重に、其の日暮しに、墨守して居る彼等の態度をわたくしは非難するだけである。

代議政治の發生した歐米に於てさへも、晩近に至り、生活の意義に關する個人の解釋の變化につれて惹き起された現存の社會制度に對する不滿と、經濟組織に對する不安とに順應するがために、代議政治の價値と、其れの基づく在來のデモクラシイの價値とは、頻りに反省され、批判されて居るではないか。

一體、代表（representation）の本質は、其れの作用にあるのであつて、其れの手續きにあるのではない。個々に取れば、それぞれ、絶對の價値を有し、其れの實現を絶對に要請する無數の欲望の、總べてを統一することに依つて始めて成り立つ人間の生活にあつては、其等を統一する方法としては、其の場合、場合に方つて、生活全體の幸福の立場から、其等の一つ、一つに相當の價値を與へながら、其等を撰擇し、醇化して行く外に、一つでもある筈はない。代表とは、さうするはたらきに與へらるゝ名稱である。して見ると、人間の生活である限り、其れが個人的のものであつても、若しくは、社會的のものであつても、其れが維持されるのは、獨り、代表に依つてであると言へる。代議政治とはこの方法の、たま、たま政治に應用されたに過ぎない。一層適切に言へば、この方法の政治の形に於てはたらいて居るに過ぎない。

かう見て來ると、政治は、其れの意義に於て悉く、代議政治であらねばならぬ。そして、事實さうであつたのである。謂ふところの專制政治も、謂ふところの代議政治も、畢竟するに、本質的の意義に於ける代議政治の二つの變形に過ぎない。されば、時としては、謂ふところの專制政治が、謂ふところの代議政治よりも、一層優れて本質的に代議政治であることもあり得る。この點よりして、勘し奇矯に過ぎ、そして事實にも盲目であつたが、本質的の政治の立場より、トオマス・カアライルが謂ふところの、代議政治を貶して、謂ふところの專制政治を嘆美したのにも、二三分の道理はあつた。聰明にして穩健なるジエ・エス・ミルが、彼れの中年に至つて、獨逸の政策の善美に傾倒した結果、デモクラシイに對して絶對的の信者たることより、制限的の信者に改宗したのにも、七八分の眞理はあつた。

然し、民衆の意思を代表するに、謂ふところの專制政治は間接である、謂ふところの代議政治は直接である。たゞに、理論として言へば、間接であるものは、餘程民衆の意思に乖離して來ないと、其れを引き戻すことはむづかしい。之れに反して、直接であるものは、勘しでも民衆の意思に齟齬すれば、其れを修正することは容易である。この事實よ

りして、文化が進み、人智が啓かれて來るに隨つて、謂ふところの專制政治よりも、謂ふところの代議政治が、政治の機構として一層優れたものであると言ふことになつた。凡人の司る代議政治でさへも、賢人の司る專制政治に勝ることと一等であるといふことになつた。わたくしとても、理論としては、この宣言を承認する。然し、この理論の中には絕大の假定が含まれて居ることをわたくし共は記憶せねばならぬ。それでは、この絕大なる假定とはどんな事柄であらうか。試みに其等を箇條書きにして見よう。

一、代表は社會を組織する一人殘らずの意思と利益との代表たること。
一、選擧者は最優の代表者を認識する聰明と、其等を選出する德性を具へること。
一、代表者は絕對の自由を以て、國政に關する議案を提出し、且つ、討議すること。

等が其等である。

或る人は、是等の個條書きが、謂ふところの代議政治の必然に含まなければならない假定であると聞いて、それは、超人間的の仕事を、現在の人間に强ひるものであると言ふかも知れない。然し、其れは謂ふところの代議政治の本質であるから止むを得ない。わたくしとても、この理想が、現に、どこの國の政治に於ても、行はれて居るとは考へない。又、この理想がどこの國の代議政治に於ても、急速に行はるべきものであるとも考へない。然しながら、いづれの國にしても、一度、謂ふところの、代議政治を採用した以上は、一日も早く其れをして其の理想に近づかしめるやうに、努めなければならない。わが國に現存する事實、若しくは、事情を、さきの箇條書きの一々に照らして見ると、何人でも代議政治の理想と、我が國に於て誤つて代議政治と呼ばれて居るものの現實との、餘りに相違するのに驚くであらう。然し彼等はいろ、いろの私の都合のために、現實をして理想に近よらせようと努めないのみならず、ますます兩者を背馳せ

しめて、平然として居るのである。已に、其の精神は去つて、形骸のみ殘つた代議政治であるのに、其れが、猶ほ、代議政治の作用を滿たして居ると考へるのは、一つの神話でなくして何んであらう。

この神話を馴致したものに、二つの迷信がある。そして、是等は在朝の者と、在野の者とを問はず、凡て、政治家と呼ばれて居る輩の信奉して居るところのものである。其等の迷信の一つは文律的のものであり、他の一つは不文律的のものである。文律的のものとは、二院並存制度に關する迷信であつて、不文律的のものとは、政黨對立政策に關する迷信である。わたくしは、こゝに、西洋に於て、是等の制度や思想が出現し、今日に至つても猶ほ惰力に依つて保持されて居る事情を詳しく述べて居る遑を有たぬが、是等のものは、西洋に於てこそ、歴史上の事情より來たつた多少の意味もあるが、わが日本に於ては、全然、そんな歴史上の行きがゝりはないのであるから、わが國に於ては、全然、何等の意味を有たぬものである。西洋に於てさへも、其の弊と其愚とに堪へずして、斷片的にではあるが、識者に依つて、だんだん改められて行かれて居るのに、わが國に於ては、反つて是等のものを是れから助成して行かうとして居るのである。

二院制度は、議會の人才をして貧寒ならしめ、其の上、（兩院は形式の上だけでも對立して居るから）不必要に、議會の中に反抗の空氣を漲らせる。

政黨對峙に關する迷信の弊と、愚とに至つては、二院並存に關する弊と、愚とに幾倍するものがある。これあるがために、議會政治の本質は、全然、沒却されることになると言つてもよいくらゐである。民衆の教育の振はないのも、これがためである。比較的優秀なる人物の選擧され得ないのも、これがためである。議會に於て民衆の意思の代表されないのも、これがためである。多くの場合に於て、聰明なる意見が不聰明なる意見に壓倒されて了ふのも、これがためであ

る。内閣組織に當つて、社會が提供し得る才能を網羅し得ず、随つて、政府の仕事はいつでも天才に依つての創造的のものでなくして、凡才に依つての彌縫的のものに止まるのも、これがためである。二大政黨の對立を代議政治の必然の様式としたのは、代議政治が發達を遂げた當時の行きがゝりと、文化の程度とより來つたのであつて、其の行きがゝりがだんだんに薄らぎ、文化がだんだんに進むに随つて、政黨政治の本元たる英國に於てさへも、だんだんに無視され、破却されるに定まつて居る。何んとなれば、其れは人間の理性に反き、社會のエコノミイに反くことが、だんだんに明瞭になつて來るからである。個人の間に於ける智力と德性とが進むに随つて、二黨對立よりも、小黨割據が勝り、小黨割據よりも、個人獨立が勝ることになることは明らかである。一人一黨主義は代議政治の假定である。其れで代議政治が行はれないといふならば、其れは、たゞ名のみに於て、代議政治であつて、實に於ては、代議政治でないのであるから、そんな虚僞なる代議政治なぞは、始めから企てない方がよいのである。わたくしは、一人一黨主義となつて、始めて、最も自由に、最も柔軟に、最も經濟的に、衆人の意見は最も卓越した人物の意見に依つて薫染され、醇化され、統一されることと信ずる。

わたくしは代議政治を以て協同生活の社會機關の最終のものだとは考へない。それに優れたいろいろの設備も考へ付かれ得るし、又、實現され得る可能性もある。然し、其れまでに到る間、其れまでに到らせる方便としてなりと、代議政治の極致として、わたくしは一院制度を取り、一人一黨主義を取る者である。さうして、わたくしはこれまで、沈澱して來た政治上に於ける多くの神話を破らうと欲するものである。

七、神とし話ての産業と學問

フリイドリッヒ・リストの『國民經濟學』に、次のやうな喩へ話しが載つて居る。

或る處に二人の金滿家があつて、各、三人づゝの男子を有つて居た。是等の二人の金滿家の一人は、彼れの財産の消散を恐れて、其れを自分の子供の教育に費やすことさへも吝んだ。其れがため、彼れが死んだ時には、非常な資産を有することとなつた。彼れは臨終の際に其れを三人の子供に分配した。三人の子供は、この遺産の相續に依つて、巨額の財産の持主になつた。然し、彼等は、元來、無教育であつたため、其の遺産を殖やすことが出來ないのみならず、其れを維持することさへも出來なかつた。彼等は、忽にして、其の遺産を蕩盡して乞食のやうな身分に成り下つて了つた。

之れに反して、他の一人の金滿家の方は、彼れが生前に、彼れの財産の全部を小供の教育費にかけて了つた。其れがために、彼れが天年を終へる頃には、彼れの手には幾何の金も殘らなかつた。隨つて、是等の三人の子供は無資産で世の中に出たが、彼等はいづれも自分の實力に頼つて獨立して世渡りの出來るものとなつて居たから、彼等は、各奮鬪して、後には、彼等の父にも勝る金滿家になつた。

是れは、リストが眞の富は現存の富の量ではなくして、未來に向つて富を作り出す力であるといふ眞理を例證するために語つて居るものであるが、是の喩へ話しは、彼れが考へて居たより一層深き意味に於て、一國に取つて、眞の産業、若しくは、眞の學問の如何なるものであるべきかを例證して居るとわたくしは思ふ。

わたくしは、この節に於て、わが國の産業と學問とは神話である、今日の狀態では、到底、神話の域を脱することは出來ない所以を論じて見たいと思ふ。固より、近世生活に於て、産業と學問との間には、極めて密接な關係はある。然し、其の內容から言へば、産業と學問とは決して同一のものではない。たゞ、わが同胞が其等のいづれをも神話化する態度と經過とには、全然、兩者に共通するものが多いから、こゝには、兩者を總括して一所に論ずることとするのであ

る。

產業にしても、學問にしても、其れが眞のものであるか、假り物であるかを批判するに一つの標準がある。其れは、眞に自生的（self-generating）となつて居るか、どうかといふことである。この標準に依つて批判する時、殘念ながら、わが國の產業と學問とは、兩つながら眞の物ではなくして、假り物であると言はなければならないことを、わたくしは悲しむ者である。

或日、小學校にかて四五の兒童が敎師と共に卵の半熟を作る實驗をして居た。そして、何分間、何度の熱湯で煮れば、どの位の半熟になるかといふことを研究して居た。さうすると、其の中の一人の女兒が急に叫び出した。『そんな事は料理の本にみんな書いてあります。わたくしは、こんな面倒臭いことをするのはいやです』と。そこで、敎師は、その料理の本は始めどうして出來たかといふことを諄々として說いてきかせた。それで、女兒もやうやく納得して、再び實驗を續けたといふことである。產業や學問に對するわが同胞の心得には、大分この女兒の心得に似たところがある。彼等は、おのれの生活を中心とし、おのれの思索を方便として、おのれの身邊を取り捲く材料を支配することに依つて、新らしき產業や學問を作り出さうと努めないで、他人が彼等の材料を中心とし、彼等の思索を方便として、彼等の身邊を取り捲く材料を支配した結果として出來上つた他人の產業と學問とに賴り、一向に、其等の利用のみを努めて居る。わが同胞の產業と學問に於ける資產は、採用の資產であつて、自生の資產ではない。

わが同胞は、理論としては近世の產業と學問とは等しく實驗に依つて發達して來たことを知つて居る。そして、彼等自身と雖も、實驗と稱するものに從事して居る。然し、彼等の多くは、既成の様式を辿つて其れの證據を求めて居るのに過ぎないのであるから、その實、實驗（experiment）ではなくして、論證（argument）に過ぎない。實驗は新らし

い生活法であり、論證は古い生活法である。實驗は新らしい材料を新らしく統一することに依つて、新らしい法則を見ださうとし、論證は新らしい材料を古い法則に下屬せしむることに依つて、古い眞理を維持しようとする。隨つて、實驗に依つては、欲求は解放される。論證に依つては 其れは安定は得るが、緊束される。もと、生活の解放を目的として起つた產業と學問とは、獨り、實驗に依つて生長するものであるのに、彼等は徒らに論證に依つて其等を死物として維持して行かうとするのである。こゝに、產業も學問も、生活の欲求を離れて、神話と化することになる。

成る程、統計の上だけで見るならば、わが國の產業が短かい歲月の中に、長足の進步をなしたことをわたくしも認める。然し、それは、大體、量に於ての進步であつて、質に於ての進步ではない。應用の進步であつて、創造の進步ではない。この間の大戰中、獨逸の、及び、其の他の西洋諸國の製品が東洋諸國の市場へ輸出が中絕されたために、其の際に乘じて、わが國の製造所は頓に增設せられ、わが國の製造品は急に增殖されたのであつた。是れは、何もわが國の製造品が、その品質に於て優良であり、其の價格に於て低廉であるがためにさうなつたのではなくして、たまたま、卓越者の抵抗がなかつたためにさうであつたに過ぎない。戰勝國たるわが國が、こゝ五六年に亙つて、これとて、何等の名指さるべき發明も、改良もないのに、戰敗國たる獨逸は、あの轗軻、困頓の際に於てさへも、いろいろの重大なる發明や改良があつたと言ふではないか。文化の道程に於ては、戰爭に於ける敗北は一時である。產業に於ける勝利は永遠である。彼我の產業の狀態が今日のまゝである限り、わたくしは猶ほ、獨逸を勝利者と認め、わが國を敗北者と認めざるを得ない者である。

見渡すところ、造船、紡績、製鐵、電氣、飛行機、其の他の種々の產業に關する製造會社にして、一つでも、わが同胞に依つて創造された方法と技術とに依つて、その業を營んで居るものがあるか。其等の總べては、悉く外國より剽竊

された方法と技術とに依つて營まれ、そして、時々に彼の土に於て著想される發明と改良との刺激の一つをも取り殘さざらんとし、取り損はざらんとして、日夜、汲々として居るだけではないか。

或る人は、わが國に於けるこの狀態を辯護して、其れは、わが國が產業に於て、後進の國たるためである。西洋に於て發達した產業の方法と技術とを取り入れ始めて、まだ五十年前後にしかならないといふかも知れない。わたくしはこの辯護者の意見に同意することは出來ない。わが國の產業がかゝる狀態にあるのは、そして、一層悲しきことには、(今日のまゝでは)殆ど無期限に、かゝる狀態に止まる徵候を呈して居るのは、年數より來たつて居るのではなくして、其れを取り上げる心掛けと、理會とより來たつて居るのである。五十年の歲月は決して短かいとは言はれない。わが同胞の心掛けにして、理會にして、もつと實驗的のものであり、もつと試驗的のものであつたならば、必らずわたくし共の生活と環境とを標準として、何か、獨自の、そして、一層優秀な方法と技術とを著想し得、創造し得たに相違ない。つまり、わが國がかゝる狀態にあるのは、新たに取り入れた產業を、たゞ、全體的に知覺として取り入れたゞけであつて、一旦、それを分析して概念と化し、而して後、其れを取り入れなかつた當然の結果である。

學問に國境なしとは、よく俗人の言ふところである。然し、是れは、語つて、其の當を得たものではない。この見解が正しとするためには、たゞ、如何なる種の學問を、如何なる側相で取るかといふことが、先づ決せられねばならぬ。學問は、其れが如何なる種のものであつても、或る國民の中の或る個人があつて、これまで、其の國民が彼等の經驗を統一するに用ゐ來たつた方法を取り上げ、更に其れを合理的に、經濟的に、組織した體系に他ならない。普遍(Universals)といふやうな一見莊嚴な名稱で呼ばれて居るものでも、畢竟するに、さうして出來た概念、即ち、生活の方針であることの外に何物でもない。隨つて其等の眞理性は、獨り、其等が彼等の生活の統一に應用された上の效果に依つての外定

まるべきものである。然し、事實として、他の國民と雖も、人間であるところから、自然に、類似の欲求を有ち、類似の經驗を開展して居るために、さきの普遍者は、尠なくとも、其等の或るものは、矢張り他の國民に取つても普遍者即ち、彼等の生活に取つても經濟的にして、且つ、合理的なる概念、言ひ換へれば、生活の方針として現はるるのである。

然しながら、一層嚴密に事實に就いて言へば、學問の種の異なるに隨つて、其れが他の國民に對して有ち得る共通性と、妥當性とは異ならざるを得ない。生活に於て比較的に恒久の性質を有つた側相に關する學問は、比較的に變化し易い側相に關する學問よりも、一層かゝる共通性と妥當性とを有つことになる。斯くして、現に星學や、物理學や、化學は、心理學や、倫理學や、社會學よりも、一層かゝる共通性と妥當性とを有つて居る。星學や、物理學や、化學でも、其れが始めて學問にまで組織される當時に於ては、其れの組織の方針となるものは、たゞ、其れが經濟的に、合理的に、生活に役立つといふ一事に限られて居るのであるから、其れの體系の可能性は一つに限られたことでなくして、幾つもあり得る譯である。さうであるから、若し二三の異なる國民が、互に何等の交渉なく、同一時に其等の種の學問を組織し始めたならば、同一程度に、經濟的に、合理的に、生活に役立ちながら、可成り違つた體系が出來上がり得ることも容易に想像出來る。

然し、いづれの種の學問にしても、つまりは、生活の方針の輪廓に過ぎない。其れが實際に生活に役立つには、其れを役立てる場合と、個人との特殊の要求に應じて、特殊に個性化されなければならない。其れで、いづれの國民にしても、他の國民に先立つて、可成り便利な樣式に其れを組織するものがあれば、彼等、自身は新たに其れを工夫するよりも既に工夫されたものを便利として使用することになるのである。或る種の學問が有つて居ると稱せらるゝ共通性と妥當

性とは、端的に、赤裸々に見られた時、畢竟、この事實に過ぎないことがわかる。

然し、この事實より容易に推測され得なければならない通り、或る種の學問が生活に於て、一層個性的の、一層精神的の、一層特殊の歴史と關聯して發達し、そして、一層特殊の義務や、趣味に順應して變化する側相に關するものになると、異なる國民の間に、其れの共通性と妥當性とは、だんだんと尠なくなる。美學や哲學はこの種の學問に屬する。如何なる國民に依つて、如何なる文化の下に涵養せられ、發達した學問の種でも、苟くも其れを參照するといふ意味に於て、わが同胞の生活を自由にし、豐富にするものならば、わたくしは彼等にさうすることを推奨し、鼓吹する。然し、わたくしは、さうする前に、彼等に總べての種の學問の成立と本質とを説明して置く必要があるやうに感じられる。彼等がやゝもすれば今、日僞して居るやうなことを繼續し、考へて居るやうなことを繼續して行く間は、未來永劫、わが國に於ては、眞の意味の學問の存在し、學問に關する眞の知見の出現する機は來たらないとわたくしは信ずるからである。

彼等は、今日に至るまで、餘りに久しく學問を神話と化し、たゞ、神話としてのみ其れを使用して居た。もう、其れを科學として利用し、運用し始めてもよい時分ではないか。

九、神話としての宗教

わたくしは正に神話としての宗教の論議に入らうとして居る。然し、讀者の或る者はこの標題を見ただけで、『其れは既にトオトロジカルである。宗教は神話である、尠なくも、其れの發展した、若しくは、洗練された様式の外、何物でもない。さすれば、宗教が現に神話となつて居るにしても、其れは、宗教の缺陥と認めらるべきものではない。斯くの如きは無益の言である、』といふかも知れない。然し、わたくしには、決して、そんな議論をこゝでするつもりは毛頭な

い。わたくしの趣旨は別にあつて、其れは、多少、世人の參考に價するものであるとわたくしは信ずるのである。

宗教が其の始め、(今日、わたくし共の有てるあらゆる生活の機關、例へば、科學や、藝術の如きものと等しく、)神話より進化して來たものであることは、事實である。然し、人間の智力と德性とが進むに隨つて、其れが洗練されると同時に、他の機關に對して密切なる交渉を生じ、夙に、一次的の意味に於ては、神話を以て目すべからざるものとなつて居ることも事實である。わたくしが、こゝで、主として考察しようとしてるのは、二次的の意味に於て、神話に墮しつゝある宗教に關してである。

わたくしが今日の宗教が神話になつて居る、それが生活に於て神話の傾向を馴致して居るものとして、其れを非難しなければならない理由は、其れが、最惡の物質主義に陷つて居るがためである。然し、このわたくしの非難は宗教の信奉者に取つては、破天荒の意見と聞えるかも知れない。何故なれば、彼等の想像では、今日、世間は滔々として唯物主義に趨りつゝある。その病弊を矯めるのが、宗教の有ち得る唯一の使命であるとして居るからである。彼等が眞にさう考へて居るからして、始めて、わたくしもこの言說を試みる必要があるのである。されば、彼等は、宜しく虛心坦懷、如何なる事由に基いて、わたくしは、今日の宗教が神話となつて居ると見るかに就いて、わたくしの釋明を聞くべきである。わたくしは、唯物的と、精神的とに關するわたくしの理會より始めねばならぬ。

今日、文人や學者に依つて、最も安價に用ひられて居る言葉の中に、唯物的、精神的の二つがある。然し、是等の言葉が、彼等に依つて用ゐられて居る時に、何等の限定された意義を有せず、たゞ、前者は卑しむべく、後者は尊むべきぐらゐのものとして、極めて漠然と、讀經的に、高吟的に、用ゐられて居るに過ぎない。一體、生活の事實に憑據して、前者は何を意味し、後者は何を意味すべきであらうか、意味するものと取らるべきであらうか。

人間の經驗に入り來たるものは、(こゝでは、其の理由を細論する手數を取ることは出來ぬが、)其れが人間の經驗に入り來たるといふ單純なる理由よりして、嚴密に言へば、純乎として、物質たる對象もないし、又、純乎として、精神たる對象もない。總べての對象は、悉く、一部分物質的であつて、一部分精神的である。然し、こゝには、姑らく俗人の考へ方に一歩を讓つて、わたくし共の欲求に入るに先立つては、純乎たる物質がある通り、又、純乎たる精神があるとする。そして、(例へば、)金錢、財貨、宮室の如きものは前者に屬し、友誼、慈善、愛國の如きものは後者に屬するとする。さう無理な假定を許したところで、是等に對する欲求が起つた時に、是等はたゞ其の欲求を滿たすの材料となり、若しくは、條件となるに過ぎない。そして、眞の實在するものは是等のものが欲求に依つて取り入れられる瞬間の體驗に過ぎない。さうすると、欲求の材料たる、若しくは、條件となるものは、どんな種のものであつても、其れが體驗されて眞の實在となつた瞬間に於ては、全然、同質のものであつて、其れは、悉く、心的であり、靈的であらねばならぬ。金錢、財貨、宮室も、友誼、慈善、愛國と等しく心的となり、靈的となつた上でなければ、體驗されたる事實とはならないのであつて、其れの存在は假定の存在たり、二次的、三次的の存在たるを免れない。そして、如何なる種の材料、若しくは、條件にしても、其れの體驗だけが價値あるがために、人間に依つて欲求されるのである。隨つて、個々には、それ、ぞれ、絶對的の價値があるのであるから、材料、若しくは、條件の種類に依つて、直ちに、其等の間に、價値の高下をつけることは出來ない筈である。まして、善惡の差別を立てることは出來ない筈である。

して見ると、若しわたくし共にして、物質的と精神的との二つの言葉を使ひ、其等を生活の事實に當てはめて、其等をして、眞に價値の標準たらしめようとするならば、其等は欲求を滿たす方法、若しくは、樣式に關するものとしなければならない。そして、物質的とは、生活に分裂を來たす風に欲求を滿たすことであつて、精神的とは、生活を統一す

る風に欲求を滿たすことであるとしなければならぬ。かうすることの外に、わたくしとしては、どう考へても物質的と精神的との言葉に合理的の意義の與へやうはないのである。さうすると、物質的、精神的といふ言葉は、たゞ、副詞として使はれて、始めて意味を有ち得るもので、普通に使はれて居るやうに、形容詞としては何等の意味をもなさぬものである。わたくし共は、或る欲求が物質的である、若しくは、精神的であるとは言へない。たゞ、わたくし共の言ひ得ることは、或る欲求を物質的に滿たす、若しくは、精神的に滿たすといふだけである。

今、わたくしは、この意味に於て、宗教はわたくし共の生活をして物質主義に陷らしむる媒介となつて居るといふのである。どうしてさうなつて居るか、どうしてさうなつて居ると見なければならぬか。

理想とは生活を改善しようとする欲求の謂である。この意味に於て、宗教は理想の最も自然な、最も端的な表現である。宗教は藝術や科學が生活の方便となつた以前に於て、生活の方便であつたために、是等のものに比して極端に實行的である。宗教が極端に實行的であるところから、宗教は其れに特有の特徴を有つことになつた。この特徴とは、其れをして知力の所産たるよりも、想像力の所産たらしめたことである。

人間には、一つの恒久的の欲求があつて、是れはあらゆる欲求を總合し、統卒して、其等に最後の意味と價値とを與へて居るところのものである。其れは他でもない。彼れが如何なる境遇に置かれ、彼れの實際に使用し得る方便が如何に貧弱に限られて居る時でも、尠しでも、苦を去つて樂に就かうとする欲求が、卽ち、是れである。

自然の機構は複雜を極め、其れのはたらき振りは微妙を極めて居る。長い間の失敗と苦痛とに依つて訓練された知力を俟つにあらざれば、其の機構とはたらき振りとを理會して、其れを支配する方便を工夫することは困難である。然し、彼れの理想は極めて氣短かである。彼れは、彼れに幸福を齎らす環境を實現するために、そんなに悠然と十分に訓練さ

れた知力のはたらきを待つわけに行かない。そこで、彼れは知力の代りに想像力を用ゐて、想像上に於てだけ効果を有する方便を工夫して、環境の改善を圖らうとするのである。こゝに、豫言や、奇蹟が信仰に於ける儼然たる事實となるのである。されば、或る學者は次ぎのやうに言つて居る。『豫言の價値を、其れが實際の事實に依つて充たされるか、どうかを吟味して、定めようとするのは愚である。實際の事實に依つて充たされゝば、其れは、已に豫言ではなくして、歷史である。奇蹟の價値を、其れが眞實に病氣を癒やす効力があるか、どうかを試驗しようとするのは、愚である。ルルドの水を分析した結果に依つて、其れの神威を信ずるならば、其れは、已に、奇蹟でなくして科學である。』と。如何にも、其の通りである。事實に依つて、充たされるか、否かに拘はらず、豫言を信じ、眞實に病氣を癒す効果の含まれて居るか、否かの證明を俟たずして、奇蹟を信ずるのが、宗教に特有な信仰の特色である。それほど、宗教の形を取つてはたらく理想は、强烈に實行的である。かゝる信仰が行はれ、多數の信者を得た時代に於ては、無論、其れがあつた方が、なかつたよりも、人間の幸福に取つて利益であつたことは言ふまでもない。然し、長い經驗と、試驗とに依つて吟味された時に、斯く想像力に依つて生活を統一するよりも、知力に依つて其れを統一する方が、長い間に取つて、一層多くの滿足を齎らす道であることを悟つて來た。それで、政治や、産業や、藝術や、科學は、宗教に代つて生活の方針を計畫することになつた結果、宗教は、たゞ人間の性情を陶冶して、宇宙に對し、人類に對して、一致の情操を涵養する道具だけとなつた。然し如何にしたならば、この情操が完全に涵養され、宗教が眞に生活に幸福を齎らす道具となるか。この目的のために、現在の宗教の信奉者は、如何に宗教を考へ、如何に其れを宣傳して居るか。こゝが、わたくしの疑惑の存する處である。

彼等、宗教の信奉者は現代は物質的になつた、それ故に、其れを精神的にせねばならぬと言ふ。文字の上だけでは、

わたくしも彼等のこの意見の孰づれにも同意する。然しながら、物質的なるものの意味に關する理會と、隨つて、其れを精神的にする方法とに至つては、わたくしは全然彼れの意見に同意することは出來ない者である。

わたくしの解釋に随へば、物質的であるとは、わたくし共の活動の中に矛盾のあり、不調和のあることを意味するに過ぎない。既に、政治や、産業や、藝術や、科學はわたくし共の生活の本質として宗教に代つて其れより分化し、發展して來たのである。嘗て、生活に對して宗教の滿たした役目が漠然であつたために、其れに慊らず、其れを一層正確にするために、是等のものが宗教より分化し、發展して來た以上は、宗教の有つて居た關係的意義をも、それぞれ、分受し、更に其れを一層强烈にして居らねばならぬ、そして、事實、さうして居るのである。されば、若し現代が物質的になつたならば、即ち、わたくし共の生活の中に矛盾や不調和が見出だされるならば、其れを精神的にする方法は、即ち、其等を改整し、調和する方法は、政治や、産業や、藝術や、科學を洗練することに依つて、其等の有てる關係的意義を醇化することとの一つに限らるべきである。

然し、宗教の信奉者の意見に依ると、政治や、産業や、藝術や、科學は、其れ自づからに關係的意義を有たぬ。現代が物質的になつたのは、たゞ、是等だけをしてわたくし共の生活を管領させたからである。隨つて、是等に關係的意義を有たしめるには、全然、是等のものの外にあり、上にあつて、是等のものに君臨し、光被する宗教の感化に俟たなければならぬといふのである。

『余はプレトオを愛す、されど、一層、眞理を愛す。』わたくしは、人間に依つて工夫された總べての他の機關を尊重すると等しく、宗教を尊重する。然し、其れに、わたくしが無限に愛し、且つ敬する人類の幸福を增長するやうに役立つて居るといふことが、假定される限に於てのことである。正直にわたくしの欲望を告白するならば、其れは、人類が宗

數を有たずして、たゞ、政治や、産業や、藝術や、科學に依つて生活し、是等のものの中に、彼等の要求する一切の詩と、光明と、歡喜との見出だされる時代の一日も速に來たらんことである。然し、彼等が、猶ほ、力弱くして、本質的に彼等の生活を組織する政治や、産業や、藝術や、科學の外に、上に、宗教がなくては生活出來ないといふならば、彼等の幸福のために、彼等が其れを有つことにわたくしは反對はしない。

傳說に據れば、神はおのれの像に似せて人間を作つたといふのである。が、其の實は、人間がおのれの像に似せて神を作つたのである。そして、神を作ることに依つて、彼等は、彼等の生活の中に一層の滿足を見出だしたのである。彼れは、その後になつて、おのれの像に似せて政治を作り、産業を作り、藝術を作り、科學を作り、其の他、いろいろの物を作ることになつた。そして、是等のもの丶はたらきは、神から、其れの存在の必要の大部分を取り去つた。然し、膚淺の感情と、生氣を失したコンヴェンションとの囚となつて生活して居る或る人々は、まだこの道理を悟るに至らない。尙ほ彼等は死者の形骸の中に、頻りに生者の靈を求めて居るのである。

この機運に方つて、宗教の信奉者が、世人に對つて宗教を鼓吹するには、二様の心得が考へられ得る。其れの一つは、政治や、産業や、藝術や、科學に依る生活が物質的である。どんなことをしても、物質的たる以外に出ることは出來ないとして、其等に精神的の意義を與へる宗教を賦加しようとすることである。其れのも一つは、賢い醫者が衛生に對して取る如く、どこまでも消極的の態度を取り、だんだんにおのれの機能を減却し、其等の作用を强烈にすることに依つて、生活を精神的にすることゝである。どちらの方法も、生活を精神的とすることを名として居るが、眞に其れを精神的として居るのは、（さきに、わたくしの與へた物質的精神的の劃義に随つて、）後者だけであつて、前者は反つて其れを一層物質的にして居るのである。然し、不幸にして宗教の信奉者が、世人に對つて宗教を鼓吹して居るのは、悉く前者に

依つて居るのである。

わたくしが、今日の宗教は人間の生活を精神主義に導かない、反つて、物質主義に陷れて居るといふのは、かゝる理由に基いて、立論されて居るのである。其れは、宗教の神話化でなくして、何んであるか。

十　結論として、諸種の「運動」の精神の改造を講ず

一見したところでは、わが文壇は前代未聞の隆盛を極めて居る。そこには、實に、千紅、其の美を爭ひ、萬紫、其の妍を競うて居るの觀がある。然し、一度其れの實質を考査するに及んで、其の思操の淺薄にして、其の知見の到徹を缺くのに驚かざる者が一人でもあるであらうか。

わたくしは、今日、總べての樣式を以て現はれる文學上の作品を一括して、三種の文章に分類することが出來ると思ふ。叙述の文章と、激勵の文章と、批判の文章とが、即ち、其等である。叙述の文章は知覺に依つて書かれたものである。激勵の文章は情意を以て書かれたものである。そして、批判の文章は理智を以て書かれたものである。叙述の文章は、たゞ、知覺に依つて、接續する、若しくは、繼續する出來事を描寫するものである。激勵の文章は事件の傾向と志向とを無視して、一つの空想、若しくは、理想を鼓吹するものである。獨り、批判の文章だけが、汎く、深く、經驗に含まれた意義を捕捉し、其れの價値を鑑賞して、細心に、然し、勇敢に、其れが醇化と改造とを圖つて居るものである。不思議なことには、わが文壇に於ては、叙述の文章と、激勵の文章とだけが餘りに多くして、批判の文章の尠なきに過ぐることである。

批判の精神は、カントが彼れの『純理批判』の一冊に依つて、其れの大切なることを叙說し、證明したのを俟つまで

もなく、現代生活の精髄であり、柱礎である。現代生活は、獨り、批判の精神に依つてのみ統一され、發展され得る種の生活である。それであるのに、どうして、わが同胞の生活だけがこの精神を理會せず、この精神に依つて啓明されることになしに、斯くは繼續して行くのであらうか。わが文壇に於て、批判の文章の極めて尠なきは、畢竟するに、わが同胞の生活に於て、批判の精神が存在せず、はたらいて居らない事實の反映であり、象徴である。

今日、わが國に於けるほど目まぐるしきまでに、謂ふところの『運動』が唱道され、又、其等が急速に新陳代謝して居る國はないであらう。然し、其れが取り上げられるのにどれだけ問き動機があるか。其れが見捨てらるゝのに、どれだけ深き理由があるか。『樹は其の實に依つて知らる。』其等の運動を通じて、わが同胞の理會と覺悟とに於て、大して賢くならないのを見ても、其の動機の問さの程度と、其の理由の深さの程度とが大抵測定されるではないか。つまり、是等の運動は、ただ、衝動に依つて取り上げられ、好尙に依つて見捨てられて居るのであつて、批判に依つて選擇され批判に依つて醇化されて居るのではない。

眞の運動(movement)はいつでも、(文藝復興や、佛蘭西革命が其の範を示す如く、)單に動搖(Com-motion)でなくして、進運(Pro-motion)でなければならぬ。然し、是れは其の運動に對して內發の要求があり、明晰なる理會があつて、始めて、實驗され得る事柄なのである。

わが國に於て起る運動の殆ど總べてが、その刺激を外國より受けて、始めて起ることは、如何にも心細き現象であると言はねばならぬ。國際聯盟の運動の如きは、列國間の合意と協同との上に成り立たなければならないものであるから已を得ないとしても、純乎としてわが同胞の內生活の改善に關する運動に至つては、せめて、其等の一つや、二つぐらゐは、外國よりの刺激を俟たないで起つてもよささうなものと思はれる。

思想運動とは蒼生の理想より、刻下の要求に合するやうにわたくし共の生活の方針を改造するの運動であり、勞働運動とは、正義の觀念より、わが勞動者の生活狀態を改良するの運動であると、わたくしは解して居る。して見れば是等の運動がヴェルサイユ會議の開かれてより、急に慌てゝ着想され、着手されたのも、些しおかしな話ではないか。思想運動の起るのは、西洋の文化の形體が輸入されて、其れの精神が十分に會得されないためである。勞動運動の起るのは、西洋の大工業制度がわが國に採用されて、勞動者の生活が漸く壓迫されて來たためである。されば、是等の運動の所縁は、十年、二十年、三十年の昔より、だんだんに醞釀されて來て居たのではないか。そこに、いろいろ、不都合なことの推積されて居たことは、ヴェルサイユ會議が開かれる前でも、何人にも氣付かれねばならなかつた事柄である。

一層惡いことには、深識あり、遠慮ある人士に依つて、(勿論、斯くの如き人士はいかなる場合にも、其の數に於て尠ない如く、この場合に於ても、其の數に於て極めて尠なかつたが、)特に研究され、警告されて來たに拘はらず、彼等の研究や警告は一向に等閑に附して來ながら、其の質に於て、さきの人士の論議よりも一層劣れる意見でも、其れが、一度鳴り物入りで思想運動だとか、勞動運動だとかいふ銘打つて唱へ出さるれば、開闢以來、始めてそんなものに接したかのやうに、騷ぎ立てることである。文藝復興の意義を理會し、其れより起つた文化の傾向を理會する者に取つては、わが同胞に依つて新らしい運動として考へられて居る是等の運動は、其の實、彼等の理會して居るよりも、更に更に甚深の意義ある、然し、古い運動の二側相と考へらるべきではないか。わたくしは、彼等の態度の輕佻に驚き、彼等の理智の混沌を悲しむ者である。

一體、圍碁の對局に譬へれば、いつでも先手を打つて居るのは西洋の諸國であつて、後手を打つて居るのは、わが國である。よくよく、西洋の苦勞し、失敗した後を釋ぬれば、わが國とてたまには先手の打てないことはないのに。西

洋に於ては、既に資本主義や、侵略主義や、軍國主義が、その百弊のために、漸く世人に依つて批判され、排棄されようとして來た日に於て、始めて其等を、然かも、全然摸倣の精神を以て、後れ走せに採用して居るのが、わが國の爲體である。然し、廢藩置縣の大英斷を實行し、市民平等の大理想を宣言した後になつて、御苦勞にも、新たに華族の制度を設けた國民である。この間の歐州戰爭の最中、勘しく獨逸側の旗幟の鮮明なるを觀て、わが國に於ける將來の教育の方針は、宜しく軍國主義であるべしと、眞面目に議決したやうな國民である。ジエムスを大哲人として歡呼した舌の根の乾かぬうちに、何等の矛盾をも感ずることなく、平然、タゴオルを大救世主として隨喜した國民である。諸の設備と計畫とに於て、常に西洋諸國の後塵を拜して居るのも當然だと思ふ。然し、わが同胞は、いつまで、かゝる不聰明な態度と、不澄明な理會とを續けて行くつもりであるか。

物を其れがあるまゝに見るといふことは、正しく、そして、善く生きることの第一條件であるに相違ない。然し、物を其れがあるまゝに見るとは、どうすることであるか。さうするには、どういふ準備と覺悟とが必要であるか。あるまゝにして置いては、物は何等の組織も、何等の意義をも有つて居ない。つまり、そこには、物と名付けらるべき何物もないのであつて、たゞあるものは、模糊たる暗示を含む混沌たる刺激だけである。わたくし共の生活の要求を標準とし、わたくし共の實力を以て、其れを統一し、醇化して、始めてそこに、わたくし共に取つての物が生ずるのである。されば、物をあるまゝに見ることは、被動的な知覺の仕事ではなくして、活動的な、理想的な、概念の仕事である。こゝに、眞に、物を其れがあるまゝに見ようとして、天才と凡人との差別が生じて來ることになる。この理由からして、西洋人に取つてのあるまゝの物は、必らずしも、わたくし共に取つてのあるまゝの物ではない。西洋人に取つてのあるまゝの物は、西洋人の要求と、實力とに依つて作り出したものである。其れを取り上げて、わたくし共に

のあるまゝの物とするには、新たにわたくし共の要求と實力とに依つて、其れを改造し、再造せねばならぬ。是れに於り返へして言ふが、知覺的の事件ではなくして、概念的の、理想的の事件である。然し、こゝにわたくしが語る言葉の意義を理會する者が、理會しようとする者が、わが同胞の中に幾人あるであらうか。

わが國は、現にかゝる狀態にあるのである、わが同胞はかゝる態度を以て生活しつゝあるのである。誰れがわが國を指導するか。誰れがわが同胞を啓發するの任に膺たるか。

キリストの弟子が彼れに對つて、彼等の中で誰れが最も大なる者であるかといふ問を發した時に、彼れは『汝等の中で最も善く汝の兄弟に事へる者が其れである』と答へたのであつた。こゝにもキリストは道德の事件に關して、非凡の天才であつたことを示して居る。わたくし共がつきつめて道德生活の永遠の法則を考へる時、そこに最も偉大なる者は最も善く協同生活に奉仕する者であることを會得するに至るのである。然し、キリストは如何にすることが最も善く奉仕することであるかを說かなかつた。わたくしの考へるところでは、世の中に奉仕しようとする志を抱く人は、案外に多い。たゞ、彼等は奉仕する道を知らないために、奉仕するの志を抱いて、其の志を實現することが出來ないのである。

刻下のわが國に於て、奉仕するの道は、最も善く奉仕するの道は、一理を說いて其れを神話としないやうに說くのみならず、其れを說くことに依つて、多くの神話を生活に還元せしむるやうに說き、一事を行つて、其れを神話としないやうに行ふのみならず、其れを行ふことに依つて、多くの神話を生活に復歸せしめるやうに行ふことであるとわたくしは考へる。

苟くも、わが日本にして、世界の文化王國の一員として、永遠に亘つて其れに特殊の意義と價値とを寄與して行かうとするならば、わが同胞の總べては、一日も速かに斯く說き、若しくは、斯く行ふ人とならねばならぬ。

農村に於ける地主對小作人爭議

法學博士　堀江歸一

農村の爭議

從來我國に於て勞働爭議が起ると云へば、其れは工業主と工業勞働者との間に限られて居つた。工業は今日專ら都會で經營され、又時に地方郡村に工業が經營されることがあるとしても、其工業が或る程度まで發達すれば、昔日の郡村を化して、今日の都會たらしめることとの關係から、勞働問題は多くの場合に於て、都會殊に大都會の出來事であつて、時に足尾とか、日立とか釜石とか云ふやうな僻遠なる鑛山所在地に起る狀態に居つたし、今日に於ても亦同樣である。成る程地方に依つては、農業勞働者に不足を告げて來たとか、作男の給金が騰貴し、然も彼等の働き振りが鈍つて來たとか云ふやうな話は耳にするが、其勞働者が團結を設けて、雇主である地主や、小作人などに向つて、運動がましい手段に出たと云ふことは、之を耳にしない。

然らば地方の農村は全く平和の狀態であつて、何事も從來通り行はれて居るかと云へば、決してさうではなく、一種の爭議が、流行し、蔓延しつゝあることを否定するを得ない。其れは地主と小作人との爭議であつて、今や小作料の高低に就て、爭端を開きつゝある。如何にも兩者の間に於ける爭は隨分昔から行はれたに相違ない、曩日農村から選出した所謂義士仁人の如きは、多くは憫れむ可き小作人の狀態に刺戟され、地主に對抗して、彼等の橫暴を掣肘する爲めに、奮起するの常であつたが、然し斯の如きは特別非常の場合であつて、概して云へば、農村は平和の天地であり、都會の勞働爭議を他所に見るの趣を示したのである。

然るに何事であるか、近頃に爲つて地主對小作人間の爭議が盛に起り、兩者の關係の紛糾することは、殆ど都會に於ける工業主對工業勞働者の關係に異ならない。固より地主と小作人とは資本家對勞働者の關係に居るものではなく、寧ろ資

業者の關係か、有産者對無産者の關係かに立つものであつて、隨つて之を農村の勞働問題とすることは出來ないが、一面から見れば都會の工業勞働問題に刺戟されて、農村に地主對小作人而爭議の釀成され來つたことも、爭う可からざる事實である。のして爭議は略ぼ全國に及んで居るやうであり、現に私が此論文の腹案中に配達された大阪每日新聞(大正十年十月二日)を讀むと、「大阪府下三島郡松春日村大字下穗積の小作人數十人は同村地主總代某に對して、今年の稻作不良を言ひ立てゝ年貢米の減額を申出で、地主の承諾が得ない爲めに、斷然耕作の返還を申出で、且つ肥料代の代償を請求し、紛議を重ねて居る」と云ふ記事があり、又其前日の東京朝日新聞夕刊には「埼玉縣大里郡佐谷田村小作人二百八十四名は十一月一日地主を訪問して、小作料の輕減を嘆願したが、交渉不調に終り、小作人等は或條件を提出して、事件の解決を待つことゝし、其間各自の子弟をして小學校を同盟休校させることを申合せた」と云ふ記事に接した。斯の如く關東にも關西にも日を同じうして、同樣の爭議の起ると云ふことは、如何に此種の事件の全國的であるかを示すに足るであらう。然し全體から云ふと、東北方面に少なくて、關西方面に多く、關西方面でも、愛知岐阜三重大阪方面に多いものゝやうに觀察される。

小作爭議と時代思潮

斯の如く地主對小作人間の爭議が地方に蔓延し、其勢に於て、工業に於ける勞働爭議と相讓らざるものゝあるに至つた原因は何れに求む可きであらうか。私は其原因の一を以つて、時勢の潮流之を然らしめることに存するものと認める。封建時代から、地主と小作人との間には、多年を通じて、主從の情誼の存して居つたことゝは、之を爭うを得ない。或る小作人が一の大地主の下に於て、小作を行つて居るとすれば、之を行うことを以つて、一身の光榮として、地主に多大の恩惠を感じる、一方に地主も小作人の一身は勿論、其一家の生活まで引受けて、保護の任に當る者で、子々孫々の末まで世話をしてやる、卽ち一世二世の緣は愚か、末代までの緣を結ばうと云ふ情誼の掬す可きものがあつたのである。斯る情誼的關係を以つて、經濟問題を律することは、果して一部の論者の主張する如くに正しい、又賢い道であるかどうかは、之を論じない、假に之を正しい、又賢い道であるとしても、事實に徵すれば、地主と小作人との間に於ける主從關係などゝ云ふような所謂良俗美風は漸次廢頽し、消散して、今や地を拂はんてしつゝあるのである。地方に依つて、事情に多劣の相違はあるであらうが、尙ほ多くの地方

を通じて、近時の趨勢として、著しく吾人の眼底に映ずる事實は、一地方の地主が組合を組織して、各自の利益を防衞しようとすることである。即ち斯る地主組合の目的とする所は一に小作人に對抗して、彼等に壓迫を加へようとする一事であつて、例へば組合に屬する地主が小作料の引上げを要求した場合に、小作人が之に應じなかつた場合には、地主は小作人に向つて、土地の返還を命じ、斯く還付された土地は他に小作人を求めるなり、又は自作をする、而して斯る一地主の命に服しないような小作人に對しては、同一組合に屬する他の地主も亦決して小作を營ませないこと丶するから、斯る小作人は事實に於て、處拂ひに處せられると同樣の制裁を蒙るのである。之を恐れて彼等は泣く〳〵地主の横暴なる要求に服さゞるを得ざるに至るのであつて、此點は恰も工業勞働者が「ブラックリスト」や「ボーイコツト」に苦しめらるゝ趣を一にするのである。

斯る勢の下に於ては、小作人の方でも之に對抗して、小作人組合を組織するのは、必然の成行と認めなければならぬ。小作人組合は組合の力を以つて、何事をするかと云へば、小作料の引下げを地主に要求するか、然らずんば地主の行はんとする小作料引上げに反對するか、孰れの場合に於ても團體の力を用いようとするのであつて、組合に屬する小作人が地主の爲めに不利な取扱を受けたとか、又は自分の要求を貫徹させることの出來なかつたとかつたとか云ふような理由で、土地を地主に返還したならば、組合に屬する小作人は何人も代つて斯る土地を耕作することを敢へてしない、若しも地主が他の地方からでも小作人を見出して來ようならば、其新なる小作人に對して、腕力其他の制裁を加へて、小作を斷念させる手段に出る。即ち工業勞働者の事業主に對する鬪爭手段として慣用する「ストライキ」とか「ピケッチング」と云ふようなことも、亦地方の小作人の行ふ所と爲つたのである。

地主の對土地觀念

斯の如く考へて來れば、地主對小作人の爭議は事業主勞働者間の爭議と根本の性質に於て、異なるとしても、類似點のあることが理解されるであらう。而して後者が最近時の我國に於て、誠に急劇の調子と爲り、將來益々其勢を加へようとすることが國民思想の變動に支配されて居る如く、前者も亦同樣の事柄に左右されざるを得ない。曩日の如く小作人が地主を主人として、崇めて居る一方に、地主も亦種々の恩惠を彼等に施したならば、問題は餘程緩和される譯であるが、小作人が何時までも斯る奴隷的心情を保つことは、環境の許さゞる所であ

い話が地主の小供も、小作人の小供も、同じ學校で同一の義務致育を受ける、小作人の小供の方が知識に於て、徳操に於て、遙に地主の小供を凌駕すると云ふような事實は常に見る所であり、而して兩者の異なる所は一方は土地所有者であつて、他方は土地賃借人であることに止まり、而して土地所有者の所有に係る土地から價値を生ずるのは、一に小作人の苦心力行の然らしむる所であるとしたならば、小作人が地主に對して對等の考を持ち、出來る限り、自分の權利を主張することを以つて、當然としなければならぬ。

以前封建時代の餘習の殘つて居つた時代には、地主殊に大地主が自己所有に係る土地を利殖の用に供するに就ては、餘程寛大の心を持つて居つた。詰り地主は先祖傳來の土地であるから、自分も手堅く之を所有して居つて、子孫に繼承させる、各種財産の内で、土地は最も確實であり、安全であるから、成る可く土地を所有して置かう、大地主として郷黨の間に處することは一門一家の名譽であると云ふような考が強かつた。私は此考を以つて、至極道理であることゝ思はざるを得ない。各種財産の内で、土地が最も確實であることは論を俟たない。利子とか利子を一つの分子とする利潤とか云ふものが高低するに就ては、種々の原因はあるが、危險の存在する有無又は程度が其最大要素であることは、何人も之を認める所であらう。而して然らば放資物として、最も安全であり、確實である土地所有者の如きは、株式の放資とか、工業の放資などに比較して、餘程低い歩合の利益で滿足しなければならぬ譯である。今耕作地の所有から生ずる收益は凡そ何分位の利廻りに當るであらうか、日本勸業銀行が大正八年四月調査した反當りの利廻りは左の如くであると云はれる。（十月二十七日東京朝日新聞所載安東友哉氏論文參照）

	價格	純收益	利廻	計算に用ゐたる米價
田	四六九圓	三三、九八圓	七分、九二	三五圓
畑	二四九	一五、四〇	七、一〇	同

利廻りの七分九厘二毛乃至七分一厘は三十五圓の米價を基準として、計算したものであつて、米價の高低に依つて、相當の變動の伴ふことは免かれないであらう。然し假に右の程度を以つて立論すると、七分以上八分の利廻りは成る程危險の多い放資に比較しては、低いとも見られるが、危險の少ない放資例へば公債に比較すれば、大分高いし、先づ社債券と同等の程度に居るのである。而して社債券と土地とは利廻りに於て、略ぼ同一であるとしても、其所有者に與へる價値に就ては、二つの點に就て、大なる相違の存することを認めなければならぬ。其一

つは社債券は短期の存在を本色とし、幾年かの後には所有者は元金の償還を受けなければならず、隨つて其賣買價格の如きも、額面價格以上に騰貴しないことを以つて、原則とするに反し、土地に至つては、時勢の進歩と共に、多々益々地價の上進を來して、底止する所を知らない、即ち土地所有者は地價の騰貴に依つて、利益を占めるを得るのである。第二に相違する所は社債券所有者は其之を所有して居るだけでは、單に一個の金持ちたるに過ぎず、社債を發行する會社の營業に對しても、何等の權限を持たないが、土地所有者は地主として地方の尊敬を受け、公民權を持ち、市町村議員にも爲れば、貴衆兩院議員にも爲り易く、富貴と權勢とを把握するに難しとしないとしたならば、利廻りの如きは、餘程之を低い所に置いて、滿足して然る可き筈である。然るに世間普通の利廻りに比較して下位に居る場合に、之を普通の程度まで引上げようと焦り出して、小作料の引上げを要求するに至つては、餘りに我慾の旺盛なることを暴露したものと認めざるを得ないのである。

土地の利廻は低きが當然

地方の地主が斯の如く目前の商業主義に支配されるに至つたに就ては、有力なる原因がある。近年諸地方に於ては、土地の賣買盛に行はれる。大地主として名聲を天下に知られて居るような人であれば、無論土地を賣放つようなことはなく、機會あれば之を買入れるであらう、斯くて土地兼併の風を生じることは勿論であるが、同時に純然たる都會の資本家であつて、地方に土地を買入れる者も多いようである。或は自分の出身した郷里に於て、大地主と爲り、斯くて郷閭に名聲を高めようと云ふ虚榮心から來て居る場合もあらう。然し此外には純然たる商業上の打算から、土地に放資する者もある。土地に放資して、利益を擧げようとするならば、幾年かの後に於ける地價の上進を待つとか、都會附近の耕作地でも買入れた場合には、宅地に變換される時期の來るのを待つのが至當であるのに、是等の土地所有者は將來に於て、斯る大なる利益を獲得することを夢みると同時に、現在に於ても、土地に放下した資本から相當の利廻りに當る利益を搾取しようとして已まない。狹義の利殖的見地から打算し、遠き將來の大なる利益よりも、目前に於ける小なる利益を確實であるとして、之を尊ぶと云ふ點から見たならば、一部の土地所有者が土地に對して、斯る態度を持することも、敢て怪むに足らない。殊に都會の資本家が地方の土地に放資した場合には、所謂不在地主即ち「アブセンチー、ランドロール」トであつて、土地の所在する地方の事情などは、殆ど之を眼中に

置かない。差配人を地方に置いて、土地の管理を託する場合もあらうし、又仲小作人の制度の設けられる場合もあらう。其孰れを以つてしても、小作人が地主の爲めに、其負担し得られる程度に於て、高い小作料を徴收されることは、何としても免かれ難き勢であつて、此一事も確に爭議を誘致する原因たらざるを得ない。既に一部分であつても、土地所有者に此風があるとすれば、次第に他に悪感化を及ぼし、一つの流風と爲ることも亦自然の勢であつて、地主對小作人の爭議が關東や、關西に多くて、東北に少ないと云ふことも、斯る關係から說明を下し得るかとも思はれる。

小作人の向上心

小作人は一生小作人であることは、昔から定まつた運命のようである、曩日の小作人が今日の地主と爲る場合があるとしても、其れは他郷に流寓して、何か利益の多い企業に從い斯くて獲得した資金を以つて、鄕里の田園を買つたとか、又は米國に出稼ぎに行つた子弟から、意外に巨額の送金を受けて、之を資本として、地主に爲つたとか云ふような稀なる場合であつて、小作人から一躍地主と爲るが如きは、事實に於て不可能であり、兩者の間には、踰越す可からざる溝渠の深いものが橫はつて居り、隨つて階級的反感の生ずることを以つて、勢の[illegible]れ難き所とするのである。以前は時に小作人が竹槍蓆旗で全村切つての憎まれ者である地主を襲擊すると云ふ事はあつても、其れは極めて稀であつた。然るに今日は兎に角世人の注意を惹く程に爭議の頻繁に爲つたのは、何故であらうか。其原因は外でもない、昔日の小作人は忍從を道德とする多年の因襲に屈服して居つたのに反して、今日の小作人は此因襲から脫却しようと焦つて居ることに歸する。昔の小作人と雖も、衷心から斯る因襲的道德律に服從して居つた次第ではない、彼等に服從を强いたのは、矢張り經濟上の關係に存することを知らなければならぬ。即ち往年の小作人は自分の成育され、又小作を行つて居る土地を離れては、生活を營むことが甚だ困難であり、又何としても一旦小作を許された土地に縋り付いて居るの外に、生活の道を知らない者もあつたのである。然るに今日は如何であらうか。關東や關西の小作人中、果して小作地を耕作するだけを唯一の仕事として、生活を營んで居る者があるかと云へば、斯る者は寧ろ少數の例外であつて、其多くは賃仕事を引受けるとか、子弟を工場に遣るとかして居り、副業に於て繁昌を告げて居る。私は大正九年夏關東機業地の經濟事情を視察する爲め、桐生、足利、伊勢崎、前橋等の町村を巡歷したが、當時最も著

しく私の注意を惹いたことの一つは是等の機業地に於て、盛に賃機制度が行はれて居り、附近の郡村には勿論他縣の農家に至るまで、盡く賃機を引受ける爲めに、機業全盛時代には大なる利益を地方小作人の婦女に與へたと云ふ事實であつた。固より機業には經濟社會の景氣の好惡に依つて、盛衰のあることを免かれず、賃機だけで全家の生活を支持するだけの安定を得ることは困難であるとしても、或る場合には小作人たる一家の主人の收入よりも、副業として賃機に從つて居る妻や娘の收入の方が遙に多額に上る事實の存する以上は、此一事が自ら小作人をして一の小作地のみに執着せしめない理由と爲ることは、論を俟たない。

之に加ふるに小作人の子女は都會に奉公に出たり、工場勞働に入つて、自然に農村に對する親しみを失ふ、其子弟も亦徴兵で都會生活をした後には、都會で自立の計を爲す念こそ強く爲れ再び草深い郡村に歸農して、父兄の仕事を助けることを好まない。是れは近頃我國でも頻に憂慮されて居る問題であつて、兵卒の歸休制度など緩和の道を求めるやうな計畫もあるが、兎に角農村の青年子弟を吸引することに就て、都會の持つて居る力は餘程大なるものであつて、徴兵制度の如きは、單に此力を强める一助たるに過ぎない、人に功名心があり、而して農村の如き古風の秩序が備はり、又物資其ものゝ少なく、才能を練磨する機會の乏しき爲めに、一旦小作人の家に生れた者は生涯小作人の家に果てなければならず、隨つて功名心を滿足させる道がないとしたならば、何で地方の青年子女を農村に留まらしめるを得るであらうか。此頃の小學讀本には間々地方で何か相當の事績を殘した人々の傳記やうの話も揚げられて居るが、私共の教育された當時の小學讀本で修身の教材として擧げられた人物は何れも大都會に於て、身を立て、家を興した所謂偉人英雄ばかりであつた。斯う云ふ讀み物が地方の青少年に如何なる感化を與へるかは、別に申すまでもなく、彼等を驅つて、第二世の偉人英雄たる目的の下に、早く郷里を棄てしめるに止まるのである。

農業勞働者の不足

左ればこそ、我國に於て近年小作人が最も苦しんで居るのは、小作に要する勞働力を如何にして得るかと云ふ問題である。我國現行民法中、親族に關する規定の如きは、如何なる束縛を設けても、我國古來の家族制度を維持して行かうと云ふ極めて古風なる立法者の意見に基いて居るものと見へ、一家の戸主に重大なる權限を與へて居る。即ち一家の家長は戸主であつ

て一方に戸主の親族として、其家に在る者や、其配偶者は家族であるが、家族は戸主に對して、從屬的關係に居らなければならぬ。即ち家族は戸主の意志に反して、其居所を定めることが出來ない、若しも自分勝手に居所を定めた場合には、戸主は相當の期間を定め、其指定した場所に、居所を轉ず可き旨を催告するを得ると云ふが如きは、戸主を中心として、家族なるものを維持して行かうとする趣意に外ならない。即ち、一家族に屬する者をして志を一にして、戸主を助けしようとする精神が包藏されて居るものと認められる。此規定を農事經營上に適用したならば、小作人の如きは、勞働者の供給に苦しまない譯である。即ち頑冥なる家長が絶對に戸主權を振廻して、家族を私有財産視し、幾組もの家族を一軒の家に同居させ、家族中の男には野良仕事をさせ、女には養蠶炊事裁縫は勿論、野良仕事の手傳ひをさせ是れで家の爲めに、當然の義務を盡させたとする、幼年時代に家長に養育された恩返しをすると云ふ趣意で、世間普通の勞働賃を拂はないで、家族の勞働力を搾取することは、如何にも家長に取つては好都合に相違ないが、實は法律を枷として、一種の奴隷制度を行はうとするものに外ならない。奴隷制度類似の制度を文明國の民法に設けて置くことの可否如何は姑く措き、幾ら、我國の民法が斯る規定の下に、家長に向つて、家族を支配する大なる權能を與へて置いたとした所で、實は次第に此法規を裏切つて居る。即ち民法の規定が其通りに假借なく行はれて居るものとすれば、小作人の如きは、餘りに農業勞働者の不足を感ずることのない道理である。然るに此點に於て彼等が苦しむ、即ち一家の家族は永く家長の膝下に居つて、其虐待頤使に甘んじない、自分の妻も子供も盡く家長に奉仕し新家と稱して、納屋の一隅などに收納され、斯くて一生を過すことの馬鹿々々しさに堪へない、少し了簡方の確な者であれば、機會を求めて、他郷殊に大都會に立身の地を築かうとする、家長の意思の如きは、此點に於て家族の向上心を支配するに、殆ど何等の力を持たないのである、斯くて地方の農家は奴隷にも類する、自家に取つて最も廉價なる勞働力を失ひ、一方に普通の作男を雇入れようとすれば、附近に工業が起るとか、或は都會に對する交通が便利に爲つたとか云ふような事情の起るに隨ひ、工業勞働者の賃銀に支配されて、作男の賃銀は昔日の二倍にも三倍にも騰貴する、此れでも何ほ農村に留まることに滿足せず、下級の不熟練勞働者であつても、職工の見習であつても、都會に赴いて生活し、比較的單調であり、又因襲の多い農村の生活から脫しようとして已まない、是れでは地方の小作人などが少々位米價の騰貴で有利な地位に立つように見へた

とした所で、仲々小作料引上の要求に應じ切れるものではなからうと思はれる。私は此頃或る必要があつて、メーヴイア氏の著作に係る露西亞經濟史を讀んだが、其内十八世紀後半の經濟的變動を叙した部分に左の如き一節のあることを見出した。

小作人が農村から工場に吸引され、工場經營者から農村を脱し來つた小作人を自家の下に收容して、彼等を離さない事實は農業的生產の頽廢を招き、地主から勞働者を奪ひ、彼等の收入を減ずるに至つた。大地主であつた貴族は農業と工業とを一手で兼ね營んで居り、兩者の間に適宜勞働者を按排することの出來る爲め、農工二業の間に於ける利害の背馳を緩和するを得た。

工業の起るに隨つて、農業が經營上に困難を蒙ることは、必至の勢であり、我國の農業も今や此時代に遭遇するに至つたものと見る可きである。我國で農業の存立に熱心の餘り、殆ど他を顧みるに遑なき農業學者の某氏は或る公會の席上に於て、我國が兎角社會政策などと稱して、工業勞働者の生活や、操業を保護する爲め、農業勞働者を驅つて、都會に集中させ斯くて農業衰微の端を開いて困まると云ふことを愁訴して已まなかつた。是れは確に一場の虛言とも見られるが、又多大の眞理をも含んで居ることを認めなければならぬ。

小作爭議と政府の責任

地主對小作人の爭議が日に月に劇烈に爲り、眞劍味を加へ來るに就ては、思想上の進步とか、經濟上の變動とか云ふやうな特別の原因の存することを肯定しなければならないが、同時に現在の政府に負はす可き責任の大半の存することを認める。原内閣の成立以來種々の問題が經濟政策の上に行はれたが、其内で終始一貫渝らざる問題は出來るだけ物價を高い程度に維持しようとすることであり、就中米價に對しては、其高低に就て利害關係の大なる地主や、小作人の地方有權者であることの關係から、彌が上にも之を高くして、以つて彼等の歡心を繫がうとして已まなかつた。然しながら人工は總ての場合に於て必ずしも天然の力を左右し得るものとは斷定するを得ない。現に我國米價の如き、最近兩三年の間に於て、非大の高きから、奈落の底に至るとも形容す可き狀態を以つて、時に暴騰し、時に暴落した。而して政府が一時種々の手段に依つて、米價の暴騰を誘つたことが、反動的に其下落を大ならしめたことは、掩ふ可からざる事實であつた。斯る急劇なる米價の騰落が我國民の生上に容易ならざる波瀾を捲き起したことは勿論であるが、就中甚だしき動搖を蒙つたものは地主對小作人の關係であつ

ある。即ち米價騰貴時代には兩者の間に小作料を引上げる議が容易に成立した。殊に米價の騰貴に伴う土地所有の利益の大なることに着眼して、新に土地を買入れた新所有者の如きは、其土地に放下した資本に對する利廻りとか、又は小作人の得る利益の增加額とか云ふやうなものを標準として、小作料を遠慮なく引上げ、他に對して爲す可き範を示したのであらうが、昨今の如き米價が下落しては、如何なる小作人と雖も、一時の人氣に依つて、引上げられた小作料の負擔に堪へられる道理はなく、其引下げを熱望して已まないことゝ爲るのである。固より小作人は純然たる工業勞働者と同一視す可きものではない。土地こそ他人から借受けるが、自ら農具を所有し、肥料を買入れ、勞働者を雇入れて收穫の良否、收穫物の價格に於ける變動に依つて、損得の分岐する危險を荷う者である以上は、一個の企業者には相違ないが、如何に企業者であるからと云つても、政府の途方もない米價政策の爲めに、米價に亂高下を生ずる犧牲と爲つては、決して默して止む可きものではない。斯く論ずれば、今日の地主對小作人の爭議で、地主が小作人の爲めに、苦しめられるのは、何が故であるか、又小作人自身小作料引下げの運動を試みなければならぬ程に、生活上に窮迫が感じるのは、何が故であるかと段々推詰めて行つたならば、私は何としても地主對小作人爭議の誘發される原因の原內閣の不徹
經濟政策に存することを認める。近頃工業に於て爭議の頻發す
る原因を解して、私は原內閣の誤まつた經濟政策の下に、不當
氣の現象の生じつゝある場合に、尙ほ物價騰貴し、生活費は上
して已まないことに歸したが、（中央公論九月號所載現代經濟學說より神戶勞働爭議を批判す參照）、地主對小作人の爭議に於ても、亦其原因を同一の事實に求めものと斷定する以上は、私は何としても原內閣の經濟政策を打破しなければならぬ責任を感じるのである。

政策一新の要

政府は今度小作法を制定する考で、既に其法律草案が世間に公表されて居る。私は本論に於ては之に對して兎角の批評をすることを避けるが、小作料の決定を依然たる當事者の自由契約に一任したことの如き、小作人が小作權を放棄するに就て六個月前の豫告を必要とすることの如き、全文數十個條の規定を通じて、小作人組合を公認する一片の條文すら存しないことの如き、小作審判所と云ふ小作に關する爭議を審査し、之に對して決定を下す可き機關を設け、之に寧ろ過大とも見られる權限を與へながら區裁判所を以つて、之に充て、區裁判所判事に小作審判所の裁判權を賦與したことの如き、私の認めて以つて缺

點とする所であつて、斷る法制を通じて、當面の地主對小作人の爭議に當らうとするが如き思はざるの甚だしきものである。

要するに吾人が今日の地主對小作人の爭議に就て、憂慮に堪へない所は斯る爭議の續く爲めに、地主をして農業よりも、寧ろ工業投資の安全確實なるを思はしめ、一方に小作人をして一家を擧げて、都會に於ける工業勞働者たるの有利であり、且つ愉快なるを感ぜしめ、相率いて農業衰微、農村荒廢を誘致するに至る一事に外ならない。固より國民經濟發達の趨勢から考へると、我國の如き國土の面積の狹隘であり、又農業に機械力の應用される餘地の乏しい國柄に於ては、何時か農業衰微の時期の到來することは、免かれ難き所であるとしても、爭議の爲めに其時機を早めるが如きは、誠に愚を極める話である。私は政府がモツト根本的に米價の平衡を期する政策を施し、地主小作人間に富の分配を公正にする處置を爲し、更に進んでは一部の土地を國家の所有に移すことを以つて、當面の爭議を解決す急務と考へる。工業勞働の爭議に對しても、政府は別に纒るまつた解決法を取らない、農業に於ける爭議をも傍觀する、而して農工二業共に爭議の爲めに、生産力を傷けて國民經濟全體に、有害なる影響を及ぼすが如きは、私の何としても堪へ得ざる所である。地主對小作人の問題は純然たる勞働問題を以つて、之を見るを得ない、然し弱者に對する强者の壓迫であつて、而して政府の爲す所は多く弱者を保護せず、却つて强者を便する傾の著しきを免かれない、斯の如くして社會的正義は果して何れに求められるであらうか、私の敢て問はんとする所である。私は小作爭議の行はれて居る地方を巡歷したい考でありながら、四圍の事情、之を許さないことを遺憾として居ります。讀者諸君の内で、新聞紙上に現はれない材料を私に御示し下されば、私の幸とする所であります。

利潤分配制度と產業民主主義

林癸未夫

一 本論の目的

卒爾に考へると利潤分配制度ほど勞働政策として合理的なものはないやうに思はれる。一事業の利潤の中から、資本家は其投資に對して相當の配當を收め、將來の不景氣や不時の必要に備へるために相當の積立金を控除し、尙剩餘のあつた場合には之を資本と勞働とに對して公平な標準によつて分配するといふことは、確に社會的正義の觀念に合致するものとして、一應何人にも理解され且首肯さるべき主義の上に立つてゐるからである。それにも拘はらず此制度ほど沿革の古い割合に實際に普及せず、絕えず研究の題目とはなりながら、一向世論の定らない題目は滅多にないと言つて可い。惟ふにそれは必ず此制度の理論か實行かの上に、資本家にも勞働者にも又一般の學者識者にも、十分に承服されない何等かの缺陷或は不備があつて、其本來の主義の發現を妨げてゐるのではあるまいか。

かういふ疑問に出發して私が此論文を草するに至つた第一の目的は、過去に於て本制度が如何に資本家、勞働者及第三者たる有識者により論議され評價されたかを究明することによつて、本制度が實際上に普及し得なかつた理由を繹ねることである。それから第二の目的は本制度は過去に於てさうであつたと同様に、將來も到底產業界の一活力たるべき素質を有たないものであらうか。或は若し過去の經濟組織が多少改造されて、新產業制度が實施されるやうになつた曉には、本制度も亦新光明を受けて、大に其眞價を發揮するやうな可能性を有つてはゐないであらうといふことを考究することである。

二 資本家側の推讚

過去及現在に於て、利潤分配制度が常に資本家又は企業家の間に其最も熱心なる鼓吹者を見出したことは爭はれない事實である。例へば獨逸のエナ市の有名なるツアイス工場の管理人で

且利潤分配制度の成功者であつたエルンスト・アツベの說の如きは屢學者の著述の中で引用されてゐる。其大要はかうである。

好景氣によつて營業成績の良かつた場合に、其利益を勞働者に分つといふことは頗る公正であるのみならず、堪能なる勞働者を保有する手段としても必要である。又營業の悲況の時期に於て賃金の引下を行ふことは困難であり、一般に嫌忌せられてもゐるからして、是等の場合に處する唯一の良策は、勞働者の實際の所得を二分して、一部は營業成績の良否に拘はらず增減なしに給與すべき賃金とし、他の一部は其時々の營業成績によつて適宜に加減すべき利潤分配とすることとである。此制度は企業者、勞働者双方の利益を顧慮するものであつて、双方の福利に合致することは明白である。

もつと近い他の例を舉げるならば、日本でも貴族院議員で且二三の大工業會社に重役たる男爵中島久萬吉氏は、大正九年十一月「資本と勞働との調節に就て」と題する意見書を知人に頒つて、産業界の平和を維持するがためには、勞働階級の自覺よりも先づ資本階級の自覺が急務であることを切言し、更に日本の現在の事情から見て、最も適切な勞資の協調策は、利潤分配制度の實施の外にないことを提唱した。而して其最後の一節にはかう述べてある。

利潤分配に對する反對論は從來諸外國に於て、本制度の發達を阻害した原因となつてゐたのであるが、これは事業家並に勞働者の双方が、本制度を以て全然權利義務の問題と解釋するがために起るのである。勞働者側からは利潤の分配に與ることを一種の權利であるやうに考へ、事業家側からは之を一種の義務であると認めてゐるがために、互に複雜なる議論を生ずる所以であるけれども、私は少くとも吾國に於ては、本制度を以て斯の如き生硬なる權利義務の問題としないで、出來得べくんば偏に之を以て事業家の勞働者に對する好意温情の問題たらしめたいと思ふのである。（中略）

資本家は須く自ら進んで其事業利潤の一部を勞働者に割き、勞働者は衷心歡んで其分配に與り、其間相互に何等の無理もなく、何等の拘束もない明々地の境涯に到り得なければ、本制度の本質は到底之を發揮することは出來ない。否、少くとも吾國に於ける利潤分配制度は常に此の如きものたらしめなければならぬ。

これは言ふまでもなく温情主義的利潤分配の提唱である。又一九一七年以降英國海軍省造船勞働局長の職に在つて、勞働問題に就ては造詣の深いサー・リンデン・マカツシー氏は、一昨年『倫敦タイムス』に『産業上の三勢力』と題する一文を寄せ

て、勞資協調の必要を力說したが、其方法の一つとして「賃金」なる語を廢して、「報酬」なる語を用ゐるべきを主張し、更にかう言つてゐる。

報酬は之を普通報酬と利潤分配とに別つべきである。先づ普通報酬によつて十分勞働者をして、其家族の生計を維持し、生活の慰樂と智能の發達とを遂げさせなければ、彼等の友愛的態度を期待することはできない。次に利潤分配の一事に就ては、勞働者は勞力と技術上の經驗とを提供し、傭主は工場と機械と經營上の經驗とを提供し、相俱に協力して利益を擧げて行くに拘はらず、傭主が出來るだけ少い賃金を拂つて、殘餘の利益全部を壟斷することは確に不合理であるといふ觀念を、どんな穩健な勞働者でも持つてゐる。此故に公正なる根據によつて利潤分配を實行しなければ、到底產業界の平和を期待することはできないであらう。

英國現代の最大事業家の一人たるロード・レヴーハームも利潤分配制度の熱心なる主張者であり且實行者である。彼は一九一八年に公にした『六時間制度（シックス・アワース・デー）』と題する著書の中でかう言つてゐる。

利潤分配制度は非常なる「寛大」だとして說明せられ、其背後の人は「博愛家」として喧傳せられたことが屢々あつた。併しそれは全然ノンセンスである。恐らくそれが過去て、本制度をして平均五箇年の壽命しか有たしめなかつた所以であらう。若し或人が本制度を「寛大」若くは「博愛的」なものとして考へるならば、遲かれ早かれ其制度は失敗に歸するにきまつてゐる。吾々は何の通路に浮標を設けたからと言つて、それを寛大だとは思はない。暗礁を示すために海岸に燈臺を建てたからと言つて、それを博愛的とも思はない。吾々は唯それを有益な當然な仕事だと思ふだけである。人をして難船を避けさせることも、吾々の使用人を向上させることも、畢竟生產費低減の手段なのである。吾々は須く本制度に係はる一切の曖昧なる、感情的なる謬見を去らなければならぬ。本制度は唯單に生產上の活動力を增進するがために、傭主と被傭者との關係を一層善良に、正當に、公平にする手段たるに過ぎないものである。

此說は要するに勞資双方の「達觀したる利己心（エンリツブンド・セルフ・インテレスト）」の上に、實利的協調の要を說いたものと解すべきである。次に獨逸における自由主義の政治家にして且工場經營者たるハインリヒ・イレーゼ氏は、一八八八年以來自家の工場で利潤分配制度を實施してゐるが、氏は一九一九年に公にした自著の結論の中でかう言つてゐる。

同じ事業に從事してゐて、等しく其事業の隆盛を希ふべき企業家と使用人とが、互に軋轢するといふことは如何にしても自然の狀態でない。吾等は此鬪爭を避くべき方法を講じなければならない。而して私は其方法を發見した。私の信ずる所では、其方法はあながち成績の優良な會社でなければ行ひ難いといふものではない。即ち其方法とは使用人をして事業の經營及利潤の分配に參與せしめる制度である。傭主被傭者共に本制度の長所を認めて、益々これを實施する途を拓くことは非常に望ましいことである。恐らくは本制度の發達によつて社會の平和を促進し、獨逸國復興の機運を導き出すこともできるであらう。

米國にも右の諸氏と同樣に利潤分配制度を推讃する事業家は決して尠くない。總じて是等の說は、それが額面通りの實價を有するものとするならば、何人も信用して受取ることができるだけの、社會的正義を含蓄してゐるものと認めなければならない。

三　施行範圍の狹小

併しながら吾等が記憶しなければならぬことは、右の如き利潤分配推讃論は、何れの國に於ても極めて少數の事業家の意見のみを代表するものであるのみならず、現に利潤分配を施行しつゝある事業家といへども、必ずしも是等の諸氏と其見解を一つにしてゐないといふことである。何となれば實際百中九十九までの事業家は曾て本制度の施行を企てなかつたのみならず、現に本制度を施行した事業家さへも、其全部が右の諸氏が高唱するやうな社會的正義の觀念によつてしたものと推斷し得べき理由がないからである。

私は右の二つの事項の第一、即ち利潤分配の施行者が極めて少數であるといふことから先づ說明しやう。英國勞働省の調査報告によると、一九一九年十月に同國に現存してゐる本制度實施工場は總計百八十二であつた。しかも同國に於ける工場數は如何に少く見積つても其百倍より少くはない。何となれば英國工業協會に加入してゐる會社だけでも、一萬六千に達してゐるから、假に是等の各會社が平均一箇半の工場を經營してゐるとしても、總體に於ては二萬四千に上る勘定となるからである。而して英國に於て過去一世紀を通じて本制度の創設された數は僅に三百八十で、其内中絕したものが百九十八即ち半數以上に達してゐる。現存制度の平均存續期間は十四箇年で、廢止されたものゝそれは八箇年半、即ち本制度は概して十年内外の壽命しか有たなかつたことが分る。

次に米國に於ては、中央政府の勞働統計局が一九一六年に發表した報告によると、現在數は六十であつて、其內製造工業に關係あるものは三十三であつた。然るに一九二〇年に公にされた同國のナショナル・インダストリアル・コンフエレンス・ボードの調査によると、製造工業における本制度の實施者は四十一で、しかも其內二十三は一九一四年の大戰勃發以後に創設されたものである。同調査によると、十九世紀後半以降少くも四十九の本制度は一旦設けられた後に廢止されたのである。

佛獨兩國に對しては近年の統計が得難いけれども、一九一二年の佛國アルベール・トロムペール氏の調査書には、同年に於ける佛國の現在數は百十四、獨逸のそれは四十六と記されてゐる。

而して是等の諸國に於て、本制度の適用を受けつゝある被傭者の數が幾何であるかは明白にすべき資料に乏しいが、今假に英國のみに就て見ると、前記一九一九年中の本制度施行工場百八十二の被傭者總數は二十四萬三千五十人であつた。然るに本制度は被傭者の勤務期間其他の事項を以て、分配資格に制限を附するのが常であるから、同年中實際分配を受くべき資格を有つてゐた被傭者は、前記百八十二中百五の工場に於て八萬千八百三十三人であつたから、全部に於ては約十四萬餘と推定する

ことができる。而して此數を英國全被傭者數に比較するならば僅に百分の一內外に過ぎないのである。是等の事實によると、何れの國に於ても、現に本制度を施行しつゝある工場主は全體の上からは極めて少數であることが分る。

私は玆に最も人道的なる工場經營者中にも本制度に反對の意見を有する者のあることを示すべき一例を擧げやう。英國に於てキヤツドベリーと並び稱せらるゝ大製菓工場主で、職工優遇の聞え高きビー・シーボーム・ローンツリー氏は、一九一七年二月の『十九世紀及其後』に於てかく論じた。

確に利潤分配制度は資本と勞働との調和に寄與した場合が屢々あつた。併し常にさうではなかつた。元來利益なるものは一箇の集團の努力とは全く懸離れた事情のために、甚しく減ずることもあれば又無くなつてしまふこともある。職工等が非常に忠實勤勉であつた場合ですらやはりさうないである。こんな場合に於て、多數の職工等に裏切られたといふ感じを有たせないやうにすることは頗る難事であつて、却て信賴は失はれ猜疑の念が生ずるは必定である。

又英國工業協會は戰時中に組織された同國工業家の大同團結で、之に加入してゐる會社は約一萬六千、其總資本額は五十億磅に達してゐる。然るに同協會は一九一九年に戰後の産業に

關する各般の問題に就き長文の宣言書を發表したが、それは疑ひもなく英國現代の工業家の與論を代表すると認めて然るべきものである。其宣言書の中に利潤分配制度に關しては次のやうに斷定してゐる。

吾等は資本に對して相當の配當をなし、積立金及準備金として必要なる金額を控除したる後、純益金の一部を勞働者に分配する諸制度に就て考慮した。此種の制度は若干の工業に於ては巧に運用することができるかも知れない。併しそれは又種々なる批評を惹起してゐるものであつて、之を一般に施行することは到底不可能と考へられる。從つて吾等は本件に就ては何等適確なる勸奬をなすことを得ないものである。

上述の事實を綜合すると、吾等は如何なる時期に於ても利潤分配制度の熱心なる提唱者を工業家中に發見するにも拘はらず、大多數の工業家は其提唱に共鳴しないのみか、本制度に無頓着であり或は懐疑的であつたことを確めるのである。

四　經濟的効果の有無

次に私は實際利潤分配制度を實施した傭主が、之を實施するに至つた動機が必ずしも社會的正義の觀念からではなくして、經濟的實利の收得を主たる目的とした者も尠くない、否寧ろそれが大多數であつたと推定すべき根據を明にしやう。

或人は説をなしてかういふ。利潤分配は其動機の如何に拘はらず、資本と勞働との協力によつて生じた利益を、資本と勞働とに分割することを本義とするものである。從つて其目的は利潤を分配するといふことそれ自體にあるのであるから、それから生ずる間接の効果を期待することは、其効果があつてもなくても、畢竟非望たるを免れないと。

併しながら、現實の問題として之を見ると、企業家はかくの如き單純な理論のみによつて利潤分配制度の施行を發意する場合は極めて稀であつたことが分る。彼等は何れも之によつて直接又は間接に何等かの經濟的効果を豫想してゐるのであつて、若し之を豫想することができなければ、本制度の出現は最初から望まれなかつたらうと思はれる。何となればそれは一九一六年米國勞働省が、同國に於て本制度を實施してゐた全部の工場主に對して、之を實施するに至つた動機如何を質問した所が、人道、正義、公平などいふ道徳的の理由を擧げて答へたものは僅に三名に過ぎなかつたことによつて明白である。然らば大多數の工場主はどういふ目的で本制度を實施したかといふと、大抵左の四項中の一項又は數項によるものであつた。

一　勤務の獎勵

二　能率の增進
三　經費の節約
四　勞働者の協調的精神の誘導（若くは勞働組合の攻擊的態度の緩衝）

私は之から議論が少しく細目に亘つて、工場實務に關係を有たない讀者の感興を殺ぐことを虞れるけれども、利潤分配が右の四項の目的に對して、如何なる程度及範圍にまで有効であるかを考究したい。何となればそれは本制度が過去の產業上に有したる作用を知るために必要であるから。

（一）勤續の奬勵

傭主が被傭者の勤續を必要とするのは、勤續其事によつて生ずる積極的の利益よりも、寧ろ不慣れな新參者から蒙むる不利益を免れたいといふ消極的理由に基く場合が多いのである。一職工の辭職によつて生じた空位を補充するために、新に雇入れる職工は、大抵の場合には前の者よりも技能に於て劣つてゐるのが常である。それも、相當の熟練工であれば未だしもであるけれども、若し其作業に無經驗な者でゞもあれば、之を敎育するがために相應の時間と勞力とを費さなければならぬ。又たとひ實力に於て前任者に劣らない者であつても、其工場獨特の操業方法にも慣れ、職長や同僚の氣心を飲込むまでには、相當の時日を要するのが普通であつて、自然其間に所有の能率を十分發揮することのできない場合が多い。曾て米國の一機械工場主は職工一人の更迭によつて生ずる損失を平均百弗と評價した。此損失額は製作品が精巧な技術を要する工場ほど多いことは勿論である。

轉職は獨り傭主の損失であるばかりでなく、被傭者に取つても不利益な場合が少くない。何となれば一方に有利な條件で直ぐ就職することのできるあてのある時でも、甲所から乙所へ移るために一日乃至數日を空費し、其賃金を失つた上、多少の旅費を投ぜなければならぬ。右のやうなあてなしに、一時の感情の衝突などに原因して罷める場合は一層の損害がある。しかのみならず、其間に動もすると一種の惡癖に感染して、前の工場に勤續して居れば當然受くることのできた利益さへも失つて後から其輕卒を悔ゐなければならぬやうな例も決して少くないのである。

右の如く被傭者の勤續は大體に於て總ての傭主の希望する所であるからして、利潤分配制度に於ても多少の勤續奬勵の趣旨を加味してゐないものはなかつたと言つて可い。例へば米國ブルークリンのエジソン電氣會社に於ては、二箇年勤續者に對しては資本金配當率の四分の一、三箇年勤續者に對しては四分の

二、四箇年勤續者に對しては四分の三、五箇年勤續者に對しては四分の四の率を、被傭者の當年該度に於ける給料又は賃金の總額に乘じた金額を分配することに定めてゐる。又ボストンのシムプレックス電線會社は利潤分配を受くる者の資格を二十六箇月以上の勤續者に限り、フラミングハムのデニソン紙器會社は之を五箇年以上の勤續者に限つて居る。此種の制限は殆ど總ての制度に共通の規定と言つて可い。

尤も分配すべき金額が相當多額であるならば、勤續期間に制限を設けないでも、勤續奬勵の効果は自然あるべき筈である。併し如何なる場合に於ても利潤分配制度は、被傭者の賃金が市場の標準以下でないことを前提としなければ、到底何等の効果をも期待することは出來ない。之は米國オハイオ州のシンシンナチ市に於て實際有つた事實であるが、同所に甲乙の兩石鹸工場があつて、甲は利潤分配制度を設け、乙は設けてゐなかつた。當時甲が支拂つてゐる賃金に年末の利潤分配額を加へると確に乙の支拂つてゐる賃金よりも多かつたけれども、單に賃金のみを比較すると甲の方が少しく劣つてゐたために、甲の職工は辭職して乙の方に轉ずる者が甚だ多かつたので、餘儀なく甲も乙と同等に賃金を引上げたといふことである。

要するに利潤分配制度は、賃金が市場の標準を下らない場合に於ては、勞働組合の餘り强力でない地方では、勤續の奬勵策として相當の効果あることは疑ひない。此點に於ては恐らく何人にも異論がないけれども、利潤分配によらないで、同一の若くはより以上の效果を擧げる方法が他にないかどうかは問題である。例へば勤續賞與、賃金定期增給、特別手當等の方法を利潤分配制度に比較して、勤續奬勵策として果してどれが最も有効であるかは容易に斷定し難い。唯利潤分配制度は利潤の有無及多寡によつて、給否並に給額が定まるのであるから、必ずしも常に一定の額を被傭者に支給せなければならぬといふ義務を傭主に課せない點に於て、傭主のためには便利であるといふことが言へる。それと同時に本制度は之を繼續的に且確實に施行するのでなければ其効果は薄弱であると言へるのであるから、詮ずる所は支給の方法と金額とによつて、其優劣を判斷する外はないと思ふ。

（二）能率の增進

利潤の分配は被傭者をして、分配さるべき利潤が自己の精勵恪勤によつて增加することを豫期せしむるがゆゑに、能率の增進上有利であるといふ說は理論上是認せらるべき所であつて、又或條件の下には事實其通りであることも爭はれない。併し此方法は各個人の作業成績を精確に計算することのできない

業務に於て、しかも全體としての能率を之によつて向上せしむることができるといふことを正當に豫期し得るやうな場合でなければ有効でない。何となれば個人若くは限られたる少數のグループの成績を比較的適確に計算できるやうな業務では、成績の優良な個人若くはグループは一般均一的な利潤分配制度よりも、寧ろ直接に且自分等と同等以下の成績の者と判然差別のできるやうな方法に於て、報酬されることを望むのが當然であるからである。從つて傭主としては其個人又は少數のグループのみに對して特別外給をするか、或は奬勵金、割増金等を給與する方法を取らなければ、能率增進の目的に副はないことになるのである。併し又此場合注意しなければならぬことは、或個人又は少數のグループに對して右の如き特別の給與をなす方法は、其等の者をして自己の成績を擧げることにのみ焦慮せしむる結果、動もすれば全體としての作業の調節に惡影響を來すやうな場合がないとも限らないことである。何となれば當今の複雜なる生産組織の下に於ては、同一物品の作業工程は數十種の職工の手を經て初めて完成するものが多いからして、各種の職工が之と連絡ある他種の職工の作業狀況を無視して、單に自分の受持部分のみの作業を進捗せしむる譯には行かないと同時に、或種の職工が如何に努力しても、他種の職工が之と歩調を一つにしなければ到底其成績を擧げることが出來ないからである。

しかのみならず現代の一工場内に於ける各部の作業組織は、恰も人體の如く有機的なものであつて、之を連絡するがためには電氣といふ極めて鋭敏な神經が通じてゐるからして、丁度人間が身體の一部に故障があつても、全身の機能に影響を受けるのと同じやうに、工場の一部の設備に異動があつても、又一部の機械に故障が起つても、それが直に各部、作業能率に影響を及ぼす場合が少くないのである。殊に工場の神經たる電氣に故障のある場合は最も其影響が大きい。又假令是等の機能健全であつても、仕事の繁閑とか、人員の增減といふが如き外來的の理由によつて、作業能率を左右される場合も尠からず有る。從つて個人又は少數のグループの能率を計算すべき標準單位は常に異動するのが當然であつて、しかも適確に其單位を算出することは經驗ある監督者に取つても頗る困難な仕事である。從つて個人又は少數のグループに對する特別給與は、其理由が明確で且公平に行はれなければ、全體の勞働者を統御する上に於て善き効果を期待し難いことを知らなければならぬ。

一工場内に使用する人員が多種多樣な作業に從事するに拘はらず、其製作物は唯一であつて、しかも各種の職工の協力に俟たなければ一つの纏つた成績を造り出し得ないやうな業務があ

る。瓦斯製造の如きは其一例であつて、此種の事業に於ては利潤分配制度は比較的普く普及してゐる。一九一九年英國に於ける本制度工場百五、其規定上利潤分配を受くべき資格を認められてゐる被傭者八萬七百餘人中、瓦斯製造工場は三十、其人員は二萬四千八百餘人を算してゐる。就中有名なるはサウス・メトロポリタン瓦斯會社である。

能率增進策としての利潤分配は損失分配と相伴はなければ、其效果を完ふすることはできないと論ずる者がある。此理論を實地に行てゐるのは米國コネクチカット、ブリッヂポートのバーリッツト木材會社である。同社は若し損失を招いた場合に、其一部を負擔することを誓約する被傭者に對してのみ利潤を分配することに定めて、毎週賃金支拂の際其一部を控除積立てしめ、利益を生じた時には、其分配額と共に豫め控除賃金を拂戾すこととしてゐる。萬一損失を招いた場合は、控除賃金を以て之を塡補せしめる筈であるが、幸に同社は本制度施行後十數年に亘つてまだ一回だし損失を生じないので、事實損失を分擔せしめた例は未だないさうである。

併し此損失分擔制度に對してはかういふ異論がある。利潤分配は本來利益收得の原因をなしたる被傭者の努力に對する特別の報酬と看做すべきものであるからして、被傭者の過失又は怠慢に原因したといふ確證のない限り、損失を分擔せしめるのは其理由を認め難いと。又かういふ。傭主が損失を招くやうな場合には賃金の引締、不時の解雇等によつて被傭者は既に實質上其損失を分擔してゐるのであるから、尙其上に決算上の損失を塡補するために彼等から支出を求めることは酷であると。又かういふ。會社は其益金の中から、將來の損益を塡補するために、相當の積立金を控除した殘額を以て、利潤分配の基準數字とするのが通例であるから、被傭者は過去に於て當然受くべかりし利潤の一部を割いて積立て置いたも同樣であるから、それ以上新に賃金の一部を返戾すべき理由がないと。斯くの如き反對論の是非は畢竟制度其者の內容如何によつて定まるものであるけれども、何れにしても實際問題としては、被傭者から既拂の賃金の又は利潤の一部を返戾させることは困難であつて、又危險であることを忘れてはならない。

之を要するに能率增進策としての利潤分配は、個人又は小グループの作業成績を比較的精確に計量することのできる業務に在つては、適當なる個人的賃金加給制度に及ばないけれども、さうすることの困難な、又全體としての職工が連帶責任を負はなければならぬやうな業務に在つては、相當の効果があるやうに思はれる。

米國の經濟學者ハツドレー氏はかう言つた「利潤分配制度は米國に於てよりも英國に於て一成功すべく、英國に於てよりも歐大陸に於て更に成功すべき理由がある。何となれば米國に於て勞銀多額である上に、勞働者は十分其能率を發揮して居るけれども、英國に於ては勞銀のみ多くして能率之に伴はず、歐大陸に於ては勞銀少くして能率も亦低級たるがゆゑである」と。亦一理なきにあらずである。

(三)經費の節約

被傭者の力に俟つべき生産費の節約は、主として(一)原料を粗末にしないこと、(二)製品に損傷を加へないこと(三)機械器具の取扱を鄭重にすること、(四)消耗品を亂費しないこと等によるのである。而して是等の四項の實施を奬勵する手段として、利潤分配制度が果して有效であるかどうかは、前節の能率の場合と全く同樣に、被傭者各個人又は小グループの生産費節約のためにする努力の成績を比較的精確に計量することができるかどうかによつて定まるべき問題である。若しそれができるならば、利潤分配を以てするよりも、直接に其個人又はグループに酬ゆることのできる他の制度を以てする方が遙に效果があるに相違ないのである。

併し右の如き個人的報酬をなすことの困難な事業に於て、生産費の節約上、利潤分配が果して有效であるかどうか、茲に申げた米國のバーリツト木材會社及ケンタツキー州ルーキスビルのバラード・エンド・バラード製粉工場の如きは確に有效だと報告してゐる。唯注意すべきは此二工場とも被傭者僅かに二百餘名の小工場であることである。蓋し規模が小さくて被傭者の少さい工場では、個人の注意が工場全體の作業に影響することも大きいのみならず、全被傭者の協同一致が行はれ易いといふ關係上、利潤分配が生産費の節約に有效であることは當に然るべき所である。汽船會社が船員に對して一航海の石炭消費量を標準として、一種の利潤分配を行ひつゝあるのも亦此理である。併し數千數萬の人を使役しつゝある大工場に於ては、利潤分配の制度が果して各被傭者の生産費節約に對する努力を誘ふだけの力を有するかどうかは疑問とせざるを得ない。

高級被傭者例へば支配人や工場長に對しては、利潤分配は確に有效なる奬勵策であるに相違ない。何となれば此種の高級被傭者は、自己の經營又は監督の如何によつて、生産費に影響を與へる場合が多いからである。

五　勞働組合の反對

私は前節に於て論ずべきものを殊更に一事項だけ殘して置い

た。それは利潤分配制度を社會政策的に考察する場合に最も必要な題目である。即ち本制度を「勞働者の協調的態度の誘導或は勞働組合の攻撃的態度の緩衝」策として考察がすることがそれである。

利潤分配制度が此目的に對して效果があつたか、どうかを個々の場所と個々の場合とに就て調査するならば、「然り」と答へ得べき事例は尠くなかつたと想像される。それは何れの國に於ても本制度が、全體からは如何に少數であつても、とにかく若干の工場に於て、若干の年數の間、實施され又されつゝあるといふ事實によつて證據立てられてゐる。何となれば若し本制度に對し一般勞働者の反感が熾烈であるならば、到底數年に亘つて之を實施し得る筈がないからである。

併しながら曾て本制度を圓滿に實施してゐた工場が之を廢止するに至つた理由は、大多數の場合に於て勞働者の反對か、さなくば他の原因による勞働者の同盟罷業に對する傭主の報復手段としてゞあつたことを注意しなければならぬ。前に述べた米國勞働統計局の報告によつて、本制度廢止の理由を答申した工場二十六に就き其理由を分類するとかうなる。

勞働者が本制度を嫌忌したるため　八
勞働者が同盟罷業をなしたるため　五
勞働者が増給を要求したるため　五
勞働者の好意又は能率を増進せざりしため　四
劣等なる勞働者を優遇する結果を見たるため　二
勤續奬勵の目的を達し得なかつたゝめ　一
賃金騰貴のため　一

即ち後半の八つの場合を除いて、他の十八の場合は勞働者の方から積極的に本制度廢止の原因を造つたことが分る。殊に何れの國に於ても、勞働組合の發達するに伴れて、本制度に對する一般勞働者の反感も次第に募つて來たことは爭はれない事實である。それは有力なる勞働組合の幹部が如何なる眼を以て本制度を見てゐるかを知れば山に領解されるであらう。米國の勞資協調會ともいふべきナショナル・シビック・フェデレーションは一九一六年と一九二〇年との兩回に、米國に於ける著名なる勞働組合の首領二十餘名に對し、本制度に對する意見を求めた所が、一人の例外だもなく之に反對の回答を寄せてゐる。今其中から五六の主要な辭句だけを拔萃しやう。

本制度は勞働團體からは餘り重要な問題として考慮されたことはなかつた。私の見る所によれば、若干の傭主は被傭者の賃金を引下げる手段として本制度を設けたやうである。其故に賃金に利潤分配額を加へても、同じ程度の他の工場の賃

金に達せないものがある。吾々が特に注意する所のものは利潤分配ではなくて、公正なる賃金と合理的なる時間と、正當なる作業條件とである。――ゴムパース（米國勞働聯合會長）

私はあらゆる種類、あらゆる名義の利潤分配に反對する。私は只勞働者に公正なる賃金を支拂ひ、彼等自身の利益を擁護することを彼等に許容されることのみを主張する。利潤分配の一切の形式は現金、分配にまれ、賞與金にまれ、株式の低價讓渡にまれ、總て同一の欺瞞に外ならない。――ストーン（鐵道機關手組合長）

私の知つてゐる限りに於ては、勞働組合としても又組合員個人としても、曾て本制度に反對する其態度を變更したことはなかつた。吾々の經驗した所によると、勞働者が組合に加入するならば、利潤の分配を受ける資格を失ふ虞があるやうな事業所に於ては、一層本制度を設けることが困難であつた。――ジョン・フライ（國際鑄物工組合長）

本制度に對する私の意見は終始一貫して寸毫も渝らない。紡績事業界に於ける私の經驗からいふと、それはいつも正當なる賃金の給與をごまかすためか、さなくば組合の發達を妨害せんとする計畫であつた。――ジョン・ゴルードン（聯合紡績職工組合長）

本制度の趣旨に對する勞働組合員の一般的反對の態度は過去數年間にすこしも變更されなかつた。否寧ろ本制度が勞働者の團結を抑制する目的に使用された結果、勞働組合の反對は一層強くなつたといふべきである。私の考へる所では、若し勞働者が團結權を認められ且團體交渉權を與へられるならば本制度に對する反對は無くなるであらう。――ジョン・エー・ヴォル（硝子壜製造職工組合長）

本制度は賃金取得者を欺くため、企てられたものである。若干の會社は最低賃金の代用物として本制度を設けたが、本制度に隨伴する僞善と欺罔との結果として、勞働者は一般に本制度に對して甚だ懷疑的となつてゐる。――ウヰリアム・エチ・ジョンストン（國際機械工組合長）

本制度は徹頭徹尾惡制度であつて、虛僞、欺瞞、略奪以外のものでも以下のものでもない。米國勞働運動の喊聲たる「公正な賃金」と「公正な時間」とのみが、勞働と賃金との問題を解決すべき、男らしき、人道的な、正直な、公平な方法である。――ジョン・フイッパトリック（シカゴ勞働聯合會長）

本制度は傭主が賃金引下の目的なしには決して提議しない

休體條約の如きものである。勞働者は傭主をして正當な賃金を支拂はせるだけの實力を有つてゐる場合でなければ、決して本制度に就き傭主と協定してはならない。――アンドリユー・ゼー・フルセス（國際海員組合長）

英國に於ける最大の勞働首領の一人たるゼー・アール・クラインスは數年前にかういふ演説をした。

勞資共同株式所有（コーパートナーシップ）制度及利潤分配制度は勞働組合からは疑惧の眼を以て見られてゐる。これには相當の理由があるのである。從來本制度を創設したる多數の傭主等は、毫も被傭者等と協議することなく、會社の幹部だけで隨意に本制度を造つて置きながら、勝手に被傭者を「仲間（パートナー）」と呼んでゐた。時としてはもつと惡いことが起つた。傭主等は勞働組合組織を打破る目的を以て、他の工場の同僚から孤立せしめるために本制度を設けたのである。要するに本制度は、強制的仲裁制度と同樣、勞働組合から正式の賛同を得ることのできないものと思はれる。

ウエッブ氏夫妻は『産業民主主義』の中で、勞働組合が利潤分配に反對する理由を次のやうに說明してゐる。

標準賃率其他の條件が明確にきめられてゐなければ、利潤分配を實施してゐる工場の勞働者は、賞與金又は利潤の分配によつて得るよりも、賃金に於て失ふ所が遙に多いことになり易い。併しそれよりももつと強い反對の理由は、特定の傭主を相手として部分的に本制度を實施する結果として、團體交涉權の運用によつて生ずる利益の一致を破壞することなのである。眞實に寛大なる利潤分配制度を施行してゐる慈悲深き工場主に使はれてゐる者等は、其特權を失ひたくないために、賃金値上の運動に參加することを厭ふやうになる。若しさうなると他の一般の勞働者等は有力なる增給運動を行ふことができなくなる。此故に勞働組合としては、かやうな方法によつて傭主が其愛博的精神を發揮されることは、實に難有迷惑であつて、ややもすれば無思慮なる傭主等を防遏すべき勞働者の團結力を薄弱ならしめる虞れがある。

ジー・デー・エチ・コール氏は『産業界の混沌と秩序』の中でかう論じてゐる。

利潤分配制度若くはコーパートナーシップの提案は、傭主が個々の被傭者等に對してでなく、勞働組合又は工場委員會に對して行はんとする場合に於ても、勞働者は之を拒絕すべきである。何となれば此種の制度は勞働者と私有資本主義とを結付けて、全社會のためにする産業自治制の完成を阻害するからである。

啻に英米のみならず、佛國に於ても利潤分配制度はサンヂカリズムを奉ずる勞働團體からは敵視されてゐる。獨逸の勞働團體も亦過去に於ては同樣であつた。一九二〇年三月獨逸政府から發表された本制度に關する論文の中には、次の三つの理由により同國の勞働運動の指導者が本制度に反對したことを述べてゐる。第一に本制度は勞働報酬を增加しないで、勞働者の能率のみを高めやうとする。言ひかへれば本制度は一層資本家をして勞働者を搾取せしめる手段となり易い。第二に本制度は勞働者を或る事業に束縛して、階級鬪爭のための團體組織から遠ざからしめんとする傾きがあるのみならず、遂には其戰鬪力をさへ失はしめる虞れがある。第三に本制度は生產の過剩を來し、經濟界不の況を招く原因となり易いから、却て全體としての勞働者の活生の安定を脅す。

以上述べ來つた所によつて、各國の勞働組合が擧つて利潤分配制度の反對者であることが明白にされた。而して其反對の主たる理由は第一には本制度が勞働組合の團結力を阻害するといふことであり、第二には本制度が標準賃金引下の原因となるといふことである。故に若し此二つの懸念なしに本制度を施行することができるならば、彼等が反對の理由は消滅すべき筈である。

併しながら年を逐うて其勢力を加へつゝある各國の勞働組合が、總て上記の如き反對の態度を變へない限り、本制度を以て勞働者の協調的精神を作興しやうとする僱主の企圖は、到底無効になるの外はないことを知らなければならぬ。從つて彼等の態度を一變せしめて、本制度の實施に左袒せしめやうとする計畫は、先づ現存の產業制度を改造した後でなければならぬことが明かである。

六　第三者たる有識者の觀察

私は最初利潤分配制度に對する資本家側の意向を調査し、次には勞働者側の態度を考察した。私は進んで公平なる立場に在る有識者見の解を質さなくてはならない。

曾て佛蘭西の商業大臣であり、遞信大臣でもあつたボールデロムバー氏は、一九一二年ボールトーに開催された利潤分配協會の會長として次のやうに述べた。

利潤分配は給料に附加さるべきものであつて、給料の一部が塡充さるべきものでない。それは又決して僱主側の恩惠ではなくして、双務的の給付でなくてはならない。それは僱主と被傭者との協調的感情を刺戟して、事業繁榮の責任を分擔せしむべきである。此責任の觀念は工場内に平和を齎すもの

である。もろ〳〵の困難やストライキを防遏するために試みられた種々なる方法の中、利潤分配制度と勞働者の社會的狀態の改善とが、最も有効なる方法であることが分つた。

これと略同じ意見を有つてゐられるものが桑田熊藏博士である。博士は其著『工業經濟論』（大正四年改訂版）の中でかう論じられた。

純益分配制度の利益たる一にして足らず。之を換言すれば勞働問題を平和の裡に解決するには實に完全無缺なるに庶幾し。若し、此制度にして廣く行はるゝに至らば、斯問題の前途敢て憂ふべきものなし。

凡そ私の知見の及ぶ限りに於て、桑田博士ほど本制度を高く評價された學者は、内外に類例を見ない。此放膽なる斷案に對しては私は敢て批評することを避けやう。之に比べると關一博士の見解は餘程懷疑的である。曰く、

要之利潤分配制度は一部の人士が想像せるが如き偉大なる効果を收め得べきものにあらず。此制度が將來尚發展の餘地を有するは疑を容れず。其教育的効果も亦少からずと雖も、此制度が社會的平和に偉大なる貢獻をなし得べきや否やは疑しといふを正當とす。（『工業政策』下卷）

墺太利の著名の經濟學者フィリツポヴィツチ教授も亦熱心なる利潤分配制度の讚歎者である。同教授は其著『經濟政策』に於てかう論じてゐる。

從來利潤分配制度を實施したる企業に就て之を觀れば、該制度は多數の場合に於て其成功を收めたること復た疑を要せざるもの〻如し。而して此に吾人の所謂成功とは他なし。勞働者は之が爲に其作業の結果に對して痛切の利害を感じ、各自其職務に忠實となり、材料器械の取扱其他の點に關して節約を勉むるの念慮を抱くに至れるは其一にして、當該企業と勞働者の結合愈々鞏固と爲り、該企業をして有爲堪能の勞働者を保持するを得るに至らしめたるは其二、而して其三に勞働者をして生活の程度を進め、其家計に一層滿足且一層周到ならしめたることと是なり。此等の効果より企業家の享くる利益の頗る多大なるものあるは勿論の次第にして、企業家と勞働者の間に利益連帶の關係を生ぜしむるの一事の如きは尤も望ましき結果の一に屬せり。然かも此事實よりも一層重大の價値を有する效果は勞働者の地位の上進、其諸德性の涵養、企業の成績に對する共同責任の觀念の發生等なる可し。就中企業の成績に對する連帶責任の觀念の發生は勞働者をして企業指揮者の地位に上るを得せしむる最良の豫習と云ふ可く、從て社會的階級形成の上に於て、勞働者の爲に地位上進の途

を開くの一手段たるべきなり。（氣賀勘重博士の翻譯による）

右のフイリツポヴイツチ教授の說の前半は、之を一般の事實に對する解說として見るならば當らざること遠く、活きた現實に觸れないで、研究室內のみに沒頭する學者の觀察の如何に迂濶なるかを示す一標本である。而して又其後半を本制度の將來に對する理想を表白したものと見るたらば、只改造されたる新產業組織に於てのみ望まるべきものと私は考へる。

現實論として利潤分配の主義を根本的に否認する學者としては英國のシユロス氏がある。同氏は其著『產業報償論』の中で次のやうに論じてゐる。

利潤分配制度は被傭者各自の受ける報酬が、各自の勤勞に一致すべきものだといふ原則に違背するものである。普通の賃金制度の下に在つては、被傭者の受ける報酬は其事業の窮極の損益とは沒交涉である。それは事業上の損益は勞働者の勤怠巧拙によらないで、主として事業主の經營方針の當否によるものであるからである。然るに利潤分配制度の下に於ては、勞働者は、利潤の分配に與りたいために、一割以上餘分の勤勞をしたのに拘はらず、傭主の經營其宜しきを得なかつたために、僅か二三分にしか當らない利潤の分配を受くることもあり、又全く何等の分配をも受けずに終るやうなこともある。

惟ふに事業の損益によつて勞働者に對する報酬を增減するといふことは、本來事業主のみの負擔すべき筈のリスクを被傭者にも分擔させやうとするもので、實に個人間の問題としても甚だ公正を缺いでゐるのみならず、之を社會的見地から論じても甚だ好ましからぬ事態だと言はなければならぬ。

次には本制度を全く實際的方面からのみ觀察してゐる第三者の說を紹介しやう。米國勞働統計局の一吏員エメツト氏は、同國に於ける本制度の調査擔當者であるが、同氏は一九一六年に『利潤分配は果して勞働爭議を解決し得べきか』と題する一論文を公にした。其結論を要約するとかうである。

若し現代の勞働爭議が單に被傭者の所得を增加することのみによつて、解決できるものであるとするならば、現行の利潤分配制度は此解決に貢獻する所が甚だ尠いと言はなければならない。何となれば當今の勞働報酬問題に基因する諸爭議の眞相を善く知つて居る者は、被傭者の現在の賃金に多少の利潤を附加してやつたからといつて、それで以て勞資の協調を維持することができやうとは誰も信じないからである。

又若し勞資の協調が、双方の領解と、相互の信賴とによつて招徠することができるものとするならば、從來の利潤分配制度は此協調に寄與する所が頗る輕少であつたと言はなけれ

ばならない。何となれば利潤分配の實施者と雖も、被傭者を隨意に任免する權利を掌握し、且事業經營上毫も被傭者の發言權を認めない點に於て、利潤分配を行はない事業主と、何等相違する所はなかつたからである。

實際利潤分配を實施してゐる事業主で、勞働組合と好關係を保つてゐる例は絕無といつて差支ない。多年本制度を實施して其成功を誇つてゐる事業主の中には、組合所屬の勞働者を利潤分配者中から除外することを當然の處置と信じてゐる者がある。彼等の意見に從へば「優良なる組合員は劣惡なる協同者である」從つて勞働組合の幹部が極力本制度に反對するのは毫も怪むに足りない。彼等の見る所によると、本制度は總て傭主の任意に改廢することのできるものであるからして、啻に被傭者の所得を不確實ならしめるのみならず、分配額算出の基礎たる決算の作製に被傭者を參加させないために、被傭者はどうしても其分配額が正當で誤算がないことを信用することができない。かくの如く傭主のみの意志によつて勝手に廢止又は變更のできる利潤分配は、被傭者の好感を誘ふよりも、却て彼等の不信猜疑を招く原因となり易いことを思はなければならぬ。

之を要するに現に米國に於て行はれつゝある本制度が幾多の非論理的な內容を有することは爭はれない事實である。併し只それだけの事實によつて、本制度の經濟的價値を全然否定するのは早計である。何となれば經濟界の實相は、常に必ずしも學者や裁判官を滿足させるやうな、論理的な基礎の上にのみ動くものではないからである。惟ふに過去に於ける本度制失敗の原因は、本制度が資本家及勞働者双方の經濟的利己心に訴へる所が餘り少な過ぎたためではあるまいか。言ひかへれば本制度によつて作業の能率と利益とを增進し且被傭者の所得を增加すべき方法が不確實であつたためではあるまいか。

右のエメツト氏の說は大體に於て過去の利潤分配制度を以て失敗の記錄と見てゐるのである。之と同じ結論に達したのが獨逸のルードキヒ・ベルンハルト博士であつた。同博士は一九〇六年に公にした著書の中でかう言つてゐる。

若し吾等が利潤分配制度發達の跡を顧るならば、此主義は常に熱心なる支持者を有つてゐたことが分る。彼等は多年努力して、疑惑の眼を放つ世人の前に本制度の效果を示顯しやうと試みたけれども、今尙決して成功したとは言へない。惟ふにそれは一産業の全體に亘つても、又一地方の全産業に亘つても、曾て本制度の實施された經驗がなかつたからであ

る。要するに本制度の歴史は失望落膽の歴史であつた。

然りこれは失望落膽の歴史であつたかも知れない。併し同博士が其失敗の理由を、本制度が一産業の全體に亘つても、又一地方の全産業に亘つても、未だ實施されなかつたことに歸してゐるのは、私の眼から觀れば本制度將來の新機運に對する一つの暗示であると言へる。

七　過去の暗黑と將來の光明

以上記述した所によつて、私が此論文の第一の目的とした所、即ち利潤分配制度なるものが主義としては尊重すべき社會的正義に立脚してゐるに拘はらず、其實行に於ては經濟的實利の獲得を直接の目的としたがために、啻に其効果を收めることができなかつたのみならず、却て勞働組合の反抗を招き、健全な發達を遂げ得なかつた事情が略明瞭にされたと私は信ずる。今之を要約すると、從來同制度は大多數の場合に於て、勞働者の勤勉を要請することによつて傭主自らが利得するか（其利得の一部を勞働者に割くにしても）或は之によつて勞働組合の敵對的態度を回避する手段として　資本家の側から強ゐて之を勞働者に與へたものであつた。從つて此制度は次の四つの理由によつて勞働者を滿足せしめなかつた。第一には勞働者が自己の勤勉によつて移動率を減じ、能率を高め、經費を節約することができたとしても、事業の經營其者に參加することを許されない以上、原料の購入、製品の販賣其他一般のマネージメントの巧拙によつて左右される營業成績に對しては勞働者は全然無關係の立場に在る。然かも利益の多寡は一般のマネージメントの巧拙によつて甚しく影響を受けべきものである以上、自己の勤勉が自己に報酬するといふ因果關係は本制度の下に極めて不確實であるとしなければならぬ。第二には假に勞働者の勤勉によつて好成績を擧げることができたとしても、其決算の作成は全く資本家又は之を代表する幹部の手によつて思ふまゝに切盛せられ、勞働者には容喙することを許されないのであるから、果して決算面の利益が眞の利益であり、之を基準とする利潤分配額が正當な數字であるかどうかといふことに就て、彼等は常に疑惧せざるを得ない理由があつた。第三には本制度が屢々賃金引下の手段として利用された事實である。傭主の側では賃金引下の外に生產費を安くする方法が他にない場合に於ては、空しく同業者の競爭に打負かされるよりは、賃金引下によつてゞも一時の急を救はうとする。併し無條件の賃金引下では勞働者が承知する筈がないから、儲かつたら後で償ふといふ一種の約束手形の意味に於て本制度が提案された場合が尠くなかつたので

ある。被傭者も一般の不景氣時代には一時已むを得ず之に承服したけれども、原則としては被傭者が確實なる賃金と不確實なる利潤分配との交換を好む理由はないのであるから、少しく周圍の事情に變化が起ると、かくの如き原因によつて出現した本制度は、必ず何方からか撤廢を要求することゝなるのが必然の結果であつた。

第四に是等の原因にも優つて本制度が勞働者から嫌忌された最大原因は、本制度が勞働者の團結力を脅威するからであつた。私は勞働組合の指導者が推斷するほど、本制度の施行者が常に組合に對して惡意を包藏してゐたとは信じない。併しウエツブが指摘したやうに、施行者が如何に寛仁公正の士であつたとしても、本制度が勞働者の團結力に對して確に一種の危險物であつたことは爭はれない。何となればそれは團體交渉の擴充を阻害したからである。團體交渉は言ふまでもなく、或範圍内の勞働者の利害が啻に一致して伸縮されるといふ事實を基礎としなければ成立ち難いものである。而してかく利害の一致する範圍が職業的にも地理的にも擴大すればするほど、團體交渉權が有效に運用されることになり、從つて勞働組合運動が强固を加へるのである。此故に組合運動の發達といふことから考へれば、利潤分配の行はるゝ範圍か、勞働組合による團體交渉權の確保されてゐる範圍と合致する場合に於てのみ之を認容すべき可能性があるけれども、然らざる場合は絶對に之を拒否することが組合運動の團結力を擁護するために必要なる處置とせらるゝのである。組合は其組合員が團體協約によつて決定されてゐる所得以上のものを與へられることも、以下のものを與へられることも、名義の如何に拘はらず之を拒否しなければならぬのである。英國に於てすら今尚屢々見る例は、團體協約以外の年末賞與の類を或繁榮なる工場から受取つたといふ理由で、組合が組合員の或者を除名するため、起る紛擾の絶えぬことである。かくの如き理由で組合の感ずる危險は、工場主が寛仁公正であればあるほど一層大いのである。從つて組合の發達が利潤分配制度の發達を阻害したことは疑ひのない事實であるけれども、其阻害したる主たる理由は、組合其者と利潤分配とが本來の性質に於て相悖るがためではなくして、寧ろ利潤分配と團體交渉權とが相容れなかつたゝめであることを知つて置くことが肝要である。

過去の利潤分配に對する右の如き私の見解が正當であるとするならば、私は自然次のやうな思想に導かれて行く。それは私が此論文の第二の目的とした所の疑問に對する私自身の解答である。

私の信ずる所によると、未來に建設さるべき新社會が如何なるものであつても、そこに勞働と報酬といふ關係があり、産業の收支損益の計算が存する間は、利潤分配の主義は活きて働くべき可能性を以てゐるものである。勿論吾等は賃銀の形に於て支拂はるゝ報酬なるものゝ存せない社會を想像することはできる。又收支損益の計算を必要としない産業を想像することもできる。而して又將來此等のものゝ實現を可能ならしめるやうな新社會の實現を全く豫測し得ないでもない。

併し假にさういふ時代が到來するにしても、現在の社會がそこまで進展するまでには、かなり長い幾段かの過程を經由しなければならぬことは確かである。而して其過程の大部分に於て勞働する者が其報酬を受取り（必ずしも賃銀といふ名目でなくとも、又貨幣といふ形でなくとも）又産業上に收支損益の決算を必要とする期間が繼續することも確かである。少くもかういふ期間が續く限りに於て、利潤分配の主義が産業上の一活力たる可能性は決して失はれたとは言へないのである。

併しながら利潤分配を産業上の一活力たらしめるためには、先づ過去に於て本制度の成功を妨げてゐた上記の諸原因を除去して、本制度のために道を淸めることが第一に必要である。詳しく言へば勞働者をして事業上の損益に對する責任を分擔せしむるために、其經營に參加せしめること、及利潤を分配することが勞働組合の團體交渉權の行使に何等の障碍をも來さないやうにすることが必要である。卽ち一言以て之を蔽へば産業民主主義の樹立といふことが必須要件となるのである。

産業民主主義とは簡單に言へば從來國法の許す範圍内に於て、完全なるオートクラシーを樂んでゐた企業家の産業管理權を、自働的に將他働的に制限することによつて、勞働者が或程度及範圍に於て産業の管理に參與することを意味するのである。其詳細に就ての私の見解は既に之を公にするの機會を有つたから（本年九月中央公論所載『産業民主主義への次の一歩』）玆にそれを繰返すことを避けたい。唯此際の問題としては如何なる形式の産業民主主義が實現せられたならば、利潤分配が其活力を有するに至るであらうかといふことを考究しなければならぬ。

八　産業民主主義の世界に於て

既に私が種々なる機會に於て屢々言明した所の如く、大戰を一轉機として世界の勞資の關係は全く新しい時代に入つた。而して此新時代のあらゆる活動を指導しつゝある中心思想は實に産業民主主義である。從つて利潤分配制度も産業民主主義の光

に浴して新たなる生命を吹込まるべき運命に在るのである。」

併し私は此際、私の常にするやうに、成るべく理論を避けて不明なる事實の上から、右に述べたやうな私の信念を證據立てることゝしたい。さうするには多年利潤分配を呪詛して息まなかつた各國の勞働組合が、或形式及程度の産業民主主義の下に在つては、從來の態度を一擲して自ら進んで利潤分配制度の實施を要請し又は確認しつゝあるといふ事實を指摘するのが、最も簡單な而して適當な手段だと信ずる。

（一）伊太利に於ては舊教を信奉する勞働者によつて組織せられてゐる有力なる一大勞働團體がある。正式の名は伊太利勞働聯合會と呼ばれるのであるが、通常キヤソリツク組合又はクリスチヤン組合の名で通つてゐる、其中堅は農業勞働者（伊太利の農業勞働者は恐らく各國の産業勞働者中最も鬪爭的である）であつて革命的手段によらないで勞働者生活の改善向上を求むることを主義とする諸組合の聯合體である。戰前の會員は十萬内外に過ぎなかつたが、一九二〇年十一月にフローレンスで總會を開いた時は總會員百十八萬と註せられた。以て其勢力の侮るべからざることが分る。

此のキヤソリツク組合は一九二一年の一月、産業管理の新主義に關する長文の意見書を政府に提出した。同組合が之を提出した動機はかうである、前年九月金屬職工の工場占領騷動の結果として、首相の調停により全國主要なる産業を勞資協同管理の下に置くといふ主義が承認せられ、此主義を具體化すべき法律案が、資本家團體勞働團體政府の三方面によつて作製せられた。併し右の勞働團體側の提案はキヤソリツク組合の加盟してゐない伊太利最大の勞働團體たる一般勞働聯合會（略稱シー・ジー・エル）によつて作製られたものであつて、キヤソリツク組合は必ずしも右の勞働團體案に贊同することができなかつた。そこで同組合は自己の立場を明かにするために、右の如き別案を提出する運びとなつたのであつた。（本年八月中央公論所載拙稿「伊太利工場占領騷動及其後」參照）

右のキヤソリツク組合の意見書中、茲に關係のある部分は、一事業場本位の利潤分配を提唱してゐることである。彼等はシー・ジー・エルが即座に全産業の管理に參與しやうとする急進論を主張したのに反して、利潤分配制度を通じて漸進的に會社の株主たる地位を取得し、株主たる資格に於て重役會に割込まうとする方策に出でたのである。今其主要なる事項を紹介すれば左の通りである。

一、如何なる種類の産業でも一つの事業所に屬する被傭者の五分の一以上の者が提案して、三分の二以上の者が贊成し

場合には、利潤分配制度を實施することを要する。但右の表決に加はることの出來る者は、其事業所に三箇月以上在職し、年齢十八歳に達する一般の勞働者、支配人、技師、事務員及其事業を經營する會社の株主とする。

一、每營業年度に於ける利益の中から、先づ拂込資本金に對する法定の利子を支拂ひ、積立金及準備金等を差引いた殘額は株主と被傭者とに分配する。

右の分配の割合は株主の出資金と、當該年度内に受領した被傭者各自（職員及勞働者）の給料賃金とを標準として按分する。

一、右の利益處分案は被傭者から選出する工場委員と、會社重役會との双方から同數の代表者が出て協議會を組織し、其議決によつて定める。

一、株主及被傭者に分配される金額は如何なる場合に於ても利益金の二割五分を超えてはならない。若し此額以上の剩餘利益を生じた場合は之を社會公共の利益のために使用する。例へば製品の賣價を引下げるが如き、或は公益事業に投資するが如き之である。

一、被傭者に分配すべき金額は現金を交附しないで、一株五リラの小株券を特別に發行し、其三分の二に右の分配額を充當し、他の三分の一は各自から現金を拂込ましめて、株主を取得せしめる。此株式は記名式で他人に讓渡することを許されない。

一、右の特別株主は普通株主と一切の點に於て同等の權利を與へられる。從つて取締役、監査役等にも當然選擧權、被選擧權を有する。

右の利潤分配案によつて吾等の知つた所は、勞働組合は一企業所内にあつて其團結權を確保しつゝ、其産業經營に漸を逐うて參加することを許される見込が確實である場合には、利潤分配の實施を歡迎するといふことである。これは必ずしも産業公有を前提とするのではない。又資本主義的生産組織を破壞しやうとするのでもない。唯勞働組合の代表者を工場委員といふ名目の下に利益金處分に參與せしめることゝ、利潤分配によつて自然に取得する株主としての資格を確保することゝ、此資格の行使によつて將來重役として直接産業の管理に當らうといふ希望を有することだけである。産業民主主義としては比較的微温的な形式に過ぎない。それでも吾等はそこに利潤分配制度の新活力を見出すのである。

(二)　一九二〇年三月獨逸政府の勞働統計局から『ライヒスアルバイツブラット』の附錄として『獨逸に於ける利潤分配制度

の研究及提案」と題する長論文が公表せられた。それはブラムステツト博士監修の下に同國に於ける最近の利潤分配に關する論文や、勞働組合の決議や、種々なる方面からの提案の梗概を紹介したものであるが、固より政府の正式の提議ではないけれども、其記述の大體の傾向から推察すると、同制度の社會上及產業上に及ぼす好果を宣傳する目的を以て公にせられたものであることが明かである。

右の論文によると過去に於て同國に本制度が普及しなかつた理由として、次の如く說いてある。

民間事業に本制度を普及することができるか否かは、此問題に對する企業家及勞働者双方の團體の態度によつて定まるのである。然るに從來企業家は理論上の疑惑と實行上の困難とのために、本制度を自己の事業に採用することをさし控へてゐたのである。(中略)

右の如き企業家側の反對論よりも一層憂ふべきは、過去數十年間の劇しい鬪爭によつて、益々甚しきを加へ來つた階級間の反目である。此階級鬪爭のために、現下の社會狀態が一刻も速に社會生活及經濟生活の上に和衷協同を必要としてゐるに拘はらず、事實に却つてかくの如き協調の實現を不可能ならしめてゐるのである。

然らば本制度を實施することによつて、將來に期待し得べき社會上及經濟上の利益を確保する方法は何であるかといふに、右の論文は勞働者の團結が其一つの要件であるとして、次のやうに論じてゐる。

賃金鬪爭の目的は勞働市場の事情をして賃金勞働者に有利ならしめるにある。而して之は又同時に利益分配制度の目的ともなるのである。吾等は勞働者が利潤の分配を受けてゐるといふ理由で、彼等に團結といふ武器の放棄を勸めることはできない。何となれば勞働者の團結は寧ろ利潤分配の要件であつて、若し之がなければ利潤の分配は享けても確定賃金率に削減を加へられ、利潤分配は畢竟空名に歸する虞れがあるからである。而して勞働團體が鬪爭の手段として實力を用ふることは、利潤分配が拒否された場合に始めて許されることであつて、苟くも此制度の實施によつて賃金が增加され維持されてゐる限りは、勞働團體と企業團體との間に、賃金鬪爭は無用無意義のものとなるのである。

同論文は更に進んで、利潤分配制度を以て勞資の關係を完全に調整し、社會共存の理に到達すべき有効なる手段であるとして、次のやうに斷定してゐる。

實に利潤分配制度は從來殆ど全く企業家と勞働者・

を支配してゐた所の社會的對抗の觀念に代つて、之を矯正するがために社會共存（ソリダリテー）の原則を或程度まで體現するものである。若し本制度によつて企業家と勞働者との協力が成立ち、産業分擔の目的が達成せられるならば、社會共存の理想は生産行程の上に立派に實現せられるわけである。かくの如くにして多年資本偏重の下に苦みながら、所謂「商品にまで墮落した勞働」は廢されて、新に勞働者の人格が認められ、曾ては他人のためであつた勞働も自己の勞働となり、自己の創造によつて增殖されるものは、分配されて自己の所有となり、やがて企業家と勞働者との雇傭關係は、完全なる道徳的並に法律的の改善に興進して行くのである。

如何に同論文の筆者が利潤分配制度に期待する所が大きいかゞ分る。同時に吾等の注意しなければならぬことは、獨逸勞働組合の或部分の本制度に對する見解が、近時著しく變つてきたことである。

例へば俸給被傭者組合は一九二〇年二月に宣明した綱領に於て、資本主義的産業制度を排し、從業者の個人的自由と經濟的獨立とを圖るがために、利潤分配制度の適當なる形式を完成するの必要を說いた。

又基督教建築勞働組合中央會の機關雜誌たる「建築勞働組合」は、傭主側の機關新聞が「今後大に利潤分配制度を實施して、企業家と勞働者との協調を計り、生産の增進を期せなければならぬ」と論じたのに答へて、かう言つた。「事業に對する勞働者の興味を起さしめ、共勤勞を增さしめやうとするのは、企業家の好意から出たものではないとしても、利潤分配制度によつて社會共存の思想を鼓吹することは結構である。唯併しながら此制度を實施しても、團體協約によつて定められた賃銀に影響はしないといふ保證を得て置くことである。」

又帽子製造職工の組合は次のやうな意見を發表した。利潤分配制度は勞働者をして事業の技術的方面のみならず、營業的方面にも容喙せしめることを許し、傭主と共に利益金處分の決定に參與する權利を認めるならば、之に反對すべき理由がないと。

是等諸組合の意見よりも遙に重要視しなければならぬのは、一般獨逸勞働組合聯合會（獨逸勞働團體の殆ど全部を包括せる中央聯合團體である）の發表した意見である。その大要はかうである。勞働能率を增進せしめる必要から言へば、利潤分配問題は今後大に論議さるべきものである。しかのみならず經濟界の機運は早晩産業の共同管理組織の發達と、立法的勞働制度の實施とを促してゐるのであるが、恰も利潤分配制度は其進步の

過程にあるものである。何となれば此制度は勞働者を無法と奴隷的屈從とから救ひ出して、傭主と對等協力の地位に上らしめる一手段であるからである。寔に此制度は勞働者をして能率を高め、經費を節約せしめ、企業家をして個人的經營から共同管理に進ましめる階梯であるから、本制度の實施が眞に勞働組合の理想及社會の福利に一致するかどうかは常に研究してゐなければならぬ問題である。從つて利潤分配問題の解決如何は勞働組合の利害に關して頗る重大なる意義があるのであると。

右の勞働組合聯合會の意見は尚多少懷疑的の調子を含んではゐるけれども、多年勞働組合の利害とは到底兩立しないものと考へられてゐた利潤分配に對して、かくまでに愼重た考察を遂げやうとする態度を示してきたことは、之を數年前の過去に比べても、殆ど隔世の感を催さゞるを得ないのである。

然らば何の故を以て獨逸の勞働組合が急に本制度に對する態度を一變するに至つたかといふに、私の信ずる所によれば一九一九年の三月新政府の下に制定された產業社會化法と、及之に連續して制定された石炭、ポタッシュ、電氣等の諸事業の管理法が直接の機緣であつたことは爭はれない。（是等諸法律の内容に就ては本年八月中東京日日新聞に連載したる拙稿『黃化した新獨逸』參照）何となれば是等の諸法律は、其實行に於ては尚不徹底を免れないにしても、主義としては產業の完全なる公有に到達する階梯として、姑く資本、勞働及公衆の共同管理を實施しやうとするのであるからである。

右の如き私の推定を裏書するものは、一九二〇年七月三十一日、第二回產業社會化調査委員會から政府に報告された、石炭事業社會化實行方法に關する多數派の意見が、利潤分配の實施を提唱してゐることである。（本年六月社會政策時報所載拙稿『獨逸炭坑公有新案』參照）右の意見の大要は獨逸全國の石炭事業は今後三十年間を期して完全に國有に移すことゝし、それまでの期間は全事業を炭坑企業者、勞働者、石炭消費者及び公衆の代表者によつて組織せらるゝ經濟的自治團體の管理の下に置き、それから生ずる利益は、炭坑買收資金、使用資本金利子、事業改良費、補塡資金積立等を差引いた後で、勞働者及俸給被傭者に對し、生產額及經費節約額を基準として賞與金を給與すべしといふのである。普通賃金の變形たる賞與金は營業費中から支辨せらるるのが常であるが、本案はそれと異り利益金の處分として、普通賃金に添加さるゝ賞與金であるから、疑ひもなく一種の利潤分配を意味するものと見るべきである。

以上述べた所を綜合して吾等の知り得た所は、勞働組合の全國的團體交涉權確保の上に行はるゝ產業管理權參加の下に在り

ては利潤分配制度が勞働報酬の合理的な一方法として勞働組合側から歡迎されるに相違ないといふことである。

(三) 米國の四大鐵道從業員組合は一九一九年プラム・プランの名を以て知らるゝ鐵道國有案を提唱して、端なくも米國の政治界及經濟界に一大ショックを與へた。其前後の事情及案の内容に就ては私は既に之を公にしたから玆に再說する必要はない。(本年九月中央公論『產業民主主義への次の一步』參照)唯本案中玆に引用しなければならぬ部分は、鐵道の管理は大統領任命の五名鐵道職員中から選出された五名、勞動者中から選出された五名によつて組織される合議機關の支配の下に置かれることゝ、營業利益は之を折半して、一部は政府の收入とし、一部は職員及勞動者に分配することゝ之である。言ふまでもなく本案は最も大規模な且單純な利潤分配の提唱に外ならない。即ち此處に利潤分配は產業國有の基礎的條件として、重大な意義を勞動組合から認められたものであることを吾等は牢記しなければならぬ。しかも本案宣傳の中心人物が、曾て「あらゆる種類、あらゆる名義」の利潤分配に反對を唱へたワーレン・ストーンであることは、寔に興味ある事實ではないか。

(四) 最後に擧ぐべきは、一九二一年の四月から七月に亙つた英國礦坑夫の大ストライキが幾多の曲折を經た後に結局利潤分配制度の施行によつて大團圓を告げたことである。即ち解決條件の中から本制度に關する部分を拔萃すると左の通りである。

一、各地方に於て標準賃金に附加支給すべき賃金は、當該營業年度の總收入金中より左記の金額を控除したる剩餘金の八十三パーセントに相當す金額たるべし。

(イ)標準賃金

(ロ)賃金以外の生產費

(ハ)標準賃金の十七パーセントに相當する標準利益(資本家に對する配當金)

一、若し或營業年度に於ける總收入金中より賃金以外の生產費及標準賃金を控除したる殘額が、前項の標準利益金額に充たさるときは、其不足額は次期營業年度の剩餘金中より眞先に控除さるべきものとす。

即ち此解決案によると、利潤分配とは言はずして「標準賃金に附加支給さるべき賃金」といふ名が用ゐられてゐるけれども、其實質からいふならば、各地方毎に產業上の總收入と總支出の差額として殘つた金額、即ち普通にいふ所の總益金を資本家に一割七分、勞働者に八割三分の割合で分割(但し資本家の方が優先權を有つ)しやうとするのであるから、一種の利潤分配制度であることは些の疑ひもないのである。即ち多年本制度を排

斥することに最も鋭い熱心であつた英國勞働組合中の、最大最强の團體たる坑夫聯合會は、たとひ自らの提案ではなかつたにしても、此利潤分配案を承認して大罷業に解決を與へたのであつた。

今、私は確信を以て最後の結論を與へることのできる時期に到達した。利潤分配制度は過去百年の間晦冥陰欝なる空氣の中に長い旅を續けて來た。それは疲勞困憊してやゝもすれば途中に亡き骸を曝すかとも危まれた。併しながらそれは端なくも大戰終了後の新時代に際會して、玆に始めて青天に煕々たる春の光を仰ぎ頓に共生氣のよみがへるを感じた。恐らくそれは遠からず活潑々地の活動によつて（勿論相當の制限の下に於てゞはあるが）人生の福利に貢獻することができるであらう、産業民主主義の世界に於て。

人間族と文化氣候

杉森孝次郎

人は動物だ。動物中の動物だ。人ほど動く生物はない。人の進化と發達は、動率の增進にある。現代の制度と觀念は、それだのに、人を草木視し、岩石視してをる。その弊がいちじるしい。

人類は、恐らくは一種として發生した。その一種の人類が、移動しては定住し、また移動してはまた定住した結果が、人種と民族だ。地理が、民族と人種の母だ。氣候が人の血を染めた。地理が、言語、風俗、習慣、傳統、歷史の産婆であつた。氣候が、性情を感化し、氣質を養成し、骨格を變生し、皮膚を織りあらためた。地理と氣候が、過去の人類の政治史、經濟史、文化史の大部分を説明する。地理と氣候は、將來の人類の上にも、それほどの影響を必然持つか。當然持つべきか。われらの答へは、當然持つべきでない程度に於いて、必然持たぬ可能があるといふにある。

氣候にも、光熱的氣候がある。風雨霜露的氣候がある。けれども、それらは、氣候の原始的形式だ。氣候は、自然が人に、野蠻人が文化人に成長するやうに、成長する。今日に於いては、氣候中の氣候は、道德的、文化的氣候だ。ヤソ教、佛教、回教、マルクス主義、トルストイ主義、これらこそが、今日の代表的氣候だ。轉じて地理を観る。山川、湖野、津涯を知らぬ海、これらが、過去の地理の主内容であつた。今日となつては、これらは、地理の主内容ではない。今日の地理の主内容は、車路、船路、電路、航空路の備、不備だ。一嶽の兩側に村居しても、墜道もなく、山路もなく、懸崖と榛莽に遮ぎられてゐるならば、一大陸をなかに挾む二人よりも、もしもその二人間に、通信、旅行の便宜さへあるならば、意味に於いては、異城遠國の住民であるのだ。地理は、天然から人工に移り、氣候は、自然から人文に變化する。地理と氣候は、この方向にむかつて、絶えず新たなる時代的改釋をゆるすのだ。

異民族間、異人種間の各別内容と、共通内容とを、現在の事實通りに認識し、それが將來に於いて、われらの理想的見地からして、なるべき通りに要求認識することは、目下の一要務だ。簡短にいひあらはすならば、現存の諸民族、諸人種は、現象を多少各別に所有し、原則を概ね共通に所有してゐるのだ。現象は、感覺、知覺、特殊觀念、ある程度までの類型觀念としての概念だ。原則は理性だ。理性は、數學にも、自然科學にも、藝術の根本義にも、道德の本質價にも、發現する。感覺、知覺、特殊觀念、ある程度までの類型觀念としての概念は、地方料理、國民食物、地方樂、國民藝術、着かた、住みかた、言ひかた、愛しかた、そして、考へかた、信じかた、行ひかたの、ある大いなる部面にさへも發現する。異民族は、また異人種は、しばしば、その「神」をさへも異にする。實をいふと、「神」の相異が、民族別、人種別の、最も悲むべき誇張に甚大の貢獻をする。その「神」が、相當に聰明なものでさへあれば、不聰明な「神」が、民族別、人種別を誇張する消極價を有するが如くに、民族別、人種別を、太陽の前の燭光とばかりに、消滅させる積極價をも有しうるのだ。不幸にして、現在の實情に於いては、その聰明なる「神」も、商業と科學及び藝術に、わづかに内容づけられて來たに過ぎない。

原始的形式に於ける東京の氣候は、單純にして一定してをる。進歩的形式に於ける東京の氣候は、しかしながら、東京のといふ地方的制限を不可能にする。氣候は同じ東京のうちに、露文學の溺愛者もゐるし、佛文學の耽味者もゐる。帝國主義者もゐるし、社會主義者もゐる。文化的氣候は、同じ十五區内の

某々社と某々社との同人や共鳴者との間、某々雜誌と某々雜誌との執筆者や愛讀者との間にも、殆んど無限深に相發してをる。われらは、この文化的氣候に、本質的支配の機會を十分に與へ、原始的氣候には、偶然的從屬の機會を、それに對する完全待遇として與ふるやうに進步すべきだ。文化的氣候は、電氣よりも躍動する。無線電信よりも自由達する。理解と共感と同信の發生するところ、成長するところ、そこに文化氣候は興起する。展現する。洋の東西、陸の南北、これらは、文化氣候形成の學と術にとつて、邪魔にも、援助にもならない。人は、かれが、文化氣候に對する知識眼と感情眼をかすめにぶらすに相應して、自然氣候に鋭感になる。自然氣候の創作としての生物人を憶ひ起こすのだ。疾痛慘苦に遭逢し、窮迫されては、人はしばしばその父母を憶ふといふ。理想が强烈でない瞬間に於いては、原因意識が、その代はりに强烈となつてくるものと見える。理想に代ふるに、原因をもつてするが如きは、恥づべき、あはれむべき代用だ。神學までも、從來のは、過去超在の創造主としての神を信じた。現代人が、すこしまじめになりだすと、民族神、すなはち民族といふ神の信者となることは、決して不可解ではないけれども、悲しむべき通則の一例だ。宇宙は、實在は、すべて將來をさして動く。人の自覺が、既往をさしては、その分にそむく。

民族性や、國民性や、人種性に道德價があるとするならば、それは、われらが、その民族性や、國民性や、人種性を信ずると信ぜざるとによつて生ずる結果の故であつて、現に生じてをる民族性や、國民性や、人種性をして、斯くあるに至らしめた原因の故であつてはならん。將來主義、結果主義が理想の本質だ。それは實に意思の本質だからだ。民族性、國民性、人種性は、然るに、進步的時間の實現に隨つて、極小限になる內外的必然關係を有し、個性と人類性は、極大限になる內外的必然關係を有する。自然氣候に、交通と、印刷と、讀書の發達によつて、勢力範圍をせばめられる。文化氣候は、それらの發達によつて、勢力範圍をひろめる。異民族間、異國民間、異人種間に於ける自然氣候の殊別は、人間や文化の本質價にとつては、その殊別の感化の薰習としての、凝成としての、民族的、國民的、人種的遺傳特質からいうても、またその特別の、現在の經驗的感化からいうても、物の數にも足らぬ些末事となる當然的、理想的運命を持つ。われらは、この運命に十分なる現實的機會を與へねばならん。その方法は、自然氣候を異にして生活する人々が、文化氣候を共にする決意をかためるにある。例へば藝術家は、藝術的理解を異にする同種族人に對してよりも、それ

を共にする異種族人に對して、自信ある友情を示す行動に出づべきだ。藝術家といつたのは、不完全なる實例だ。精確には、道德家といふべきところだ。藝術家も、生產家も、科學者も、技工者も、人といふ人、專門家といふ專門家、職業者といふ職業者は、すべて道德家だ。藝術家は、かれの道德家としての具體的一部分として藝術家であるのだ。

民族別、人種別を、非存在に移す一可能は、雜婚の發達だ。雜婚は、ある水準以上の精神的及び身體的發達を有する一男一女の間には、生物學的に非認すべき方法ではないらしい。雜婚者が、從來の多くの場合に於いて、品性智能の成績に失敗を示したのは、生物學的原因からではなく、社會事情に起因するらしい。民族本能が、なほ熾烈である現代に於いては、そして、國家が、主としては民族的政治團體である現代に於いては、混血兒の受ける社會的感化待遇は不純だ。無統一だ。かれの人格的統一は、かれの人格的個性の統一的成長は、愛鄕心と愛國心の反引作用によつて不可能にされる。鳥のむれからは、獸として他人扱ひにされ、獸のむれからは、鳥として他人扱ひにされる蝙蝠同樣だ。一社會悲劇だ。一社會悲劇ではあるけれども、一生物悲劇ではないらしい。世界の人々が、個性と人類とを、人間の兩極價として、直接に明視し、確信し、體驗する程度に進まば、混血兒の社會悲劇は消滅しよう。混血兒の不成績は、その原因を除去された結果として、なくならう。

しかし、雜婚を、どの程度に奬勵すべきかは、別の研究を要する問題だ。たとひ結婚は同種族内に限られて行はれるとしても、そのために、思想上、道德上、政治上、經濟上の異種族間に於ける結合が不可能にされたり、微弱にされたりするやうな、なさけないことのないやうに、物の本質價と偶然的とを、われらは、識別する、そして待遇別する聰明と品性を持つべきであるのだ。現代人としては、その方の用意を急ぎたい。生物學的には、もしくは人種學的には、純粹の一日本人であつても、或ひはヤソに對し、或ひはカントに對し、或ひはマルクスに對し、或ひはトルストイに對し、或ひは某々科學者や藝術家や、政治家や將軍に對してさへも、その本國人の大多數者に優るとも劣らぬ理解を自信し、體驗してをる現代日本のある個人は、文化氣候を、自然氣候に拘束されずに創造し、保護する努力の價値と可能とを、論人に說き、問發する位置にある。雜婚の價値は、生物學的知識をも多分に參照する必要ある問題だらう。文化氣候の超種族的形成の價値は、文化學的知識だけで完全に了解される問題だ。われらは、この明白に可能な境の實現に吝嗇であつてはならん。

文化氣候をして、自然氣候の上位に立たしめる努力を敗弱にする勢力のうちには、すなはち文化人をして、生物人の目的たらしめる努力を裏切る惡魔力のうちには、闘爭本能がある。闘爭本能は、共和本能と共に、深根柢ある心理だ。最後の計較に於いて、共和本能の方が、闘爭本能よりも一層の深根柢ある心理だと判定されるけれども、闘爭本能の存在も、恐らくは恒久的にして且つ普遍的だ。ただ、われらは、闘爭本能を教化する可能を有する。その方途は、文化價値の本質的優秀、隨つて創造能率の卓越を目的とするにある。及び競戯意識の發達にある。

文化價値の本質的優秀を目的とする方法によつて、闘爭本能を全用することは、生の經濟の最大原則の一に屬すべき重要さを有する。ニーチェの思想に不死の一點が認められるのもこゝだ。しかし、それはそれとして、われらは、競戯意識の將來に、甚深の希望をかける。闘爭に於いては、勝つことが目的だ。競戯に於いては、本質的優秀を實證することが目的だ。共和の精神は、勝敗に頓着なしに維持される。人間らしい生活は、實に、競戯に於いてその最好適例の一を見いだす。卓越を犧牲にせず、それでゐて共和をも犧牲にしない。異民族間、異國民間、異人種間の闘爭本能發現の機會も、今後は、一寄宿舍内の一寮と他寮との間に試みられる競戯同樣の心理に於いてのみ可能とされるやうに、われらは、われら自身を含めての全人類を教化しなくてはならん。

競戯は藝術だ。藝術の一態だ。藝術が不まじめでない故に、競戯はまじめだ。選手及びその團體のまじめさを見よ。競戯が藝術である限りに於いて、競戯は個性を發表する。個性を發表することによつて個性を保護する。實をいふと、競戯でさへも、個性を發表する能率に於いて、比較的に卑近な限度を有する點に、それが眞實の藝術、否なむしろ狹義の藝術にくらべて淺く考へられる弱みを持つ。競戯は、事實、藝術よりも淺いのだ。淺い藝術であるのだ。しかし、闘爭と競戯とをくらべれば、勿論こゝでは、内容に從つてくらべるのではなく、闘爭本能と、競戯本能とを、單なる本能としてくらべるのだが、さうすれば、競戯本能の方が、闘爭本能よりも、遙かに高級だ。上等だ。リファインされてゐる。闘爭本能は野蠻である如くに野暮だ。低劣趣味だ。聰明缺乏だ。粒があらい。纖維がふとい。藝に遊ぶといふ餘裕がない。闘爭本能は破壞的だ。競戯本能は創造的だ。必らずしも非常の高度に於いてでなくとも、本質と傾向に於いて、創造的だ。競戯前の不安、競戯中の眞劍、競戯後の淡懷、しかも、その初、中、終を通じて、共歡交和のの旺然たるを見れば、今日の民族際、國民際、人種際の

能、單たる結果としての勝負を爭ふところは、競戯意識の洗禮を受け、敎化を蒙むる必要が絶大だ。

　競戯、藝術、科學、この三方面の意識を强烈にすることは、異民族間、異國民間、異人種間の關係を滑澤にする油の效力を多少持つ。道徳的人類一體觀も、この三方面から悟入すべき餘地がある。經濟的興味からして、諸民族、諸國民、諸人種が、人類主義に改宗することは、産業時代、經濟時代ともいふべき今日及び近き將來のわれらにとつて、最もこひねがはれる一事だが、その可能は、競戯中心、藝術中心、科學中心の努力の成功ほどに單純明白でない。列强は自然資源の前途を悲觀し始めた。石油、鐵、石炭が、世界の資本家及び資本主義國の深刻なる反省、閉門、侵奪を結果しつゝある。一種の政治的豫感を有するスマッツ將軍は、數年前、地理學關係の會席に於いて、海國時代の末路を宣言し、大陸時代の新來を指示した。英國の如きも、「海狹隧道」を伏設し、歐阿兩大陸の間にも同樣にし、ロンドンからケープまで、陸路直通にする必要があることを說いた。潜航艇に對する攻防術なき今日、海國の破滅は、その一事のみからしても結論されるといふ意味もあつた。單なる商業國は、すでに過去の可能に屬してゐた。國內でさへも、生産組合と、消費組合と、國家とが、資本主義制度の上に立つ單なる分配者としての商人を窮追滅盡せんとする形勢が、近時諸方に見えだして來た。最近の、かたちに於いて小さい、意味に於いて小さくない一例は、東京府が、ある種類の小賣業者に對して、管理制裁の手を伸ばした事件にもある。公設市場が、不完全ながらに存在理由を證示しつゝあるといふ一事象にもある。國際的にも、原料を握ることが、いのちのつなとして意識されて來た。直接に原料を所有し、直接にその原料を使用して製品に、直接にその製品を消費して生存することの消極的必要に、世界はいま面接して着目して來た。否な實にその必要を觸覺し始めた。切絶に意識しかけた。新保護主義が、英國最近の、殊に戰時中からの進潮だが、その意味は、多少各國に共通だ。戰爭は、一面に於いて、列國和共の新理想を喚起したが、同時に、列國をして、經濟的自給のほぞをかためしめた。けれども、保護主義と戰爭とは、從來、友誼以上、兄弟以上、親子關係とさへ公認されてをる。その保護主義が、歐洲戰によつて、一層の自覺ある獎勵を受けて來た。經濟的自助が、各國民の生き[illegible]となつて來た。活神佛となつて來た。直接行動の意識が、經濟生活の上にも萌發して來た。他國の原料に依賴する生活の不安固、不確實を知つて來た。牢として拔くべからざる一境に、各國は、その國民の生存を置きなほす努力に着手した。米、英、

陸、歐阿兩大陸、濠洲、要するに、大陸中心の政治的新生命が勃發して來た。經濟的には、多少無自治な大陸爭奪が、比較的に無自治な大陸を爭奪することが、國際新本能だ。支那、南米、西伯利が、有事なのはそのせいだ。この國際新本能は、この先きしばらく、非常の勢ひをもつて進むだらう。民族際、國民際、人種際の平和が、この國際新本能の發動伸達によつて、いまひとたび、震盪攪擾される可能がある。われらは、その對策と善導方法とを知らねばならん。

經濟が最近文化の基調だ。華府會議の一動機としての軍備縮小も、列强の財政逼迫にある。經濟が政治を支配する近代の實情は、一見して悲觀され、再見して樂觀され、三見して悲觀樂觀併はせ到る。政治と文化が、空疎から密實に進んだことは、經濟第一主義の現代思潮の樂觀される點だ。けれども、經濟は、人類殊に現代人にとつては、畢竟するに、文化を目的とする一手段でなくてはならん。それは實に大いなる一手段だ。大いなる一手段ではあるけれども、要するに一手段だ。單一なる生活を、それの多少の特徴的殊差に從つて、われらが、文化と經濟とに識別しうる限りに於いて、經濟は文化の從位に立つのだ。經濟の存亡興廢は、文化の存亡興廢に直接の一大機會を呈する。手段價としての經濟は、その目的が至高價であるだけに尊貴だ。その目的が、文化であり、生存である程度に應じて、經濟は、それ自身、文化價値であり、生存價値である。しかし、經濟價値は、文化價値そのものでもなければ、生存價値そのものでさへもない。經濟と文化との間には、營養と健康との間に認められるが如き距離が認められる。

人類の經濟的新必要は、ひとたび國の數をへらさう。大體に於いて進步だ。大陸內に分散し、島々に點在してをる國々が、大陸本位の國際大地方自治區に合融進達するのだ。要點は、それが自治區であつて、民族主義や、國民主義や、人種主義にもとづく排他區であつてはならんことだ。それが自治區でさへあるならば、人類社會に對する責任も、人類社會に對する創造的奉仕も、期待される。その區が大であるが、小であるよりも、小競爭に原因する浪費を省き、大協力に原因する生產を增すが故に、一層有價だ。しかし、人類社會的創造、責任を內含する自治は、新大陸主義の發展にあたつて、强大なる文化主義の支配下に於いてのみ可能だ。大陸が、巨盜國の大本城となるだけの變化であつては、進化か、退化か、容易に斷じがたい。巨盜の壓迫と、巨盜に對する細賊の陰謀とは、隨分の破壞を結果するかも知れん。人類の文化價値の至寶にだ。公有としての至寶にだ。自然氣候を標準として經濟本能を發揮せずに、文化

氣候に全信を捧げ托して、その氣候の名と實のために、經濟本能を統率し、制御する雄魂毅魄が、現代文化人の胸底に旺湧して來なくては心細い。現代文化人は、現代各人だ。動能を本質とする人間族が、生まれ落ちた土地に固着し、窮屈なモンロー主義を標示して、實力競爭と、眞價協力との機會を吝約することは、小經濟だ。人間族は、脚の用を忘れてはいかん。脚は、人に地上の一點に立つ自由と、地上の各點に移住する自由とを暗示する。なかんづく、移住が脚の本能だ。かたちに於いて常に移住せずとも、意味に於いて、人は、自己を各地に運び、植え付けなくてはいかん。人間的自己の最眞實の本質の自覺としての文化氣候を、人は、自然氣候の各帶、各圏を通徹して、鮮やかに染めださなくてはいかん。普遍的文化が、特殊血液を染め拔く必要が、目下絕大だ。



闘争氣分の兇暴化

暴力と文化

杉森孝次郎

もしも、現代に於いて、現代のわが國に於いて、闘争氣分の兇暴化が事實だと判斷する人があるならば、そ判斷が當たつてをるとするならば、それは、放任すべない。人間の一本能としての闘争心は、大體に於いて、競技心に移り行くが、進化だからだ。競技心に於いては、競争の目的が、本質的優秀に存する。單なる勝利には存しない。且つ競技に於いては、根柢の精神が友和的だ。

學藝復興に始まつた近世は、一面に於いて、力の信仰の目ざめであつた。科學もそれの延長にほかならない。工藝も、技術も、その一證だ。科學主義は、殊にそれが工藝技術主義と直續する場合に於いては、一種の直接行動だ。精神療方、祈禱療方、これらの中世主義、神祕主義、主觀主義は、すべて間接行動宗教は間接行動だ。無抵抗主義は間接行動だ。說得義は間接行動だ。いかにたましひを込めた矢でも、石まい。薄信勇氣の士卒が放つても、近世式巨砲は、石壁ぐらゐをば容易に、確實に粉碎する。實在は、心物兩界に一延してをる。この眞理に認識眼をむけたのが近世だ。物力學、政治學、經濟學が、それぐ〵、一種の直接行動として發生して來た。立法、行政、制度、組合、國民主義、資本主義、社會主義、近世式藝術主義、これらも、みな直接行動たる意義をあざやかに含んでをる。哲學上の意思本位說、進化論、マルサス說、マルクス說、或ひはニーチェ說、功利主義乃至プラグマテ

イズム、おの〳〵、ひとかどの直接行動だ。社會問題、社會政策、これらも直接行動の舞臺上の役藝だ。近代生活そのものが、直接行動の進水であり、駛航であるのだ。ペーガニズムに代はつた基督教は、むしろ表面上の現象であつた。さればこそ、一九一四年の夏から、一九一八年の秋へかけて、代表的基督教諸國民は、本質的資本主義、帝國主義、英雄主義のための死戰に耽つた。その死戰の戰ひ果たさるゝを待たずして、同じ基督教國民は、階級爭に身をも、こゝろをも全傾せんばかりの概況だ。國民主義も、階級主義も、直接行動の實に於いて於いて常名實兩具の形式に於いて發動し、進達しつゝある。人類び、植行動史は、文明と共に進化も内的自か、擴大もした。鬪爭本能の露の形式が、個人的から集團氣質遷り變はつてくるところに、その一面の說明がある。個人としては帶刀せず、氏族としても、地方族としても武裝しない今日、國民としては軍備を、豫算の一大部分を代表するほどに必要としてをる。一職工と一重役とが、街頭ですれちがつても喧嘩はしない。けれども、勞働組合と資本同盟とは、罷業、解雇、時あつてかそれ以上の直接行動をも敢てする。鬪爭形式が集團的になればなるほど、戰線は長い一本になるが、そしてその一本の向ふに立つ人の數も增すが、その一本のこちらがはに立つ人の數も殖える。その殖えたこちらがはは同志のあひだには、友和、情愛、協同が成り立形式上に於ける鬪爭本能の進化は、この一線が、人と自然とあひだに引かれ、眞、善、美、聖と、僞、惡、醜、不聖とのあひだに引かれるやうになるにある。そのあひだにのみ引かれるやうになるにある。しかも、僞、惡、醜、不聖に對する眞、善、美、聖の態度と方法とは、本質的には、教育でなくてはならん。愛がその基調でなくてはならん。そして、內實上に於ける鬪爭本能の進化は、競技に進み、藝術に進むにあるのだ。

、それが、神秘主義に代はる科學主義、祈禱主義

主義である場合には、善だ。同一目的を達するた

ゝの、一層有効なる手段としての善だ。不聰明に代はる聰明としての善だ。無智に代はる智としての善だ。失敗に代はる成功としての善だ。直接行動は、それが、創造の敵であり、賊であり、創造を目的としての最有力の方法でない場合に、その破壞的、消極的程度に應じて惡だ。暗殺が不可とせられる理由は、暗殺主義の社會に於いては、文化の發達は、いひかへれば個性の發達は、想ひも寄らぬことだからだ。不道德も、不聰明も、要するに心界の事實だ。心界の惡勢力に對するには、すべから〈先づ心界の善勢力をもつてすべきだ。さうでないと、善勢力の發達の機會がなくなる。意見がちがふ。趣味がちがふ。そこです

ぐにそのちがふ意見や趣味の持ちぬしのからだを破壊する。さうすることによつてそのちがふ意見や趣味をなくする。非常に要領をえた方法のやうであるが、これは、實は、世界を唯物化する方法だ。意見の差、趣味の差、或る程度まで善悪、正邪の差があつても、おのが信ずる優等意見、優等趣味、乃至善、正の信者を、成るべく多大に造る努力を拂ひ、輿論を目的の方向に準備するなり、改信者を敵の勢力のうちからも造りだすなり、理想としては敵そのものを改信させるといふ方向に、決意して勵進することが一必要原則だ。輿論、人心、全民衆の思想信仰を、随つて態度實行を、おのが信ずる目的にむかつて準備するためには、その人は、甚深絶大の創造的努力をかさねる必要に、しきりに面接するだらう。自己の品性をも偉大にし、自己の智識をも擴充し、自己の才能をも發達させる要に頻接しよう。そこに、その當人の本質的發達も結果し、その社會の進歩も結果する。間接行動は、直接行動の目的を、その本質的眞價に随つて、直接行動が達しうるよりも遥かに高い程度に於いて達する方法だ。文化主義、制度主義のかたちを帶ぶる多くの間接行動は、暗殺主義、暴力主義のかたちを帶ぶる多くの直接行動に比してだ。ついでに一言するが、現在の議會主義に對する多少の非認は、それの優等代用として、直接行動を豫想するわけでも、結論とするわけでもあつてはならない。現在の議會主義に代はるべき方法は、現在の議會主義以上に、民意と個性と社會進歩とに忠實なものでなくてはならん。組合代表制の如き、或ひはもつと卑近にしては普選の如き、不完全ながらその試案であり、企行である。

創造の信念と目的にもとづいて、現代の國民と人類とは、武勇から文勇に進化すべき餘地と必要が絶大だ。武勇は、概しては防ぐための必要を存在理由とすべきだ。途上で、悪漢が善人を害せんとする危機を見知らば、その善人がその悪漢に害せられるのを防ぐための必要手段として、その悪人を、力をもつて制裁せねばならぬことがあらう。生活の積極的方針と行動は、個人としても、集團としても、文勇主義でなくてはいけない。暴力主義は絶無に、文化主義が全有とならなくてはいけない。その絶無と全有とを來たす力が文勇だ。

闘争心理に關する諸考察

千葉龜雄

世界不安である。日本ばかりが血の洗禮に戰慄して居るのではない、愛蘭の獨立といふ理想の名に拂つた血の價のどんなに高價なものであつたかは最近に誰も知る事實であらう。そこでは放火、殺人、暗殺、破壞が、正義の名の下に、堂々と世界最高の文化國の巷にさらけ出された。墨西哥、西班牙、葡萄牙の元首達の地位が、相變らず血で購はれて居る最近の消息も、新聞電報によつて傳へられて居る通りである。あの偉大な專制君主である露國のレエニンやトロツキイさへが、絶えず傳統であるところの爆彈の脅威の下に居る。獨逸ではエルツベルゲルが斃されて居る、講和會議の眞たゞ中には、あの愛國熱のクレマンソウさへも危ふく刺客の鐵の手から逃れた。伊太利を横斷するフツシスチの威力はどうであるか。もうガアフキイルドやマツキンレエやリンカァンのやうな生命的の危險を持たない元首のある米國でさへも　その廣大な國土内では、非人道な私刑が公々然と行はれて居る。あらゆる文明の最高收獲を以て飾られたその都市では、殺人率が恐るべき指數を示して居る、それから東洋へ還つて來て、支那が目まぐろしい政局の移りかわりの中に、反對黨首の首が何萬元で懸賞されて居ることも、史記や漢書の時代と一向かはりがない。すべてが血の恐怖である。

安田翁が刺殺され、原前首相が暗殺された爲めに、暗殺に關する日本の傳統的恐怖がつなみのやうな勢ひで暗く押寄せて來た。その恐怖も事情の上からは有り得るものとして一應は肯定されるが、また靜かに考察すると、その心理的内容には確かに多くの錯覺がある。それはどこから來たか。安田氏が財界の大あたまであり、原氏が政事界の最高の有力者であつた　夫れ等の人々が俄かに死んで了つたところから來る、社會的價値と不動を大きく見積ることから、自然その反動として、刺客の恐怖感をも過大に大きく勘定した。當然其の距離の上の錯覺から來たものでなければならない。

實際それは地球の上に存在する一人の生を、他の一人が抹殺した意味において、よく有り觸れる世間の殺人沙汰と何の變りもないものなである。殺された當事者の社會的價値によつて、特に暗殺の評價が重大に考へられるのは何等の理由もない。暗殺を否定すべきならば勿論明殺も否定すべきである。むしろ暗殺を考へることは、一般殺人の原理を考察することによつて、始めて其本質に到着するものと云ふべきである。單に暗殺だけを取放す根據は一つもない。

殺人　意義を辿つて來ると、どうしても還つて來るのは闘爭の心理である。なぜ地球最高の生物と見られて居る人間が、お互ひ血みどろになつて生死の爭ひをせねばならぬか。それについて一番手近く誰でもが考へ付くのは一九一四年から一八年に亘る歐洲大戰であらう。そこでは殆んど兩半球の戰闘員が動員されたばかりではない。宗教、思想藝術のあらゆる非戰闘員さへも、動員されて、それぞれ其の任務のために躍動した。尤もそれ等の多數さへも多くは愛國魂といふ囚はれた傾向にひんまげられて居たけれども。

私は其の中の戰爭文藝を點檢して、少くとも七方面に分たれた傾向を認めることが出來た。

(一)戰爭に現はれた英雄魂の禮讃
(二)國民の愛國的精神を煽る爲めの效利の爲めの藝術
(三)戰爭の無意義と、軍人主義に執着する軍人階級の正義觀念の缺乏を暴露した藝術
(四)生死の刹那を爭ふ兵士達が、どんな殘虐なさいなみを、精神と肉體に享けるかの如實の描寫
(五)人間に爭闘心のある間は戰爭は恐らく熄む時がない。その相剋する爭闘心は、人間が永久に神から呪はれた刑罰だと考へる藝術
(六)その刑罰から解放される日の、一刻も早く來ることを神に禱る希求の藝術戰
(七)戰爭は絕對にイントレラブルな罪惡である。人生の本義は互に相愛する事にあり、戰爭の起るは人間の無知にある。あらゆる人間的墻壁を取除いて、自由な純愛な世界人の生活を營ましめよ——と云ふ人道主義的藝術、世界的、國際的精神。

戰爭中はどうであれ。殊に戰後に、一番強く人間の純愛心をふるひ動かしたものは、何と云つても此の第七項の人道主義の戰爭文藝であり、又たそれは、時處を超絶して永久にのこさる

べき人類の悩みである。けれども今ま私が與へられた命題の中で考ふべきものは、第五項から第六項に亘るそれである。

爭鬪心理は全く人間の呪はれた神の刑罰であらうか。それを肯定するのがクウプリンの「カイン」である。そこではアベルを殺したカインの權化だと名乘る銃殺された老人が、マルコフ大尉の夢幻に現はれて斯う宣言する。俺は人間殺戮の歴史をみな目撃して來た。人間の血の歴史はいつまで經つても盡きる時がない、從つて自分の罪も永久に救はれずに、神の仰せの儘に永遠に地球を漂浪する、自分は唯人間に向つて、目覺めよ、目覺よと叫ぶ外はないのだと。佛蘭西の作家ジョルジユ・デユアメルも、そのゴンクウル賞を受けた戰爭小說「文明」でから絕望して居る。「文明！　本當の文明！　私は幾度かそれを考へる。」「人々はいつも唱へて居る、お互を愛し合へと、そして惡に向つて善を酬ゐろと、けれども此の二千年の間、この御題目を繰返す外に、人間は何をしたと云ふのか。人類はたしかに善と幸福の觀念を間違へて居る」

「日本も平和事業だけで優れて居た限りは、永久に歐洲からは取除けになつて居たのだ。日本を歐洲が始めて認め出したのは、日本が露西亞との戰爭で、日本も歐洲同樣に自滅を何とも思はぬ勇氣と、その野蠻さと、外のどんなものを犧牲にしても[illegible]ない向ふ見ずを認めた刹那からである」と皮肉つたジョルジ・ブランデスは、やはり人間心理の爭鬪性の存在を肯定して、「私は人間が極く遲々と、よりよい方面に進化しつゝあることは認めるが、しかし打明けて云つて見れば、人間の心態と云ふものは、まあ高々、高級な鸚鵡か、若しくは進步した人類猿あたりに止まるものだ」とその「大戰の世界」で冷笑して居る。

もつと勇敢に爭鬪性の必要を肯定して居るのが、白耳義のモーリス・メエテルリンクである。彼は「斧の頌」と「劍の頌」を書いて、爭鬪の步むを得ない事を擧げ、「二重の花園」の「劍の頌」の中では「我々の法律が、もつと簡單に實際的になり、もつと廉價に、もつと親みの多い時代が來ない限りは、不正と戰ふには、拳と劍による外の方法はないのである」と說いて居る。これが歐洲大戰の場合に、彼をして戰爭の上の英雄魂を強く禮讃さした理論の延長になる譯である。

ブランデスやメエテルリンクがこんな風に條件付きで爭鬪性を肯定して居る。爭鬪性を肯定する以上は、云ふまでもなく止むを得ない場合の殺人をも、また戰爭をも肯定することになるのであるが、他方にそれを絕對に否定して、人類の一切の悩み

は人間の闘爭心理から醱酵される。だから一切の人類の幸福を解放する爲には、先づ人間の闘爭心理を絶滅しなければならないと云ふ主義を強く高調するのがある。それは凡ての宗教家以外に、先の第七項に數へた人道主義的の傾向を帶びた藝術家の悉くである。彼等から眺めれば、人間の闘爭心理をひき起すのは力に對する信頼である。力によつて征服し、力を以て權威たらんとする慾望である。だから人間の闘爭心理を撥無するには、どうしても一切の力に闘する形式と精神を取り除かねばならぬ。それを成就し得るものは何であるか。唯だ人道的精神に浸潤されたところの理解と愛の光そのもので無ければならないと云ふ。

さらば闘爭心理は絶滅さるべきものであるか。これは絶滅どころか、むしろそれを永續させねばならぬ事を主張する他方の思想家がある。同じく肯定であつても、メエテルリンクやブランデスは止むを得ぬ上の不承ぶしやうの肯定であるが、此の方は絶對的必要としての存續說である。前者は闘爭性の暗黑面のみを見たものであるが、後者はその光明面を眺めた考察である。前者は時代の進化によつてそれが段々と消滅することを條件として居るが、後者はそれが善導されて、却つて社會と文化とを進展さして行く齒車になるやうにしやうとするのである。大變な相違である。

彼等の說くところは斯うである。第一爭闘性は人間の心理から取除け得られるものではない。第二たとへ又た除き得るにしても、除いてはならぬものである。何故かなれば人間の進展と文化の光明はみな此の爭闘心理の接觸する競爭の火花から出發するものだからである。第三には人間の慰樂は可なり多く此の闘爭心理から作られる。今日は世界どの國でも、國際的の運動競技が民衆の娛樂の大部分を支配する。これは或る方面の思想家によつて絶對の禍であると見られて居る闘爭心理を、極めて平和的に、道德的に、また人生に最も有效に導びき又た利用して來た闘爭心理である。もし闘爭心理を絶對に否定するならば、此文化世界の娛樂と人生をこれほど清新にする國際運動競技は全く成り立たなかつたであらう、と。

凡ては此の理論である。ホワイト・パトリツク博士が「社會改造の心理」で說いて居る名人氣質の本能（The Instinct of Workmanship）もそれである。彼は云ふ闘爭本能は決して絶滅すべきでなく、却つて利用する處に効用がある。勞働者の勞働時間の短縮もよい、賃銀の增加もよい、けれども多數の勞働者の中の、名人氣質の本能だけは絶滅しないやうに注意せねば

たらない。名人氣質とは時間もかまわない、規則もいらない。いやいやながら規定の仕事を仕上げることではなく、その仕業の仕上げの藝術的效果を觀賞する事に唯一の娛樂を求めるものである。現代の勞働政策はあまりにセェルスマンシップに傾むいて居て名人氣質を絕滅する危險があるが、この名人氣質こそは、實は人間から排除することの出來ない爭鬪心理の最も微妙な現はれである。それは他人の創り得ないものを自分だけが制作し得ると云ふ誇りと勵精に依賴するものである。改造された當來の生產世界は、かうした諸地層の名人氣質によつて築かるべきものであると。

これはバアトランド・ラッセルの創造衝動やウヰリアム・モリスの藝術的勞働の論據によほど近寄つて居る。けれどもよく考へてその間に橫はる差別を發見する時に、私はやゝはつきりと、全體の答案の解決に突き當つたやうな氣がするのである。

それは私が此處まで說いて來たやうに、鬪爭心理に關しては、これまでそれを絕滅せよと云ふものと、善用せよと云ふものと、決定的に保存せよと云ふものと三つの相納れない論結があつた。私は強いてそのどれをも否定しなければまた肯定もしない。むしろそれ等を度外において、それと同じやうな效果が擧げ得られたならばそれで好いではなからうかと思ふのである。つまりパトリック博士は名人氣質を發見したのは好いが、鬪爭心理の見方をそれに附け加へた點に間違ひがある。ラッセルやモリスの見る創造藝術では、それを創造する意味が、他に競爭相手があらうが、あるまいが、それは問題ではない、全く何等の他の刺激を待たない自己自身の完成なのである。純な創造衝動それ自身の上に、それ自身を享樂する爲にだけの絕對努力の創造であるべきである。美もそうであり、愛もそうであり、眞もそうである。鬪爭衝動などと云ふ相對的な條件によらずに、一地絕對の眞如に入ることである。たとへば運動競技でもそうである。それが他の團體に優勝する爲　實體であると考へずに、團隊の細胞それ自身達の生命の享樂であり、生長であると見る處にこそその眞義がある。凡ての民衆をそうした平和な心境に導くことに於いて、始めて望まるべき新文化の世界があり、社會があるのである。

ところで理想から實際へ、暗殺から殺人に還るのであるが、凡て人間が絕對に自分の創造することの出來ない他人の生命を、思ふまゝに絕滅し得られると云ふ理法や權利は絕對にない。然るに係はらずそれが思ひ掛けもない處に無數に現はれて來る

のは、一つはその當事者が文化の光りの薄かつた前時代の人間歴史を、無省察に、無意に繼襲する無知にもある。が、それが精神病者にあらぬ限りは、多くの場合は、彼等の感情或ひは理知を暴虐に壓迫する何ものかが當面に起るからである。そしてその暴虐な壓迫をはねかへさうとする彼等の葛藤が、卽ち鬪爭の形をとつて現はれるのである。それは或は殺人である場合があり、放火である場合があり、革命である場合もある。凡てその現はれる反動は、當事者その人の理知感情の深さ厚さ强さ大きさと反應する。又たもう一つは、その壓迫した重量の容積と內容とも反應する。その當の者の採り上げた行動が、もとより好ましくないことは誰だつてわかる。けれどもそれが好ましい、好ましくないの問題ではない。いくら好ましくなくとも夫れがどうともする事が出來ずに勃發するのだから仕方がない。つまり彼にとつては夫れが絕對の生活だからである。

　つまりそれが病理學的培床から發生し、物理的法則によつて爆發するものとすれば、それを事々しく道德的に評論したり、常理の理詰めで押して行かうとした處が結局何の足しにもなる譯ではない。人間、ことに近代の人間心理と感觸は、任意的に手を下して人間屠戮をするほどにそれほど粗硬に組み立てられて居はしない。

　もし殺人者の心理と理由だけを肯定させ、或ひはそれに感激することをも許すやうな正義をその中に認め、一方にその行爲を刑罰すると云ふやうな矛盾した社會があるならば、そうした奇怪な社會を作つた其の社會人は、その殺人者よりも先に良心に刑罰さるべき社會である。そしてそう云ふ社會は確かに間違つて居る社會なのである。

　時代の空氣は可なりそこに棲む人間の爭鬪心理を無用に興奮させるやうに出來て居る。富を權力と其他の多くの階級には、なほその上に此興奮を煽立たせ、その理知を昏迷させその感情を兇暴にさするやうな機緣と可能性と危險がある、考へねばならない。それには先づ凡ての社會的機構の流通を自由ならしめると共に、民衆個人の自由と人格と權利を何等の私心なく明るい心で認め、いつくしみ、成長さする必要がある。凡ての事件には全くの偶然と云ふものは殆んど無いから。

卑劣なる暗殺行爲を排す

安部磯雄

暗殺は歐羅巴大陸及び亞米利加では時々行はれて居るが、英國に於ては近來余程少ないやうである。私の記憶でも近頃になつて政治家富豪の暗殺された者が殆んど無いと云つても好い位である。然るに日本に於て、最近暗殺が引き續き二回も行はれた事は非常な不幸と云はなければならない。此際我々は此暗殺と云ふ事に對して、出來る丈け、深く研究考察して見る必要があると思ふ。

一體世間では暗殺と云ふ事をジャスティファイする傾向が幾分あるやうである。若しも輿論が全然暗殺と云ふ事を排斥するやうになれば、それは根絶する事が出來るものであると思ふが、然し今日も猶暗殺と云ふものを大體に於ては非難しては居るが、或點に於て矢張これをジャスティファイして居るのである。是れは確に社會人心に惡影響を及ぼすものと思ふ。今暗殺を如何なる點に於てジャスティファイして居るかと云ふと、一體暗殺と云ふ行爲は惡いが、暗殺者の動機其物は必ずしも惡くはない。彼は自分が善い事をして居ると云ふ信仰を樹てゝ、其下に暗殺と云ふ行爲を行ふ。勿論それが爲めには自分の生命を棄てゝかゝるから、其處に幾分犧牲の精神と云ふやうなものが現れて、或意味に於て悲壯な分子が含まれて來る。昔支那には多く暗殺が行はれ、暗殺者を暗に賞讃する風があつた。はつきり憶えぬが秦の始皇帝を刺さうとした荊軻が自分の思想を現はして「風蕭々兮易水寒、壯士一去復不還」と云ふやうな詩を詠じて居るが、斯くの如く世間も暗殺者を一個の壯士と見る風があり、暗殺者の立場を暗に是認して居る傾向があつたのであつて、其思想が今日でも未だ一部に殘つて居るのである。此の考へは非常に悲しむべき誤謬であると思ふから、私は今此暗殺と云ふ事に對して出來る丈け遠慮なく私の意見を述べて見る事にする。

第一に考へなければならない事は、我々には果して人を殺す權利があるかと云ふ事である。人間は如何なる人でも生を樂し

む者であつて、死を好む者はない。大體に就いて云へば生は大なる人間の幸福である。誰れが此幸福を他人から奪ひ去る權利があるであらうか。若し人の最大幸福たる生を無暗に奪ふ事が許されるならば、これは實に亂暴極つた話であり、さう云ふ思想は全く野蠻思想と云はなければならない。少くとも私共文明の世界に住む人間は他人の幸福を願はねばならぬのに、此の人の最大幸福たる生を奪ふ事は實に大なる罪惡でなければならない。然るに世間には此の事に就いて深く考へる人があるかどうか甚だ疑問であつて、どうも人間は勝手に人の生を奪ひ得るかの如く思つて居る者が少くないやうである。然しこれは人間の自然の欲望と云ふ點から云つても、人の生を奪ふ事は絶對に不可なる事は云ふまでもないのである。今日國家は死刑に依つて人の生命を奪つて居るが、今日では死刑廢止論を唱へる人が少くなく、此議論は年々勢力を得つゝあるやうである。これは何う云ふ處から起つたかと云ふのに、夫れは國家が法律を設けて人殺しを死刑に處すると云ふ事は、國家の目的から云つて大なる矛盾であつて、國家の目的は人殺しを無くさうとするのであるから、國家自らが人殺しをする處の死刑を廢止する事を主張するのである。これは確かに道理のある事で、死刑にしたからとて世人は恐れて人殺しを止めると云ふ事はない。事實死刑は長く行はれて居るが人殺しは常に絶えないのである。國家は寧ろ死刑をやらずとも無期徒刑に依つても其目的は達せられるのである。國家でも猶人を殺すと云ふ事が惡いと云ふ思想が今日世に行はれて居るなら、況して個人が個人の生命を奪ふと云ふ事は非常な間違ひと云はなければならぬ。只人殺しの許されるのは正當防禦の場合のみである。自己の防禦の場合のみは人殺しをやつても差支へないやうに思はれるが、然し是れも實は考へ物であつて、若し今日文明が十分に進み、宗教の精神が遺憾なく發揮されるやうになつたならば、正當防禦の場合に於ても猶ほ人を殺すと云ふ事は大に疑問になつて來るのである。トルストイは絶對的無抵抗主義を唱へたが、我々の社會も此無抵抗主義まで進むのが理想でなければならない。私共は常に此境地を理想として居なくてはならぬ。若し人が私を殺さうとしても、私は人を殺さぬ、抵抗せぬ、少くとも私はさう云う理想もあるのである。今日の社會に於て人が人を殺すと云ふ事が幾分でもジヤスティファイされて居る傾向があるならば、私は社會のために悲まなければならないのである。

第二に私は暗殺を以て最も不公平な手段であると考へる。暗殺の行はれる時には、暗殺者は恰も裁判官の如き位地に立ち、一人で判決を下して其判決通りに刑の執行をやる。是れは何んと

云ふ恐るべき事であらう。今日裁判所で裁判官が判斷をするのにも往々誤りがある。誤りなきを期するためには十分調査をしなければならぬ。政府の機關は比較的整つて居るから、出來る丈けの手段を以て事件に關する事實を蒐め、多くの時間をかけて、而も裁判官が數名關係して判決を下すのであるが、それでも時々判決に誤りがあるのを避ける事が出來ない、そこで此頃では陪審制度を設け、判官以外の人をも入れて公平な裁判をしやうと云ふ事にまでなつて來て居るのである。然るに暗殺者は一人で裁判官の位置に立つて、或人に對して極めて不十分な證據を賴りとして判決を下し、そして其人の生命を奪ふと云ふのであるから、是れは明かに酷いやり方と云はなければならない。暗殺者の判斷の誤りなる事を多くの人が後に認めるのは當然であつて、大概暗殺者の判斷と云ふものは世の中の人が讃成しないのである。暗殺者の判斷は屢々誤るものであるが、殊に政治家のやうな公の立場に居る者に對して判斷を下す事は一番困難である。政治家には常に反對論者があつて、彼の政策や行動に對して罵詈讒謗するものであるから、此場合自分一個の勝手な判斷に從つて彼の生命を奪ふと云ふやうな行爲に出る事は甚だ亂暴である。世に獨斷位恐しいものはない。學問に於ても學者の警むる所のものは獨斷說である。所が暗殺者は自分は天に代つて彼を誅する、天誅を彼に加へるのであると云ふ事をよく云ふのであるが、これ位酷い獨斷說はない。昔は宗教家の間に多く此獨斷說があつた。彼等は曰ふ、天の命令なりと。天の命令と云ふ言葉程恐ろしいものはない。天は決して命ずるものではない。宗教家が異端者を慘酷に殺して、天の命令なり、神の命令なり、と云ふ如く、暗殺者が天をだしに使ひ、天誅を加へるなど丶云ふのは獨斷の甚しいものである。其意味から云ふと亞米利加のリンチよりも日本の暗殺の方が余程たちが惡い。成程リンチは慘酷なものである。警察や法律の手を借りずに、數百、數千の人々が感情に動かされて、牢屋から罪人を引き出し、擲り殺しにして刑を加へる。是れは文明の進んだ今日の世界に於て行はれる事は確に恥辱であるが、併し暗殺の場合の如く一人の判斷に依つて他の人に對して刑を加へるのでなく、數百、數千人の判斷の下に刑を行ふのであつて、而もその刑を加へられる者が罪人として囚へられて居るものであるから理屈に適つて居る。彼等は只政府の代りに刑の執行だけをやつたに過ぎないが、暗殺者は一人で、彼自身の判斷に依つて他人に刑を加へるのであるから危險である、そして多くの場合此暗殺者はきまつて自己を愛國心とか社會心、公共心のために動かされて暗殺を行つたと云ふ風に書き置きに書き、若くはさう思つて居るらし

く、また第三者が暗殺者を多少ジヤスティファイするのは其點にあるとも云はれるのである。判斷は誤つて居るかも知れないが、國のため社會のためにやつたのだから動機其物は決して惡くはないと。併し私は倫理の方でも主觀論に傾く人は必ずさう云ふ考へ方に進む弊があると思ふのである。彼等の倫理は斯う說く、自分自身に疚くなければ純な動機であるからそれ丈で好いと。併し餘りに此の考へに偏すると總ての道德は、自分に疚しくなければ惡事とはならぬと云へるやうになる。此の考へは確かに主觀的倫理說の弊であると思ふ。私共の動機が好かつたら總ての行ひがジヤスティファイされると云ふのなら、私共の敎育を受ける意味が分らなくなつて來る。敎育の意味は私共の理性判斷を誤まらぬやうにするためでなければならぬ。動機だけではいけない。好いか惡いかの判斷がつかなければならぬ。多くの知識、經驗を得て初めて私共の行ひは正しくなる。今の暗殺者などは主觀的、獨斷的で、動機さへ好ければ何う云う卑怯な眞似をしても恥じないと思つて居るかも知れないが、それでは世の中の不安是れに越した事はない。私は動機一方で行ふ道德論は飽く迄も危險であると信ずる。

第三に、私は暗殺を以て最も卑劣、卑怯な手段とする。暗殺者を壯士と云つたのは昔の思想で、今日では是れ位卑怯な臆病な者はないと思ふ。暗殺は讀んで字の如く、暗がりで人を殺す事であつて、それは其人の卑怯、卑劣を現はすものである。少くとも暗殺は英國人の所謂フエアーではない。遊戲に於てもフエアープレーと云つてフエアーと云ふ事を尊ぶが、暗殺の何の點にフエーアーがあるであらうか。暗殺は全く武士道の精神に反して居る。武士道の精神から云へば、此方も先方も武器を以て果し合をすると云ふなら未だ好いが、暗殺は全く寢首をかくにも等しい、臆病、卑劣なやり方である。日本の仇討本を讀むと、日本には武士道の立派な精神のある事も分るが、一方に於て隨分汚い精神のあるのをも見る。君主の前で御前仕合をやり、負けた者が遺恨に思つて暗夜に乘じて復讐して相手を殺す。殺された者の子が天下を廻つて仇を訪ねると云ふのが大概の仇討本の筋書である。世にはフエアープレーの出來ない人間が多いが、私は暗殺者は卑怯者か臆病者で、壯士であるとか、壯烈とか、社會の犧牲とか賞讃するのは甚だ間違つた話であると思ふ。

第四に、今後日本に於て階級的爭鬪が段々盛になる事と思ふ。而して其階級の一方は金持の階級であり、他方は貧乏人の階級である。之れを近代語で云へば一方は有產階級で、他方は無產階級である。此二つの階級は將來相對抗して行くもので、其處

からいろ／＼な爭ひが起るのを免れない。此爭は禁止しやうとしても出來ないものであつて、余程注意せぬと此爭から暗殺者を出すと云ふ事になりはしないかと惧まれる、私は階級鬪爭の起る事を信じ、それを差支へない事と思ふ者であるが、然し丁度昔の戰爭と今日の戰爭と違つて來て居る如く、最早一騎討の戰は時代遲れであり、戰爭は必ず團體的でなくてはならぬ。今日の戰爭に於ては一騎討は負けであり、是非團體の力でやらなければならなくなつて居る。此際双方で考へるべき事は、團體としては飽く迄も爭ふが、其間個人的感情を交へる事を努めなければならぬ。さうならなければ双方の不利である。具體的に云へば資本家を個人々々に憎む必要はない。資本家何某を憎むのでなくて、資本制度を敵とすべきである。資本制度は今日社會が困難に陷つて居る原因であるから、速に打破すべきであるが、資本家の個人個人に就いては寧ろ之れを敵視する必要を見出さないのである。今日資本家制度の存在して居るのは資本家の責任ではなく、それは今の經濟組織が產んだものであつて、此制度の缺陷から資本家が生れたのである。之れに依つて見ても資本家を憎む事は當を得て居ない事が分るのである、今結果から云へば大富豪の二三人を倒しても、それで富家の反省を促す事が出來ない。安田一人でなく、他の富豪が四五人殺されたとしても少しも効果はないであらう。それよりも資本制度さへ打倒せば富豪はなくなるのであるから 何よりも先きに制度を打破する事を考へなければならぬ。そして其方法としては團體で堂々と戰へば必ず勝つのである、個人々々にやる戰は決して効果を生じない。原氏も政友會總理として、現內閣の總理として暗殺者の目標となつたらしいが、彼一人死んでも政友會の生命は絕たれぬのである。假りに政黨政治が惡ければ、今日の政黨が惡いのは富豪の擁護機關たるにあるのであつて、それは明かに資本制度の缺陷から來るのである。原氏一人を倒したとしても今日の資本制度を改めない以上今日の政黨は決して改造される事はない。國民は此點に就いて冷靜に考へるべきで、飽く迄も制度の改造に向つて進み、個人々々に對しては矢張同胞の一人であるから、特に金持だから憎い、貧乏人だから恐れると云ふやうな事があつてはならないのである。亞米利加でも政治に奔走する人は、政治上の事に就ては敵と爭ふが、個人としては普通に交際して居る。斯くの如く敵としては飽くまでも爭ふが、個人としては決して反抗せぬと云ふ思想が漲つて來たなら將來暗殺と云ふ忌まはしい事はなくなるに違ひない。

最後に一言して置きたいのは最近二回も續いて暗殺が起つたので、私の知人などでも手紙を寄越して、斯うなつてはデモク

ラシーも何もあつたものではないと悲觀して居たが、それも少し極端な考へであると思ふ。どうしても社會には私共の考へでは推測する事の出來ない人間があつて、狂人染みた行をやる者が多い。戀愛などについてもかなり突飛な考へを持つて居る者もあるやうである。世には常に狂人染みた人間が多少ある事は考へなければならない。亞米利加でも大統領を殺すやうな人間は狂的で、大概は不平や病氣などから、アブノルマルになつて、天下に名を賣りたがつて居るやうな者が多い。斯う云ふ人間が居る間は暗殺と云ふやうな事が時々起るのは社會としては或程度迄忍ばねばならぬ。であるから、斯ふ云う事件のあると云ふ事は決して社會全體のバロメーターとはならない。社會全體が不健全であると速斷は出來ぬ。私は狂人染みた人間が社會から全然なくなると云ふやうな事は今の所豫言する事は出來ないのである。

兇行を誘ふやうな仕打も愼め

文學博士　三宅雪嶺

□

昔からの事であるけれど、近年いよいよ重きを置かれるのは、成功といふ事であり、それに最も肝要なものは、「押し」、或は「一に押し、二に押し、三に押し」とする。一度び思ひ込んだ事は何處までも決行し、何の故障があつても辟易まぬと云ふやうでなくてはならぬと云はれる。意ある所則ち道あり、左右を顧み躊躇するやうでは、何事をも爲す事が出來ぬと說かれ來つて居る。日本でそれ程でないが、尤も活動の旺んな米國で突進を奬勵して已まぬ。如何なる反對があつても突破して進み、ナポレオンが我を妨ぐるアルプスなしとした調子で進むべしとする。日本でもいくらか其調子を高調し、相當の地位を占めて居るものは、毀譽褒貶を顧みてならぬと云ひもし、信じもして居る。劣敗者が彼れ此れ云ふけれど、自業自得、それに頓着して居つては何事も出來ぬと明言する。かゝる事は社會の進步に伴

ふ必然の現象であるが、同時に其殺伐な氣分を緩和する事に努めるやうになつて居る。倫理道德と云ひ、美風良俗と云ふのは、殆と悉く之を緩和するを目的とする。若し人々各々突進し、是が非でも構はぬとあつては、何處でも喧嘩が絶えず、喧嘩の果てが殺し合ひ、全體に衰微するに極つて居る。如何に生存競爭を競爭でないやうに成し得べきかが、多少人類の幸福に心懸ける者の、考へずに居れぬ所である。或人が特別に考へなくても、社會が進步を續ける間、自づと緩和するに傾く所がある。

□

東洋と西洋と何れが突進するかと云へば、後者であると云はねばならぬが、何れの風俗が良いかとなれば、同じく後者にある點の整つた部分がある。往來で足を踏む者があれば、踏まれた方が御免下さいと云ふ風習(ならはし)になつて居る。踏んだ方が御免下さいと云ふべきをば、踏まれた方が先んじて云ふのは、東洋で皮肉と聽えるが、皮肉が皮肉にならぬ所が、喧嘩を減ずるに與つて居る。踏まれた方で御免下さいと云へば、踏んだ方で、何う致して此方(こちら)でこそと詫びずに居られぬ。電車の中で誰か故意(わざ)と人の足を踏む者なく、踏まれた方で怒つてならず、聲高く痛いとか非道いとか云ふので、それを聽いて踏んだ方が忌々しく、足を出して居るのが惡いと云ひ返し、そこで喧嘩になる。喧嘩したとて何の利益にならず、詰り閑(ヒマ)があるからと云ふ事になる。

世間が忙しい程衝突が起り易く、それ丈け衝突を避ける方法が考へられ、大きな所では國際仲裁裁判で、國家と國家との爭ひを避けさせようとし、一國內で議會を以つて治者と被治者との爭ひを緩和しようとする。議會は衝突する爲めに起つたやうでも、事實に於いて衝突を柔げる所が多い。專制政治ならば、殺すか殺されるか何方かになる所をば、腕力でなく口で相談し合ふやうになる。種々の組合が出來、勞働組合が出來るのも、一面に力を伸すが爲めならば、他の一面に爭ひを柔げようとする所がある。双方が妥協せぬと云ふても、殺すとか殺されるとか云ふ事にならぬ。平氏が勝てば源氏を悉く殺さうとし、源氏が勝てば平氏を悉く殺さうとするのと異つて居る。殺さなくても濟み、殺すなど考へもする事がない。今尙ほ何處でも鬪爭氣分が旺んであり、隨分大袈裟な鬪爭あるけれど、國と國との爭ひこそ疑問なれ、國內の爭ひは成るべく人殺しを少くするやうになつて居る。

□

然し制度とか規則とかで制限するのは限りがあり、それだけで可いとせば必ず間違ひが起る。法律は守るべきであつても、之

れを守りさへせば、他に何も慮るべき事が無いと云ふ程危險な事はない。如何に法律を周密にしたとて、隅から隅まで裁き得るものでなく、裁かうとすれば利が害を償はなくなる。楊枝の尖きで重箱の端をほじくるが可いか、杓子で掬へるだけ掬くつて置くが可いか、大抵中間を行かうとする。法律の及ばぬ所は人々の心次第であつて、法律を借らずに治まつて行く程風俗が整つて居ると稱する。自治に重きを置くのも、法律の力の及ばぬ所で固く治まつて行くのを望むのである。

所が彼れ此れ遠慮して居つては、仕事が捗取らず、法律に觸ない限りに於いて、全力を盡くすべきであると云ふやうに考へる。力が無ければ考へもせず、考へても思ふ樣にならぬが、相當に力があり、人を推退けて進む事が出來れば、弱い奴共と嘲笑つて通つて行かうとする。其憚れる所は只國家で定めた法律、之に抵抗しようとして出來ぬので、努めて之を避けようとする。それさへ時として動かす事が出來、動かし得れば隨分動かさうとするが、先づ一般に法律に觸れまいと心掛けて居る。「我が爲す所が惡いと云ふが、何が惡いか、何處に法律に觸れる所があるか、告訴するならして見よ」と云ひ、大手を振つて通つて歩いては、なんとも取押へ樣がない。取押へ樣がなけれど、誰れ彼れとなくいくらか忌々しく感じ、少くとも愉快な氣持ちせぬのである。忌々しく感ずる者の中、「誰も取押へぬならば、俺が取押へる」と云ふのが出て來る。金持ち喧嘩せずの諺ある如く、多少の位置ある者は喧嘩を憚るが、性急な者は我識らず飛出したりする事がある。事によつて、分別盛りの人が袒を拔いで出掛ける。人類の社會は平穩と見えても、何處かに動物時代の闘爭氣分を具へて居り、種々の事情で抑へて居るものの、或るはづみで命懸けに闘うようになる。故陸奥伯が獄を出でゝ人に語つた言葉がある。「監獄は氣樂で好い、自分は性急で泥棒が入つたりすれば之と組打ちして殺されるかも知れぬ」と。冗談ばかりでなく、事によりては弱い身體で組打ちせぬと限らぬ。平生溫厚な人でも、僅かの事で怒り、取返しのつかぬ事をしたりする。忌々しい奴と云ふやうな事は隨分頭腦を刺戟し、むら〱と癇癪が起り、とうとう制する事が出來なくなる。風俗習慣が良いと云ふのは、成るべく忌々しい奴と云ふまで癇癪の起らぬやうになるのを意味する。

□

金もあり、力もあり、法律でも何うする事も出來ず、忌々しいとなつては、俺が一つとつちめてやらうと思ひ立つ。何處から左ういふ者が出るか豫め知れぬ。餘り人に癇癪起させぬやうにするに越した事がない。法律で取締まり得ればそれで濟むけ

れど、法律でそれ程の事を爲る事が出來ず、詰まり人々の克己心に依頼する外ない。星亨は「押通る」の綽名を取り、何處でも押通り、人がそれで開けて通し、彼自ら聊か得意を感じたらしい。彼は明治年間有數の人物、群小輩の到底企て及ぶ所でなく、適當の地位を得たならば立派な働きをしたであらう。然し法律に觸れない限り、如何なる事でも遠慮會釋なく行ひ、他で制しようがないと見え、何うも仕方が無いとの氣分が世間に漲ひ、其處で分別ある四十男が飛出して之を鎗した。世間には血塗れ事が珍しくなく、刄物を振上げたとて特別に考へる程の事とせぬが、刺客が身を捨てゝ取掛る所、力を以つてする外何うにも仕様のないものと見られるに於いて一致する。稀に例外あるにせよ、依估地で、頑張り、人相見が劍難の相ありと云ひさうである。何處でも押通つて行く無遠慮な奴、一つ叩いてやらうと云ふやうになる。目差される者は強ち惡い了簡も無く、只持つて生れた才幹及び根氣で仕事するに過ぎぬと思ふが、聊か程を辨へぬ嫌がある。家康が身の程を知れと人に敎へたのは、因循を望んだやうに聽えるが、物を八分目にして置くを忘れてはならぬ。智慧ある者が案外智慧足らずになるのは、其邊の心得の足らぬによる。何でもない事、今少しく控へて居れば、自分の爲め、人の爲めになるのに、少し許り控へる事が出來ず、餘計な面倒を惹き起すに及ぶ。安田氏が一億の金を作つたのは偉いと云ふが、何の必要で之を作つたか。今少しく手軟かにしたならば、それ程の金高になるまいが、餘計な怨みを受ける事がなからう。破産の恐れあるのを引受け、能く之を守り立てるのは、人救けのやうでも、救けられた方が齒嚙みして殘念がるのは何であるか。絞つて絞り取り、頭の上げようがなくなるからでないか。それとも絞つた金で公共の利益になる事を企てるたらば、別に考へ様もあるが、さうでもない。死後に遺族が何百萬圓かを公共的事業に提供したが、億を超えた身代で何百萬が何程の事であるか。長者の萬燈と云へるか。千燈に値切つた跡がないか。それとも生前にそれだけの事をしたならば、非常富豪の爲し能はぬ所で、天晴れと云へようが、六日の菖蒲の嫌ひを免かれぬ。自分の腕で自分の金を作り、人からかれこれ云はれる筈がないと考へる事からして誤つて居るでないか。自分の腕で作つたと云へるか。露國に住んで居れば、一文無しにされる所でないか。日本の法律で助けられて、彼の如きを得たのであり、それ相當の事を爲すを心懸けねばならなんだのである。それほどの思慮が無かつたのを惜しむ。」

□

原氏は之と違ひ、國家社會の上から考へる事が出來、爵を辭

じた所など、非常に優る見識あるを見るが、死を決して位置を守つた所、千歳の一失と云はうか何と云はうか、隨分思ひ違ひをして居る。場合によつて飽くまで頑守すべきであるが、現在の政局で頑守するが可いか、頑守せぬが可いか。尼港事件、普選事件、疑獄事件、司法官交迭事件など、人の疑を解き得ない事が積み累り、それで頑守するの必要が何處にあるか。國家多難の折り、身を以て事に膺らねばならぬと云ふであらうが、責任を踏み付けにしてまで、踏み止まるべき危急の場合であるか。前總裁は伊藤公でも、西園寺公でも、逃げ足が迅い。伊藤の第四次内閣の如き、腰の弱いのも餘りであつた。然しそれ故伊藤が原より廉潔と云へるかどうか。去るべきに去るを知つたのであるまいか。誰が何處で殺されぬと限らず、伊藤も哈爾賓で禍に罹つたが、國内で一度も刄を向けられなんだ。腰の弱いのは褒めた事でないとしても、唯徒らに腰を強くして居るのが、國家に利益あると云へるか。頑守して屈せず、平氣で維持し、何時死んでも可いと覺悟する所、立派さうであつて、餘計な騷ぎを起した譯になつて居りはせぬか。刺客は出るか出ぬか知れず、出ねば尚幾年か安全に續け得たらうと云ふが、非常な場合の外、餘り人並み外れた事を爲ぬ方が可いでないか。今の日本は原氏が職に斃れねばならぬ程切迫して居らず、人物が拂底して居らぬ。法律に餘儀なくされぬ間、何をしても構はぬぞと云ふやうに見える振舞は、公人として深く警しむべき所に屬する。原氏は此邊に譯らぬ筈がないのに、有象無象に押立てられ餘計な事を爲るやうになつたのであらうか。

□

死に重きを置き過ぎるのは良い習慣でなく、死ぬ覺悟よりも、如何にするのが政界の爲め、國家の爲め最も有利であるかを考へるに若くはない。立憲政治は本來國爭を緩和するを旨とすべきものと見て可い。或る期間を經て内閣が更迭するのも、二大政黨が互に權を得るのも、餘計な騷ぎの起らぬ樣にしようとするのである。今の日本で政黨政治が思はしく成立たず、政府黨が何時でも總選擧に勝ち、位置を保たうと思へば何時までも保つて居るので、自ら加減して進退せねば、兇器を以て迫る者が出るようになる。從來惡い癖があり、何か騷ぎが起らねば改めぬやうになつて居る。騷ぎが起つたから改めるのと、其の起らぬ前に改めるのと、自分に取つても、人に取つても、餘程の違ひあるを察せねばならぬ。日本の政界に種々の缺陷あり、何とかして改めねばならぬにしても、心ある者自ら改めるやうに努めるを肝要とする。原氏の聰明で此邊に氣の附かなんだのは、何と云ふのであるか。高橋子が首相となり、此邊‐

であらうか何うか。其左右の人達に於いて、篤と思慮せねばならぬ。反對黨に於いても、自ら反省して警しむべきである。經濟界とても、他人事と思ふて居つてはならぬ。國際間に戰爭が損失である如く、國内に兇變が損失である。常に之を防ぐの工夫を凝らす事になつて居るが、今は特に用意を致さねばならぬ。刺客が出たとて、警察で速かに取締を嚴にするが如き、あらずもがなと思はれる。危險は其處にあるのでなく、他にある。何でも十二分にしようとせず、八分目にする位で、餘計な騷ぎを防ぎ得るとして可い。」



□申分のない日記□

一度之を用ひたら外の日記はとても使へぬと經驗者は申されます。

大正十一年 重要日記

内容一斑

皇室皇族…天皇御歴代…年號表…大正十一年暦…舊暦…九星…各人毎日吉凶表…年齢早見表…滿年算月表…各月行事…衛生…金錢出納錄…收支統計表…貸借控…家族錄…知人錄…備忘錄…契約及保證事項控…重要通信摘錄…內國郵便電信電話法規…鐵道規則概要…諸税法…年利換算法…日歩換算法。

内容は完備
體裁は優美
紙質は丈夫
印刷は鮮明
附錄は重寶

▼定價壹圓
▼郵税十錢
▼四六判
▼總布美本

日記は之に限ります

大正十一年 懷中ノート

日記と手帳と出納帳とを兼ね携帶に頗る便利

定價七十錢　郵税四錢
袖珍型總皮天金

大正十一年 婦人日記

日記と家計簿と備忘錄を兼備へた婦人用日記

定價壹圓　郵税八錢
四六判總布美本

東京市京橋區南鍋町二丁目

實業之日本社

振替貯金口座東京三二六番

登録 鳩 商標

事務ノ澁滯ヲ來サザル**筆**而モ縱横酷使ニ耐フ

◎梅品八斗才　壹本廿五錢　◎貳號自在　壹本七錢

氣持ノ善キ光ト漆黒ノ**墨**而モ芬芳ノ香氣アリ

◎櫻印紅花墨　一丁半形　壹圓　◎わか菜　一丁半形　貳拾錢

鮮カニ氣持良クのびる**繪**具而モ色彩絢爛ナリ

◎十二色絞出し　壹圓四拾錢　◎三號六色入　廿五錢

事務ノ進捗ハ炷ノ薫**香**而モ終日執務ニ倦ズ

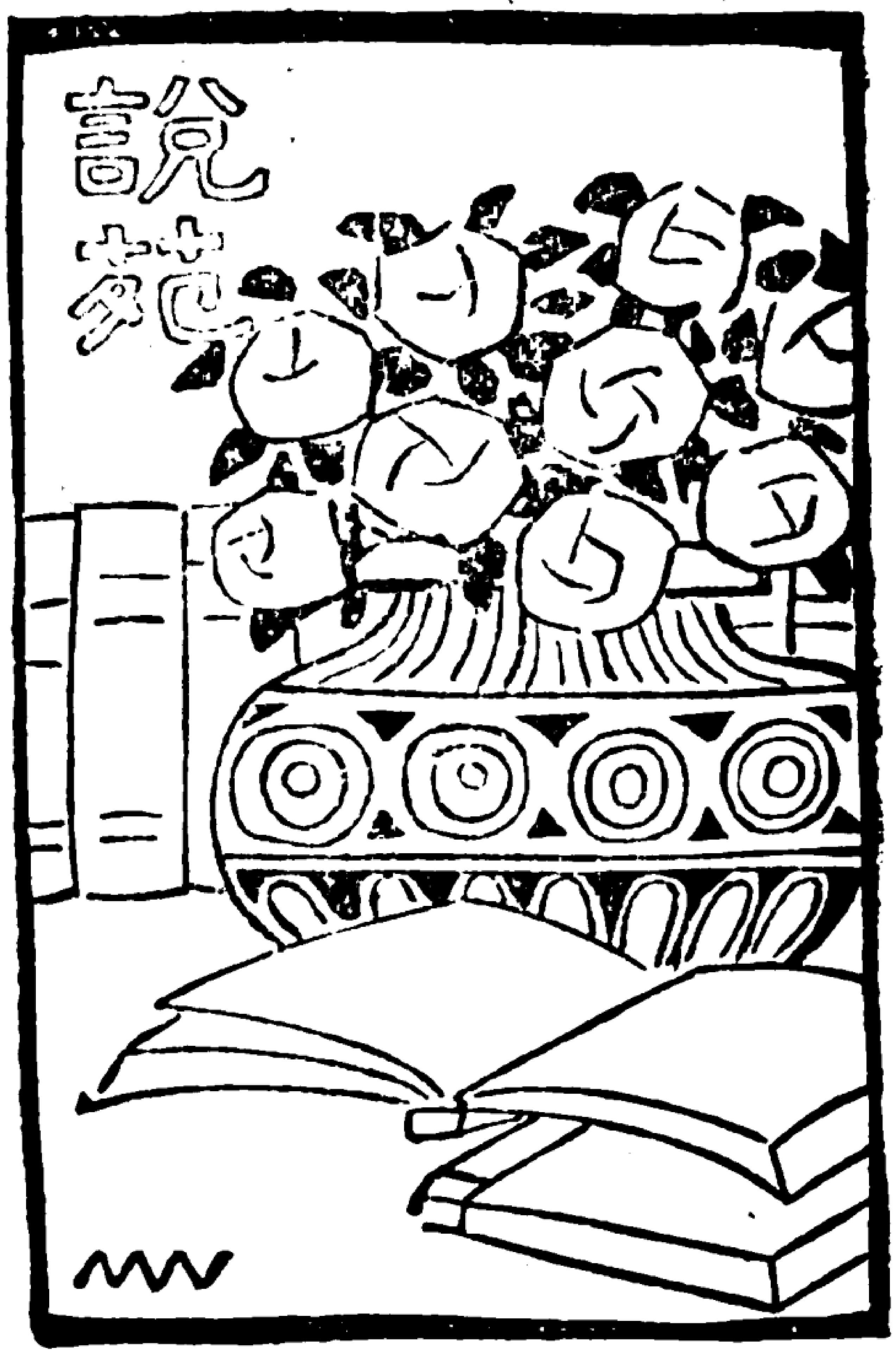
◎梅ヶ香壹入　四拾五錢　◎あかつき一把　參拾錢

熊谷鳩居堂

京都寺町　振替＝大阪六三八

東京銀座　振替＝東京二〇七〇

目録御報次第送呈



男を賣つた女の話

村松梢風

私。今日は、先日は失禮――

談話賣買業者。やあ、宜う入らつしやいました。さあ何卒お掛けなすつて。過日はどうも有難う御坐いました。

私。いや、私こそお蔭で大助りを致しました。若しあなたといふ方が無ければ私は雜誌社へ對して言ひ譯の成らない立ち場に陷るところでした。

談。どうもお客樣の方から左う仰しやられると誠に痛み入ります。如何でしたあの話は？　評判が惡くはありませんでしたか？

私。至極好評でした。近來私自身が書く物は、材料は無し型には嵌まるしゝて誠に面白くありませんが、あなたの處から買つて行つた話だけは何時も目先きが變つてゐる上に頗る風變りだといふので大變歡迎されるのです。殊に先月の「三人兄弟の話」では、宗教家二郎に關する身の上話しが、近來頻りに續出する世間の怪教團を諷刺して痛快だと云つて來た人などもありました。

談。はゝゝゝは。併し、彼の天竺教は決して怪教團でも邪教でもないつもりです。御覽なさい現今のどの宗派にしたところで、更に一層荒唐無稽で、有形無形に社會に害毒を流してゐる點に於てはむしろ天竺教以上です。宗教家といふ職業者は人類の中で最も神の思召しから遠ざかつた仕事をしてゐる徒の謂ひではありませんか。

私。左う云へばそんなものですな。時に、早速ですが、今日は少々御相談があつて參りましたのです——

談。はあ、はあ。

私。他でもありませんが、本日は私の談話を買つて戴き度いと思ひまして。實は今晩に差し迫つた金の要り道があるのですが、今から原稿を書いてゐる暇は無し、雜誌社へ行つて融通を頼んだところが前借りを一文も返濟せずにあるものですから頑として應じて呉れませんし、殆んど窮してしまひました結果、ふとあなたのことを考へ付いて、つまらない談話ですけれど是非買つて戴きたいと思つて遣つて參りましたのです。

談。いや結構な御相談です。實は私の處でも近頃仕入れを怠つて居りましたために品が拂底になつて困つてゐる場合ですから、丁度願つたり叶つたりです。殊にあなたの談話なら嘸面白いでせう。是非頂戴致しませう。

私。それで漸く安心致しました。やれ、やれ。

談。處で、御相談が極まれば早速お取引きを願ひたいのですが、あなたがお拂ひにならうと仰つしやる談話の題目は？

私。お氣に召すか召さないか、途々電車の中で考へて來た話ですが、題を付けると「男を賣つた女の話」と云ふのです。内容を稍具體的に申しませうなら、女が戀愛の爲め或ひは自己の安全を圖る爲めに、男に對して計略を構へ又は術策を施す話なのです。其の計略が美事に効を奏してマンマと首尾よく男を埋葬し了せる場合と、見露はされて反對に辛き目に遇はされる場合とありますが、兎に角さう云つた種類の談話を三つ四つ纏めてお聞きに入れようと存じます。

談。いや益結構ですな。人氣といふものは妙なものでして、實は例の筑紫の歌人紅蓮女史の一件以來私の店でも左う云つた種類の談話の需要が滅切り殖えて來たのですが肝心の品が不足で困つて居るのです。

私。それは丁度幸ひでした。えゝと、そこで、値段はどれ位に引き取つて下さるでせうか？

談。總べて賣り値の二倍、詰まり卅分の話ですと六十圓、一時間の話が百圓といふのが店の規定になつて居ります。普通の商法と違つて一度仕入れた話は陳腐になる迄は何遍でも繰返して賣ることが出來ますので、從つて仕入れ値も勉強してあるわけです。が、あなたは謂はゞ商賣人で、仲間商ひのやうなものですから、特に奮發致しまして賣値の三倍で頂戴することに致しませう。

私。へえー、そんなにいい値で買つて下さるんですか。それ

ならば何も骨を折つて雑誌の原稿なぞ書く必要はありません。是れから雑誌社の仕事は成る可く斷ることにしてあなたの方と取引きをすることに致しませう。では今からお話を始めます。

指を切つた話

是れは昔の花魁に關した話で御座います。總べて男女の交際に於て眞實が何より尊むべきものであることは云ふまでもありません。詰まり戀愛には嘘僞りは大の禁物であります。が、此の自明の道德を常に無視しなければならない境遇に置かれてゐるのが花魁といふ稼業を勤めてゐる女達で御座います。彼等が客に對して常に虚僞の言動を敢てして飽く迄男を誑かすのは、是れに依つて正當に自己の安全を圖り且つ職務を忠實に遂行しやうとするのであつて、彼の餓えたるが故に盗みを働く者にも增して更に一層同情すべきもので御座います。「傾城の涙珊瑚の珠となり」といふ川柳が、吾れ吾れの良心に觸れても何等道德的の批判に訴へないばかりか、膝に凭れて紅涙珊々たる情景に却つて一種の美觀をさへ感じさせる所以も亦其處に在るので御坐います。されば物の表裏をわきまへ、人情の機微に通じてゐる彼等花魁の徒におきましては、益其の權謀策略の手を繰つり、是れをば手練手管と稱へて、商人が算盤を重んじるが如く、或ひは僧侶が經典を尊ぶが如くに、專ら其の運用の巧妙ならんことをば期してゐるので御座います。

偖、徳川時代萬治年間の事、江戸は吉原の、玉屋の抱へで花紫といふ花魁がありました。彼女は、所謂太夫と稱する階級に屬する遊女でありました。此の太夫と申す者は天明時代を最後にして吉原には無くなつてしまひましたが、遊女の中での最高位の格式を有してゐたもので、容色拔群にして、女藝一通りをわきまへて居ることは勿論、殊に客をもてなす技巧に於て十分其の任に耐へうる者でなければ、其の位に上ることは許されなかつた。されば其の權勢は大したもの。太夫が揚屋から歸つて參ります時には、伴の六尺が先きに店へ驅け入つて「何々樣お歸り――」と振れ込みます。すると直ぐ樣行水係が盥に絹漉しの湯をば捧げて手水を遣はせる。料理番は直ちに膳立てに取り掛り、醫者が脈をとり、坊主は佛間に坐つて太夫が一夜の勤めを無事に了へて歸つたことを祝ふための經文を誦みにげます。彼等が形式上如何に貴族的生活を營んでゐたものだかといふことは、吾れ〳〵の想像以上にあるので御座います。花紫は恁りいふ生活をしてゐる女でありました。そして、其の並ぶ者なき美貌と、客をもてなす術の巧みな事とを以て、彼女は一

世に婚名を謳はれて居りました。

花紫の處へ通つて來る客の中に山谷大盡と呼ばれる人がありました。山谷といふ屋號で、日本橋西河岸で名うての材木問屋の旦那でありました。彼は花紫のためならば現在自分が有つてゐるところの總ての物を失つても構はないと決心した程の熱心をもつて通つて參りました。花紫が此の客をば殊に大切にしてもてなしたことは勿論であります。彼女もしまひには有らゆる誇りを投げ捨てゝ男に眞意を示すのでありました。遊女だとて戀をしないと限らない以上は、花紫の態度も單なる職業的の技巧とばかり見過すことは出來ません。世間では二人の關係を更に數倍誇張して評判いたしました。

山谷大盡は得意でした。彼は花紫の云ふが儘に金錢を湯水の如く費消して更に悔ゆる處はないのでありました。が、さうして放蕩に耽つて居る彼の腦裡に折り折り係ういふ考へが閃めきました。

「花紫が俺を愛してゐることは今は確かだ。が、それも現在は俺が金持で彼女の云ふ通りにして遣ることが出來るからよいが一朝俺が零落したらどうだらう？　其の時になつても矢張り彼女は現在と同じやうに俺を愛して厚遇して呉れるだらうか？」

彼は不安を感ぜずには居られませんでした。そして自身が金持であることをば呪ひました。女の心を確めんために、本統に乞食になつて見たいやうな氣が致しました。

山谷大盡の其の望みは達せられる日が來ました。彼が多年の放蕩と贅澤三昧にかてゝ加へて、商法の失敗やら何や彼やが重なつて、さしもの老舖も遂に破産のうきめに遭遇いたしました。祖先傳來の家屋敷も今は人手に渡り、大勢の奉公人もちりぢりに離散して、妻子眷族の徒らも夫れ夫れ他人の厄介にならねばならない境涯に立ち到りました。昔日の山谷大盡は今や乞食にも劣る果敢ない身の上でありました。

さうなつてから、彼は一日吉原へ行きました。曾ては小判の雨を降らせた全盛を顧ると、尾羽うち枯らした今の吾身がさすがに羞かしくなりました。彼は花紫に會ひ吾身の境涯を包まず隱さず物語つて、さて、

「今日はこなたに最後の暇を告げようと思つて來たのだ。其のために人の謗りも笑ひも顧ず、わしは狗のやうにコソコソと此の廓へ這入つて來た」と申しました。

花紫は、非常に駭き且つ悲しみました。そして其の後で優しく相手を慰めるのでした。

「あなたが其のやうにしたのも元はと云へばみんなわたしから起きた事、嘸皆さんはわたしを憎んでゞ御座んせう。しかしあ

たゞ想ふわたしの心には以前も今も變りにありません。どうぞわたしをふびんと思し召して此の後ともに見捨てずに可愛がつて下さいませ」と彼女は男の膝に取りついて泪ながらに申しました。

　山谷大盡は案外でありました。彼は譬へやうもない歡喜の情で胸が一ぱいになりました。

「それではこなたは、此の乞食のやうに落ちぶれたわしを見捨てずに――？」

「何んで見捨てゝよいもので御座んすか。世間の女郎衆は知らぬことと憚り乍ら此の花柴は、金や名前ご此の心に賣りませぬ。一旦惚うと想ひ込んだあなたとなら、たとひ深山の佗住居、唄の文句にあるやうた、手鍋さげてゝも夢々厭ひは致しません」

「それが誠ならわしに此の樣に嬉しい事はない。したが花柴、口さきだけでは誰れも云ふ。又筆で書いた起請誓紙なら此處にも持つてゐるけれど、未迄變らぬといふ確かな證據をわしは見せて貰ひたいのだ」

「えゝまあぬしは何んといふ疑ぐり深い人で御座んせう。それほどまでにわたしの心底を見たいなら、どうぞ是れ見て疑ひを晴らして下さいませ」

　花柴はじれつたさうな顔をして起ち上がると、鏡臺の抑斗から一挺の剃刀を取り出して來て、吾身の小指を黒塗りに蒔繪の紋を散らした枕の胴に當てがふが否や、あなやと云ふ間に切り落しました。

「山さん、是れでもまだわたしの心が分りませぬか」と花柴は顔の筋一つ動かさずに申しました。

　山谷は感激に顫へる聲で叫びました。

「これ花柴、こなたを疑つたのはわしが惡かつた、どうか免して呉れ」

「では疑ひが晴れましたかへ？」

「晴れたとも／＼、日本晴れがしたやうだ、わしはもう此んな嬉しい事はないぞや」と山谷は感極まつて申しました。

　何んといふ俺は果報者だらうと山谷は思ひました。自身が全盛時代にはどうしても摑めなかつた女の心を、今や確りと手に握つてゐるやうな氣持がいたしました。どれ程豪奢を極めた遊びをしても決して得られなかつた一種特別の滿足が彼の心にはありました。彼は財産を蕩盡してしまつた現在の境涯を[illegible]向つて感謝したいやうな氣持になりました。

　彼は最早誰れの顔を見ても引け目を感じなくなりました。そして今迄經驗した中で一番愉快な一番晴れ晴れした日を花柴の側で過ごしました。

快い眠りから山谷が眼を醒ました時には花紫は其の側には見えなくて、次ぎの間の方でも人聲は聞えませんでした。

「みんな何處かへ出て行つたと見える」山谷は體を起して枕元の水を取つて一口吞みました。冷たい水が醉ひざめの乾いた舌に快く感じて、意識がはつきりとして來ました。

半刻の花紫の言葉や、行爲が、新らしい記憶の眼に映つて居ります。ダラダラと血の糸を引いてゐる白い小指の半分が空間で踊つて居ります。其の小さな物こそは彼の一生涯の幸福のシムボルでありました。ゾクゾクする嬉しさが彼の全身を走るのでした。

山谷は屏風の蔭から出て次ぎの間の方へ行つて見ました。其處にも誰れも人はゐませんでした。山谷は所在なさに突つ立つたまゝ其處らの物を眺め廻しました。箪笥だの鏡台だの小机だの、彼女の生活を現はしてゐるそれらの道具が、優しく媚めかしく彼の眼には映りました。

其の時ふと彼は、机の上に置いてある手紙に眼を留めました。それは花紫が他へ遣るために書いた文で、まだ封もせずにあるのでした。山谷は輕い好奇心を誘はれて其の文を手に取つて見ました。宛名は男で「戀しき何々樣まゐる」としてあります。彼は俄かに或る不安に心を搏たれて、ワナワナ顫へる手で慌たゞしく手紙をひろげて中の文句を讀みました。

一筆しめし上まゐらせ候このほどはしばらくお顔も見ず戀しく〱ぞんじまゐらせ候さてとやわたくし事かね〲ぬしも御存じの山谷といふ馬鹿に泣かれしかたなく大事の指を切り申候へども指はぬしに上げるつもりゆへ今宵のうちにぜひ〱會ひにおいで下さるべくいさいはおめもじの上にてかしこ

山谷大盡は柿のやうな赤い顔をしたり、梅のやうに青くなつたりして茫然として突つ立つて居りました。其の時何所の座敷で

「親に貰つた五本の指を四本半には誰れがした」

と凄いやうないい聲で三下りの唄を唄ひました。

* * * * *

私。如何です？　少しは面白う御坐いますか？

談。いや實に結構です、花魁の心理がよく現はれてゐて大層面白いです。

私。さうですか。ではついでにも一つ花魁に關した話を致しませう。

談。さあ〱何卒。

男を試す話

女といふものは生れ付き疑ぐり深い性質をもつて居ります。老若貴賤を問はず此の性癖は共通して居ります。一體、自己の力を信ずる者は人を疑ひません。英雄は、己れを信じさせることのみを知つて、他人を疑ふことを知らない者であります。女が男に較べて弱者であることは、此の一事を以ても知ることが出來るので御坐います。中にも、浮氣稼業に從事する女達に於て特に此の悪癖の著しいのを認めます。彼等は常によく男を欺き誑らかすことによつて、自らも亦男にだまされる事を常に惴れ警戒してゐるのです。事實又通つて來る男達に於きましても其の費消つた金の額だけの眞實しか有つてゐないといふのが通例なのです。だから商賣人の女が男を疑つて容易に信じないのは、客を騙すことが彼等の本領であると等しく、自家防衛の策として是れまた止むを得ない次第なので御坐います。偖是れはつい近頃の話です。吉原の或る大籬に右近といふ花魁が居りました。頗る美人でありますところから大層繁昌して、常に其の樓でのお職を張つて居りましたので、賤しい勤めとは云ひながら何不自由なく、其の日〳〵は贅澤三昧に送つて居りました。斯樣にして彼女は餘所眼では何不足もなさゝうに見えましたが、唯一つ彼女が不滿を感じてゐたのは、是れぞと云つて自身の方から深く打ち込んで見度いやうな男にまだ出遇はないとこでした。俗に間夫は勤めの憂さ晴らしと申しまして、多くの朋輩達は皆夫れ〳〵一人の相手を拵らへて持つてゐるにも關はらず、右近だけがそれが無いといふわけは、一つは彼女が氣位が高くて撰り好みが過ぎるせいでもありました。「お金はなくても好い男を」と彼女は望みました。と云つても職人はとかく下品でこちらの懷ばかり狙つて物騷でいけず、商人は勘定高いから厭氣がさすし、書生さんは亂暴で始末が惡い――とばかりも限らないが、とにかく誰れが見ても感心するやうな、立派で溫和しいそしてわたしに深切な男にめぐり遇ひ度いものだと、彼女は架空の戀人を想像しては遣る瀨ない思ひを馳せてゐるのでした。

或る晩彼女の處へ來た初會の客がありました。齡の若い男なりの粗末な書生でした。酒も澤山は飲まず、口數も餘り利かないといふ風で座敷は極く淋しいもの。直きにお引けといふ事になり、右近は初めてお客の側へまゐりました。其の客は齡廿二三で、色がくつきりと白く、顏立ちはきりりと引き締まつて男らしい中に優しい處があり、上品なやうで何處かに粹な處もある、丁度芝居で見る白井權八のやうな感じのする男でした。

「まあ何んといふ好い男だらう――」

と彼女は思ひました。そして、こんな好い男が來てくれたことを内心嬉しく思ひながらも、氣遅れがするやうで何んとなく極まりが惡くなりました。それでも彼女は少しづゝ客と話しを交しました。書生は、神田の下宿屋にゐて、法律の學校へ通つてゐる、辯護士になるつもりだ、なぞと淡白な調子で語りました。「ほんとに頼母しさうな人だ」と、右近はそれとなく惚れ惚れした眼で男の顏を眺めながら考へました。此の人ならわたしのいい人ですと云つてどなたにお目に掛けたつて恥かしいことはない。人物も賢こさうだから末始終出世する人には極まつてゐる。無論まだ奥さんがある筈はなし、それにお見掛け申したところ金滿家の息子ではなさゝうだから、わたしが稼いで溜めたお金を貢いで上げれば屹度お喜びなさるに違ひない。さうして學校を卒業させてしまへば此のわたしは押しも押されもしない辯護士の奥さん。第一あの辯護士といふ職業は、高尚な中にも伊達なところがあつて男らしいかちわたしは大好きさ——と右近は獨りで心にきめて未來の空想を描くのでした。が其の後で彼女は或る不安にぶつかりました。それは「恁んな好い男を是れ迄世間の女が捨てゝ置く筈はない、若しも疾うから何所かに切つても切れない深間の相手がありでもしようものなら、わたしがどれ程想つたところで無駄なはなしだ」と、彼女はそれが心配になるのでした。

「あなたは御容子がいいから、嘸方々にお愉みがおありなさるでせうね?」と右近は長煙管で一ぷく吸ひ付けて渡しながら男の顏を流眄に見て戯談のやうに云ひました。

「そんなものがあるものか。縱しんばこつちで少しばかり想つて見たところが、貧乏書生の相手になつて呉れるやうな奴はまづ無いさ」と男は笑つて答へました。

「それでは、わたしのやうな女の處へも是れから偶には入らしつて下さるでせうね?」

「うん、是非來よう」

書生のさつぱりした物の云ひ振りが右近に一層いい感じをもたせました。彼女は成らうことなら相手の言葉を其の儘信用したいやうな氣持が致しました。けれども、既往の數々の經驗がさう手易く男を信じることは許さないのでした。彼女はどうかして男の本統の心を試して見たいものだと思ひました。さうして其の手段に就いて考へました。

暫らくすると右近は急にふさぎ込んで、大きな溜め息を續けさまに吐きました。

「どうしたのだ?」と男は不審顏をして訊きました。

「どうもお耳障りで濟みません、實にわたし少し心配事がある

もんですから——」
「心配事つて、どんな事か知らないが、若し差し支えなかつたら僕に話して見玉へ」
「でも眞逆今晩初めてお目に掛つたあなたにそんな事申されませんわ」
「構はないぢやないか、出來ない相談に乘らうと云ふわけぢやあなし。膝とも談合といふ諺へもあるぢやあないか」
「ぢやあ思ひ切つてお話し丶ますが、實は明日の晩迄にわたしは五十圓のお金がなくてはどうにも困るわけがあるんです。處が、いろ／＼事情があつてどうしても其のお金の出來る當てがありませんのです」と云つて右近は途方に暮れたやうな表情を致しました。
「さうか——？」
男も眉の間へ皺を寄せて考へるやうな眼付きをしました。
「ねえあなた、初會のお客様に向つて恁んな事を云つたなぞと若しお茶屋さんの人にでも聞かれやうものならそれこそどんなに悪く云はれるか分りませんですけど、あなたがわたしを可哀さうだと思つて下さるなら、明日のうちに其の五十圓を何んとか御都合して貸して戴くわけにはまゐりませんでせうか。其の代り二三日經てば乾度お返し致しますから」

恁う云つて頼んで見て、相手がそれを承知して金を屆けて與れるやうなら、まつたく深切があつて、そして自分に對して愛情をもつてゐることが確かめられるわけだ、と右近は考へたのです。
「宜し、僕が引受けた。明日の午頃迄には間違ひなく金は屆けて上げるから安心してゐたまへ」と書生は堅い口ぶりで承諾しました。
朝早く書生は歸りました。右近は其の後で、當てにならない事を當てにしてゐるやうな頼りない氣持で時間を過ごしました。「考へて見ると少しわたしが無理だつた。假りに先方に實があつたにしたところで、書生の身分では五十圓といふ大金が急に調へられるわけがない」と思ふと、餘り無法な事を云ひ掛けて、あの好いたらし男を二度と此所へ來られないやうにさせてしまつたことが後悔されました。
「まあ仕方がない、どう世緣の無い人なかもしれない」と彼女は思ひ切りよく締めて二度寢の床へ這入りました。
すると其の日の午頃、意外にも昨夜の書生から約束を違へず五十圓の金を人に持たせて寄越しました。それには簡單な手紙が添へてありました。右近は飛び上るほど嬉しくなりました。
「何んといふ實のある人だらう？」是れならわたしのいい人に

しても大丈夫だと、右近は、白井權八のやうな書生の顏を眼に描きながら、其の男を立て過して時々會ふ愉しみを貪ぼるやうに空想するのでした。

四五日經つてから男はやつて來ました。右近はくれ〴〵も過日の禮を述べて早速五十圓の金を返しましたが、其の上彼女がどんなに男を款待したかといふことに就いては管々しく述べることを避けませう。處が、其の晩男はどうしたわけだか先夜とは打つて變つて萎れてゐるのでありました。

「あなた、今夜は何故そんなに鬱いでゐらつしやるの？」と右近は氣懸りになつて訊ねました。

すると男は恁う答へるのでした。

「實は僕は明日に迫つて是非共玆に百圓の金が要るのだが、其の金策の方法がないので心配で溜まらないのだ」

右近は可笑しくて溜まりませんでした。「此の人はわたしに先夜の仕返しをする氣に違ひないが、それにしても同じやうな事でわたしを試さうとするのは何んといふ初心なお方だらう……？」

「そんな事なら御心配には及びません。其のお金はわたしがお立替へしますわ」

「花魁それあ本統かへ？」

「大丈夫ですとも。此の前あなたに助けて貰いたんですもの、今度はわたしがあなたをお助けするのが當り前ぢやなくつて？」

右近は恁うは云つたもの丶、百圓といふ大金は持ち合はせて居りませんから、直ぐ樣御内所へ行つて樓主に談判をした結果、自身の年期を増すことにして漸く百圓の現金を借りて來て、それを待てゐる書生の枕元に並べました。

「さあ、あなたや、玆に百圓ありますから早くお仕舞ひなさいな」

「花魁、本統に貸して呉れるのか、どうも濟まないな」

「あらいやだ、濟むの濟まないのつて、そんな水臭い事わたし大きらひ」右近はもう辯護士の奥さんになつたやうな氣持で恁う云ふのでありました。

書生は百圓の金を持つて歸りました。それからといふものは右近は日本一の美男子のいい人が出來たと思ふと嬉しくてたまらず、二階中へ惚け散らして居りました。處が、約束の日が來ても、それから二三日經つてもまだ男は顏を見せません。「感冒でも引いて寢てゐるのではあるまいか？」と考へると右近は大事の男の體のことが心配で〳〵たまりません。

右近は到頭待ち切れなくなつて、或る日病氣見舞ひの積りで新造に鷄卵の折を持たせて、書生が書いて行つた下宿屋

の番地など教へて使に遣りました。すると日暮れ方に新造がぼんやりした顔をして戻つて來て云ふことには、花魁に教へられた町名番地を尋ねて行つて見たところが其處には下宿屋はありません。それから神田中足を棒にして歩き廻つたが到頭其の下宿屋は目つからず、一番最後に法律學校へ行つて聞いて見るとそんな名前の學生は來て居らんと云はれたので仕方がなくて戻つて來ましたと、今朝のまゝの卵の折を極まりわるげに差し出すのでした。

右近は「うーん」と云つた儘癪を起こしてしまひました。

子寳を失ふ話

新橋のさる家の抱へで艶香といふ藝者がありました。齢が廿二で、柄の大きい、そして肥り肉で、色白の愛嬌に富んだ顔立ちが男好きのする性なので相應に賣れッ妓の部でありました。けれども艶香には目下の處定まつた旦那といふ者がありませんでしたので、其の日〳〵の商賣も人一倍骨が折れ、季節々々の身に着ける物でも其の都度頭を悩まさねばならず、諸事萬端苦しい境涯なのでありました。ですから艶香は、一日も早くいい旦那を目つけて、樂な體になり度いものだと、明け暮れ其の事を神に念じて居りました。すると茲に、艶香に取つてはまことに好都合な事が出來たといふのは、山茜といふ日本橋邊の薬種問屋の主で、家には孫の三四人もある齢でありながらまだ此の道の浮氣が止まず、あちこち泳ぎ廻つてゐるうち偶然或る待合で艶香を呼んだのが縁となつて其の後はせつせとやつて來るのでした。艶香は此の老人を出來るだけ款待することを怠りませんでした。ですから山茜は大喜びで急に卅も若返つたやうな氣持で艶香を相手にいちや〳〵して居りました。併し然うなつてもまだ本式の旦那といふわけではないので艶香は少しも安心といふ處へいきません。彼女は何んとかして相手を完全に自己の掌中に納めてしまひたいものだと尠なからず腐心致しました。が何を云ふにも相手は寝るにも算盤を枕にして育つて來たやうな親父のことですから、いざとなると勘定高くて迂闊には寄り付けないのです。けれども、女の智慧といふものは、斯様な際に於て特に意表な點にまで其の鋒鋩を閃めかすので御座います。

或る晩例の待合で寝物語りに、艶香は山茜に向つて斯んな事を云ひ出しました。

「わたしはあなたに是非御相談しなければならない事が出來てしまひました」

「何んだな、改まつて相談とは？」

「他でもありませんが、わたしはどうやら姙娠したらしいんです」

「何、姙娠した？　嘘だらう――？」と山茜は半信半疑の體で申しました。

「いゝえ本統なんです、實は昨日婦人科で診て貰つたんですが矢っ張りさうだつて云ふんですもの」

「ふうん、それでは先づ確かと見なければなるまいな。其處で？　わしに相談と云ふのは？」

「きまつてるぢやありませんか。わたしに子どもが出來れば、あなたに相談するのが當りまへぢやありませんか」

「おや／＼、それぢやあ何か、お前の腹の兒はわしの子だとでも云ふのか？」

「知れてるわよ、そんな事は。あなたの子でなくて誰れの子を孕むもんですか」

「それは少し可笑しい理屈だな。お前がさう極めるのは勝手だが、併しわしは信じないぜ」

「まあ、あなたは何んといふ薄情な殘酷な人でせう？　それぢやあわたしが浮氣でもしてゐると云ふんですか？」

「さういふわけぢやあないが、兎に角お前自分でも考へたら判りさうなもんだ。お前だつて綺麗にお座敷ばかり稼いでゐる藝者といふわけでもなしさ、假りに云へば誰れの子だか、相手が多過ぎて困るほどぢやないか。其の中で兒が出來たからつて、何んでもわしの子のやうなことを云つて押し付けようつてのは年寄りだと思つて甘く見るつもりか知らんが、お前の方がよつぽどひどいといふものだ、はゝゝゝは」

「何んですつて？　惡魔！　外道！　畜生！　散々人を馬鹿にしない、どっせわたしは不見轉ですっ。チヨッ、いくら不見轉したつて、何處の馬の骨かも分らない奴の兒なんか孕むもんですかよっ。そんな薄情なこと云ふんなら、あたし死んでやるからいい、くやしい――ッ」

と泣き聲で罵りながら、艶香は山茜の胸倉にしがみ付いて、其の上猶彼の干大根のやうな腕にいやと云ふ程嚙み付きました。山茜は一り溜りもなく海鼠のやうにグニャ／＼になつてしまひました。

山茜は、艶香の條理に外れた言葉を其の儘信じることは出來難いと同時に、彼女の腹の中の兒が或ひは自分の胤であるかも知れないといふことも滿更否み難いので御坐います。又心の片隅には、寧ろ自信的にさう信じてしまひたいやうな氣持もありました。兎に角艶香自身が、無教育の賜物とは云ひながら絕對に彼の兒であると確信してゐるといふ一事は、自分に對する彼

女の愛情が如何に猛烈であるかといふことを證據立てゝゐるやうに思はれて甚だ愉快ならざるを得ませんでした。彼は以前に數倍して艶香を可愛く思ふやうになつたと共に、何時となく腹の兒をも肯定する氣持になつてしまひました。彼は藝者に兒を生ませて、これを育てゝ行く愉みを私かに想像してみました。

間もなく山茜は艶香を落籍して、大工の後家さんである彼女の母親をも引き取らせ、芝佐久間町邊の横丁に小粋な世帶を持たせました。黒板塀に見越しの松などと云つたのは昔の事、當世は磨り硝子を嵌めた格子戸を明けるとチリリンと鳴る鈴の音も勇ましく、中折帽に獺虎の襟の外套を着込んだ山茜がぬッと這入つて來るのをきつかけに「あら旦那入らつしやいまし」と玄關へ出迎へる艶香は今は本名のお艶に戻つて、潰し島田に代はる一番の大圓髷も柄が大きいだけにうつりがよく、大島紬の書生羽織をきちんと着た姿は高等官の奥さんだと云つてさへ通りさうで、諸事堅氣に、賤しい藝者稼業の名殘りは生得嫌ひな三味線の撥と一緒に仕舞ひ込んでしまつた處が、山茜の眼には頰ひ付きたいほど有難くも又頼母しくも見えるのでありました。

山茜は最早腹の兒については何んの疑念も挾んでは居りません。艶香が赤坊を膝の上に抱いて柔かな乳房をふくませてゐる光景を想像して見るだけでも、彼は知らず〳〵顔面の筋肉が弛緩するのを感じるので御坐います。腰を冷やしては毒だとか、高い處へ手を擧げては不可ないとか年寄りだけに氣の付くこともこまかく蒼蠅く世話を燒くので艶香は浮つかり忘れてしまひ「どうだ今日は動いたか」と聞かれた時「今夕刊を持つて來ますから」と米相場と間違へて頓珍漢の返辭をして危うく尻尾を出しかけるやうなこともありましたが、地腹の大きいのが勿怪の幸となりどうやら胡麻化し了せて居りました。

併し、何時迄も此の儘では通されません。何んと工夫して見た處で腹の中にゐない兒は生めないから、露見しないうちに一と狂言書かなければならないと、是れも餘り細くないお袋共々智慧を絞つた結果、間もなく彼女の家に於て次ぎのやうな珍妙な事件が行はれたので御坐います。

或る日山茜が妾宅へやつて參りますると、何時になくお袋が慌てゝ玄關へ飛び出して來て

「旦那樣宜う入らしつて下さいました。實は只今あの娘が飛んでもない事を致してしまいましたんですよ」と顔色を變へて云ふのです。

「な、何んだつて？　お艶がどうかしたのか？」

「まあお聞き下さいまし、斯うなんで御坐います。旦那も……

ん仰つしやる通り、身重な體だから氣を付けなけりや不可ないつてあれ程云ひ聞かせてありますのに、あの娘はまあ何んといふ馬鹿なんで御坐いませう？　今日は乾度旦那が入らつしやるから其の前にお二階のお花を替へて置くんだつて申しまして、止せばいゝのにあなたお二階の花活けを自分で階下(した)へ持つて下りようとするんで御坐います。わたくしも生憎お勝手の方に居りましたので存じないで居りましたが、するとあなた大變な物音が致しますので急いで出て來て見ると、どうでせうあの娘が花活けを持つた儘梯子段のてつぺんから足を踏み外して眞逆樣におつこちたのでは御坐いませんか」

「け、怪我はなかつたか、怪我は？」と山茜は蒼くなつて申しました。

「はい、お蔭樣と帝釋樣の御利益であの娘の身に怪我はなくて濟みましたが、其の代りあなた、落つこちた拍子に打ち處が惡かつたと見えましてお腹の兒が流産してしまひました」

「げえッ！　流産したァ！」

「はい、しかも男の兒でしたからほんとに惜しい事を致しました。あの娘もよくよく惡い事をしたと氣がついたと見えまして、旦那に申し譯がないと云つて泣いてるんで御坐います。しかしお醫者樣が仰つしやるには、親の體に心配は無いが、産後だから當分動かさないやうに寢かして置かなけりや不可ないと申れまして奥に寢(ね)ませてあるんで御坐います。旦那樣が御立腹遊ばすのは御尤ですが、何しろあの通り氣の狹い娘で御坐いますから、あなた樣に強く叱られでもすると取りのぼせて又どんな事にならんとも限りませんですから、何卒此の度びだけは此のわたくしに免じて御勘辨なすつて下さいまし、お願ひで御坐います」

と母親は一期の浮沈に關する事ですから一生懸命に述べ立てました。

山茜は驚駭きと失望の中にも、お艶の體に別狀の無かつた事を心私かに喜びました。けれども彼はうはべだけ苦り切つた顏をして奥の座敷へ行きました。其處ではお艶が鉢卷きをして「うんうん」唸つて寢て居りました。山茜は其の枕元に座り込んで諄々と彼女の不心得を說き諭すので御坐います。

「これお艶、詳しい話は今お袋から聞いたが、お前はまあ何んといふ思慮(かんがへ)の無い女だらう？　だからわしが常々云はないこつちやない。是れといふのもお前が自分の體を粗末に扱ひ過ぎるからだ。身重の時に重たい物を持つて二階から下りるなんて、わしは聞いたゞけでも身顫ひが出る。全體お前は子といふものをどう考へるのかな？　いいか？　昔から子寶と云つて子供は

何にも替へられない寶としてあるのだよ。お前は自分の粗忽から其の大事な寶を失くしてしまつたぢやないか……」

此處迄來ると山蔭は、闇から闇へと送つてしまつた我が子の運命がいぢらしくなつて來て、老ひの眼からハラハラと泪を零すのでありました。

＊　＊　＊　＊

私。此の話は是れでお仕舞ひです。どうです、お氣に入りましたか？

談。いや、大層面白う御座いました。事件の興味よりもあなた一流の微に入り細を穿つ說明の箇所が、面白いですな。時に、まだ時間が半端ですから序でにもう一つお話しを願ひませうかな。

私。承知致しました。ではもう一題だけ、今度は今までの話とは趣きの變つた話を申上げることに致しませう。

天罰を蒙る話

或る山國の田舍に一人の獵人がありました。其の名を吾作と申しまして、殺生を渡世にする者に似合はない至極心の善い佛性に近い人物でありました。其の女房をお咲と云ひまして、是れは山家育ちとは云ひながらなか〳〵の美人、其の上氣象も餘程聢り者で御座います。夫婦の間に今では可愛い子供も出來て貧しいながらも至極平和な生活を營んで居りました。

折しも秋の最中で御座います。晝飯を食べてしまふと、今日は仕事を休むつもりと見えて吾作は爐端へ胡坐を搔いて何時迄も悠々と煙草をくゆらして居ります。裏の掛樋で洗ひ物をして居つて來たお咲は家の中へはいると、

「おや、お前さん今日は仕事に行かねえだか？」と良人の顔を見て云ひました。

「うん、今日は死んだ親父様の命日だから、今日一日だけ稼業休むべいと思つてな」

「親父様の命日は知れてあるが、稼業休むのは間違つちやゐねえだかね？」

「何故だ？」

「何故つてお前さん、殺生はお前さんの稼業でねえだか、鳥や獸を打つのは、百姓衆が田圃へ出るのも、商人が店へ座るのも同じ理屈だんべ、死んだ佛様に遠慮しるには及ばねえだ」

「だら云へばだらだが、是れ迄親父様やおつ母の命日には何時でも仕事を休んで來たでねえか。汝今度に限つて何故それえなこと云ふだ？　佛様を粗末にしると罰が當るべい」

「おや、お前さんおかしな事を云ふね？　何時わたしが佛様を粗略にしただ？それ聞かして貰ふべい」

お咲は少し機嫌を損ねて、爐端へやつて來て亭主の前へ座りました。

「お前さんはどう思つてるか知んねえだが、以前と近頃とはまるで世の中が違つて來てゐるだ。年々物は高くなるばかりだし、とても昔のやうな考へでゐたぢや家の活計が立たねえだ。子供にだつて正月前にやあ着物の一枚宛も買つて遣り度いしさ、ちつとも餘計お前さんに稼いで貰ひ度いと思へばこそ、わたしや怎んなこと云ふだよ」

「分つた〳〵、俺らが惡かつただから勘忍してくんろ、ぢやあ直ぐに仕事に出かけるとしべい」

と、根が温和しい吾作は女房に云ひまくられて、多少氣は進まぬながらも直ぐに山へ這入る仕度をして、鐵砲を擔いで我家を出ました。山家の村だが少しは田もあり、人家に近い山は段々畠になつてゐる。秋日和の朝から暖かな好い天氣で、霜に遇つた雜木林は黄に紅に美しく染められて居ります。吾作が獵場にしてゐる山は村を通り拔けてしまつた奥の方にありました。

「怎んな好い日には存外獲物があるかもしれない」と考へると、吾作は出がけに女房と云ひ合つた事などは最早念頭から消えてしなつて、勢よく里道を進んでまゐりました。

「やあ吾作さん、相變らず精を出してよく稼ぎなさるね」

吾作に行き遇ふと怎う云つて聲を掛けた男がありました。柔か物の濶袍をぞべらと着込んで懐ろ手をしてゐる其の男は、平助といふ博奕打ちで、近頃此の村へ流れ込んで來てごろ付いてゐる人間でありました。

「精を出さねえと、わしらあ嬶あや子供にお飯食はせることが出來ねえでがすからな」と吾作は笑つて答へました。

「だから吾作さんは感心だと云ふのさ。だがなあ、いい女のかみさんは持ちたいものだ」

「何云ふだ、人を嬲るもんでねえだよ」

「何お前さんを嬲るもんか、まつたくの噺だ。俺なんぞもお咲さんのやうな別嬪のかみさんがあつたら、怎んな道樂稼業は止めて土方でも車挽きでもするといふ噺さ。あは丶丶丶は。まあ早く歸つておやんなせえ、お咲さんが待つてるから」

怎う云ひ捨て丶平助はさつさと向うへ行つてしまひました。

「好かねえ奴だ――」と、吾作は其の後姿を見送つてつぶやきました。あんな破落戸が何時の間にか自分の女房の名前まで知つてゐて「お咲さん〳〵」とあ丶慣れ〳〵しく云はれたことが吾作には何んとなく不愉快に感じられました。

何時の間にか村を出端れて居りました。小徑が、谷川を下に見て、林の中へはいつて行きました。あたりからは「キイー〱」といふ鳥の聲が靜かな山の空氣を震はせて響きました。落ち葉を踏む自身の足音がカサカサと大きく鳴りました。吾作の心は忽ち鳥や獸の存在に對つてのみ注がれ始めました。

此邊は雉子や山鳥のほかに兎の出場所になつて居りました。吾作は、鐵砲を肩から外して、足音を忍ばせるやうにして歩きました。日光が樹間から斑らに彼の體を照らしました。さうして彼は數時間を山の中で過ごしました。がどうしたわけか今日は一つも獲物がありません。彼方此方の山を歩き廻つて見ましたが、小鳥一つ獲られないのでありました。

「矢つ張り來ない方が宜かつたのだ――」

彼は忘れてゐた父親の命日といふことを思ひ出しました。すると、矢つ張り殺生をするのは宜くない事だといふ氣がしたので、思ひ切りよく鐵砲を肩に掛け直して我家をさして歸り掛けました。

吾作は、今度は山傳ひに歩きました。道といふやうな道は無い代りにそれを行けば大層近くて、自然と我家の裏山へ出られるのでありました。彼は小さな崖を滑つて下りたり、齒朶の茂みを掻き分けたりして進みました。

漸く自分の家の屋根を下の方に見ることが出來る處迄來ました。其の邊は粗らな雜木林で、樹木と樹木の間には丈の長い枯れ草が茂つて居りました。其處迄來た時、吾作はふと遙か前方の叢の中に小さな白い物の姿を認めました。よく〱眼を据えて見ると、それは確かに兎に相違ありません。と、吾作は殆んど無意識に肩の鐵砲を外して身構へをしました。が直ぐ其の後から「今日は殺生しないつもりだつた」と氣が付いて打つことを止めようかと思ひました。

兎はちつとも動かずに圓くなつて居ります。吾作にそれを見ると本能的に打ちたくなりました。彼の多年の職業的習慣が、山にゐる獸を看過して逃ることはどうにも許されないやうな氣持を起こさせるのでした。其の上、彼は今朝出掛ける前の出來事を心に思ひ浮かべました。

「空ら手で歸るとお咲の奴が又愚圖々々云ふだらう――」と考へました。

吾作は到頭打つことに決心しました。そして再び鐵砲を取り上げると、十分に狙ひを定めて、引き金を引きました。

吾作は確かな手應を感じました。と同時に、恐ろしい悲鳴に似た叫び聲が彼の耳朶を擘きました。彼は吃驚仰天して、こけつまろびつ獲物を目掛けて駈せ付けました。

吾作が鬼と見たのは、白い手拭を冠つてゐる女の頭でありました。彼は其の女を見て息の止まる程に駭きました。何故かと云へば、それは彼自身の女房のお咲だつたのです。

お咲は頭部一面に銃丸を受けて、一と溜りもなく縡切れて居りました。が、其の側にもう一人殆んど彼女と抱き合つたやうになつて倒れてゐる男がありました。それが博奕打ちの平助であることを知つた時、吾作は始めて一つの秘密の世界に行き當つて、前とは別な驚駭きに、譬へやうのない深刻な悲哀にうたれて鐵砲を持つた儘べつたりと尻餅を突きました

＊　＊　＊　＊　＊

私。是れでお仕舞ひです。まだ考へれば類似の話は幾らでも思ひ出すでせうが、餘り永くなると御迷惑でせうから今回は此の邊で止めて置きませう。

談。いやどうも御苦勞樣でした。お蔭で新しい賣り物が出來ました。では丁度一時間經ちましたから百五十圓差し上げます。何卒お請取り下さい。

正夢物語（まさゆめものがたり）

橋本五郎

泥棒

『命が惜しくば金を出せ。い、い、すのこの吐すと、どてつ腹へ風穴を開けるぞ……』

曲者はそんな脅迫の臺詞（せりふ）を並べて、ぎらぎらする白刃を眼の前の疊へぐさりと突き立てた。手拭で覆つて居るので、もとより面態はさだかに知る由もないが、二つの眼だけはぎろりと光つて見えた。凡てが紋切り型に嵌つて居た。

私は思はず噴き出して了つた。恐怖の念に襲はれる替りに、時代錯誤の滑稽味を感じて、操られるやうな心地がした。今時恁んな古風な泥棒のお見舞を受けやうとは、思ひも設けぬ所であつた。——お、失笑した後から直ぐ、輕い後悔の念が起つて

來た。皆に對して濟まない氣がした。態とらしく威張つて居る泥棒にも、ぶるぶる慄へて居る母や妹にも、何だか氣の毒な思ひがした。

私は急に眞面目を取り繕つて云つた。

『お金なんか無いよ。うちは貧乏だから』

『嘘を吐け？　隱すと赦さんぞ』

『疑ふんなら、何處でも探して見るがいい。せめて月末にでもやつて來れば、少しは有るだらうけれど……』

『そんなら着物でも品物でも、金目になりさうな物を何でも出せ……』

泥棒は駄駄つ子のやうにさう云ひながら、室内をじろじろ見廻した。

最初こつこつ戸を敲いて案内を乞ふた時、母は氣味惡がつて、相手になるなと誡めた。怎んな夜更に訪れて來る筈の知り人も無いから、きつと怪しい者に違ひないと云つた。けれども私は肯かなかつた。もしも曲者だつたら立ち所に捕らまへてやるぞ、と力んで見せた。さうして躊躇なく門を開けた。すると、果して母の豫言通り、私達の前にぬつと姿を現したのは、黒つぽい着物の尻を端折つた一人の怪漢だつた。其男は玄關の土間に立つといきなり、背後に隱し持つて居た拔き身の大刀を突きつけた。母は居竦んだまま聲も立て得なかつたが、私は別に驚きもしなかつた。のみならず不思議な事には、却て待ち設けたもの――來なければならぬ運命が訪れて來た、と云ふやうな思ひがした。其時、着物の裾からによつきり出て居る兩脚が、どうした譯でか私の注意を惹いた。其脚は、薄穢い股引を穿いて居た。

『碌な物は無いな……何だ是は女物か』

そんな贅澤を泥棒は並べながら、簞笥の抽斗から私達の衣類を一枚一枚取り出しては、圓筒型の大きな竹の籠の中へ詰め込んだ。其いやに落ち着いた態度が、にやにやと冷笑を浮べた横顏が、私の癇癪と敵愾心を挑發した……。

私は表面だけ努めて冷靜を裝ふて、泥棒の爲すがままに委せたが、心の裡では、飛び懸るべき機を窺つて居た。それで度度母に眼配せ――危險を避ける爲めに彼方へ行けと云ふ意味のそぶりを示した。けれども母は一向に悟れぬ風つきで、妹と共に凝と私の側に縮こまつて居た。

私はふと、母が腰を拔かして了つたのではないかと思つた。さう思ふと、さうらしい氣もするのであつた。すると、妙に忌忌しさが胸に込み上つて來て、覺えずちえつと舌打をした。其音が存外强かつたので、泥棒はぢろりと振り向いて、

『どうもお待ち遠樣……』

とでも云ひたげな皮肉な表情を浮べながら、ぴよこりと變なおじぎをした。怒氣がむらむらと、私の腦天へ込み上つて來た。

『おい、もう大抵にしないか！　夜中だぞ！』

我知らず私は、變な挨拶をして了つた。

今度は泥棒の方で、ぷつと噴き出した。

『夜中だから遠慮しないのさ。まさか眞つ晝間にね……』

さう云つて、また抽斗を探り始めた。夜中だから……成程さうだと思ひながら、私は圖圖しい泥棒の云ひ草に呆れるよりも自分自身の變な挨拶の方が餘つぽど可笑しくなつた。がくすりと出かかつた苦笑を危く嚙み殺して、私はきつとなつた。

『おいおい、餘り莫迦にすると赦さんぞ。俺も帝國の軍人だぞ！』

私は到頭思ひ切つて、さう叱責の辭を浴びせかけた。

『帝國の軍人？　軍人だか何だか知らんが、兎に角そろそろお暇しやうかな。跡はもうガラクタばかりだから……』

泥棒は悄悄しげに棄てぜりふを吐きながら、ぎつしり衣類の詰つた大きな籠を、何の苦も無ささうに背負ひ上げた。やや俯向き加減になつた不恰好な其立姿が、私には、かつて何處かで見覺えた事のあるやうな氣がされた。然しもとより泥棒杯に近づきの有らう筈もなし、唯そんな心持がしただけの話に過ぎなかつた。それよりも、現在まのあたりに見せられる傍若無人な所行を、私達に加へられやうとする災難を、如何にもして妨がねばならない。——忍耐の殼を破つた最後の勇氣を、私は猛然と奮ひ起した。

『おいつ、何處へ行くんだ！』

『何處へ？……歸るのよ』

『歸るのはそちらの勝手だが、其荷物をどうするつもりだ？』

『知れた事よ、貰つて行くのさ』

『誰に貰つた？　誰が遣ると云つた？』

『何だ、誰が遣ると云つた？　……洒らつくさい！　遣ると云はうが云ふまいが、貰つて行くのが俺達の商賣だ……』

『泥棒待て！』

私は室から出て行かうとする泥棒に一聲高く呼びかけながら、獲物を狙つた猫のやうに、勢鋭く追ひ迫つた。さうしていきなり、其背に擔つた籠に手をかけて、ぐつと一氣に引き戻さうとした。泥棒は激しく上半身を搖すぶつて、私の腕を振り放さうとしたが、私も更に力を罩めた。

二人の爭鬪が暫らく續いた。……どうした機か、私の腕が可なり強い衝動を感じて、解れた時、泥棒もよろよろと蹌踉めい

た。よろめいた拍子に、くるりと後の身體が廻つて、假面のとれた不氣味な顔が私を睨んだ。……はつと氣が着くと、其長しい幻の場面は、狡猾のやうに消え失せて了つた。私は異狀なくいつものやうに、然し不行儀な寢像の跡を留めて、暗い夜具の裡に埋まつて居た。

それは私が兵營生活を終つた翌年、早春の曉に見た夢であつた。もとより夢の事なので深い注意を惹かれた譯でもなかつたが、でも劇の場面を見るやうなまざまざとした光景と、自分が其處で素晴らしい活躍を演じた事に、私は一寸興味を覺えさせられた。他愛もない物の怪におそはれたり、肝腎の場合に力が萎えて出なかつたり、さうした恐ろしさや苦しさを經驗する事の多い私の夢が――大抵の人もさうだらうが――見事に曲者と格鬪し得たと云ふレコードは、兎に角珍しい事であつた。弱虫の私も銃や劍で鍛へられたお蔭で、滅切り氣强くなつた爲めだらう。さう思つて私は、自分ながら可笑しくてならなかつた。

それから二日目か三日目に當る日曜日の事であつた。

其頃私は、一週一度の定休日には定つて、のんびりと正午近くまで朝寢を樂しむ習慣をもつて居た。が、其日に限つて快い早曉の夢を、只事ならぬ母の呼び聲で無慙に破られた。

『一體どうしたんです？　あゝ睡い睡い……』

譯を聞く前にもう不平が先走つて、私は眼を半ば開いたまゝ不機嫌にさう云つた。

『早うから起して濟まんけどね、一寸起きて貰ひたんや。えらい事が出來たんや……』

母は其後を續けるのを恐れてでも居るやうに、それだけ云つてぐつと咽喉を鳴らせた。私は何か無しにはつと吐胸を衝かれて彈かれたやうに床を離れた。

母は私を、離れから中の間へ案内した。

『此始末や……』

と指差されたのを見て、私も一寸驚かずには居られなかつた。大きな泥の足跡がべたべた疊の上に印されて居た。箪笥に近寄つて開けつ放しの抽斗を一つ一つ覗いて見ると、どれもこれも中は殆んど空つぽになつて居た。勿論、私には直ぐ事情が讀めた。

『泥棒の仕業ですね』

『え……十二時半頃迄は、妾もS子（妹）も確かに眼醒いといつたし、あんたも大方さうやつたろ？　そやから、盜人の這入つたんは一時過ぎか二時頃、兎に角ぐつすり皆寢込んだ後やつた

んやな。……えらい災難に逢ふてしもた。今更云ふたかて仕方がないけど……』

母はさう云つて、私に同意を求めるらしい顔色をした。昨夜は土曜日の氣安さで、私は勸めて母と妹を遊びに出した。二人が歸つて來たのはもう十一時を過ぎて居たが、それからも一時間餘り話し込んで、私達は疲れて寢た。母の言葉の通り、泥棒は其處を狙つたものに違ひなかつた。

私はふと、二三日前に見た夢を想ひ出した。で、何の氣無しにではあつたが、其のあらましを母に語つて聞かせた。

『やつぱり虫が知らしたんやね、爭はれんもんやで。……是からそんな時には、きつと用心することつちや』

母は眞劍にさう云つて、無關心らしく構へて居る私を咎めた。が、私はやはり微笑んだまま、格別意にも留めなかつた。

十時頃、母に連れられて檢證に出て來た警官は、被害品を一々手簿に書き留めたり、泥棒の足跡の寸方を計つたり、邸内の其處此處を見巡つたりした。泥棒は塀を乘り越えて庭園に降り立ち、其處から厠をどうとかして屋内に忍び込んだものらしい、との事であつた。

泥棒が不淨の場所を潜り拔けたと云ふ一言には、潔癖家の母も私も、一寸眉を顰めさせられた。警官が歸つて行つた後で、母は妹を指揮したから、入念に掃除をした。處々にきよめの鹽を蒔いたりした。

正午前、私が散歩から歸つてみると、母の話聲が勝手口に聽えた。障子越しに小耳に挾むと、どうやら盜難の一件を誰かに物語つて居るらしい。私は何げなく其處へ姿を現はした。さうして母の話相手を見て、思はずはつと驚いた……

私を驚かせた相手と云ふのは、一人の男であつた。時々見かける事のある、つまり出入りの屑屋であつた。黒つぽい筒袖の、尻を端折つた、裾から脚のによつきり出た、それは先夜夢に現れた泥棒の立姿にそつくり其まゝだ。ぎよろりとした眼、背に擔いだ大きな紙屑籠、それまでが不氣味な程似通つて居る。似通つて居ると云ふよりは、同一人が再現したと云ふ方が、適切らしく感じられた。

私は驚いた瞬間に、一方では、寧ろ自分自身の眼を疑つた。が、見れば見る程それに違ひはなかつた。夢の醒め際に覆面がとれて歴歴と印象させられた泥棒の顔、それも今のあたりに見る眉の太い、頬骨の高い、青黒い顔に違ひなかつた。……屑屋はちらりと私を見て、丁度夢の泥棒がしたやうに、微笑を含んだまゝぴよこりと頭を下げた。私ははつと眼を逸しながら、母に訊ねた。

『お誂さん！　何か拂ふ物でもあるんですか』
『今日は別にないんやけどね、紙屑が少しばかり……』
『ぢや、早くしたらいいでせう。詰らない話なんか、するもんぢや有りませんよ』
　私はいつになく突慳貪にさう云つた。（母に向つてと云ふよりも、屑屋に對してのやうに）さうしてそれきり、不氣味な男の顔を見返す氣になれなかつた。
　屑屋の姿が見えなくなつてから、私はまた母に告げた。
『何だか厭な奴ですね。了度彼奴そつくりですよ、夢で見た泥棒は。……どうも私は、彼奴が怪しいやうな氣がして成らないんです』
『ほほほほほ……何云ふかと思ふたらまあ、何ぼ何かて、まさかあの人が盗人もせんやろかい。あれは始終來る紙屑屋さんやがね』
『然しまあ要心した方がいいです。人は見かけによらぬものと云ひますからなあ……』
　私は苦笑するより仕方がなかつた。考へてみれば成程母の云ふ通り、單に夢の中の人物に似て居ると云ふだけで屑屋を誤解して了ふのは、少しく早計でもあり輕率でもあつた。多分あの男のあの不氣味な風貌が、知らず知らず私の頭腦に刻み込まれて居て、ああした夢を結ばしめるに至つたものであらう。尤も盗難其ものだけは事實となつて現れたけれど、それは偶然の暗合だつたかも知れない。或は母の所謂虫の知らせであつたとしても、だからと云つて、あの男に關係や責任のある譯とはならない。――私はそんな事を思ひながら、其まま口を噤んで了つた。
　然し、それから後も其屑屋の姿を見る事があると、妙に厭な感じが、私を襲はずには居なかつた。私が努めて、冷靜な理性でそれを逐ひ拂はうと試みても。

　私の家が侵されてから其後三月ばかりの間に、此S町（關西のK市に近い郊地）に起つた盗難は、可なり頻繁であつた。警察の方でも中中に神經を腦ました。K市から特に密偵が入り込んだりした。新聞紙でも一寸問題として書き立てたりした。それだけ人の噂にも上つて、同時に町民の不安を募らせた。にも拘らず泥棒は、巧みに夜陰の横行を恣にして居た。
　夏に移つて間もない或日の朝、妹の頓狂な呼聲によつて私は夢を破られた。
『兄さん兄さん……摑まつたわ、泥棒が！　今朝の新聞に出たから御覽らさい。そら！』

『やかましいな、どうも！　捌まつたら夫でいゝぢやないか…』
寝醒めのよくない私は例によつて澁い顔をしながら、でも幾らか興味を覺えて、重い頭をむつくり擡げた。妹の突つけた新聞をふんだくるやうにして手に執ると、指差された中央邊に「Sの泥棒は紙屑買」と大きな活字が眼に着いた。「百日越しの安からぬ枕も——今から高くして眠れやう」と二行の小標題まで添えてある。鋭い或ものの影が、さつと私の頭腦に閃いた。

　くだくだしい說明を加へるまでもなく、私達を苦しめた泥棒は、あの不氣味な屑屋の男であつた。但、泥棒が屑屋に化けて居たものか、それとも屑屋から泥棒になつて行つたものか、其邊の所は判然しなかつた。——皮肉な事には、彼が逮捕されたのはS警察署直接の功績に據るものではなかつた。O市で贓物買の親分があげられて、同時にそれと聯絡のあつたK市の贓物買もあげられて、それから段々足がついて、彼も亦一二の仲間達と共に到頭年貢を納めたのであつた。

　それにしても私は、私の不思議な夢を偶然の暗合とばかりは思へない。私の夢が泥棒の正體を視透したやうな結果となつたのは、私の或微妙な神經が、いつか秘そかに屑屋の眸を通して其奥にうづくまる怪しいものの影を認めて居て、其潜在意識がああした働きを爲したのではなからうか。……何は兎もあれ、私は私の夢に對して敬意を捧げたい。それは、拙くも或點に於て夢の方が、眼醒めて居る時の私自身よりも、遥かに天才的であるから。

逃亡犯人

　今から三十何年前の事であつた。（それは私がまだ此世に生れて來ない前の話ですから、勿論私自身に關係のある事では有りません。が、同じやうな私の經驗との對照上興味がないでも無からうと思つて、それで玆に挿んでみました）

　其年の晩夏の或夜、A巡査とB巡査は單衣の久留米絣に兵古帶をきりりと結んだ輕裝で、ふらりと郡部方面へ巡邏に出た。其頃はまだ工場の數も多くはなかつたし、郊外生活向きの住宅杯も少かつたから、繁華なO市も場末はひどく寂しかつた。況して町を外れて了ふと、もう片田舍と變りはないのであつた。二人は妙に緊張した互の胸に互の呼吸を感じ合ひながら墨のやうな闇の野路を辿つて行つた。

　一月程前から郡部方面が物騷になつて、近村到る所、頻々として强盜に脅やかされた。大河に沿ふた堤では、剽盜が出沒した。身ぐるみ剝がれた者はまだしも、無難な方で、どうかすると大切な命まで持つて行かれる者さへあつた。所轄警察署では、

夜が明けると被害の届出に惱ませられた。勿論連夜のやうに非番巡査を微行させて、專ら警戒に努めて居るのであるが、大膽で巧みな盗賊の行動は恰も、それを嘲弄するもののやうに、神變不可思議を極めて居た。

二人の巡査は受持の區域を、何遍も何遍もぐるぐる廻つた。何遍目かに村の中程へ廻つて來た時は、もう午前三時に近い頃であつた。

『君、君……一寸』

囁くやうにさう呼びながら、A巡査は立止つた。反對の側から、B巡査が寄つて來た。

『氣をつけ給へ、どうやら容子が怪しいから……』

A巡査の聲は低かつたが、妙に尖つて顫へを帶びて居た。

二人は軒下に沿ふて、忍び足で進んだ。が、間もなくまた歩みを止めた。今度は足が地にくつ着いたやうに動かない。……と見ると、二三軒先の軒下に、一人や二人でない何人かの人影らしい黒いものが、幽かに蠢めいて居るやうだ。凝と眸を据えて居ると、深い水底のやうに鎭り返つた耳もとへ、ひそひそと囁き交すやうな人聲が傳はつて來た。

二人も袖屏風の蔭で耳うちをして、何事かを諜し合した。と、A巡査がまづ怪しい人影を目がけて、可なりの素早さでつかつかと進み寄つた。

『おい、其處に居るのは誰か！　今頃何をしとる？……』

いきなり、相手を威嚇するやうな語氣でさう詰つた。不意を衝かれた曲者達は、一齊に振り返つたまま、石像のやうに凝り固まつた。が、それはほんの一瞬間に過ぎなかつた。

『うぬ！』と突然野獸のやうな叫び聲を揚げたかと思ふと彼等の一人は、やにはに躍り出して撃つてかかつた。細い紫電がきらりと頭上の闇を切つた。それが合圖のやうに、俄にあたりの空氣が動揺めいて、曲者達は一齊攻撃に移つて來た。最初の不意撃ちは危くも避けたが、もう殆んど、姿勢を立て直す遑もなかつた。A巡査は、覺えずたぢたぢと後退つた。其時、飛び込んで來たB巡査が、まつさきに向つて來る男の腕を、短棒を揮つて透さず打つた。

やや暫らく、亂闘亂撃の幕が續いた。二人の巡査は必死になつて防戰した。が、味方に較べると敵は倍に餘る大勢で、其上何れも屈竟な兇器をさへ携へて居た。二尺足らずの樫の棒だけでは、防ぐ事すらも充分でなかつた。二人は次第次第に斬りまくられて、大小無數の手傷を負ふた。やがてA巡査が、物凄い唸り聲と倶に倒れて了つた。

B巡査は唯一人になつて、無論向つて來る敵の人數も

が、急に自分の生命の危險を感じた。恐怖と云ふよりは不思議な物寂しさが、ひしひしと全身に迫つて來た。……どうして重圍を脫したものか、兎に角B巡査は、血だらけに成つて警察署へ歸つて來た。さうして概略の報告を述べ終ると、其まま人事不省に陷つて了つた。

時を移さず非常線が張られたが、曲者達は遂に姿を見せなかつた。不幸たA巡査は、むごたらしい死骸になつて戾つて來た。B巡査だけは、幸に一命を取留める事が出來た。

程なく、其夜の兇行者は四人まで逮捕された。然し共犯者の一人なるKSは、何處へ落延びたものか更に行方が知れなかつた。所轄警察署を首め府下の各署では、腕ききの刑事連が懸命の活動を續けたけれど、結局、雲の行方を探すやうに手懸りさへ消かなかつた。

T刑事も、此事件の探偵に伴はつた一人であつた。彼は自分の過去の名譽に對しても、又主任警部の期待に對しても、是非成功を贏得なければならぬ立場に在つた。で、平生使ひ馴れた諜者達を八方に放つて、最善の探偵を試みた。が、やはり效果は擧らなかつた。遉のT刑事も大きな岩に衝き當つたやうな困惑を感じた。

最後と云ふよりも寧ろ窮餘の一策として手を着けたのは、犯人の生れ故郷であつた。KSの原籍地はH縣のA町であつた。

T刑事は其處から何等かの端緒を摑るべく、搾り上げた苦心を最後の一滴まで注ぎ盡した。けれどもやはり、犯人が同地方へ立ち寄らなかつたのは云ふまでもなく、參考になりさうな材料の片鱗すらも得られなかつた。

『畜生め！』

刑事は胸の內で、忌忌しさうにさう呟いた。それは何者に向つて云つたのか、自分自身でもはつきりと判らなかつたが兎に角絕望の隣り合せに住んで居るらしいものに對してである事だけは、自覺して居た。どうせ其絕望にぶつからなければならないとすれば、せめて其處迄行き着く道筋だけたりと、はつきりと確めて置きたいと考へた。さうしてT刑事は、KSの實父をA町に訪れたのであつた。

KSの實父は變裝した刑事を疑はなかつた。腹からの道樂者らしく身を扮した刑事を、倅の眞實の友達仲間として接した。（KSは賭博常習者であつた）T刑事も亦飽くまで空とぼけて、殊勝らしく口をきいた。

『何でも普段から北海道へ行くとか云ふてましたよつて、ひよつとしたら急に都合があつて行たんかも知れんと、私はさう思てましたんや。さうならさうと一寸知らして呉れたら、何ぼ私

が病氣で寢てたかて、餞別ぐらゐしたかつたんやのにと、さうも思て怨んでましたんや。何せ一向便りがないもんやさかい、丁度こつちへ用があつた次手に、實はお寄りしたやうな譯だす。……一體どうしてまんのやろなあ。そんなら何だつか、お父つあんの處へも、一寸も便りおまへんのやな』

如何にも物馴れた刑事の言葉つきに耳を傾けながら、KSの實父は半白の頭を神妙にうなだれて居たが、此時急に聲を落して、

『いろいろと御親切さんで。……ええもう彼奴ちうたら、御承知の通りの惡性者で御座りましてOへ行てからも惡い事ばつかりしとるちう噂を聞く度に、何ちう因果な子を持つた事ぢやろと、蔭ながらひとり泣いとつたやうな譯で。……それに又今度と云ふ今度は、あんたさんも定めてお聞きなされましたぢやろが、するに事を缺いて巡査に手向ひをして、傷を負はしたとか殺したとか、私はもう生れ落ちてから此方、あないに吃驚した事はあらしまへなんだ。それからちうものは、警察のお方が始終お越しになつて、いろいろお疑ひも受けましてなあ。ぢやと申して、何ぼ我が子の事かて知らん事は知らんちうより外あらしまへんやろがな。……さうは云ふものの又其處は親の情で、あんな憎たらしい奴でも、今頃は何處でどんな苦勞をしとるちやらうと思ひましてなあ、あんたさん、夜も碌々眠られしまへん……』

さうした愚痴を洩して老眼をしばたたいた。聽いて居るT刑事も段々變な氣持になつて來て、嫌疑をかけたり探りを試めたりするどころでなく、却て、此方から慰めて遣らたければならなくさへ成るのであつた。

『へえ、いろいろどうも御親切さんで。……どうぞあんたさんも、彼奴にもしお逢ひに成る事でもありましたら、濟んだ事は何ぼ云ふたかて取返しがつかんさかい、せめて此上は男らしう名乘つて出るやうに、どうぞあんたさんからも云ふて聽かして下はい。……いやもう老人になると、つひ愚痴ばつかり多うてははは』

と寂しい笑ひに紛らさうとしたが、爭はれぬ涙が喉に溜つて居た。

豫期して居たやうな絶望を抱いて、T刑事は空しく引返した。

隨分歩いたので、すつかり疲れて居た。でも、尋ねあぐんだ目的の宗を發見した時には、思はず小躍りした程嬉しかつた。來てみると、思ひの外立派な住居だつた。間口の四五りさうな二階建で、唯深い廂が田舍らしくて陰氣臭

兒に角相當な暮しを送つて居る事が窺はれた。

『御免下さい……御免下さい……今日は！　お留守ですか』

玄關に立つて二三度案内を乞ふてみても、ひつそり閑として返辭がない。何だか敵地へ踏み込んだやうな緊張を感じて、T刑事は、油斷なく屋内へ氣を配つて居た。

『お留守ですか……今日は！』

やや自棄氣味になつて、もう一度呶鳴つてみた。すると、生あくびをしたやうなぼやけた男の聲が聞えて、同時に、突然正面の障子がすらりと開いた。今の今迄人の氣配もしなかつただけ、それだけ、突然と云ふ感じが強く胸を撲つた。さうして又同時に、眼玉のぎよろりとした長い歪んだ顏が、ひよつこり其處へ現れた。

T刑事はあつと驚いた。思はず後退りする程驚いた。今目前に現れた顏、それこそ日頃探ねあぐんで居る――よもや此處で遇はうと思はなかつた――其顏だつたから。

『おおS！　探しとつたんぢや……』

さう云つて、つかつかと彼に迫らうとした。と、見る見る顏色を變へたKSは、聲をも立てずいきなり、燕のやうな素早さで身を飜した。

『待てつ！』

と叫びながら、續いて其跡を追はうとした。すると又、何處から出て來たものか、彼の實父が白髪頭を振り立てて、T刑事の行手を遮つて了つた。

『赦してやつて下さい！　赦してやつて下さい！　どうぞお願ひで御座います！　どうぞ……』

狂氣のやうに喚きながら、必死の力を罩めて刑事に縋り着いた。縋り着いた拍子に、一通の手紙をぽたりと落した。落した手紙の封筒には、太い文字で父上樣と書いてある。それがどうした譯か、恁んな咄嗟の場合にもはつきりと眼に留つた。

『放せ！　放せ　！放せ！』

と連呼しながら、T刑事は藻掻き苦しんだ。……ふと眼醒めてみると、夢であつた。やはり自宅の二階で、何事もなく臥つて居た。近所の一番鷄が、勇ましい調子を張りあげて、頻に時を告げて居た。

A町から空しく皈つて來て、がつかりしたまま二三日を過した。徒勞の探偵に疲れて、それでさうした夢を見たのであらう。然し見るにも事を缺いて、貧乏人が紙幣の束でも見せつけられたやうな、極めて悔しい夢であつた。T刑事は、莫迦莫迦しさに長いあくびをした。

長いあくびをしてから三年經つた。其間、KSの事は殆んど

忘れて居た。忘れて居たのではなかつたが、次から次と湧いて來る種々な新しい事件の爲めに、つひつひ手が廻りかねた。廻さうにも、廻す工夫がつかなかつたのである。でも去年からまた數名の諜者を、心あたりの先々へ忍ばせて置いた。

晩夏の或る日（A巡査の殺されたのも三年前の其時分だ）、諜者の一人が一寸耳寄りな知せを齎した。それは、H縣下の片田舍に在るK温泉の或旅館で、勿論僞名はして居るが、其處の下男をして居るKSの姿を確に見た者がある、と云ふのであつた。刑事の胸は俄に時めいた。が、都合上同地の警察署へ宛てて、まづ其文の照會状を出してみた。

T刑事は、また失望を感じなければならなかつた。K警察署からの回答に據ると、KSと推測される人物は、かつて確に居たには居たけれど、泊り客の財布を盜んで何處へか逐電して了つた。それはもう一年半ばかり前の事で、隨て、彼の行方も全然不明のまゝであると云ふ。

『畜生め！』

さう云つた忌忌しい思ひを、また繰返さなければならなかつた。

それから間もない或夜の事であつた。

『放せ！　放せ！　放せ！』

刑事はさう連呼しながら藻掻き苦んで居た……眼醒めて見ると、やはり夢であつた。

それは三年以前、空しくA町から引返して來た當時に見た――其時は何の氣にも留めなかつた。さうして其後あくびと倶に忘れ果てて居た――あの夢であつた。そつくり其まゝの夢であつた。が、妙に今度は、莫迦莫迦しいと云ふ氣も起らなかつた。

同じ夢を二度まで、それも三年の長い月日を隔てて見たと云ふ事が、一寸不思議に感じられた。と倶に何故となく、KSの故郷や實父の面影が、事新しげに記憶を呼び返した。

「事によると彼奴は、秘そかに實家……でなくも聯絡を取りつつ何處かに、隱れて居るかも知れんぞ。もうほとぼりも醒めたと思ふて、少しは油斷をして居る時分だから……」

さう思ふと、一刻も猶豫しては居られなくなつた。

其翌朝、T刑事の密旨を含んだ諜者が一人、A町へ急行した。が、其結果はやはり豫期を裏切つて、逃亡犯人の所在は皆無知れなつた。刑事は輕い失望を感じた。けれども以前のやうにそれで屈しはしなかつた。もとより一場の夢を神秘的暗示抔と解釋した譯ではなかつたが、でも、それに據つて得た一種のヒントが、新しい勇氣を鼓舞して與れたからであつた。

最後の一策――非常手段が講じられた。T刑事は自ら再びA町へ出張して、KSの實家に奉公して居る下男某を竊に招き寄せた。さうしてそれを利用しやうとした。事情を納得した下男某は、有利な他家へ周旋して貰ふと云ふ交換條件の下に、自分は急に主家から暇を取り、其後釜へ、刑事の連れて來た男をうまく嵌め込んだ。後釜に据つた新しい下男は、云ふまでもなくT刑事の部下で、敏腕の聞えある諜者であつた。

諜者の下男は、うはべは忠僕としてKSの實父に仕へながら陰では同家の内外の隅隅へまで、鋭い注意と監視を怠らず放つて居た。

其翌年の夏、KSは終に逮捕された。兇行後逃亡してから、實に四年目であつた。――彼は、山陽道のH縣とは背中合せの山陰道の僻陬に潜んで居たが、四五ケ月目に一度位の割合で、僞名の音信を實父の許へ寄こしたらしい（實父の方からは多分其何倍もの度數で、機宜の秘密通信を送つた事だらう）。諜者が下男に住み込んでからは、後にも前にも、それらしいものが二回だけ屆いた。さうしてそれは極秘にされてあるので、諜者が如何に苦心をしても、中の文面を見る事は出來なかつた。僅にちらりと盗視した封筒の縣名と郡名だけを唯一つの手懸に、T刑事が苦心惨憺の結果、やつと所在を突き留めたのである。突き留めてからも、恐らく實父の後援もあつたであらうが、KSは巧みに逃げ廻つて、捗からず刑事を手こずらした。

處で此物語の裡に、T刑事が二度まで見たと云ふ不思議な夢が、あの深い暗示的魅力を湛へた眸を凝と据えて吾吾の胸を窺つて居るのを、うつかり見落しては成らない。犯人のKSと其實父の二つの心の奥深く潜んで居る秘密を、其眸は、刑事其人よりも遥かに鋭く素早くさうして正しく看破つたのである。

科學者の説は如何にもあれ、私は唯それを讃美したい。――恰も天才に對してするやうに。さうして淺はかな解釋の挿入杯は愼みたい。それは、痴人が天才を批評するに等しい事だから。

大正十年歳晩記

生方敏郎

春翁　おや、いらつしやい。秋子さん。ずゐぶん暫くでしたね。

秋子　何うも、本當に、大へん御ぶさた致しちやひました。お宅では皆さん。お變りはありませんか。

春翁　えゝ、何も別に變つたことは有りません。

秋子　それは何よりでございます。

春翁　いやはや、少し位、變つたことでも有つて呉れると、いゝのですけれど、いつも同じ様なことで、折角の大正十年も平々凡々の裡に暮れて行き相です、たゞもう毎日惡く忙しいばかりで、實際閉口してゐますよ。

秋子　結構でございますわ。暮に忙しくないやうぢや、困るぢやありませんか。今頃暇なところは樂隱居かお妾の家か、市設食堂の近所にある證券屋くらゐのものでせう。

春翁　いや／＼、日本は御隱居さんの忙しいところさ。それ西園寺公望朝臣など、來たら、この暮に京都からわざ／＼東下りお遊ばして、政界の中心に成つてござる、山縣公は三十八度の熱のある病氣で寝てゐても、訪問客は引つ切り無しだ相だ。何と御多忙なことではないかね。この春翁とても、今言つた通り、惡く忙しくてトンと閉口して居りますよ。いや、これも貧乏暇無しといふのぢやらうが、若い時分にはな、貧乏は同じ貧乏でも懐手をして暇な暮の街をブラ／＼散歩する位の暇はあつたものだが、老人の貧乏は時が無くて閉口する。老先きが短いと思へば、益々暇が欲しくなるわけだが、さう行かぬ。私は、金の無い方の貧乏と較べて一層この暇の無い方の貧乏が辛いと思ひますよ。

秋子　どういたしまして、御隱居さんが貧乏だなんて、飛んだことですわ。御冗談にも、そんな事を仰言るものではありませんよ。

春翁　いや、さうでない。またさうでない／＼と申すと、何だか老人は一つ／＼反對ばかりする様に聞えませうが、私はこ

でも立派な無產階級ぢや。プロレタリアートぢや。この家も、少しばかりの地面も、家財道具も、皆倅に讓り渡して、今自分のものと言へば、この老軀と僅かばかりの書物があるくらゐのものに過ぎません。

秋子　でも御隱居さんなんか、勞働しないでも食べて行かれる樂な御身分ぢやございませんか？　それが、何うして無產階級でせう。

春翁　無產階級は必ず勞働するものとは限らない。働かずに、ゴマ化して、ストライキの煽動ぐらゐを商賣にして、立派に食べて行く連中が、プロレタリアートといふ名で天下に通つてゐるぢやないか？　さうしてこの勞働しないプロレタリアートの方が大正十年には、一層景氣がよく、大にメートルがあがつた樣だな。そこへ行くと、私なぞは、それでも隱居仕事に忙しすぎるほど働いてゐます。子供が出來りや名を付けろと言ひ付かる。娘お女學校を出れば、それ仲人をしろ、と申し込んで來る。近頃大分自由結婚をする者も殖えた樣だが、それにしてもまだ日本では、仲人が大に必要だ。それが又仲々大役でマメな人間でなくては出來ぬ藝當ぢや。だから仲人親と云つて、仲人は親も同樣、新郎から一生大切にされるが、これが深切の受ける報酬といふもので、今時流行る經濟學にはどんな奧床しい勞働のことは書いては有るまい。年末の多忙な時になんぞ、折角暇を割いて仲人をしてやつても、中にはそれを何とも思はぬ忘恩の徒も有るが、それかと云つて一々仲人がストライキを起すわけにも行かん。それから私の仕事は夫婦喧嘩の仲裁ぢや。四海波靜かならずして、家の內にも時々喧嘩が起るものぢや。その仲裁を始終持ち込まれる。飯を食べてる最中に、嫁女が駈け込んで來ることも有れば、夜々中に泣き付いて來ることもある。そして私はその都度引き出される。いやはや、飛んでも無い勞働を課せられたものぢや。これなぞは、大抵何の報酬も來ない。全くの搾取ぢや。と云つて、先方も餘り資本家らしくもない長屋の若い夫婦だから、まあ、それつきりなもんぢや。私が若し社會主義だつたら、夜中にさんざん夫婦喧嘩の仲裁をさせて、後ぢや知らん顏をする若夫婦に對して、搾取の罪を鳴らし、大に宣傳するところだがなあ。あ、はハハハ……何うぢやね。秋子さん。隱居連に總立ちで社會主義に成られたら、あなた方は、ずゐぶんお困りだらう。平塚さんに共鳴して拒婚同盟どころの話ぢやありますまいて。仲人の方が先廻りをしてストライキと來るからのう。

秋子　おほゝゝゝ。正月の會合に、そんなこともありましたのね。でも御隱居さんはよくそんなことまで覺えていらつしやい

ますわ。ほんとうに柿博士に若返りの注射でもして頂いたかと思ふ位ですわ。御記憶のいゝことよ。

春翁　まだ注射とまでは行つてゐないが、この新年號に出た「スタイナッハの若返り法」は面白く讀んだよ。それと、もう一つの論文。さう〳〵アインシュタインの相對論さ。この二つは大正十年の學界を賑はしたものだな。

秋子　さうですね。若返り法の方は學者間の爭論と成り、相對論の石原博士は……

春翁　女歌人の原阿佐緒さんと戀のローマンスと出懸けなされた。石原博士は相對論で、ニウトンの學説を打ち破らうと試みたが、地下のニウトンはチヤーミングな女歌人を拉し來つて引力説を證據立て、とう〳〵博士を見事に取りひしいだよ。いや、久米の仙人は女の脛の白いのを見て通を失つたといふ話が徒然草に書いてあるが、學者だとて仙人だとて、美人に會つちや理屈はないさ。敗北に極つてゐる。流石の博士もタヂ〳〵と引き寄せらた。あハヽヽ……

秋子　本當にアインシュタインの相對論よりも、博士の戀愛問題の方が、よつぽど學界の問題に成つたやうでございましたわ。

春翁　さうさ。學問よりやあ戀愛の方が、誰にも分りが早いからなあ。學者間にもだ。一體學者といへば、金佛か石佛のやうなものだと思つてゐる社會の方が、間ちがつてゐる。學者とて人間である限りは、戀愛もするさ。それ、この夏中、何とか云つた田舍の老錬金術家が、萬物の中に皆銀があるとて、鳥の羽か何かの中から、銀を何匁か採つてみせ、それこそ大に學界を賑はせたらう。私の發見に依ると、萬物には皆戀愛の元素が含まれてゐる。智者も愚人も、善男も惡女も、皆戀愛病にかゝる。でも以前には、人々の間に愼みといふものが有つたから、そんなでもなかつたが、現代は何も遠慮が無く成つた。性の解放なんどと叫んで、新聞や雜誌までが尻押をするんだから、堪つたものぢやない。だから、御覽。女の引力の爲めに尻つぺたから大學教授の椅子を取られたのは、石原博士ばかりぢやあない、後藤某といふ東大の先生も有つたよ。

秋子　それから、近いところでは、野村隈畔さんがさうでせう。あの熱情的な哲學者の。

春翁　うん、さう〳〵。ありやあ可愛い男だつたに、惜しいことをしたよ。津田沼で抱合心中をして死んだつてなあ。もうそろ〳〵海も寒いだらうに。だが、同じ死ぬない、あの方が洒落れてるな。猫入らずで死ぬのなんかは醜態だな。鼠ぢやあるまいし、これも當節の流行物で、當局で之を買ふには認印を持つて

藥屋へ行くやうにといふ、おかしな規則を拵へたのも大正十年だ。大正二三年頃は、警察はペスト騷ぎに追はれて、お廻りさん自身が軒並お勝手口から訪問して、臺所の上げ板を上げさせ、御持參の鼠取り藥の團子を三ツ四ツ入れて行つたものだ。それが五年と經つか經たないに、今度は人間の方が心配に成つたわけだ。あははツは。妙なものだな。

秋子　野村さんは、平生から死の美に憧憬れてゐたのですつて。ですから、そんな猫要らずで死ぬやうな、通俗的自殺とは同日の談ではありませんわ。

春翁　あなたは、あの哲學者を生前お存知でしたか。

秋子　はあ、一度、東洋大學で文藝講話會のありました折に、お講演をおうかゞひ申したことがございます。その時も、戀愛問題と婦人問題に付いてでした。情熱に滿ちた感動的なお話でございました。あんな方となら、驅落する位、女として無理はないと思ひますわ。

春翁　をや、〳〵。これは危險千萬。演說がうまく成ると、命を失ふかも知れん。婦人が知識的に眼覺めると共に、さういふ方面の人々に戀愛の對象を求めるやうに成つたのかも知れぬ。兩三年前まで、何處へ行つても成金全盛成金崇拜であつたが、今年から、インテリゲンチヤがモテるやうになつたとは、何うい

ふ風の吹き廻しかなあ。天下廻り持ちとは、これだらう。

秋子　實際、今年は、艶種をすつかり智識階級の方へ奪られてしまつて、新橋や烏森の藝者連はポカンとして、開いた口がふさがらない相です。

春翁　都新聞の記者が無聊に苦しんだことだらう。それだけ婦人雜誌記者が忙しかつたわけだ。

秋子　わけても多くの記事を作つたのは、濱田榮子の事件でせうね。あれは當人が學者といふのぢやありませんが、家庭は醫學博士の家でございますからね。背景が大きいのと、若い美しい女の戀愛が產んだ悲劇ですから、反響も大きかつたわけでせう。こないだの晩、早稻田の通りを步いてましたら、書生さんがバイオリンに合せて濱田榮子の唄を、哀れな調べで唄つてました。そして唄の本を賣つてゐましたよ。

春翁　さうさ。今年は事件も多かつたが、そして世にうたはれた戀愛事件もずゐぶん多かつたが、榮子の事件が尤も讀賣の小唄には應はしからう。美しく、若く、おぼこで、無智で無分別で、良家の娘と來てゐるのだから。昔で言へば八百屋お七といふところさ。畏畔の情死も、何も平生は哲學者だからといつて、そこへ行けば普通人と少しも變つてゐるわけではないのだが、何處か知的の臭ひがするので、くどきや八木節には不調和だ

よ。矢張詩かな。

秋子　白蓮夫人の事件は如何でせう。小唄に成りませうか？それとも小説ですか？

春翁　左様さ。まあ、小説の材料かな。ロシヤの小説などには姦通物が澤山有るよ。姦婦が歌人で貴族の出で、姦夫が法學士の社會主義と來てゐる迄は、小説向きで、近代的の匂ひが高いが、寳られた傳ネム君が古すぎる。でも、まあ小説かな。今年は長編小説の無暗と流行つた年だから、誰か、うん、幹彦君なんか之を新聞の續き物にしたら何んなものぢやらう。だが八木節にも成らんことはない。へところ知らぬ火、筑紫の果に、銅御殿と時めきなさる、傳ネム殿の奥方さまよ。白蓮夫人と呼ばれし方は、元は華族の姫さま育ち、つくし女王と謳はれ乍ら、何が不足でこの捷重ね。外面如菩薩内心如夜叉、ハツ、ラツショウ〳〵ラツショウネ。と、こんな調子にな。だが八木節にするには、傳ネム老人がもう少し若く、品行方正で、その上貧乏で姦夫の方が大工さんか博徒か又は浪人の悪侍か何か、少々いなせな苦が味のある方でないと巧く出來ない。勿論、詩や唄には到底ならない。資本家、女歌人、社會主義といふ三ツ巴だからこれに續く幕は新聞記事、裁判、といふ鹽梅に理屈ぽい。赤化してゐる戀愛といふ點に興味があると言へば有るのだが事件全體が情味に乏しい。

秋子　でも、安田善次郎翁の暗殺は、榮子の唄と一緒に唄つてゐましたよ。尤もその文句は可也ひどく翁を筆誅したもので、詩としての味の少しも無いものではありましたが。守錢奴だの何だのと。

春翁　もうそんなに執拗く死屍に鞭打たなくも宜らうになあ。安田家でも、橫網の邸を公園にするやら、大學へ寄附するやら可也搾取した物を吐き出しにかゝつてゐるのだから。

秋子　でも、今年は、ずゐぶんお金持の祟られた年ですね。足尾銅山の鑛夫のお内儀さん達が古川男爵夫人に面會を求めたとやら、神戸の勞働者を見て岩崎男爵が跣足はだしで逃げ出したとやら、妙な白樺文士の悪漢に大倉男爵が脅迫されたとやら、新聞で騒された位ですから、裡面には、もつと様々の事が有つたでせうね。

春翁　無論、金持の家にも悲劇は多い。積善の家には餘慶有り、積悪の家には餘殃有り、と古人も言つてゐる通りさ。福徳は、富の多寡ぢやあなく、善行の多寡だよ。金持の今年の祟りも決して偶然に起つた珍事ではないのだから、これを以て將來の警めとすればいいさ。決して泣き事を言ふには當らない。傳ネム殿なんかは、あの位ではまだ〳〵輕い、税金の中だ。安田さ

のやうな事すら有るのだからな。まあ、少し宛でも、例の搾取した物を吐き出して、社會奉仕を忘らないがいゝのさ。岩崎家でも巣鴨の邸の一部を解放するとか聞いたが、殺風景に成らざる限り目下住宅難の人々の爲めに、廣大な邸を解放して、小住宅を作るのなぞも、奨勵す可きことだらう。彼等自身の爲めにだ無論、こんな手ぬるいことで、このせゝこましい世の中が急に廣々とはしなからうけれど。それでも、好いと思はれることは何でもやつてみる方がいゝ。社會の苦患も、子供の病氣と同じことだ。盡せるだけの手は盡してみるがいゝ。人々が良いと敎へて呉れることは、何でもやつてみるがいゝ。たとへ、それが禁厭のやうなものであつてもだ。

秋子　さうですとも。今年は金持の厄年だなんて申しますけれど、貧乏人には厄年でない年は恐らく唯の一年も無いでせう。來る年も〳〵こと〳〵く祟られた年ばかりですわ。雨に祟られ、物價騰貴に祟られ、不正小賣商人に祟られ、失業に祟られ、住宅難に祟られ、病氣に祟られ、糞尿難に祟られ、年が年中たゝられ通してるぢやありませんか？

春翁　いや、その通り、全く今年はよく雨が降りつゞけましたな。あの雨では貧乏人の困難は嘸かしとお察し申すが、われ〳〵老人連も困りましたよ。第一に、散歩も出來んから、つい〳〵運動不足になり、冷えるから遂に體をいためるやうな事に成りましての。流石百二十五歳主義の大隈侯さへも、この雨には健康を害されたらしい。山縣老公も同斷ぢや。老人には長雨が禁物ですわい。

秋子　それに、雨が三日も續くと、道がひどく成りましてね。女には着物が着物だから、兎ても歩かれませんの。ですから、よく〳〵の用事でないと、外出しないのですけれど、何うかして退つぴきならない事件が起つて、外へ出やうものなら、自動車は名物の泥をはねかして行きますし、馬力は來る、自轉車は來る。それが一つも步いてゐる人をよけやうとはしずに、若し此方から除けなければ轢きたふして行き相な權幕ですから、堪りません。私は、或る雨の日、泥道の中で子供が車をよけやうとして、轉んだのを見ましたが、轉ぶ拍子に持つてゐた牛乳壜を投げ出し、壜はこわれて乳が白く流れたので、子供は自分の痛いのも忘れて、牛乳をこぼしたのを泣いてゐました。そのまゝ歸れば、大方繼母にでも叱られるのでせう。東京の道路は何時に成つたらよく成るのでせう。後藤さんが市長に成つても、これぱかりは何うにも成らないものでせうか？

春翁　如何にも、後藤新平男が市長に成られたのは、今年の一二月頃だつたね。あれまで田尻梅干市長には、市民も大分悩ま

されたな。そこで新市長は大へんに期待されて市長を相續したわけだが、その後格別成績が上りもしないやうで、この分では行末が少々しんぺいいに成つて來た。

秋子　でも、後藤さんが市長に成ると、直ぐ私の家の邊は、百姓が前よりは精出して糞尿を汲み取るやうに成りました。その後、以前のやうに、お憚りが支へたことがありませんです。その代り一月四十錢も五十錢も汲み賃を取るやうに成つたには成りましたが。

春翁　成程、後藤市長の一番の成績は、糞子の方面から上つて來た次第かな。區役所でも一荷十錢は勉強してゐる。前と較べて十五錢方安い。近頃の市設市場は何んなものか知ら。

秋子　牛込の横寺町へ出來た市設食堂へ一度試食に行つてみました、先に松井須磨子が首をくゝつた藝術座のすぐお隣りです。朝食十錢晝夜食各十五錢で、うどんは天ぷらが十五錢、油あげうどんが七錢で、値も安し、それに分量が普通の二倍は十分あります。

春翁　なるほど。如何にも婦人の共鳴しさうなところだ。政府の小賣商征伐は、政策としても成功した政策ぢやぞ。恁うして小賣商人の暴利を貪る者に強い制裁を加へる時は、天下の婦人は皆政府を謳歌する。天下の婦人が味方に付けば、政府の基礎は萬歳だ。なるほど公設市場だの市設市場だのと、うまい事を考へ付いたもんだ。

秋子　さうですとも、何をしても、天下の婦人を味方に付けないで、成功するものは一つもありはしませんとも。ですから皆さんが、皆な婦人の機嫌を取る方が賢明だわ。多數の民衆に勢力を認めてる文明國では、皆さうするぢやありませんか？婦人に參政權を與へる位のことは、今更問題ぢやありませんわ、それに、私小賣商人の不正を征服することは、必ずしも婦人の機嫌取り政策といふだけぢやないと思ひます。實際今の小賣商人は餘り不德義過ぎますもの。こないだの婦人公論で見ると、方々の奥さん方が異口同音に、商人の付けかけと、目方のごまかしに就いて怒つてゐらつしやいます。これで見ても計量器の知識の宣傳を、此夏の或日、心有る婦人達がやつたのは、時機に適したことゝ私は考へますのよ。

春翁　早速婦人を讃めて人氣を取るといふのではないが、全く近年、殊に大正十年に成つてから、或る一部の婦人達の生活に對する智識は著しく進歩し、生活を豐富にし享樂しやうとする慾望は増し、主婦として眞面目に心を働かせるやうに成つた樣ぢやね、物價に對する知識、計量に關する考へ、何も[illegible]した。

秋子　お讃にあづかり、嬉しうぞんじます。

春翁　いや決して煽てるわけぢやない。だが、また一方には、市設食堂の饂飩の味は知らないが、歌舞伎座の燒け落ちた日は何月の何日何時何分で、何から火が出て、何地から風が吹いて、何分間燒けて、役者に怪我は有つたか無かつたか、誰々から火事見舞の品が何れだけ屆いたか、チヤーンと暗誦してゐる婦人も澤山有るにちがひない。それから。今年の夏は三越の新館が落成したことも、大正婦人史に特筆大書す可き事件でせうかね。

秋子　勿論でせう。私達の樂みにして行くところでも有り、智識を得て歸る事も少くないのですから、それからエレヴエーターとエスカレーターの數が殖えただけでも、何んなに世間の子供さん達を悦ばせてゐるか知れやしません。

春翁　あ、はツはハヽヽ、それでは、この春、憲政會を脱黨した尾崎行雄氏ではないが、少々軍備縮少でもして、デパートメント、ストーアを幾つか拵へますかね。冗談でなく、婦人や子供の爲めの生きた智識の教育を施す學校の幾つもを、私共は市内に持ち度いものです。

秋子　とても、ダメですよ。教育費豫算節減案が立派に通る日本では、到底そんなドリームが實現される時機の來ることは有りやしませんよ、まご／＼すれば、小學教育さへ滿足に受けさせまいとする文部當局を、上に頂いてゐる次第ですもの。二部教授を奬勵するなんて、不都合とも何とも御話には成らないぢや有りませんか。軍ごつこには湯水のやうに金をつかつて子供の教育に金を惜み、それで何んな國民が將來に出來ませう。私はそれを悲しく思ひます。

春翁　左樣さ。その結果、二枚舌を使ふ大臣なんかゞ、澤山出來ることでせう。何しろ、一國の文相たるものが、相場をするとかしないとか、反對黨からは不名譽極まることを問題にされ、學生諸君からは、二枚の舌を使つたなどと、正月早々から大騷ぎに騷ぎ立てられても、恬として恥ぢず、噛り付けるだけ大臣の椅子に噛り付いてゐやうといふ人が、國民教育の大綱を握つてゐるのでは、甚だ心細いわけぢやね。

秋子　そして今年に成つて一番流行つた言葉は、性教育でせう。實行されたか何うかは別として、そんな類の鼻つまみの書籍が、教育の名の下に儲け主義の人々に依り盛んに公刊せられました。

春翁　そこで、世間の表面に現はれて來る者は、疑獄ばかり、神宮道路の砂利喰ひ市會議員が昨年の冬の初めに上げられて以來、まるで蔓莖でも手繰るやうに、やれ瓦斯會社の收賄だ、や

れ滿鐵だ阿片だ、郵便局の犯罪だ、と後から〱引つ切り無しに泥棒が珠數つなぎに成つてつながつて來る。新聞は半歳あまり、裁判所の出版部から發行される機關新聞かと思はれる位だつた。豫審調書の續き物が、小説か講談のつゞき物のやうに、毎日〱掲載されるとは、何と珍らしい話ではないかね、文相のこの教育に對する冷淡ありて、裁判所のこの多産的な結果あり、文部省で蒔いた種を、司法省で刈り取つてゐるやうなものだ、政府では、外來の思想に對し、やれ危險思想々々々々と、二タ言目には危險思想と言つてゐるが、これら新年から引きつゞき裁判所の御厄介に成つた議員諸君の中に、外來思想の一端にでも觸れた人間がゐるだらうか？　ゐたら、それこそお目にかゝる。又、安田善次郎翁を刺した者、大倉男を脅した男、總理大臣原敬閣下に兇刃を擬した犯人の一人でもが、外來思想に觸れるなりかぶれるなりしたものであるならば、吾人また何をか言はん。ところが天か命か、彼等は何れも誤れる頑冥舊弊思想の持主で、日本外史でも有がたがり相な連中だ。横文字のヨの字も讀んだ人々ではない。彼等の中の一人もが、バクーニン、ソーレル、クロポトキン、レーニン、等の信者ではない。マルクス、モーリス、ショウ、ラツセルの渇仰者ですらも無い。外來思想はおろかのこと、日本現代の新思想新文藝にすらも與つた連中ではない。何れもこれも、氏神さんのお札でも配つて步き相な、氣の利かない手合だつたぢやないか？　全く、この分では、政府が外來思想を取りしまるのは滑稽なる杞人の憂だ。どちらかと云へば、外來思想を取しまるの無用の手數をする代りに、外來思想を取りしまる者を取りしまつた方が賢こ相に思はれる。

秋子　あゝ、それで思ひ出しましたが、この夏日本を追放せられた盲詩人エロシエンコさんは、今ごろ何處の空に、何うしてゐなさるでせう。盲目の身で知らぬ他郷から他郷へと、さまよひ步く心細さは、何んなでせうね。こゝでも追ひ出され、あすこでも追ひ拂はれ、廣い世界に五尺の體を置きかねて、傳説に有る呪はれたユダヤ人のやうに一生流浪の旅枕暖まるひまも無いといふのは、他人から見てはお氣の毒ですけれども、本人としては幾分痛快に感じる時も有りませう。雄々しいとも云へば言へます。

春翁　さうだとも。日本人では、迚もあれだけの苦痛に堪えて生き伸びる力が無いぢやらう。自殺するか病死するかしてしまふぢやらう。あんなに蝕まれて生きてるところが豪いものだ。また不思議のやうでもある。抑さへられても、踏み付けられても生き返つて來る、その彈力性を持つ人種は怖ろしい。

の信念は怖ろしい。

秋子　私は一度あの人を見ましたが、身のまはりを世話する人がないと見え、ずゐぶん薄汚い着物を着てゐた樣でした。お伽話をしてくれましたが、聲がちひさし、日本語の話し方が下手なので、始から終ひまで何を話してゐるのやら、サッパリ分りませんでした。

春翁　私も帝劇で一度、秋田雨雀さんに手を引かれて廊下を歩いてゐたエロシエンコを見た。その時盲人が芝居を見に來るとはおかしなものだと思つて訊いてみると、芝居を聽きに來てゐるとの事であつた。何う見ても國を放逐されるやうな素質があるとは、全く思ひもよらなかつた。私はこの夏、新聞を見てはじめて知つて驚いたくらゐだ。だが、あの人は何をして生活してゐたのぢやらう。

秋子　存じません。お伽話など、時々新聞や雜誌へ書くやうでしたが、そんな原稿料なぞは幾らでも無かつたでせう。

春翁　だが、近來はお伽話を書いたゞけで、暮して行かれる人は有りませんかね。大變流行してゐるやうだが。

秋子　少年少女雜誌の種類の殖えたこと、みんなで四十種類もある相ですが、それが何れも相應に賣れて行く相ですから、從つて、お伽話なんか書く人も殖えて來たのでございませう。宜

論といふものも壯んに流行つてゐますよ。

春翁　詩論も大正十年の流行だが、詩もやゝその時代が近づいた樣な氣がする。永らく散文全盛小說一天張で來たのだから、少しは息抜きに詩の時代も來た方がいゝ。現に仲面白い現象。丁度明治卅年から三十六七年頃まで、日本も詩の時代だつたのだが、それが循環して來るのかも知れない。そんな事で大詩人が生れて呉れゝば、何よりだ。詩に浮かれて生活を離れて了つてゐる時代は虛僞だが、さうかと云つて、近頃のやうに生活問題經濟問題一手專賣でも、何となく窮屈に感ぜられる。人間て奴は、兎角我まゝなものぢやてなあ。

秋子　だから、その双方が並び進んだら宜しくはないでせうかしら。今年は、惡い方面から云へば人殺しや家庭のごたごたが流行つたやうですが、いゝ方から見れば、勞働問題も少しづゝ進歩した相ですし、詩の世界も近づいたといふなら、こんな目出度い話はありますまい。勞働方面も、大阪の藤永田の騷動や神戸の罷業や、だんだん大きくなり、だんだん長びいて來た樣です。石川島造船所のストライキも、もう大分永いやうですね。

春翁　いろいろ見方といろいろ立場によつて、之を進歩とも惡化とも言へる。勞働問題が進歩したといふ人もあり、惡化した

といふ人もあり、樣々だ。だが、何の道、大正十年が勞働問題で賑つたことは事實だ。日本ばかりでなく、イギリスにも大變だつたぢやないか。ロンドンの市民がエメラルドのやうな碧空を仰ぎ見ることの出來る日が、幾日か續いたといふのだから、大變な事件だ。あの石炭の烟に始終蔽はれてゐたロンドンの町に烟を見なかつたといふのだから、その罷業の如何に大仕懸けだつたか、想像が付くだらう。日本は、世界の大勢には大變おくれて、漸く近年に成りデモクラチックの思想が流れはじめ、從つて勞働運動もボツ／＼壯んになり、勞働問題も論議されるやうに成つた。大正十年へ來て益々昇り詰めた形だ。今思へば夢のやうな話だが、もう五年前までは、社會主義などいふ言葉は浮つかり口から外へ出せなかつたものぢや。社會學の書物を机の上に置いて、萬一刑事さんの眼に觸れやうものなら、それこそ何んな目に合はせられるか分らなかつたんだ。デモクラシイも普通選擧もあつたものぢやあない。そんな言葉は、夢にも聞けず話されなかつた。それが、何うだ。今年は、もう普通選擧なぞ生ぬるいとて、ラヂカルな連中は、殆んど口にしない。先年け堺枯川君なぞ普通選擧のハガキ運動なんかやつたものぢやが今年は忘れたやうにしてゐた。(或は何かやられたかも知れぬ、そして拙者の方が忘れたのかも知れぬ)今春、普通選擧や又は選擧權擴張やで騷いだのは、却つて非常に時勢おくれの代議士諸君だつた。諸君は今頃選擧權擴張を問題にして騷ぐよりも、代議士を辭職してくれた方が社會の爲めだ。と世間では言つてゐた。それから、また普通選擧で騷いだ連中が他にある。それはお寺の坊さんだ。彼等は「宗教家にも一票を與へよ」てな標語を宣傳して、増上寺だつたか本願寺だつたかで一騷動した。だが世間ではもうこんな騷ぎをデモクラチックな運動とは見なく成つてゐた。たゞ無智な僧侶の演じた醜態だと考へた。普通選擧がそれほど箔が落ちたのか? 飽き易い日本人の癖として、まだ手に入れぬ中に早やくも昨日要求したものを飽いてしまつた結果なのか? 兎に角、あまり珍しがらない。猫も杓子もデモクラシー、猫も杓子も社會奉仕を絶叫するやうに成つた。そこで大正十年に成ると、デモクラ屋先生、勞働運動屋、普通選擧屋がズラリと軒を並べた始末だから、其筋でも馴れつこに成つて、危險神經が(特に警官には係う云ふ妙な名前の神經系統が有る)麻痺してしまひ、却つて本物の社會主義者の方が、係ういふイカサマの普選屋やデモクラ屋を撃破するやうに成つた。

秋子　全く、社會主義めいた事は大變な流行物に成りました。婦人達でさへ何やら會といふ團體が出來たくらゐですもの、

方いまに、三越や白木でそのデモクラシーだのソシアリズムだのいふ新柄を賣り出すかも知れません。

春翁　で、今年あたりは、ソシアリストも大分官製の物が市場に見えはじめて來た。だから民間社會主義者は此際警戒を要することだらう。

秋子　へえ。それは私も初耳でございます。

春翁　そりやあ、レッテルによく注意して、製造會社の名前と材料とを吟味すれば、直ぐ分る。それは偖おき、神戸の勞働騷ぎも永く續いて仲々眞劍に見えたが、終ひはコソ〳〵とお終ひに成つてしまひ、折角の大山鳴動一鼠を出だすの感がある。大阪の藤永田騷動も同樣ぢや、併し、これらの騷動は、一般社會に何等かショックらしいものを與へた。また百姓は百姓で、小作問題で最近紛擾を生じてゐる。目下濃尾の間に壯んだが、これもこの先きだん〳〵全國に擴がるだらう。小作人ばかり眼が覺めないといふ筈はないから。

秋子　ずゐぶん物騷でございますこと。

春翁　なあに、我々は、高見の見物さ。これから心配が絕えないのは地主さん達だ。私等、都會人は、ねんねんよう、おころりよと、寢話でも唄つてゐればいゝ。工場を持つ者は工場で苦しみ、土地を持つ者は土地で苦しむのぢや。さて、先刻の詩の話にあと戾りして、詩の近況を伺ひませう。

秋子　あら、私詩の近況といふほど、何も存じませんわ。けれど、この春の初め、まだずゐぶん寒い風の吹く暗い晩でした。上野の精養軒に詩人達の發起で、島崎藤村さんの誕生五十年祝賀祭が催されました。餘興に音樂なども這入つて、感じのいゝお祭でした。

春翁　それから、その五十年紀念出版とか云つて藤村全集の内容見本が私の處へも屆いてゐるが、もうあの位まで苦勞して來た人は、國民的に祝意を表してやり度いものだ。文士も五十まで生き伸びることは、仲々容易でないからのう。この三月に岩野泡鳴君の御法事が築地の本願寺に營まれ、私も行つてみたがあの打つ殺しても死に相もなかつた男でさへも、五十に滿たずにコロリと行つてしまつた。あゝ、人生朝露の如し、今日在つて明日が分らない。原さんを御覽。大政黨の總裁、內閣總理大臣とした時めいた白頭熱柿翁も、ピン〳〵シヤン〳〵して少くとも大正十一年は迎へることが出來ると思つてゐたのに、大阪へ演說しに行くとて、東京ステーションで十九の小河童にズブりとやられて、忽ち三寸息絕えてしまつた。あの飛ぶ鳥を落す勢ひのあつた大宰相も、今や大慈寺の土まんぢうの下に眠つてござる。後から齋藤總監が泣いてみても、大塚驛の助役をふん

しばつてみても、はや後の祭だ。大政黨は首をもがれて、四苦八苦の有樣ぢや。高橋是清布袋和尙に內閣組織の大命が昨夜忝くも降下したが、さて何處いらまで漕ぎ拔けられるやら。目下海の向ふ岸では太平洋會議が始まるとて、德川公が出張中ぢやがどんな風にこの幕が開展して行くことやら。皆さんが仲々御心配なことでござらう。地下に眠る原さんの方が、或は却つて幸福かも知れない。

秋子　來年はこれを仕樣あれを仕樣と、働き盛りの身で、ずゐぶん仕殘した仕事も多いでせうに、途中で不意に暗殺されたのでは、原さんも嘸かし無念でございませうねえ。

春翁　汽車の衝突で死ぬこともある。水で死ぬこともある。麻布鍋島侯の崖崩れのやうに、雨の爲めに山が崩れて來て家と一緖に潰されてしまふこともある。野村隈畔のやうに女に好かれて死なねばならぬこともある。死は運命だから止むを得ない。原さんにも、平素から死の覺悟はあつたやうだ。あの遺言狀を見ても分る。だが、平素から大任を負ふの覺悟無く利黨本位利己本位の政黨者流が、百鬼夜行の目下の國こそ、大に笑ふ可しだ。

秋子　さうでございますね。私もこれまで多くの人の遺言を聞いたことがありますが、この夏の初め、熱海か何處かでトンネルの工事中、土砂が崩れ落ちて多くの工夫が生埋となり、數日經つてから堀り起されて生き還つたといふ事件がありましたでせう。あの時、その生き埋めになつた工夫の小頭と技師とでしたか、一週間も土に埋れてから後、もうそこで死ぬものと覺悟して、手帳の端に書き置きをした者がありましたね。あの文章は今記憶して居りませんが、何といふ立流な遺言狀だつたでせう。

春翁　うん、さう〳〵、そんな事が有つたね。私も嬉しくて、よく覺えてゐます。

秋子　私はあれを讀んだ時、今の世の中にも、こんな淸い、そしてあんな場合にも少しも知れない亂れない雄々しいお方があると思つて、あんまり嬉しくつて泣いちまひましたわ。市會議員や代議士やお役人やお金持の實業家や、相當學者でもある會社の重役達や、さういふ人々が球數つなぎにされて恥を國民の前に曝す時に、工夫や勞働者の中にも、あんな立派な人格を持つ責任感の強い人が有るのかと、賴母しく嬉しく勇み立ちましたよ。

春翁　さうさ。實に見上げたものだつたな。平素豪ら相なことを言つてる奴でも、生埋にされるやうな際には、亂心する。だから人は平素の信仰と心懸が、大切ぢや。大本敎を御覽。去年まで旭日登天の勢を見せた綾部の大本敎は、不敬事件を惹き起して、こつぴどく所刑された。その時の王仁三郞の態度を

なだつたらう。そこが日來の信仰の力の試錬の日なんだ。宗教はそれを錬えるところに價値があるのぢやが、果して王仁三郎がその試錬に及第したか否かが疑問である。大本教退治、これも亦た大正十年中の注目す可き一大珍事といふ事が出來やう。元來、大本教などいふ宗旨が大正の今頃ヒヨツコリ飛び出してくるといふのが、全くの時代錯誤で、私らはこの大本教退治を見てゐると、床下の荒獅子男之助が、怪鼠を踏まへたまま、せり上げられて來るのを見るやうな、芝居氣澤山のものとしか思へぬ。一方が赤つ面で、一方が一卷をくはへてゐる怪鼠仁木彈正だ、こんな物を有がたく信じる者が、陸海軍人の中に多數あつたといふのだから、呆れざるを得ない。といふ人も有るだらうが、信仰は戀愛も同じことで、人は人、自分は自分、蓼喰ふ虫も好きずきといふ奴で、惚れた目で見りやアバタも笑くぼ大本さまでなけりあや妾やいや〳〵と來れば、側から何うして見やうもない。それを腕力づくで神殿取破しなどは、無用の骨折ぢやらう。

秋子　しかし、他にも、今日、見ぬ戀にあこがれてゐるやうな宗教が有ります。

春翁　へい、それは又極めて奇妙な宗教ぢやね。

秋子　私達の今度越して來た町の何丁目かに、小さい祠がありますが、この町の若い衆が或日の午後打揃ひ、中には着つけない袴なぞを仔細らしく穿いたのもあり、宅へ參りまして、今度御輿を作るのだから奉加に付けとて帳面を出しました。私の考へでは大方十錢か十五錢もやれば手間暇いらず追拂へると思ひましたから、心安く承諾して拈つて出しますと、何うして〳〵先方の要求は、そんな小さなところではないのです。

春翁　一體いくら寄附しろといふのです。

秋子　五十圓と見當付けて來たとマジメくさつて申すのです。私はそれを聞いてバカ〳〵しくつて開いた口が塞がりませんでした。それでもその神社には、また何んた尊い神様が鎭座ましますか知らずして、無下に斷つては惡いと思ひ返しまして、神様は何方を祭つてあるかと訊いてみますと、御隱居さん。まあ實に呆れるではありませんか？その十人も來た人數の中に、一人もそれを知つてゐる者はないのでございました。彼等は「併し此處いらは皆な氏子ですから、是非寄附して頂かねば困ります。」と言ひ張ります。理由といふのは、氏子だからといふのです。しかし、神様の名前も知らずに、私共は寄附は出來ませんと云ひ、それからそんなに多額な寄附金を御請求なさいますが、あなた方の作らうとするおみ輿は、一體幾ら位のものですと、きゝますと、「それは二千圓かゝる」との答でした。誰を祭つて

あるやら知らぬ神様の爲めにこの不景氣の時に、金二千圓のおみ輿を作つて擔がうといふのです。それも金持ぞろひの町ででもあらうことか、昔から名高い貧民窟の跡で、今は手すきの紙などを商ふ小さな店の並んでゐる淋しい町なのです•何故、彼等はそんな苦しい中から、高價のおみ輿を作つて擔ぎ度いか、といふと、大きな法華寺が近くの村にある爲めに、道順として、毎晩もお會式の萬燈が通るので、それを見て大方刺戟されたものでもございませう。眞似をしてかつぎ度くなつたのです。この人達の神社崇拜は先づこんな位の程度のものです。一貫三百何うでもでいゝ、ドンドコドンドンドコドコ、これがこの人達即ち大正の都會の青年の宗教なのです。

春翁　上には上が有る。こいつは大本教以上に罪が無いね。あははヘハヘ……ところで、この一貫三百何うでもいゝ、といふ團扇太皷の節は、幼稚な耳に、餘程面白く響くもの見え、内の孫やら近所の子供やら、先達つてうち、毎日毎晩それをやつてゐました。日蓮上人も仲々考へたものぢやテ。

秋子　さやうでございますよ。私共の内の近所の子供も、お會式の前後は毎晩太鼓を叩くので喧ましくつて閉口しております•小學校も亦貧乏町の中にある學校だものですから、生徒が物置のブリキ屋根に上つて、屋根を叩いて柏子を取りつゝ、團扇太鼓の眞似やら八木節やら、迚も堪りません。それ故その小學校が一番近いのでございますけれども、兄の子供はそこへやらないで、わざ〳〵高師の附屬小學校へ通はせてあります。

春翁　あなたのところから附屬まで、そいつは大變な奮發ですね。往復が遠くて容易ぢやあない。あすこは毎年入學志願者が非常に多くて、容易に入學出來ないと聞いたが、よく這入れましたなあ。

秋子　ほんとうに、今年なぞ志願者が、また豫想よりも更に一層多く、七百人も有りましたらうか？　その中から百人くらゐほか入れないのですから、その心配つたらありやしません。でも運よく若い鬮を引き當てましてね。それから試驗のやうなことも有りましたが、おかげ様で何うやら恁うやら、這入られました。

春翁　そりやあ、いゝことをしました。あすこの一部を出ると府立の中學が無試驗で這入られます。この節は中學へ入學するのが、又大骨折ぢやでのう。一校だけ試驗を受けてみて、首尾よく入學出來ればいゝが、若しやり損ふと困るからといふので、一人で二校も三校も入學試驗を受ける。中には今年の春、一人で九校の試驗を受けたものがあつた相だ。その骨折や思ふ可しぢや。これといふも、學校の數が足りないのに、入學志願・

供が澤山殖えるばかりだからだ。迚も今日教育費删減などいふ時代ではない。教育費をうんと殖やして學校を多く建て、教員の俸給を少くも倍以上に增額せんといふ事はない。先達て警視廳の連中で出してゐる「自警」とかいふ雜誌で、警察に對して何か希望があるかと訊いてきたから、私は先づ巡査諸君の月給を二三倍にしろ、さうすれば警官の頭が好く成る、と答へてやつた。教員も同樣ぢや、俸給を增し、生活に餘裕が生じれば勉強も出來頭もよく成る、軍艦ばかり澤山こしらへても人間が出來なくちや仕樣が有るまい。軍備縮少同盟會とかいふものから、參會するやうに案內狀が來てゐるが、軍備は縮少以上、徹廢に勗めなければならないんだ。税金の大部分が軍備の爲めに消費されるとは、あんまりバカ〳〵し過ぎる。

秋子　税金のことを言へば宅の兄のところへも去年の冬頃から税金の赤い紙が來るやうに成りましたよ。

春翁　ほう。文士から、徵税するか？　文士も近來景氣がいゝと見えるな。

秋子　いゝにも惡いにも、この頃の物價の高さでは、一年に八百圓以下の所得では、誰だつて暮せる筈が有りませんわ。一家構へてゐる人で、それ以下だといふ人は、それこそ滅多に無いでせう。皆な脫税してゐるのです。兄なんかは、不定收入で、可也苦し相ですけれど、一年に八百圓や千圓の收入が無いとは申しかねるでせう。

春翁　正直に申告すれば、この物價騰貴の今日、所得が八百圓以下で暮せる筈がないのだから、誰も皆納税の義務があるわけだ。だから、もつと所得額の高いところ、少くとも三千圓以上の者から納税することにするとか、又は誰からも世帶主からは小額づゝ皆取り立てることにして、所得の大きい大商工業者、ブルジョア階級の大きい脫税を防ぐやうにするかしないと、一國の風敎の上から考へて甚だよくない。税金はわづかにもせよ人々に脫税の習慣を作らせ、僞の申告をする可く餘儀なくするやうに成るからの。

秋子　兄なぞも、納税は少しも苦しくはないが、ブルジョアが大きな脫税をしてゐるのに、我々貧乏人がマジメに出すのが馬鹿〳〵しいと申して居りました。

春翁　おまけに、さうして集めた國庫の收入の大半が、軍備の資本金に向けられ、子供の入學すら困難を極めるといふのではな、これでは人民は治まらない。安田翁が殺され、つゞいて原大臣が兇刃に斃れるといふも、爲政者側の人達に、よく〳〵考へて貰はなければならん。兇漢を捕へただけでは、全部後始末を付けたとはいはれん。まだこの先き、恁ういふ不祥事が續々

と起るやも知れん。

秋子　そして、人の氣の荒く成りましたこと。何處にも此所にも、今年は離婚沙汰が大變多かつたやうです。新聞や雜誌でも離婚問題の考察のやうなものが、あちこちに見え、三下り半の研究までも發表した博士がありました。

春翁　女が世間のフエミニストからけしかけられて、氣の强く成つたからもある。今年は何となく世も亂れ家も亂れ、ゴタ〱して暮れたやうだ。鐵道事故や自動車事故も大分多かつたやうだし、火事も大きなのが出て驚かされたな。何うだい、三月三日の淺草の大火は！其火事で一なめに一千五百戸も燒き拂つたんだからなあ。田舍廻りの役者の家の留守居婆あが、近所へ出てお喋りをしてゐる間に火を出したといふのだが、火に祟られると恐ろしいものだな。そこへ來ちや、理屈も絲瓜もないからの。

秋子　新宿の火事もずいぶん怖ろしい火事でしたわ。夜の九時頃に始まつて夜中ぢう燒け通して、やうやく新宿御苑で止まりましたけれど、一時は何處まで擴がるかと思はれた位でした。燒け出された人達は、ずゐぶん困つたことでせう。雨に攻められたり、火に攻められたり、人生もつらいものですのねえ。

春翁　そこで悅ぶのは大屋さんばかりだ。市區改正で家が破される。電車を引くので家を破す。それが一度に數千戸づゝだ。おまけに火事が手傳ひ水が手傳ふ。そして新築する方は大工の細い腕でコツ〱やるのだから、寢る目も寢ずに工事を急いだとて知れたものさ。市區改正や火事の力には迚もかなはない。府や市で建ててくれるといつても、そんな物は燒け石に水だ。こないだも何處かへ府で建てたやうだが籤引といふのだから、勸業債券で一千圓當てるよりも、心細い。市で右京ケ原へ建てるといふ話は、田尻市長以來の觸れ込みぢやが、もう出來たか知らん、まだ草が生えてゐるのぢやあないかね。

秋子　私共でも、もう先達て、大屋さんから改築する故立退いてくれと云はれ、方々探して漸く見付けて越しました。この頃家はボツ〱有るやうですけれど、家賃のお高いことは實際驚いちまいます。まあ、一寸した家が、すぐ六十圓七十圓ですもの、そして敷金が四つも五つもですもの。ひどいのは巢鴨にあつた家ですけれど、賃七十圓の敷五百圓といふのです。これなど七ケ月以上でせう。その上、子供の有る人はお斷りですとさ。

春翁　どうも、借地借家法案なんといふ下らない物が、今會の議會を通過したものだから、益々大屋の鼻息が荒く成つて仕樣がない。

秋子　でも、あの法律は借家人の權利を保護する爲めに出來

たのでせう、

春翁　と思ふと、大間ちがひだ。あれは惡い借家人を保護して善い借家人を困らせる法律だ。あの法律だと、立退の催告を受けてから六ケ月ゐられるといふのだけれども、考へても御覽なさい。店立てを喰つてからベン〳〵と六ケ月も引つ懸つてゐやうといふ先生に、ロクな借家人がありますか？　眞面目な人なら、さうしたイサクサの附いた家には一月は愚か半月ゐるのも厭でせう。そこで、今度新たに借りやうとすると、恐ろしく多額の敷金を請求される。これもその筈、イザとなれば六ケ月止まる權利を渡すのだから、大屋さんの方でも前以て用心して六ケ月迄の敷金を要求するのは見易い道理だ。わざ〳〵こんな不徹底な法律をこしらへて、借家人に餘計な苦勞をさせるのだから、議會の信用も地に落ちたわけよな。では、地面を借りて家を建てやうとすれば、市內に空地は見付からない。それも新らしい土地法案の罪だ。家主は、しかし、萬々歲だ。それから、惡い借家人は、六ケ月だけ息がつける。

秋子　何だか、今年はいやな事ばかりありましたね。我々平民の間ばかりでなく、宮中にも正月中から、度々新聞に某重大事件などと、何となく恐ろしい記事が見えてゐましたが、山縣老公も御無事でゐらつしやるやうですから、丸く治まつたのでございませうね。官爵を辭して、たゞの山縣狂介に歸るなどゝ噂れてましたが。

春翁　山縣公の辭爵の問題なんか、人民にはほとんど沒交涉だよ。何うでもいゝ事さ。あの辯護士の山崎今朝彌君のやうに、手製の米國伯爵で得々としてゐられれば、それでもいゝ事ぢやないか。某重大事件の內容は知らないが、杉浦重剛翁が宮中を去つた時には、これから何が始まるかと思つたね。それが、案ずるよりも產むが安く、畏くも皇太子殿下には船路平かに御渡歐遊ばされ、諸外國にて大歡迎を受けさせられ、御見學を終つて御歸朝遊ばしたとは、誠に慶賀の至りではないか？　これで大正十年の暗い雲も晴れた樣な氣がする。まづ來年は、國民全體がもつと伸び〳〵した氣分になつて暮し度いものぢやが、それにつけても坪內博士が民間の行樂として藝術氣分のパジエントリーを鼓吹された事も、大正十年の思ひ出の中に消えんならう。來年も何うかさういふ氣分を發展させて、國民が少しは晴れ〳〵した心持で暮したい。笑つて暮すも泣いて暮すも、理屈を言つて暮すも和らいで暮すも、一生は一生だからのう。日本が東洋の樂土に成つたら、世界中の呑氣者が集つて來やう。今年はラッセル先生が來られたが、將來日本の學問が進んだら西洋から留學生が來るやうに成らうも知れぬ。まづ、それは前

途踏遝として、兎に角、來年は良い來年を迎へて、笑つて暮し度いものぢや。今年流行つたものは、唄で鴨綠江ぶし、言葉で文化、ストライキも相變らず。政友會の横暴と、暗殺騷ぎ、戀愛事故。さて來年は何が流行るかいう。(終り)

支那人の顏其他

長谷川如是閑

支那人の顏

日本に居て、支那　の顏を見ると、そこに何處か同胞を離れた、特異を感ずる。恐らく目と鼻との距離の關係らしく思はれるが、判然としたことはわからない。ところが、支那に來て、そこに充滿してゐるその國の人々を見ても、その顏面の特異を認められない。人々は、それで好ろしいといふ顏をしてゐる。私もその人々の顏を、それでよろしいと感ずる。ばかりでなく、その間、偶に、その人々の中に、日本人を見出すと、その顏が馬鹿に特異に見える。さうしてその特異は、日本で支那人の顏を見た時に感ずる特異とは違つて、甚だ穩かでない感じである。何といつて好いか、その感じを適切に言ひ現はす言葉を知らない。何が譬へていふならば、羊の群の中に犬を見出した時のやうな感じである。それは甚だ善い場合のことで、時には狐を見出したやうにも感じ、更らに狼を見出したやうに感ずることさへある。それは私が、殊更ら日本人の惡口をいふのだと誤解されては困る。あの支那人の群の中に西洋人を見出した時の私の感じにもつと惡い。それは譬へていふなら——譬へないでも——人間の中に獸を見出した感じである。(それは顏面についての話だ。)實際西洋人の顏は、獸的特徵を帶びてゐるといふことをつくづく感じたのは、支那に行つて彼等を見た時だ。實をいふと今迄私は、西洋人の顏を、もう少し尊敬してゐた。澤山の日本人の顏の間に、西洋人の顏を一つ二つ見た時に、決してそんな失禮な感じは起らなかつた。ところが澤山の支那人の顏の間に西洋人

を見た時には、『アレ白い顔の獸がゐる、』と言葉に出したら、さう云はなければならなかつた。而かも、その獸の顏は羊や牛や豚や膃肭獸やの顏のやうに、氣の好い獸のそれではなく、一番それに近いと思はれるのは、慾情の強いゴリラのそれであつた。

しかも私は、實際その英話を話すゴリラを見たのだから堪らない。漢口から北京へ行く鐵道の中での話だ。立派な食堂車で食事をしてゐるうちに、汽車が停車場へ止つた。大きい硝子窓の外は、プラットホームだが、それが日本のよりも高いと見えて、そこへ行き交ふ人の側が自由に食堂車の窓を覗き得る。うまそうな御馳走をたべてゐる異人達を珍らし相に、又物欲し相に支那人がその窓から覗く。巡警ものぞく、苦力も覗く。それを忌やがる一人の英人か米人かゞ硝子窓のうちから、手眞似で、支那人に立ち去れと命じる。立ち去る。双方に氣の毒なほどそれを繰り返してゐるうちには、手眞似位では立ち去らないのもある。其の時だ。その異人は、手にフオークとナイフを握んで身體を少し窓の方へのり出させながら、歯をむき出して、恐ろしい顏をして見せた。それが、そつくり檻の中から見物に怒りかゝる動物園のゴリラだつた。私は、その時ほど、西洋人の顏が類人猿系であることを實見したことはない。こんな顏を澤山見てゐれば、ダーウヰンでなくとも、あの位な學說に思ひ到るであらうとさへ思つた。

實際西洋人の顏の曲線を仔細に觀ると、その複雜な線は、決して人間的のカーブではなく、獸的のカーヴであることを知るのである。彼等に仕合せなことは、彼等の發明した寫眞では、彼等の顏の線を立體的に示すことが出來ないので、西洋人の寫眞面には、その獸的のカーヴがよく現はれてゐない。が實際について見ると、西洋人の顏のカーヴは、年老いた猿の顏のカーヴと共通の感じを示してゐる點を澤山發見するのである。西洋人自身は、所謂『顏角(フエーシアル・アングル)』の直角的なことを以て、自分達の顏が、最も人間的進化の高い顏であると說いてゐるが、然し角度だけ修正しても、全體の感じは改まらないから仕方がない。

話が岐路へ入り過ぎたが、私がこんなことを強く考へたのは、すべて支那人の顏の群れに接してからのことだ。あの間のぬけたやうな顏は、日本で見てゐた時には、何うしても人間としての強度の足りないマイナス面としか感じられなかつた。殊にグループとしてそれを見た時にさうであつた。或る時私は、東京の近郊で士官學校の生徒の行列に出逢つた。それは服裝から武裝からすべて日本の士官學校の生徒であつた。がたゞ首だけが、何うしても入れ違つてゐた。何の間違ひかと、一瞬間思ひ惱ん

だが、次の瞬間に、彼等の或るものが、支那人風の日本語を話したのが聴えたので合點した譯である。それは入ヨ一8といふ顔だと思つた。

ところが、支那に來て、すべての顔がそのマイナス顔であることを發見した瞬間から、私は、マイナス顔でない顔に出喰はすと、私はその顔が入ヨ十8の顔であることを知つた。西洋人の顔は入ヨ十環の顔であつた。日本人の顔は入ヨ十……何だらうかと考へた。それは入ヨ十環ではなかつた。段々考へた末に、それは入ヨ十口本入の顔であることに思ひついた。日本人の顔は人間の顔として、支那人の顔よりはヨリ尨雜な何物かゞ加へられてゐる。而かもその加へられた尨雜物は、人間には餘計な何物かである。何物だらうかと考へて見たら、それは『日本人』であつた。

入ヨ十口本入の顔が私に與へた第一印象──始めて、支那人の顔の間に日本人の顔を見出したのだから、私には第一印象である──は、前云つた羊の中に犬か狐か狼かを見出したそれであつた。

支那人の顔に、ヌケた或る物があると、私が今まで思つてゐたのは、その顔に餘計なものがないからであつた。支那に來てその顔の群れを見た時には、全くそれで好いと思つた。實際支那人は、紳士は無論車夫でも苦力でも、ヌケた顔をしてゐる。言ひ換へると、それで好い顔をしてゐる。所謂好男子型のものさへ鮮くない。──注意して置くが、私が今まで言つてゐるのは、主として男の顔についてなのだ──ところでその好男子といふのは、日本人に云はせると、所謂う〻味のない顔だ。單純なのだ。文法的に正しい顔なのだ。けれども、如何なる外國人と雖も、支那の市街の群衆が、誰れも彼れも、その文法的に正しい顔に近い顔をしてゐるのを發見したら、自國の顔の野蠻的であることを感じない譯に行くまい。實際支那の苦力の群れに入つて見ても、その人々の、若いもの〻うちには、此人は相當な身分から零落したのぢやあるまいかと思はれる顔を見出すことが多い。それが餘り多いので、さう皆零落したものである筈がないことを知るのである。而して年を取つたもの〻うちには、所謂逸士、高士、隱士など〻いふ風格のものを澤山に見出す。尤も此奴は惡漢らしいと思はれる顔にも出喰はす。然るに、さういふのに限つて、外國人──殊に日本人──に似た顔であることは遺憾である。

支那の人力車

高慢な日本人のうちに、同じ日本人を乘せて走つてゐる車夫

といふものを見出すのは意外なことである。これに反して、支那で支那人が人力車を引いてゐるのは頗る自然に感じられる。又その裝と車とが思ひ切つて汚たないのも不自然には觀えない。又その車の恰好が日本のとは違つて、車臺が低くて乘客の頭が車夫の頭よりも低い位なのも、支那的である。

人力車は東洋車の名はあるが、元來日本人の發明で――世界の發明のうちで此位人間を侮辱した發明はない、然もそれが汽車の發明された後の發明なのだから愈々人を馬鹿にしてゐる。電信が出來てから早飛脚を發明しなかつたのは責めてものことだ。――外の東洋人は寃罪を蒙つてゐる譯だが、その發明に對して支那にゐる西洋人が修正を加へたのが、支那の人力車だ。それは今云つた通り、所謂『高臺』ではなく、維新後に始めて出來た人力車の型に近くて、それよりも一層車臺を低くしたものだ。それが力學上の原則に適つてゐるとかで、顚覆の虞れが少なく、梶棒の重力が平均されてゐて、安全であり輕快であるとの事だ。が日本人がその車の形を見ると屹度いやな感じがする。少しも威勢の好い感じがしない。日本人ほど『威勢』を好む國民は少ない。すべてのものを『威勢』本位で作つてゐる。人力車も、始めて出來たのは、支那車に近い『威勢』の乏しい恰好だつた。梶棒の先が車夫の頭より高く上つてゐて、車臺の後ろが、イヤに後方へ傾いてゐ、て乘手が背り返つて、窮屈を示すのに甚だ都合が好くなかつた。それで『威勢』本位に、今のやうな高い所に傲然と構へるに適した構造に改良された。始めはそれを『高臺』と稱して遊廓行などの『威勢』を示す必要のある場合には、その高臺に限つたものとされた。ところが、道路の惡い日本の町をその車で威勢を示すと往々顚覆した。で老人などはけんのんがつて高臺を嫌つた。で低い車は愈々威勢を失つて、老人を乘せて、老車夫が引くものに定つてしまつた。今でも落語家などが、威勢の惡い車夫のことを話す時には、梶棒を高く差し上げて、乘手が後ろの方へ引つくりかへるやうに座つてゐる恰好を示すが、あれは高臺前の車の引方を示してゐるのである。支那の車は、現在それよりもモツト低い、重心を一層下の方に置いた安全車即ち日本の老人車の極端の恰好である。

ところが、支那の人力車の速力の早いことは到底日本の車の比ではない。――尤も賃金をひどく値切ると極端に遲い速力で歩むさうである――然かも支那の都會の往來の混雜は日本以上で、上海などは、それに馬車も自働車も遙かに多く、その間を人力車が奇聲を放ちながら、非常な速力で走るが、比較的誤ちが少ないさうである。私は日本に歸つて來て、神戶で車に乘つたが、その遲さに驚いて、肝癪を起して降りて歩いた。――尤

も私は日本では滅多に車に乗つたことがない、旅行をする時にさへ成るべく乗らないことにしてゐるので、日本の車の遅い速いなどは、今まで問題にもしてゐなかつたが、問題にして見ると、遅いのに驚いた。兩肩を前後に交互に烈しく押し進めて、乘客に足の裏を見てくれとでもいふやうに兩足を刎ね上げてゐるが、その實早く驅けて居るのではない。さういふ身體の運動を見せて、車が早く進んでゐると思ふ錯覺を乘客に起させてゐるのである。かういふ虚僞は、得て『威勢』本位の國民のすることである。支那人は斷じてそんなことはしない。遅く走つてゐる車力は、遅く走つてゐるやうな風をしてゐるから、乘手も通行人も、彼れが遅く走つてゐることを知り得る。

が支那人車夫の早く走る心理は、私の考ふるところでは、全く本能的である。日本の山國では、犬に車を引かせる所が多い。月が瀬や吉野山などでやつてゐるが、先達も、信州の飯田でそれを見た。その犬は、車につけさへすれば全力を以て走らうとする。それは、犬の本能的な運動を利用してさう馴したのである。動物の運動には一種の傾向がある。それは動と反動との平均を採らうとする作用なのであるが、例へば、後から何物かゞ押へてゐると感ずると、その靜止を破つて運動を起さうとする。又前から押すものがあるとあべこべにこちらが前へ出やうとする。即ち靜に對しては動、動に對しては反動を以て應ずるといふ本能である。犬を後ろから鎖で引くと前へ出やうとする。驢馬を前へ進めやうとすると後へ下る。日本の柔術は、この本能を利用して工夫した術なのである。支那人を車につけると、吉野山の犬のやうに極力引かうとする。それは全く本能的である。人は本能によつて行動する時には、周圍の事情を考へない。盲滅法に突き進んで、惰死でもなんでもする。支那人の車夫が人込みに構はず驅け廻るのは、日本人が妻子に構はず惰死するのと同じ理窟である。

車夫ばかりでなく、一體支那人は危險を顧慮しない人類である。輕業師でも曲藝師でも、日本人に出來ない際どいことをやる。板の前に人間を十字形に立たせて、その額の上や、頭の廻りや、兩腕や股ぐらに牛切り庖丁を手裏劍のやうに投げつける藝當などは、日本人には眞似手がない。日本人は、これを解して、支那人の命が安いから、そんな時に板の前に立つて、氣も知れない他人の牛切り庖丁を受ける役を平氣でするものがあるからであるといふが、それは正鵠を得た解釋ではない。假令板の前に立つ人間があつたつて、よくそれに向つて牛切り庖丁を投げつける勇氣のある日本人がないのである。支那人の危險を顧慮しないのは、受け手の如何によるのではなく、働きかける方

の如何によつてゐるのである。車夫の突進も、群衆の命の安い故ではなく、車夫その人の感覺の問題なのである。これも動物的本能に於に勝つてゐるからであるといへば、さうとも云はれるが、然し彼等が、人に危害を與へない自信のあることを見逃してはならない。件の曲藝で庖丁を投げる人もさうであるが、人込みの中を走る車夫もさうである。彼等がその危險の多い行動に於て、危害を發生せしめないだけの技術上の自信を持つてゐることは、その行動に於て、安全率を出來るだけ寡少に見積ることによつて踏擬立てられる。技術家は、その計算が不安であればあるほど安全率を多く見積るものである。或る梁木が五噸を支へる必要のある時に、その梁木の强さと、それに乘る五噸の重量との計算が全く正確であれば、安全率は、五噸を支へること僅少で好い譯である。然かも實際の場合には、梁木に五噸を支へしめやうとすると、原則としてその何倍もの力をその梁木が有つことを必要とすると定られてゐる。支那人は、この工學上の原則を無視して、多くの場合に安全率を最低限度に見積る。この事は、支那人の生活に何倍かの危險を增してゐる譯であるが、又それが爲めに何倍かの利益を增してゐる理窟である。卽ち外國人が、五噸を支へるには十五噸を支へ得る梁木を用ゐなければならないとする場合に、支那人は、たゞ五噸を支へるだけのものを使用する。從つて外國人が三を要する時に、支那人は一で足りる。此の事が、生活の競爭に於て、あらゆる外國人が支那人に敗を取る重な原因である。

車夫でも日本人なら、十五哩走るとは走れるが、安全率の上から五哩の速力で走らなければならないと考へる時に、支那人は十五哩出せる譯である。此の安全率無視の適例を私は、支那人の飛行機で實見した。北京の空を每日のやうに飛行機が飛んでゐるが、それが時々、最も繁華な市街の上で、而かもパイツトの顏が見える位の低空で、宙返りをやり、木の葉返りをやり、逆落しをやる。その亂暴さは外國人を冷や／＼させる。然かも餘り墜落の例がないと支那人は つてゐるが、夫にしても、安全率の上からそれは外國人にはやれないことである。日本の陸軍などでは、到底そんなことをやらせる勇氣はあるまい。然かもそれで危險がないとすると、さうする方が利方である。飛行機の曲乘りの場合には、直ちに實益が割り出される譯には行くまいが、商業に於て工業に於て、此無安全率的方針を取れば――事實支那人がさういふ方面に無安全率であるか何うか知らないが――豫備後備を皆現役に使つてゐる理窟で、夫は彼れの强味である。私は支那人の生活を外面から見て、其旺盛さには、此安全率無視の强味が大分働いてゐるやうに感じたのである。たゞ、原

則には屹度例外のあるもので、黄河の鐵橋を汽車が通る時に、非常な緩速力であつた。がそれも、此の鐵橋が最早架け換を要する年代に達してゐるといふこと、此鐵道が白耳義人の管理に屬するといふことを考へると、餘り例外でもないらしい。

支那の汽車

汽車のことの出た序に、支那の汽車の第一印象を話せば、それは始めてあの人力車を見た時の感じとは正反對であつた。卽ち支那の人力車に於ては、日本の過去を見、支那の汽車に於ては日本の未來を見たのである。

戰爭と洪水とで絶えず不通となり、時間は正確であつたらば誤つたので、恐らく前の汽車が後の汽車の時刻に暗合したのであらう。などゝそんな風に、日本人——然かも支那にゐる日本人——に批評されてゐる支那の汽車に實際乘つて見ると、その何れに於ても、第一、四五時間遲れることは覺悟の前でゐろと云はれた時間が、餘りに正確なので、矢張り、後の汽車の時刻に暗合したのではないかと疑はれた程であつた。今は何うか知らないが、伊太利の汽車は、而かも急行が到着が遲れるなら未だしも、發車時間が、廿分も遲れたのに驚されたが、その比較で行くと三日位遲れても理窟は云へない支那の汽車が、時間表の通りに出て行くのは無論の事、試みに驛毎に時間を調べると、キチン〳〵と正確に着いてゐる。尤も單線の爲めに待ち合せに時間の狂ふことはあるが、その待合せが、日本の單線ほど頻繁にないので結局直ちに取り返へす。

それに、日本の政治家の腹の小さい例に引かれる日本の汽車の狹軌なのに反して、支那の廣軌は、何うしても向ふに優勢味を與へる。三等の貨車とその以下の、無蓋車に乘客を積むことゝは、一寸他國に見當らないが、これも支那人の生活が、例の無安全率式の一例として、その强味を構成する一例である。支那の汽車はそれが爲めに、他國の汽車の何倍かの能率を擧げてゐる譯である。然かも雨の少ない支那では、天氣の好い時など無蓋車の中に座り込んで景色を眺めながらの旅行も惡くないと、それで旅行した經驗のある日本人が負惜しみを云つてゐた。それに無蓋車でも、日本のと違つて大きいので、緣の高さは人が立つて肩位まであるから風除けには十分である。石炭の煙が恐ろしからうといふと、それが又何時も日本の引合ひに出されることで、支那の汽車の石炭は、日本炭と違つて煤煙が燃燒しない炭素の粉ではなく、燃え切つた貝殼の粉のやうな灰である。それは英國船などの燃いてゐるカーヂフ炭に似て、白い着物の上にふりかゝつても振ふ時に黑い線だらけになるやうなこ

とはない。日本の汽車の石炭は、乘客の鼻の孔を染める爲めに焚いてゐるかと疑はれる位、意地惡く隅から隅まで眞黑にしなければ已まないが、あんな石炭を粗のまゝで焚いてゐる國は世界廣しと雖も日本の外にはない相だ。海軍では日本炭を日本魂と稱して嫌つてゐる。日本の『炭』は日本の『膽』に通ずるので日本魂の譯だが、此の日本魂は無暗と氣焔を擧げるので戰爭の際などには使へないといふゴロツキの魂のやうな炭である。で此頃は海軍では煉炭を用意してゐるが、西洋の汽車でも、炭質の好くないのを用ゐる時には必らず煉炭にして使つてゐる。戰爭け滅多にないのだから、其際だけ日本人を眞黑にしたところで、たいした迷惑でもないが、汽車は始終のことだから、それが日本人を眞黑にすることは國家の常住の迷惑であるが、汽車で戰爭をする時代の來ない限り、日本の汽車が煉炭を使ふやうなことはあるまい。日本では戰爭に用のないものはすべて閑却される。人間さへ戰爭に用のない人間は喜ばれない。

汽車が脫線してしまつたが、復舊して、支那の三等の貨物車も一寸好い相である。それは腰かけなどは無論ないのだから、各自毛布を携帶して、それを敷いて横になる。始めに場所を取つてしまうて、決してそれを犯さないのが支那人の禮儀だ相で、三等國もその點で、場合によつて混雜した二等に乘るよりも好いことがある相である。

況して、一等は中々好い。線によつて違つた京漢線其他多くは、一等寢臺車は二人一室で卓子があつて——尤も二等にも卓子つきがある——茶を持つて來る。さうして汽船と同じく室の戸には乘客姓名を揭げる。ボーイも大人で、掃除も中々よくする。洗面器などは、一人が使つた跡は屹度ボーイが掃除する。立派なことでは、滿鐵の歐露連絡の車には及ばないが、その他の點では申分がない。殊に食堂はハイカラで金釦の服裝の、例の文法の正しい顏をした美しいボーイが、正式に大皿を持ち步いて客人に取らせる。大食の支那人のことだから、一人前取らねば損だとばかりにウンと取るので二三度食堂へお代りに入るのは氣の毒な位である。さうして代價は定食一弗半位で安いこと夥しい。尤も外のは餘り甘くないやうだつたが、京漢線沿[illegible]線のは可なりであつた。それに感心なことは、代價が即時拂ひでなく、チツトに署名して降りる時に纏めて拂ふホテル式であることだ。たゞ京漢線は外人との合辦なのでコンダクターが佛人だか白耳義人だかだが、此奴がいやに倣慢で、官僚式なのが不愉快極まる。本國の佛蘭西や白耳義では、車掌が切符を見せろといふ時には、丁寧に『どうぞ切符を』といふが、こゝに來てゐる田舍車掌は、その時には、支那人の從者を澤山つれて

やつて來て、大威張で、それでも役目上、自分で切符を切つて行く、それが滑稽でもあり、氣の毒でもある位、殿様ぢみた風をしてゐる。

支那人に鐵道管理の能力ありや否やといふことは、能く外國人のいふことだが、それに憤慨した譯でもあるまいが、京綏鐵道は、支那の材料で、支那人技師だけの手で作つたと稱されてゐる。此鐵道は、停車場も日本式に、草花などを作つてあつて、すべてが日本の風に眞似てゐるらしいが、此一等は極めて規模が小さい。座席は僅か二室位で、乘客は皆食堂車に構へる。日本の食堂車のやうに、椅子が取りつけで小さく、卓子も小さかつたらやり切れないが、卓子は頗る大きく、椅子も大きい肱掛けで自由に移動されるので、一寸展望車の格である。たゞ支那の將校が乘り込むと、その乘卒が大勢で、同じく一等車を占めるので他の乘客の迷惑此上もない。然かもこれが皆無賃乘車なので、軍隊といふものゝ支那に於ける地位を、こゝでも能く表現してゐる。が滿州に來ると、日本の軍人はやはり此無賃式を實行してゐる。たゞ支那の軍人のやうに、大勢で賭博をやり始めることだけをしない。然し此等の支那人の將校は、噂に聴いたやうに、威張り腐つてはゐない。日本人を見ても、決して排日的態度などは毛程も見せないで、却つて此方に支那語の少し話せるものが居たのでいろ／＼と話しかけたりした。それは蒙古へ出征する軍人だつたが、皆平服でゐた。上級の軍人が平服でゐる習慣は、西洋人に似てゐる。それを仕ないで何處までも金筋とサーベルで押して行く日本人も支那では往々平服で通す風があるのは、所謂居は心を移すものか、又は何か都合のあることだらうか。

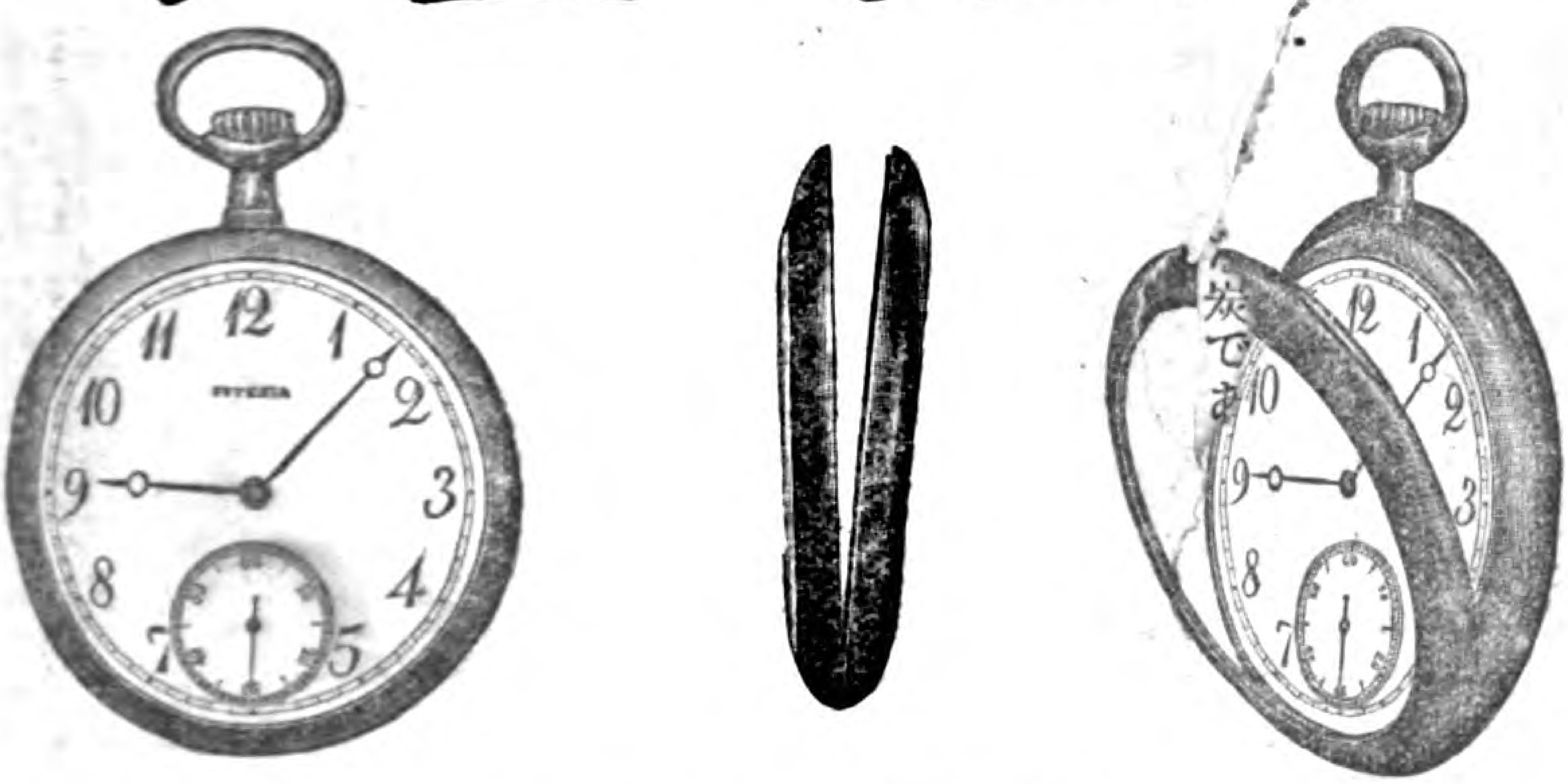
支那人の特色とされてゐる不潔と遲鈍とは、支那の汽車では例外であること右の通りで、然かも所謂禮讓の國を、汽車の上まで持ち込んでゐる點で、日本よりも文明の皮に厚みのあることを見せてゐる。遲鈍でない一つの例は、例の單線の待ち合せの際に、日本では往々待つてゐた汽車よりも後から着いた汽車の方が先に發車する。これはスタツフを受け渡しする關係からであるが、待つてゐるものにとつては忌々しく感じられることである。支那の汽車は此の時に、待つてゐたものが先きに出ることが多いのは、意外なことであつた。

時間の觀念が全く失はれてゐるといふ支那人も、時間が入用の時には相當にそれを考慮に入れてゐる。さうして僅か仕込みらしくもなく、その時間を働かしてゐる。それは彼れが、群衆の頭の上で飛行機の宙返りをしてゐるのよりも、もつと適切に支那の將來の運命を暗示してゐるとのやうに私には思はれた。

瑞西國製高級品

JUVENIA

ジユベニヤ



ジユベニヤは時間の正確なること世界第一

ジユベニヤは美術化したる時計として世界第一

世界のあらゆる博覽會、共進會に於て、最高名譽賞牌六百八十四個を有す

全國各都市の最も信用ある時計店に於て販賣す

ジユベニヤは時間を重んずる紳士用として世界第一

ジユベニヤは實用と裝飾を兼たる淑女用として世界第一

原首相暗殺事件に關聯して

原首相事件の近世暗殺史的考察

高須梅溪

（一）

それは、星の瞬きの鋭い夜であつた。

私は寒むさうな空を仰ぎながら、默々と暗い場末の町をひとりで歩いて居た。もう初冬らしい寒冷な夜氣が、強く身に感ぜられた。路傍の木立に夜風がそつと音づれると、朽ちた木の葉が脆く散つて、地上をすべりゆく時、からからと音を立てた。どの家も、沈靜の眠りに入つたやうに話聲さへも聞えなかつた。唯ある家の二階から洩れるほの赤い燈光が妙になつかしく思はれた。もう冬が眼の前に來たのだ。萬物が凋落するシーズンが近付いたのだ。私は斯う考へると、淋しかつた。

私は何となく、一味の暗愁に沈んだ。昨年の晩秋に病歿した愛兒のことや、早く良人に死別した義姉のことや、始終、不安と焦燥とに襲はれて居る自分の生活などを考へて、重い心持になつた。私の住む世界はいつも冬のやうだ。春の光りに接するのは、一體いつ頃であらうか、私の行く道には、永遠に春が來ないのだらうか。私は、そんなことを胸のうちに繰返して、家に歸ると、勤め先から戻つたばつかりの義弟が「今、原さんが刺客にやられた號外を見て來ました。」と云つて、其の報道の大要を私に話してくれた。

得意の絶頂に起ちつゝある原氏の奇禍！私は、深い驚きと同情との交錯した感じに打たれた。近畿大會へ出席して、勝ち誇つた將軍のやうな雄姿を見せて、黨員を鼓舞しようと期待して居た原氏が、出發の一刹那に無名の少年のために、鋭い一擊を加へられようとは、誰れも豫期しなかつたことだ。恐らく、平生から萬一の場合に備へて居た原氏さへも、斯う早く運命の兇刃が氏の身に振りかゝつて來ようとは、思はなかつたにち

ない。
　だが、私は最初、それが眞實の出來事だとは、どうしても思へなかつた。或は一片の虚說か、捏造された風聞であるかも知れないと推測した。けれども原首相暗殺の號外が、信用すべき有力な新聞社から出たのだと云ふことを義弟の言によつて確めると、漸く實際の出來事だと思ふやうになつた。それと同時に、假りに原氏が重い負傷をしたとしても、平生強健で、青年のやうに元氣が宜いから、必ず一命は取留めるだらうと想像した。ところが、五日の新聞で、氏の逝去が愈よ事實であつたことを知ると、昂奮し易い私の頭は、強い刺戟を受けて、無限の感慨に沈んだ。人生は實に脆い。
　安田翁が暗殺されてから、僅かに一ケ月ばかりしか經たないうちに、原敬氏が又暗殺されたとは何を語るか。私にはそれが、どうしても、時代の險惡な風潮を暗示するやうに思はれてならない。思想上に目ざめた民衆が衷心から要求する新政治と目ざめない妥協政治家が固執する舊政治との間に大きい間隔が横はつて居るうちは、動搖、不安、疑懼の空氣が濃厚に漲つて、すべての人心を險惡に導くことを免れない。
　今や時勢は、隱約のうちに、急轉直下しつゝあるやうに見える。其の機運を直覺して、哲人主義の政治を行ふものが出ない限り、政治上の風潮は到底平穩であり得ないであらう。自己が民衆の一員であり、民衆と苦樂を一つにして進むべき公僕であると云ふことを明晰に意識した哲人的政治家でないと、どうしても、新時代の先頭に起つて、民衆に滿足を與ふべき有意義な新政治を實現することが出來まい。
　原氏は、現時政治界の第一人者であるけれども、哲人主義の新政治を要求するものゝ眼から原氏を見ると、餘りに微温的で、今日主義的で、新しい時代を導いてゆく新傾向から、大分かけ離れて居るオポチユニストのやうに思はれる。そして何事も、「力」を中心として、黨利、黨略に重きを置き過ぎるところは、ともすると、政敵や、正義と自由に目ざめた民衆の強い反感を挑撥しなければ止まない傾きがあつた。殊に學校昇格問題についての失態、綱紀頽廢を暴露した各種の疑獄事件などに關して、當然、其の責任を分たなければならぬ理由があるのに、冷かに輿論の糺彈を無視して、原内閣の生命を持續してゆかうとしたことは、一部の民衆を火のやうに激憤せしめたやうに思はれる。氏が東京驛における悲むべき禍は、恐らく、茲に胚胎して居たのではなかつたか。

（二）

ある人は「日本には、一體に暗殺が多い。」と云つたが、近代日本の政治史を見ると、可なりに、暗殺事件が、眼に付く。それの動機は大體、政治的闘爭にある。保守主義と進歩主義との爭ひ、武斷派と文治派との爭ひ、外交方針についての衝突、左樣した烈しい戰の空氣が濃厚になると、暗殺の罪惡が、往々行はれた。幕末に於ける井伊大老の暗殺事件以來、明治初年までは、血腥い暗殺が頻發した。其の殺伐な遺風は、明治時代にも及んで、横井小楠、大村益次郎、廣澤眞臣、大久保利通、森有禮らを斃した。岩倉具視、大隈重信、板垣退助らの人々も、危く爆彈や兇刄の下に生命を失はうとした。ロシヤ革命のために悲痛な最期を遂げたニコラス二世も、曾て大津に於て津田三藏の爲めに暗殺されようとした。外國に於て英雄的に死んだ伊藤博文、東京市役所に於て殺された星亨の悲壯劇は、尙ほ私等の頭に深い印象を殘して居る。

伊藤公が暗殺されたのは、朝鮮人の一部に呪はれた爲めで、内國に於ける政爭に基づいたものではないから、暫く別にして置いて、他の人々について考察すると、保守主義と進歩主義との激爭のために暗殺され、若くは、暗殺されようとしたものが多い。そして暗殺の標的となつたものは、大抵、新思想を有する進歩主義者である。此の傾向は、明治三十三四年頃まで續いた。それ等の暗殺の動機、理由は、比較的に單純で、其の裏面に潜んで居るところの意義も亦單純であつた。

ところが、星亨の暗殺事件に至つて暗殺された人物の内容が、在來に比して、近代的色彩を濃厚に有して居たところから、自然、其の死に附隨するところの意義の上にも複雜さを加味して來た。今度の原敬氏の場合も、各人の見方によつて、いろいろの解釋を下すことが出來る。それに今の時勢は、明治時代よりも、遙かに多難で、複雜で、各種のイズムの流れが、烈しく渦卷いて、衝突、激鬪の色合が極めて強いから、暗殺された人の心理も、また原氏を暗殺したものゝ心理も複雜に働いて居るやうに思はれる。

星亨の暗殺事件は、現代暗殺史上に一期を劃したものだ。それ以前に於ける暗殺は、すべて進歩主義と保守主義との爭ひを基調として居ると同時に、暗殺を計畫し、實行した闘爭の心理は、大抵、皮相的な誤解に動かされて居たやうだ。それは、保守的精神を有するものが、唯表面から進歩的精神を有する人々の心持を揣摩した丈で、何等の理解も、同情も有しないので、一時の私的激情の發揚に左右されて行動したからだ。だが、左樣した罪惡に共鳴する社會民衆の一部が何處かに存在して居て、其の空氣の中から、自然、暗殺を企てるものを發生するの

だ。時代錯誤的な暗殺が是認され易い傾きが、社會の一隅に今も尙ほ存する理由は、暗殺企劃者の意志と社會民衆の一部に潜在するところの意志とが抱合する場合が往々あるからだ。

更らに暗殺された側の人々や、暗殺されようとした人物の性格を見ると、概して進歩主義を抱いて、あらゆる障碍を一排しつゝ、猛然として進まうとする傾向が見えて居る。彼等は自信が強く、意志が固くて、拔群な戰鬪力を共通的に持つて居る。反對派への讓步と妥協とは、彼等の最も好まないところである。たとひ死を賭しても、尙ほ其の行かうとするところ迄は、必ず到達しなければ止まない。大久保利通、星亨、森有禮などは、何れも左樣した性格の所有者であつた。此の種の性格は、悲壯な最期を招き易い。そして暗殺を企劃した反對派の誤解や、皮相上の解釋などが暗殺の標的とされた人物の直往的、急進的な態度と相觸れて強く、烈しく、反撥し合ふと、玆に血腥い暗殺事件を生ずる。

(三)

明治暗殺史の第一ページは、横井小楠の死に始つて居る。彼が暗殺されたのは、明治二年正月五日である。彼れは、當時最も進步した思想家で、日本を中心として急激に西歐文化を採取しようとした。彼れは、尊皇と愛國とを以て、自己の思想の核心として居たのだが、純粹な攘夷主義者の眼から横井の表面のみを見ると、どうしても、西歐文化を崇拜して日本の國體に抵觸すべき危險思想を鼓吹する人物のやうに考へられた。

それに、横井は、一時公武合體論者として周旋したので、幕府に味方するやうでもあれば、朝廷に心を傾けるて居たやうでもあつた。玆にも、彼れが誤解され易い曖昧點を持つて居た。だが、彼れが生命を失つた主因は、徳川慶喜に上書して廢帝說を唱へ、外人と密約して、キリスト敎を公許しようと傳へられた爲だつた。勿論それは、一片の風說で、全く彼れの關知しないことであつた。

けれども斯うした虛說が、眞實らしく思はれたのは、横井が言論、詩文の上に於て、共和政治の價値を高唱したり、キリスト敎が西歐文化の進步に偉大な貢獻をしたことを說いて、日本に於ける神儒佛三敎の不振を慨いたりした爲めだと考へられる。反對派の單純な心で、左樣した說を解釋すると、日本の國體を無視する洋夷の奴隸だと見るのが、當時にあつては恐らく至當であつたかも知れない。横井が、廢帝說を主張した國賊のやうに誤解されるべき禍の芽は、既に彼れの詩文の上に現はれて居たのだ。

横井が若し用心深い人で、其の所信や、思想を發表する場合に、社會の嫌疑を避けることに力めたならば、勿論、彼れの奇禍は起らなかつたかも知れない。だが、彼れは、此の點に於て、餘りに開放的で、少しも警戒しなかつた。激昂しつゝある攘夷主義者中の保守分子は、どうして、彼れの言説を見逃し得よう。彼等は、當然、天誅を加ふべき國賊として、横井の存在を咀つた。それが爲め、横井は文久元年、江戸に於て、一度、刺客のために襲はれたことがあつた。其の時は、巧みに毒刃を免れ得たけれども、明治二年に於ける刺客の襲撃からは、到頭、逃れることが出來なかつた。斯うして、横井は、急進的な新思想のために、時代の犠牲者として斃れたのだ。

横井が、過激な攘夷主義者の毒刃の下に殺された半年後に、横井とひとしく、急進的思想を抱いて居た爲めに、暗殺されたのは、大村益次郎である。大村は、勿論横井のやうに文學方面に新思想を開展したのではなかつた。共和政治や、キリスト教にも共鳴しなかつた。けれども兵制改革の上に急進主義を執つた爲めに、保守主義の結晶とも云ふべき士族に呪咀され、憎惡されたのだ。

大村は、時勢の趨向を見て、國防の基礎を確立する爲めに、擧國皆兵主義を實現しなければならぬと固く信じたのである。それにはどうしても全國に向つて、徴兵法を施行しなければならぬことを政府の人々に力説した。けれども當時、僅かに版籍奉還が實行されたばかりで、各藩は尚ほ割據の形勢を維持して居たのであるから、士族の意氣は、容易に新政府に對して屈下しないのみならず、日本の軍隊はすべて士族によつて組織されねばならぬと考へて居た。彼等士族の眼から、大村を見ると、平民に味方して、士族を根底から亡滅させようとする背叛者のやうに考へられたにちがひない。大村が、京都に於て、五人の壯士のために襲はれて其の毒刃を浴びせられたのは、畢竟、兵制改革の上に於ける彼れの急進主義が、大村に禍したのだ。

大村が暗殺された一年の後には、廣澤眞臣が、また京都で刺客のために生命を失つた。廣澤は、木戸孝允と並稱された長州の一英傑で新政府の施設のためには、最も力を盡くした。彼れも矢張、急進主義者の一人と見做されて、奇禍に逢つたのだ。蓋し當時の政府には、少壯氣鋭な人材が集つて居て、思ひ切つた新施設を斷行し始めたのであるが、それ等のことは、保守を尊ぶところの士族の群にひどく喜ばれなかつた。それに、錯綜した情實や、紛糾した關係などが搦み合つて居た爲めに、失意の地位にある人々は、悉く政府の云爲を咀つた。不平、激怒、慨嘆、怨嗟の聲が何處にも漲つて居た。中には、新政府を顚覆す

るために、要路の大官を暗殺しようとする過激派も漸次擡頭して、直接行動を以て、政敵を打倒することを寧ろ愛國的行爲だと妄信するやうな有樣だつた。

蓋し新政府の要路に居た人々は、大抵新思想の先驅者で、保守思想家は、西郷一派を除くと、殆ど無かつた。そして彼等は、其の新思想を實現するために反對派の攻撃を恐れずに猛進し、勇往したのであるから、たとひそれが正しく、適切であつても、一方廣く渦卷いて居る保守思想の群と衝突しなければならない破目にあつた。殊に其の態度、施設には、尚ほ欠點も少くなかつたのであるから、攻撃されても仕樣のない弱味をも多く持つて居た。斯うして、新舊思想の衝突が激成された時代には、暗殺が頻出するのも、避け難い勢であつたらう。

(四)

其の後、新舊思想の激戰が最頂點に達すると、恐るべき內亂となつて爆發した。そして西南戰役と西郷隆盛の死とによつて一先づ新思想派の勝利に歸すると間もなく、政府の柱石と目されて居た大久保利通が暗殺された。大久保の死は、横井、大村、廣澤らの死にくらべて、遙かに悲壯感が深い。それは强大な鐵のやうな彼れの意志と不可抗力を有するやうに見る運命との爭鬪の上に沈痛な、嚴肅な生を象徴して居るからだ。

大久保の性格と境遇とは、最初から全然悲劇的であつた。彼れは、徹頭徹尾、意志の人、主義の人であつた。どんな場合にも感情に支配されるやうなことがなかつた。彼れと西郷隆盛とは、最初から死生を共にした間柄ではあつたが、新政府が成立してから、彼れの文治主義と西郷の武斷主義とは、どうしても一致しなかつた。彼れは、萬事、意志を以て押通してゆかうとしたが、西郷は、萬事、感激を以て終始しようとした。彼れは冷めたい鐵、これは燃ゆる火であつた。

征韓論が起る前から、既に大久保と西郷との衝突は、暗默のうちに人知れず行はれて居たのだ。それが征韓論を限界として、互ひに政治上の敵となつて了つた。大久保の周圍に居る人々は西郷を舊思想の權化として咀ひ、西郷の周圍に集つた人々は、大久保を新思想に媚びる奸物として咀つた。西南戰役の終りに西郷が城山で死ぬと、西郷の門下は「私等の首領を殺したのは大久保だ。」と思ひつめて憤つた。

だが、大久保の心裡に立ち入つて見ると、西南戰役前後に於ける彼れの苦惱は、非常に深かつたのだ。彼れは、國家の事を思ふと共に、また親友西郷のことをも思つた。主義の上から、彼れは、西郷と一致しなかつたけれども、西郷が其の子弟に擁せ

られて内亂を起さうとするのを極力、防がうと焦慮したのだ。そして鹿兒島に騒動が起つた事を聞くと、彼れは松平正直に向つて「實に遺憾だ。然しどうしても、こんなことが起るわけがない。」と云つて、單身、鹿兒島へ出かけて西郷と話し合はうとした程である。其の事は、西郷が先づ爆發した爲めに實現されずに了つたが、彼れは深い暗愁の色を浮べて「數年間私は西郷と離れて居るが、今でも逢へば、直ぐ私の胸中がわかる。西郷に大義を談ずれば、彼れは必ず私の説を容れて、門下の人々を取鎭めるにちがひない。」と嘆息した程だ。

けれども大久保の内部生活は、勿論、西郷の崇拜者や門下には、わからなかつた。彼等は大久保が、内閣の首班に起つて、得意氣に政治を左右しつゝあることのみを知つて、其の心の上に淋しい影がさして居ることを知らなかつた。大久保が、積極的に進歩主義を執つて、政界の第一人者として衆望を集めつゝある姿のみを見つめて不快に思つた。畢竟主として黨派的感情の上から、大久保を呪つたのだ。それには、勿論西郷の死を痛惜する強烈な情熱も加はつて居た。島田一郎らが、明治十一年五月大久保を紀尾井坂で要撃したのは、反大久保派の思想を體現したのである。

大久保が死んだのは、四十九歳の時で、彼れは、寧ろ今後に政治的活躍を示すべき有望な時期に居た。だから、彼れの死は、ひとり、彼れのため痛惜すべきことであつたのみならず、國步艱難な當時にあつては、國家の一大損失であつた。暗殺の害が、如何に大きいかは大久保の死に徴してもわかることだ。だが、一面から見ると、大久保は、彼れの行き得るところまで至つたのだ。其の強い意志の力と時勢を透察する識見とを以て、あらゆる障碍を排して進んだのだ。左様した冷靜な、しつかりしたところが、味方に深く尊重されたと同時に大久保の活動に強い反感を燃やして居た政敵に呪咀されて、不意に生命を失ふに至つたのである。

當時の一挿話として傳へらるゝところによると、遭難した日、彼れの懷中には、紫の帛紗に三條公に貸した西郷の手紙を包んで持つて居たさうであるが、それが兇刄を浴びた生々しい鮮血に染つた居た。大久保と西郷との關係は、不思議に死ぬまで續いて居たのだ。原敬氏が遭難の日に三浦子から貰つた黄金の觀音像を持つて居たのと、何處か似たところがある。

五

大久保の歿後、暗殺史を飾つたのは、森有禮の死であるが、其の以前に暗殺の目標となつて、悲壯な叫びを發した[illegible]

岐阜に於ける遭難があつた。「板垣は死んでも自由は亡びない。」の警語は、永遠に強い響き殘して居る。板垣は、竹内流の小具足術を知つて居た爲めに、刺客相原尚褧が胸部を刺した時、相原の腕を衝いて、重い傷を受け乍らも、肺部に達することを免れた。

相原は、當時政府の御用新聞だつた『東京日々』に於て、自由主義に反對すべき思想を培はれた結果、板垣を國賊のやうに誤解して、暗殺を決行したのである。若し相原が、も少し修養を積んで、自由民權の思想を正しく理解して居たならば、板垣を刺殺するやうな罪惡的感情を起さないで濟んだかも知れかなつた。熱情に燃ゆる青年が、一方の黨派の聲のみ聞いて、其の反對派の聲に靜かに耳を傾けない時は、相原のやうな錯誤を行ふ結果に陷ることを避け難い場合があらう。

板垣の遭難前後は、暗殺的空氣が大分濃厚に漲つて居た。越後高田に於ける政治上の疑獄、群馬、秩父の暴動、加波山の激擧、埼玉、名古屋、靜岡に於ける騷亂の如きは、何れも、政府顚覆を企つると共に、要路の大官を暗殺しようとして、失敗に歸したのである。彼等は手厳しく、自由民權思想を壓抑するところの政府に反抗して生命を的に起つたのである。

政府が政治思想の發達と開展とを不自然に抑へ付けると、民衆の反撥力が一層烈しさを加へることは、以上の事實が說いて起つた結果に見ても、わかる。それ等の渦中に投じたのは、何れも少壯血氣の人々で、理性よりも感情に走り易かつた上に、今日の青年にくらべると、頭腦が單純で、其の所信のために一氣に邁進しようとしたから、言動の過激は、自然、血の雨を見なければやまなかつた。彼等は一齊に高い聲をあげて「昔し思へば、アメリカの、獨立したのも蓆旗、此處らで血の雨降らさねば、自由の土台が固らぬ。」と悲壯な調子で歌つた。また立憲自由の思想に強く共鳴した赤井景韶は、大臣らの壓制を激怒して、天誅黨を組織し、卿以上の權官を悉く暗殺しようと企てた。赤井の同志のうちには、時事を憤つて「明治十四年十月十二日は、堂々たる我が日本帝國の滅亡の日なり。」と友人に向つて激語したものさへあつた。

殊に最も過激であつたのは、靜岡に於ける壯士の一團で、彼等は、明治十九年七月、箱根離宮落成の式典が擧げらるゝ日を期して、諸大臣を暗殺した上、政府の組織を改造しようと夢みて居た。そして爆彈製造に餘念もなかつたが、首謀者の一人山岡晋高が、政府から放たれて居た探偵の巧妙な術策に罹つて、不圖同志の秘密を洩らした爲め、悉く捕へられて了つた。

私は此の暗い時代のことを考へると、何となく、西歐に於け

る恐怖時代の惡夢を見るやうな心持ちがする。フランス革命時代に於ける山岳黨の首領マラーが、女詩人コルデーに刺殺されたことや、吸血鬼の名があつたロベスピエールが、メダのために狙撃された場面や、ロシヤの怪僧ラスピュチンが首都の郊外で泥醉中に銃殺された物凄い光景などが思ひ出される。それ等は最も忌むべき病的變徵だ。私は斯うした灰色の重苦しい時代を咀ひ且つ憎む。

さて其の後、暫く暗殺事件は、影を潜めたが、明治二十二年二月には森有禮が、山口縣人西野文太郎に暗殺された悲劇を見た。森は、曾て大久保利通が遭難した數日前、大久保に向つて「貴下は疊の上で死ねないかも知れませんよ。萬一の事があつてはなりませぬから、充分氣を御付けなさい。」と注意したことがあつた。其の時、森は恐らく、十年の後に自分が大久保と同じ悲痛な運命を見ようと思はなかつたであらう。

蓋し彼れが暗殺された主因は、急進的な新思想家だつた點にあるやうだ。此の點は横井小楠と似て居るやうに思はれる。森は當時に於ける勇敢な思想的戰士で、彼れが眞理と認めたことは、少しも畏憚しないで、公同的に主張した。彼れは、明治二年頃に「廢刀論」を唱へて、先づ人を驚かした。そして明治六年、アメリカから歸朝すると、福澤諭吉、加藤弘之、中村正直らと提携して思想上に於ける新運動を起した。其の時、彼れは「一夫一婦論」を發表して其の頃一般に是認されて居た蓄妾主義に鋭い攻撃を加へた。

彼れは、アメリカ文化に共鳴して居たところから、すべて、アメリカの哲人ハーリスの感化を受けて、其の言論の上では、アメリカ讃美に傾き過ぎたやうに見えたところが多かつた。國粹主義者の眼から、森の言動を解釋すると、どうしても、アメリカを盲拜する奴隸的政治家のやうに思はれたらう。それが森に取つて、最も不利であつた。彼れが土足の儘で、伊勢大廟の社殿に上つたと云ふ虚僞に近い風說は、平生、彼れを呪咀しつゝあつた者の口から傳へられたのだらうと思はれる。

だが、此の一片の風說は、表面、アメリカ心醉者のやうに見做されて居た彼れとしては、自然ありさうなことだと妄信された。國粹主義が漸く高調されつゝあつた時代に、斯うした不利の態度を執つたと誤信されたのは、森の大きい禍だつた。彼れを國賊視した西野文太郎は、ひどく激昂して、憲法發布の大典に列しようとした彼れを暗殺したのだ。西野の凶刃は、鋭く森の心臟を刳つた。要するに、森の遭難は、一種の思想的悲劇だ。彼れは、新思想の先驅者で、大膽に其の所信を告白した爲めに自己を悲しい運命に導いたのである。

（六）

森有禮の悲劇は、當時國粹主義に對峙して居た歐化主義に對する手强い打擊であつた。それを序幕として、第二に開展されたのは、大隈侯の歐化的な條約改正意見に對する國粹主義的反抗だ。歐化、國粹二主義の葛藤と激爭とを重ねた末は、來島恒喜が怒髮を逆立てゝ、爆烈彈を大隈侯に向つて投げ付けた悲壯劇を演出するに至つた。此の時に於ける大隈の英氣、來島の沈毅な態度は、明治暗殺史に於ける双美だと云はれた。蓋し在來の刺客中、來島のやうな國士的風格を有したものは一人もなかつた。大隈侯は、敵ながらも、來島の人物を認めて、其の執事をして、來島の死を吊問せしめたと傳へられて居る。大隈の豪快な心持は、此の遭難當時に於ける政戰の上に最も能く發揮された。其の痛手に屈しないで、自己の所信のために、最後まで、花々しく戰つたのは、ひとり、大隈の壇場と目すべきものであつた。

國粹主義と歐化主義との爭鬪時代が漸く過ぎ去ると、個人主義と沒我主義との衝突時代が來た。其の最初の爭ひを悲劇的に象徵したのは。星亨の死である。星は、個人主義の權化で、また「力の福音」の信仰者であつた。彼れは、無理想家ではなかつたけれども、主として現實の上に立脚して、此の方面に於ける自己を擴張して、飽くまでも其の勢力の增大を實現しなければ止まなかつた。それがためには、如何なる手段をも用ふると同時に、彼れの名を毀損することさへも介意しなかつた。一旦、彼れが志した政治上の目的に向つては、猛烈に突進して、障碍を壓倒し去らねば措かない風があつた。

彼れは、左樣した行動によつて、ある程度の勝利を得たけれども、極端な個人主義が結局悲劇的な末路を招くことに迄想到し得なかつた。「力」を重視して、何事も、最後は「力」によつて解決し得るものだと誤想して「力」の有限なることを知らなかつた。そして彼れが露骨に綱紀を紊亂して、其の門下や、子分のうちから政治的罪人を出しても、尚ほ冷かに輿論の糺彈を無視した時、伊庭想太郎の一擊によつて脆くも斃れて了つた。それは明治三十四年六月二十一日のことであつた。

原敬氏は、星亨の後繼者と目されて居る點に於て、其の最期の悲壯な色彩を帶びた點に於て、何となく、彼此共通したところがあるやうに思はれる。原氏も個人主義者だ、そして「力の福音」の信仰者だ。唯其の異なる點は、星のやうに露骨で、殺風景で、野暴なところが餘程少かつたことである。だが、飽く迄、「力」を以て、押通してゆかうとする剛强さは、餘程、能く星

に似て居る。そして「力の悲み」を知らなかつたところも同様だ。

私は、星の死に於て、現實と「力」とのみを偏重する個人主義的政治家の末路の如何に悲むべきものであるかを見た。星の歩んだ道を最も能く知つて居た聰明な原氏が、何故、星と同じやうに、現實と「力」とのみを偏重したかは、私の解し得ない點である。氏は黨人の首領として、自然、星と同じやうな傾向を帶びるに至つたのであらうか。また氏の性格が、期せずして此に至らしめたのであらうか。抑も時代必至の傾向であつたらうか。私は原氏のために痛惜する。

(七)

流石にどの方面から見ても、偉大で立派なのは伊藤公の死だ。それは、ひとしく暗殺の兇刄に斃れたアメリカの大統領リンコーンの死を思はしめる。リンコーンは正義の擁護者だ。彼れは奴隷廢止を實現するために、眞先に善戰した巨人だ。北部の人々は、リンコーンを崇拜したが、南部の人々のうちには、尙ほ奴隷制度についての私利に執着して、リンコーンを憎惡して居たものがあつた。其の憎惡感を直接手段によつて發現したのは、俳優ブースであつた。

ブースは、南部の人々のため復讐する考へで、一八六五年四月、ワシントン市のフオード劇場で、リンコーンを暗殺すべき機會の來るのを熱心に待つて居た。リンコーンは、勿論左樣した暗殺者が、彼れの血に渇して居ようとは、夢にも思はなかつた。そして十四日の夜家族と共に劇場の棧敷に入つて、樂しさうに演技を眺めて居た最中、舞台の上に居たブースが、突然ラテン語で「壓制者の末路は正に斯うだ。」と云ふと同時に、短銃をリンコーンの方に差向けて、一發放つた。其の彈丸は、リンコーンの頭部に命中したので、剛毅な大統領も、自分を支えることが出來ないで、急に卒倒して、苦悶の聲を洩らした。リンコーンの夫人や、隨從の人々は、驚いて、リンコーンを介抱するうちに、暗殺者ブースは何處へか逃げて了つた。歡樂の頂上にあつた劇場の空氣は、俄かに悲哀の調子に代つて人々は、愁然として、リンコーンが場外に搬ばれてゆくのを目送した。

リンコーンは、其の翌朝、呼吸を引取つた。そしてブースは、間もなく、捕へられて死刑に處せられた。當時、北部の人たちは、悉く自己の父を失つたやうな悲みを以て、リンコーンの死を痛悼した。終生、正義のために戰つて、一身を忘れたリンコーンが、正義の犧牲として倒れたことは、崇嚴であり、悲壯であつた。彼れの死は、暗殺史上に於て、特に尊い心持を起させる。

伊藤公の死も、國家のために倒れたと云ふ點に於て、リンコーンや大久保の死と酷似して居る。そして其の最後の舞台が、廣漠としたシベリヤの地で晩秋初冬の冷めたい風が野原を吹く頃、ハルピン停車場で、刺客安重根のために狙撃されて倒れたのだ。老齢の身で、日本政府の重大使命を帶びて、獻身的奉仕を怠らなかつた英雄が、未だ前途に多少の希望と光明とを認めながら、空しく、シベリヤの露となつたのは、悲壯であり崇高であつた。其處には、星亨らの死に見るやうな暗い影が少しもなかつた。

私は、これ以上、最早血腥い暗殺史について語ることをやめよう。私は、原氏の奇禍を悼惜して、満腔の吊意を捧げると同時に、今後の爲政家に向つて、今正に自由と正義とに目ざめて居る民衆の要求に應ずべき新政治を實現すべき時であることを警告したい。時代の底を急激に流れつゝある暗潮は、どう云ふ機會にどう破裂するかもわからないから、速かに其の險惡に赴かんとする傾向を喰ひ留めねばならぬ。そして恐るべき暗殺の株を今後永久に閉ぢて了ふやうにしたいではないか。私は左様した平和な明るい新時代の、到來を切に熱望して居る。それでこそ、原氏の死も、始めて無意義でなくなるわけだ。要するに今は政界のすべての人が、先づ自己に内省の眼を向けて、心の底から正しく目ざめなければならぬ秋だ。

原敬と、張祿先生

健堂生

一、

わたくしは、原敬氏の人物に對する一面の觀察を話して見たいと思ふ。

原敬氏の人物の全體を解剖し、その心術を分析するは、容易ではない。原氏は、近來、著名なる人物の中に於て、尤も複雜なる精神情態に居た一人である。故に、彼の心の鍵を握つて居る人は決して一人ではなかつた。彼の心は、複雜組織であり、單なる鍵では開けることは出來ない。彼の鍵を握つて居ると思つて居る人でも、實は、未だその全體を攫んで居るのではない。彼に面した第一印象は、人々、皆、違つて居る。それだけ彼の心は複雜であつた。彼と三年間、事業を共にした人でも、能く分らない人物だと言つて居る。能く分らないといふ意味は、その心の底が分らないといふことである。

原氏を尤も能く知つて居る者は、加藤恒忠氏と、岩下清周氏とであらう。政治家としての彼は、世人の眼に映つて居る。彼の心の奥底が分かり難いのである。加藤恒忠氏は、彼の書生時代からの親友であり、岩下氏は、經濟上に込み入つた關係を有して居る。若し、此の二人が口を開いたら、おもしろい話があるだらうと思はれるが、それは期し難い事だろう。岩下氏は本月廿五日、名古屋で、いよ／＼判決がある筈だ。彼の人の運命も定まり、年數も經過した後には、原論を話すかも知れない。

二

原氏は、剛情、我慢に於ては、天下一品ともいふべき人であつたが、彼の夫人も亦たそれに劣らざる剛情であるだらうと思はれる。わたくしは、未亡人を見ない。然れども、彼の凶變及び、その送葬に於ける態度、その外、新聞に掲載された原氏生前に於ける夫妻の逸事等から推して見ると、或は原氏以上の剛情な婦人ではないかと想ふ。原氏が、見込んだのは、その點にあるだらうと思はれる。

宴席などに於ける原氏は、藝者などに對して、案外、愛想のある人で、議會の演場で、敵を突き放すときとは、別人であつた。料理屋の女将などの觀察では、いつも變はりのない贔屓客であつたと言つて居るらしい。世の中の澁面漢といへども、女に對しては、顔が溶ける人は、いくらもあるが、原氏のは、それでもない。原氏は敵に面すると、剛くなるが、第三者には左ほどでもない、だん／＼軟らかになつて、最後に味方に面すると遂に溶けるといふ方である。あの人の脈管には、つねに理智を溶かした感情の液が流れて居た。あの人には戀はない、その戀といふのは理智が混じて居る。女に對しても、理智の溶けた感情の目で見て居たらうと思はれる。彼の見立てた夫人は、或意味に於て、彼の參謀長であつた。

彼は、萬事を、自力で解決する人であつた。その相談相手といふのは、野田、高橋の二人と、その夫人くらゐであつたらう。

三、

原氏が複雜なる心の所有者であることは、その容貌にあらはれて居る。

原氏の寫眞は、凶變後に、頗る多く各新聞に發表された。それを集めて見ると、その變化の多いのは人を驚かすに足るほどである。彼は、つむじ曲がりであると共に、口も曲げて居た。彼は、獨得の口曲がりは、敵に面したときの表情の一である。

南部の鮭の鼻曲がりといふことがある。彼は、南部の生れで、口曲がりであるのは、地方粋の意味から見ると、北方の強たるものの象徴であるともいひ得る。鼻曲がりといふは、剛情といふ事を連想させて居る、彼は全く剛情であつた。彼は剛情で以て天下を取つた。北方の弥を天下に誇示したものは、古來、彼を以て第一人者とする。その誇示は、彼の口曲がりである。もつとも、非常に剛情なる者は、しばしば口曲がりの表情をする。大隈侯もそれである。

原氏は、早くから白髪、童顔といはれて居たが、彼は、若白髪を嘗て染めたとはない。近來になつて、その銀髪、紅顔が、頗る引立つて來た。身長五尺六寸餘、軀幹も堂々として、立派な異彩であつた。そして彼は頗る表情に巧みである。その點に於ては、日本人として群を抜いて居る。むしろ日本人には稀有と言ひ得るほどである。西洋の映畫に現はれる悪形役者の中には、そういふのがある。探偵小説のうちの花形にありそうである。例へばアルセン、ルウパンのように聰明な、そして努力の強い、極めて精悍な人がやりそうな表情のやうに思はれる。論より證據で、多くの場合に於ける彼の寫眞を、成るべく多く見れば、それは明確なる事實である。生ける彼を多く見た人は、わたくしの說を信ずるであらう。殊に、彼の笑ふときの表情は尤も鮮やかで、そして複雑なる心の全性格を、尤も軟らかに、圓滿に、よく調和して、あらはして居る。而して彼が、眞面目に、嚴格に構へたときは、如何にも力強い、恰も勇者の表情を見せる。全體の輪廓は、高尚ではないが、大きくて、確つかりして、資しい、總裁に適はしい堂々たる風采である。

四

風貌以上から見て、彼と對照すべき興味のあるのは、陸軍の上原勇作氏である。上原氏は原氏と似ては居ない。その氣分に於ても全く違う。唯だ、その表情の變化する一點が、珍らしく似て居る。上原氏の容貌は、譬へば七面鳥のように短かい時間に、著るしき變化を見せる。その寫眞を見ると、澤山集めて見ると、短時間のうちに、殆んど別人であるかのように變はる。然れども上原氏は、原氏の如く、相手に依つて變化を示すのではなく、自分の感情が不随意に、移り變はるのであるが、原氏は、自覺して、表情を變へる。巧妙なる役者がするやうて、その手際は、随意に、鮮やかに變はる。日本の役者よりも西洋の役　である。無言で、芝居の出來る表情である。原氏が新らしい感じを與へたのは、その顔にもある。「お能の面」といふ世評があるが、原氏のは、それと反對である。西洋

寺公のは、形式が「お能の面」のようなばかりではなく、あのお能の面のような顔の後ろに、眞實の顔があるのではないかと思はれるが、原氏のは、眞紅な、新らしい血が、活々して漲ぎつて居る。その聲が、金剛性の、極めて澄み切つて居るばかりでなく、その顔も、非常に清冷な泉の水面を見るような感じがある。原氏の紅顔は、毎日、ヘモグロビンを飲む爲だといふことだが、精悍なる原氏といへども、その老齢と、多忙との爲に精力涵養の必要を自覺して、攝生には、人知れず、注意して居たものと思はれる。

孟子は、その眼を見れば、人、豈、隠くさんやと言つた。眼は人格である。原氏の氣魄は、全く、その眼にあらはれて居る。眼は、彼の身上であつた。探偵小説に「水晶の栓」といふのがある。水晶を義眼にして、そのうちに仕掛をして文書を入れておいた秘密の眼である。原氏の眼のうちに、一切の、文書智謀は、皆、秘密に蔵められてある。原氏の人格と、その眼とを連想すると、彼の眼には、仕掛があるかのように見える。彼の眼とい眼は「水晶の栓」である。

五、

辯の人としての原氏は、一世に卓越したる技倆を有して居た。演壇の辯士としてよりも、その得意として居るところから見ると、彼は説客であつた。説客としては、原氏ほどの人は、近來随一であるともいひ得る。

彼は議會に立つてから、既に久しいものであるが、辯士としては著はれなかつた。専ら策士として知られて居た。首相として議會の演壇に立つに及び、世間は、初めて彼が舌力の雄健なるに驚いたのである。彼が、辯士として著はるるに至らなかつた理由は、いろ／＼有るが、その主なるものは、(一)彼は徹底的の現實家であるから、實行を貴び、演壇を迂遠なりとし、思想、言論に重きを置かなかつたこと。(二)彼が理想家に非ざるが故に優秀なる演說家の適材に、非ざりしこと。(三)彼は官海に於て發達したので、その間、演說の練習をせなかつたこと等である。故に、彼は、その生涯を通じて、演說としては傳へらるるべきものは、首相としての答辯の外には、殆んど一つも無い。名士となつてから、學校の講堂に於て、演說したこともある。彼が政治以外の演說を試みたことは、大體に於て、非常に稀であるが、それ等は、皆、可も無く、不可もなく、所謂、お茶を濁したに過ぎないので、聴衆から見れば、唯だ有名なる原敬氏の演說を聞いたといふに過ぎないのだ。わたくしは、彼の、最近に於ける卓上演說の一つを聞いたが、それも、やはり、

ふ性質のものであつた。彼の演説には、すべて名論卓説などいふものは見出されない。なか／＼皮肉をいひ、冷評を浴せることもあるが、その辯論の鋭どいにも拘はらず、警句として傳へられるものがない。彼は自ら好んで皮肉を言ふわけでもなからうが、彼が辯論の得意の調子は、好戰的であり、挑戰的であり、辯を以て、敵の口をふさぐを特色とし、その論調及び語調に、敵を緩和するといふ氣分はなかつた。敵を押倒し、捻ち伏せるといふのが、彼の本領であつた。彼の性格、及び生涯は、その舌に現はれて居る。

しかし彼は、如何なる場合にも係はらず、その發言には、そつがない、あまいことを言はないまでも、まづいことを言はない。その出來、不出來を問はず。演説に所謂すきといふべきものはなかつた。そして、いつでも人の耳に附くものは、その金屬性の澄み切つた獨特の聲であつた。

六

原氏は討論の人である。演説の人ではなく、對談の人であつた。對談では、議論も鋭どかつたが、非常な口説上手であつた。彼が、討論の人たることは、その白紙主義の大家たることを證明するものである。彼は、理想家に非るが故に、問題を出す人ではない。問題を解決する人である。つねに、徹底した答案の人である。彼の答辯が一代の政治家に卓越したのは、則ち答案の人たる所以であつた。

彼の辯は、東洋の古政治家に對照すると、蘇秦よりも張儀に近かい。わたくしは、張祿先生に尤も近かつたと思ふ。張祿先生は、則ち范雎である。原氏も、戰國に生れしめたら、蘇秦、張儀等の如く、辯舌を以て、游説して、宰相の印綬を帶ぶべき説客の一人であらねばならぬ。張儀が尤も窮困、落魄を極めたとき、舌を吐いて見せて、「吾舌なほ在りや」と問いた。その抱負は實に、説客の雄といはなければならぬ。原氏にも、張儀くらゐの抱負はあつたに相違無い。原氏の活路を切り開らいたものは、やはり彼の舌であつた。但、演説といふわけではない。孟子は、辯論の雄なるものであつた。孟子一部に、その辯論を自から纏めて筆記したものであるが、孟子は、その游説を以て、小邦とはいへ、とにかく、宰相の印綬を帶びたが、彼は、偉大なる理想家である。その書が、千古に不朽なる所以は、そこに存する。原氏の辯は現實の問題を解決し、事務を處理するだけのものであるから、その演説筆記を編纂しても、孟子の如くに、後世の人から共鳴せらるべき筈のものではない。孟子は、理想家たる故に、梁惠王に答へて『王、何ぞ必ずしも利を言は

ん』と言ふた。孟子は、利よりも理を取つた。原氏は、則ち利を以て、政友會を操縦した。利の一字は、彼の金科玉條である。

原氏のように、徹底したる現實家に取つては、辯論は一の手續たるに過ぎない。仕事が出來るまでの手續であるので、出來て仕舞へば、手續は殘るものではない。手續としての辯論そのものには何等、究極の價値も、生命もあるものではない。原氏から見た辯論は、かういふものであつたろうと思ふ。譬へば、原氏の辯論は、建築工事に於ける足場である。建築が大なれば、大なるほど、そ　に相應する大なる足場を、必要とする。原氏は、その才に相應する雄辯を有して居たに過ぎない。原氏の辯論は、則ち建築工事の足場であつた。近代政治史の上に、原氏が答辯に雄なたりしといふ記事は、殘るかも知れないが辯論、そのものは、足場が取拂はれるように何も殘るものはあるまい。

七、

現實家にして、辯論に雄なりしものは則ち秦の張祿先生であつた。張祿は、元と魏の人、その國にありし時は、范雎といひ范雎の名を以て、歴史に傳へられて居るが、生前秦の宰相としては、張祿である。秦人、これを尊んで張祿先生といふた。わたくしは、原氏と張祿先生との間に、人物上、好對照の點を、いろ／＼見出すのである。

わたくしは、此の好對照たる所以を說くに先だち、少しく張祿を說、せねばならぬ。張祿先生、その全盛を極めて居るとき、その選用した僚友が、皆、失敗して、その地位を辱かしめたので彼は、内心に、これを愧ぢて居た。燕の人、蔡澤、これを聞き、秦に入つて、張祿を遊説しようとした。その前に、人をして宣言せしめていふには、蔡澤は、天下の、雄俊、宏辯の智士である、必らず君を苦しめて、君の地位を奪ふだろうと。張祿先生、これ聞いていはく、五帝三代の事、百家の說、吾、すでに聞いて居る。衆口の辯、吾、すでにこれを摧いた。何者か、能く吾を苦しめて、吾が地位を奪ふことを得る者かあるべきと。此の一言は、晩年の原氏、その儘である。若し、全盛時の原氏を脚本にして、上場する者があつたら、原氏は、やはりかういふことを言ふであらうと思はれる。そも／＼張祿先生は剛情我の強かつたとは非常なもので、原氏に劣らざるものである。德の人ではなく、力の人で、その態度は、しば／＼世人の誤解を招くようなことがあつたのも、原氏と似て居る。徹底したる現實家で、統御力のすぐれた點も、ともに似て居た。自分

では、餘り悪いことをせなかつたようであるが、潔癖だとも思はれない。少くとも、嫌疑に遠ざかるような謹愼を缺いで居た。執拗で、横著で、大膽であつた。

張祿は、若いときから諸方に游說したが、貧乏であつた。取り敢へず魏の中太夫須賈に事へた。その頃から評判男ではあつたらしい。須賈に隨行して、齊國に使したとき、齊王から金と牛、酒とを贈つた、張祿の聲名に對して、敬意を拂うたのだといふことであるが、須賈は、それを疑つた。國家の秘事を漏らしたのだろうと思つた。牛酒だけを受けて、金を返さした。此の時の張祿に、實際に、やましいことは無かつたのかも知れないが、その形迹を疑はれたのである。

八、

張祿は、齊に使して、賓國の嫌疑を受けた。これは彼に取つては寃罪であつたらう。他日、彼が、それに對する憤慨の猛烈なのも考へなければならぬ。須賈は魏の宰相に密告した。宰相は魏の公子、魏齊である。魏齊、大に怒つて、張祿を拷問させ、その肋骨を摧き、その齒を折つた。拷問に堪えかねた張祿は、死んだようになつて居た。魏齊は賓客を集めて酒宴をして居た。張祿の死骸を便所に置かせて、賓客に、かはる〲それに小便をさせた。隙を窺ふて、張祿は、番人に、重賞を與へる約束をして出して貰つた。番人は、魏齊に願うて、張祿の死體を取捨てた。醉うて居た魏齊は、それを許したが、その後に、張祿が死だんのでないことを知つて、後悔し、嚴に、探索したが、分らない。それまでは、彼の姓名は范雎であつたのを、張祿と改めて、秦の國に逃げ込んだ。彼の逃亡を助けたものに鄭安平である。張祿は、他日、恩誼のあつた人々に悉く酬ゐたが、オ人の事だけは傳はつて居ない。此の男こそ酬ゐらるべきであるが、その事の無いのは、魏齊の爲に殺されたのかも知れない。

此の頃、秦の使者王稽が魏に來た。鄭安平が、周旋して、張祿は王稽に伴はれて秦に入つた。その途中で、秦の宰相穰侯の行列に行き逢うた。穰侯は說客を好まない。張祿は、それを知つて居た。速かに、王稽の車の中に隱れた。果して、穰侯は說客を伴うて歸りはしないかと聞いた。王稽は、無いと答へて、無事に行き過ぎてから、張祿は、車を出てから、奔つて逃げた。穰侯は智者であるといふのに、車の中を探がさなかつた。必らず引返して探がすに違ひないと考へた。果して穰侯は、引返して、車の中を探がしたが、もはや說客の影は、なかつた。

張祿の剛情、勇氣、智謀、敏捷といふのは、此の如くあ

る。假死して、死骸として扱はれ、便所から逃げ出した剛情、大膽は、非常なものである。これから、彼が秦王に說いて、その策、用ゐられ、大宰相となり全盛を極めた時の態度と、原氏と對照して見たい。

九、

張祿先生は、秦國の大宰相となり、その地盤が固まつてから後には、當年の舊友、舊恩の人人に悉く酬ゐ、それ等の人々を、悉く重用して、顯要の地位に立たせた。史記に、その態度を評して、一飯の恩も必らず報ゐ、睚眦（ガイサイ）の怨も必らず報ゆと、いふて居る。如何に、彼が、敵對精神の強い人であるかは分る。此の意味に於て、彼と原氏とは、古今の好對照である。

そもそも睚眦の怨は舊惡の細かいもので、一飯の恩は舊善の小なるものである。細かい舊惡にも必らず報ゐ、小なる舊善にも必らず酬ゆるは、人情の痛快とするところであらう。然れども、此の精神の、餘りに旺盛なるは、反省すべきことである。恰も、巧妙なる會計員が、舊るい簿記帳を探つて、その出入、貸借の微細を極むるに至るまで、遺漏なく、これを決算するといふように、舊善と舊惡とを計算するは、有爲な事とはいはれるかも知れないが、大人物たる者の爲す可らざることであらう。—世の覇者として、假令、能く爲し得るとも、此の如き態度に出ることは、愼まねばならぬ、その高大なる地位に立つて此の如き者を挫すといふことは、既に、間違である。その[illegible]、[illegible]の途中に於ては、そうすることが希望であつたとしても、志を得た曉に於ては、その希望を捨てるのが、本然の態度であらねばならぬ。此の意味に於て、原氏が、張祿先生と、その轍を同じくするの事を以て、わたくしは、深く、彼の爲に惜しむ者である。

しかしながら、此の古今の二政治家に、多少、同情すべき點はある。世間に、舊惡を忘れざる者は多いが、悉く、舊善を忘れない者は、至つて少ない。恩を忘れて居ても怨を必らず報ゆるの例は乏しくはないのである。原氏と、張祿先生とは、恩怨ともに一樣に報ゐたといふだけが、取るべき點である。わたくしは、此の場合に於て、伯夷、叔齊を思ひ出す。伯夷、叔齊は布衣にして、一世の人望を得た者であつた。孔子は、これを評して、伯夷、叔齊は舊惡を思はず、怨、これを以て稀なりと言つた。此の一言は、伯夷、叔齊の全人格を言ひあらはした一句である。舊惡を忘れ得るようになれば、人道上の英雄であるといつても宜い。世人は、往々、此の域に達した人物を評するに、漫然として寬大の一句を下すことがあるが、それ[illegible]

足りない。世人より見ても、原氏は、寛大ではなかつた。舊怨を悉く記憶して居て、悉く、これに酬ゆれば、それに由つて、新なる怨が、また起つて、それが自分に酬ゐて來る。悉く舊怨に怨ゆることを期する人は、譬へば、火を以て火を消すようなもので、後の火が大なる爲に、前の火は分らなくなるだろうが、後の火の焔が熾いて居る。

十、

張祿先生は、終を全くした、その點は彼らの方が、原氏よりも幸福であつた。原氏の爲に、强ゐて慰むれば、名花が一夜の嵐に散つたようで、その全盛のときに、不慮の凶變に斃れた爲に、天下の同情は集まつたといふようなわけであらう。私人としては惜しまれる最中に死ぬるのが佳いようであるが、國家が彼に待つ所以のものは、前途、未だ少くはなかつたのである。

張祿は、悉く、舊友、恩人を擢用した。その顯著なる者に失敗が多かつた。王稽は敵國に通じ、鄭安平は戰敗れて敵國に降參した。此に於て、世論の批難を受けた彼は、一身を保全することに氣が附いた。そこに、燕の說客、蔡澤が乘じて、勇退を勸めた。それに由つて、張祿先生、終を全くすることを得たのである。わたくしは、原氏の爲に、一人の蔡澤を欲しかつたと思ふ。原氏の擢用した舊友のうちにも、失敗が少くはなかつた。それに對する非難の矢は、悉く原氏に注がれた。かういふ事は、權勢の全盛に達したときに起り易いものである。進んで退くことを知らざる原氏には、それに對する反省は少かつたように思はれる。政友會としても、此の春の議會が終はつたとき、一先づ、內閣を投げ出すのは、將來の爲に得策であつたと思ふ。猿が、他から取られまいとして、一生懸命に柿を握りつめて居るように、政權を握りつめて居るのは、宜いことではたい。握つたり、放したりして居るうちに、天下の人心を繋ぐのである。執著性の極めて强い原氏は、權勢にも、甚だしき執著を見せたが、それは彼の性格でもあつたし、且つ、政友會を統御する上にも、必要であつたのだろう。

近來の政友會は　天下無敵であつたから、內閣を投げ出しても、引受ける人も無く、形勢の上に於て投げ出す必要もなかつたのである。そういふ有樣で、遂に、前途なほ有爲なる原氏をして、權勢に殉ぜしむるに至つたのである。太史公の「夸者は權に死す」といつたのは、原氏の事であつた。

十一、

原氏は、一世の政治家であつたが、政治史上に特筆すべき、

主義、政綱、事業を留めて居ない。その在世中、當面の問題を解決した手腕と、戰鬪力とが、非常なものであるといふ事が、彼の特色である。

張祿先生は、秦を強大ならしむる所以には、頗る功があつた。彼が政治の中心となるに當つて、彼の先輩、元老は、皆、彼の爲に押し退けられた。原氏が、近來の勢で、今、少し、長生したら、その中に、元老に、ますく老境に入るし、彼一人の天下になるであつたろう。最近に於ては、實は、元老ありといへども、權勢は彼に集まつて居た。彼以前を見ると、桂公が、その全盛時に於て、頗る元老を挫いた。然れども、その挫くのが露骨であつた爲に、元老の反撥を招いたのは、桂公の爲に惜しむべき事であつた。流石の桂公も、晩年には少しく氣短であつた。原氏は、此邊の消息は、能く觀測して居たであろうし、頗る隱忍して、以て、機會の熟するのを待つて居たようであつた、此の意味に於て、彼は張祿の成功に劣るものではない。

張祿が首倡した國策は、遠交近攻の策である、此の國策は、政治史に不朽なるものである。原氏が政友會の擴張策は、恰も、それと合じく、遠交近攻であつたように見えるのは興味ある事實である。彼は、中央たる東京に居り、彼の根據地たる東北と、西南の地方と、相呼應して、全國を風靡して居た。その形が、遠交近攻の策に協つて居るのがおもしろい。彼が、薩派と結ぶのは、薩派自から活路を求めつつあるにも由ることであり、いろくの經緯があるやうだが、彼から見れば、軍資に富んだ薩派と提携するのは、一面には山縣系に對する牽制であり、得策である。政友會は、東北と西南とが尤も振つて居る。此の遠交近攻のような關係は、彼が創めたのではなくとも、彼は、それを利用したことは疑無い。而して彼の最後には、此の西南と東北との二大暗流の衝突が行はれつつある。そして、それを調和すべき彼の後繼者がない。

十二。

原氏の死後の政友會は、恰も織田信長の兇變後の形勢のようである。盛岡に於ける本葬は、固より嚴肅に行はれるであらうが、政友會の追弔會が、他日、行はれるとき、必らずや、大德寺の一幕があるだらうと思ふ。諸領袖の間に於ける暗鬪は、事變に於ては、兇變の翌日から始まつて居るらしいが、暗鬪の熱が高まるとやがて、熱が光になつて、暗鬪が明鬪に化する時が來ないとも限らぬ。此の際、一人の秀吉があれば政局は解決せられるが、その人物が見當らない。柴田勝家丹羽長秀ぐらゐの人が多い。それでは纏まりそうな筈はない。むしろ分裂する

のが自然であらう。そして鎬を削つた後に、統一し得るものに統一されるのが、政友會の爲にも利益であるかも知れない。西園寺公が肝煎をして、一時を彌縫したところで、それは姑息の平和で永續すべきものではなからうと思ふ。とにかく、原氏の政友會であつただけに、原氏を失つた政友會は、かなめの外れた扇のようなもので、バラ〳〵になるか、巧みにかなめの代用物を發見するかの外に途はない。

原氏の兇變後、鳴りを靜め、國境を固くして、政友會の變化を傍觀して居る憲政會は、恰も、本能寺の變後、東海道に退いて、風雲を觀望して居た家康の地位に相當するであらう。彼等が傍觀するといふ意味は、わたくしどものように、無色透明の批判者の位地に居るのではない。天候を觀測しつつある氣象臺の技師ではない。靜かに默つて跼蹐して居るのだ。手には劍を持ち、銃には丸を籠め、十分に武裝したる傍觀者である。信長の兇變後に、政局が纏まるまで家康が、ぢり〳〵と、その封境を固めたように、憲政會も、それまでの間は、中心勢力の衝突を試みないだらうが、傍觀の間にも、小せり合を行つて、徐々に、その武威を張つて行かうとするのは明らかである。原氏の本葬の日、福島縣に於ける補缺選擧戰に、憲政會が勝つたのは、その一例である。原氏の本葬の日に行はれる選擧戰に、「我黨內閣」の土木局長ともあらうものが、負けたとは、時節に時の運とはいへ、確に、原氏の逝去に因つて、政友會の歩調の亂れたことが分る。此の記念とすべき本葬日の選擧戰には、是非とも勝たなければ、原氏の英靈に對する面目が無からうと思はれる。

黨略からいふときには、此の際、政友會は勇退するを本來得策とすべきである。此の內閣を延長すれば、するほど、政友會の爲には破綻を大きくするであらうし、憲政會は虎視眈々として、それを待つであらう。しかし今日に於て政友會が勇退するのは、黨の結束の爲にも、事情、困難であるだらうから、つまり原氏を失なつた政友會は、ヂレンマの危機に瀕して居るといはなければならぬ。

十三。

原氏の生前に、その眼中にあつた後繼者は、果して誰なりしかは疑問である。何人も、それを推測し得た者はない。原氏の如く、黨首として自黨の爲に、深く考へて居た人としては、後繼者を豫定しなかつたことは、用意の不充分といふ非難を受けても仕方があるまい。原氏は、後繼者に就ては、定案が無かつたであらうか。

大久保公が、兇變に斃れたとき、直ちに、起つて、次の内閣首班となり、内閣を維持した者は伊藤公であつた。伊藤公が起つたことは誰も異存はなかつた。大久保公は、遺書を作つて、伊藤公を以て、後繼者と指定したわけではなかつたが、生前に於ける兩者の關係から見て、そう定まつて居たのである。原氏にはその人が無い。しかし強ゐて言へば、高橋、野田の二氏の中といはなければならぬ。此の二人だけを、彼が相談相手にしたからである。而して二氏の中と定まれば、二氏ともに長短があつて、一概にはいはれないが、表道具としては高橋子の方がよからう。譬へば野田氏は、名人の俳諧のようで、人には好かれるが、儀式の舞臺には向かない。高橋子が、假りに首相として、演壇に立つとすると、その答辯振りは、一種の奇觀であらう。政黨が原氏に肉薄するのは、金城鐵壁を攻めるようであつたが、高橋子に向ふのは、暖簾に腕押しであらう。

（大正十年十一月十一日、盛岡に於ける原氏の本葬日、東京、駒込に於て記す。）

原首相の兇變に就いて

内ヶ崎作三郎

原首相遭難の報に接した時の感じ

十一月四日、夕飯を濟まして新聞を見て居ると玄關に人が來たやうな音がするので、自分で出掛けて見ると、宮城縣の田舍の知合である七十幾つかの老人が立つてゐた。此老人は自分に或文章　依賴してあつたので、催促に來たのだといふことが分つたから、直ぐ應接間に通した。私は此老人に食事を出して、其間話をしながら賴まれてゐた文章を書いた。其時老人はふとしたことから原總理大臣の批評を私に求めた。私は文章を書きながら華盛頓會議のことや、それに對する日本政府の方針等の話をして、更に今度原内閣は華盛頓會議の終る迄はどうしても繼續して貰はなければならないといふやうな話をした。此老人は私の子供の時から知つて居る百姓で、今は勤勉努力の結果、多少の土地を所有してゐるのである。併し殆ど目に一丁字もない人であるが、一度は收入役にも擧げられたことがあつた。今度は三十年間村の爲に獻身奉仕の生活をした有德なる村長の頌德碑を建てたいといふので、其文を私に依賴して置いたのであ

る。私は地方の事など色々聞いて見たが、殊に教育もないのに、政治のことなども幾らか分るやうな話をするので、私は大に感服して、自分の十二三歳位には馬を牽いて米を運んで歩いた此人が、今は兎に角村の有力者になつて、名誉職にも就くやうになり、村の公共事業の爲に百里の道を遠しとせず、東京迄わざ／＼上つて來たので、世の中も随分進んだものであるといふ考を抱きながら、氣が向いたものであるから近所に頌徳碑の文を書いて老人に與へた。午後の十時頃であつた。老人は非常に欣んで一刻も早く村の者を喜ばしてやりたいといふので、十一時の汽車で是非歸へらなければならないと言つた。宅では一室に蒲團まで敷いて、其老人を泊める準備をしたのだけれども、たつての願ひであるからといふので、それならば上野迄見送りませうといふて、斷はるのを強いて停車場へ見送つた。で其老人の這入つた列車の上り口に、私を知つて居た人があつて、會釋をしたが、此方は誰であるか思出すことが出來なかつたが、其人は何も總理大臣の遭難のことは言はなかつた。號外賣も見えなかつたから、多分其時は上野に集つてゐた人々は總理大臣の遭難のことは知らないでゐたのであらうと今から思はれる。

十一時半頃に巣鴨の停車場で降りて、山の手線の土手を江戸橋迄歩いて來ると、橋の上に人集りがして警官が三四名居提灯を提げて土手の上に立つてゐる者もあれば、線路へ降りて行つたのもある。それで何か轢死人があるのではないかと思つて、橋の上にゐる人に聞いた所が、今し方人が轢かれたのだといふので、橋の上から死骸でも見えるか知らんと思つて、覗いて見たが薄暗くて何も見えない。それで自分は穢た豫感を抱かせられたやうな氣持になつて程遠からぬ宅に歸つて門を閉めると、北の方の横丁から號外々々といふて叫んで行く者があつた。此間に這入ると先刻近所の人で、夕方東京驛に行つてゐた人が、原總理大臣が暗殺されたといふ報道を齎らして來た。原氏は重傷を負ふたが病院に運ばれて行つたと聞いて、今の號外はそれであるなと思つた。全く是は意外な事で、自分は暫く瞑目して色々なことを考へたが、兎に角病院に運ばれたのであれば、或は運好く一命を取止めることが出來るかも知れないと思つた。其夜は大分夜が更けたから一時頃床に這入つた。

五日の朝早く起きて郵便受を見ると號外が二枚這入つてゐた。續いて朝刊新聞も投ぜられた。それを見て原首相が逝去せられたことを知つて、私は非常に感動した。それから他の新聞を買はふと思つて、朝飯を食はずに、巣鴨驛前に行つた所が、唯だ一種の新聞が來て居つただけである。それから狗猫町の方

へ歩いて行つて、新聞配達所を二軒程訪ねて又一二枚の新聞を讓受けて、家に歸つた。八時過ぎに朝飯を食つたが、何だか不愉快で、讀書も仕事も手に著かないので、殆ど晝頃迄は庭に出て何することもなく日光に照されながら沈思と瞑想に耽つたのである。丁度前の晩に田舍の老人と原總理大臣の政策の話などをして居つた頃に、原氏が東京驛に於てあへなくも兇刄にかゝつて殪れたのであると思ふと、何となく不思議なやうな感じもするのである。此大なる問題を中心として色々なことを思出させられるのである。

米國の輿論はどう考ゆるか。

私は何のために刺客が原氏を暗殺したのか、暗殺者が如何なる人物であるか、そんなことを考へる暇もなく、先づ第一に想起したことは、原氏の不幸なる逝去が、國際關係に色々な惡影響を及ぼしはしまいかといふことである。人間愛はかゝる國際的關係に推及する前に無理に此世を去らせられた原氏の不幸に同情を感じさせてることはいふまでもない。殊に米國の輿論に對して突然冷水を浴せ掛けたやうな氣がしてならないのである。華盛頓會議が將に開かれんとする矢先に、日本の全權委員が大に同情ある歡迎を受けて、會議も存外都合好く進行するらしい、此大切なる時に於て、日本帝國の總理大臣が刺客に殪れたといふ報道が米國に達したならば、米國の輿論は之を何と解するであらうか。原總理大臣はハーヂング大統領の軍備制限の會議に贊成して、米國と妥協することを辭せないといふので、米國にそれを頼りにして居つたに違ひない。然るに此大切なる總理大臣が全權委員を送出した後にムザ〳〵と、而も慘殺の下東京驛に於て暗殺されたといへば、恐らくは日本に於て軍備制限の運動に反對の有力なる保守主義者、若くは軍閥者流が頭を擡げて來て、其手先となつて教唆された者が此兇行を敢てしたのではあるまいかといふやうな印象を與へはしまいかと思つた。總理大臣が暗殺されたことは、原氏が一種の政治家として近頃比類なき手腕を發揮したこと、殊に對外政策に平和主義があらはれかけてゐたことを承認するが故に、一入之を哀惜するの情に堪へない感が起つたばかりでなく、兎に角吾々國民の最も優良なる一人が、何等意味なき暗殺の目的物となられたことに對して、自然に同情の念が生じたのではあるけれども、華盛頓會議及國際問題が目の前にブラ下つて居るのであるから、私は先づ第一に此事を考へたのである。

三　暗殺は果してその目的を達し得るか

次に私が考へさせられたことは一體暗殺なるものは果して下手人の目的を遂するものであるかどうかといふ問題である。先達は朝日某が安田善次郎翁を刺した。其評判が未だ失せない中に、其印象が尙ほ生々として吾々の記憶の中に鮮かに存在してゐる中に、原總理大臣が再び同じやうな方法で以て殪れたのであるが、果して暗殺は其目的を遂するものであるだらうか。反對者若は已の邪魔になる者を殺せば、其目的が達せられると考へるのは甚だ見識のないことではあるまいか。縱んば一人の政治家を殺した所が、それに代るべき政治家は幾らもあるから、一人の暗殺は、それで以て其人の代表してゐる所の政見を根本的に覆へし、政策を全然破壞することは不可能な事である。朝鮮などに於ても隨分爆烈彈騷ぎがあつて、伊藤公始め其犧牲になつた人もある。併し日本の朝鮮に對する政策に失敗が多かつたとしても、獨立運動者が之に酬ゆるに單に刺客や、爆彈を以てすることは甚だ道理のない事であつて、自暴自棄の方法としては已むを得ないかも知れないが、是だけで以て獨立運動の精神を貫かふとすることは、稍々輕卒ではあるまいかと考へてゐるのである。同じ道理に基いて或公人若は政黨の首領、或は一國の責任を双肩に擔ふ所の人を殪したからといつて、其人が從來主張し來つた所の政策が一朝一夕にして變更さるゝとは想像することは出來ないのである。縱んば朝日某が一人の安田善次郎を殺して、非常時は富豪暗殺に對して一種の恐怖を感ぜしめ、屡々ながら社會事業にでも寄附をしなければならないやうな氣分を與へたかも知れないけれども、人の噂は七十五日であるから、過てさう云ふことも忘れられてしまへば、矢張慾の深い者は昔の通り慾が深くなつて、社會公共の爲に寄附をすることなどは怠り勝ちになりはしないかと思ふのである。それと同じやうに一人の原敬氏を暗殺したからといつて、原敬氏に依つて代表せられたる所の政友會の政策には、何等の變更を來すべきものではあるまいと思ふ。人を憎まば寧ろ是に默殺するに如くはないのである。人を罵詈讒謗してすらも、寧ろ其目的物とせられる人の名聲を揚げるのであつて、決して其地位を低くすることは出來ないのである。原氏自身に不幸にして思慮なき青年の兇刄に殪れたけれども、原氏自身は却て明治大正の政界に於ける一大人物となつて、後世に記憶せらるゝだらうと思ふのである。例へば日露戰爭の中心人物として働いた桂公爵の如きも、其末路は稍々振はなかつたけれども、兎に角世界歷史に於て記憶せらるべき所の大戰爭の一方の責任者である、然るに單に病死をして、其末路に何等の光彩を加へなかつたから、今日の人は動もすれば桂公を忘れんとして居るのである。然るに原氏は其

抱負は未だ之を十分に實現することが出來なかつたかも知れないから、暗殺せられたことに對しては實に哀悼に堪へないのであるが、併ながら歴史的人物としての原氏の位置は、此暗殺に依つて確定したものと見ても差支はあるまいかと思ふのである。恐らくは將來の日本國民が明治大正の政治家を追懷する時に於て、先づ第一に浮ぶものは大久保甲東、西郷隆盛、或は伊藤博文、次は大隈侯爵、其次に記憶せらるゝものは、或は原敬氏であるかも知れない。若し原氏が圓滿辭職をして餘生を盛岡の別墅に送つて、悠々自適して其生涯を終らるゝやうなことが、萬々一あつたとしたならば、恐らくは桂公位の程度に於て國民に記憶せらるゝに止つたかも知れないのである。然るに原氏を邪魔物として、原氏を刺止むれば原氏が代表したる所の政策に、根本的變動が來るであらうかの如く早呑込をして、原氏を暗殺するが如き思慮なき馬鹿氣たる事が行はれたるが故に、原氏の歴史的の位置が俄に確立したことは、暗殺者の青年も其事實を知るに至つたならば、自ら茫然として爲す所を知らざるやうなことになりはしまいかと思ふのである。安田翁の場合にしてもさうである。安田翁が幾億の富を積んだかも知れないけれども、若し彼れが八十九十の長壽を樂んで圓滿に此世の中を去つたとしたならば、或は極めて平凡なる人間の如く、記憶せられなかつたかも知れない。然るに其末路頗る慘憺なるものあるが爲に、安田翁の過去の生涯が研究せられ、記述せられて、我利々々亡者の如く評判されたのであるが、其一面には中々の抱負もあつて、不見識な事業には總理大臣の命令であつても一文の寄附もしない代り正當の事業であるならば進んで寄附をして宜いと云ふやうな考があつたことが世間に廣まつたのであるから、結局安田翁を偉大たらしめたことになつた。過去將來に於ても新日本の金滿家に多いのであるけれども、恐らくは安田翁が特別の光を放つて後世の日本人に思出される所の富豪であると思ふのである。斯かる在々と理解せらるべきことをも理解せずして空しく此有爲の政治家を、時期未だ至らざるに其命を奪つた所の青年に對しては、其無謀を責めざるを得ないのである。

四　文化問題の分子としての暗殺

此大なる事變の結果として日本國民は人樣々の感想を抱くことであらうと思ふのである。私は此問題を單に原氏若は暗殺者の個人的の行爲と見ずして、之を日本全體の社會的、精神的、文化的の問題と關係を付けて考へて見たいのである。何故今日の日本に朝日某の如き、或は中岡某の如き暗殺者が現れる

あるか、是は眞面目な問題である。暗殺者のあるのは日本ばかりではない、世界に絶えない譯である、米國に於ても、アブラハム・リンコルンが暗殺せられ、マッキンレーも暗殺されたことは能く人の知つて居る所である。又同時にリンコルンは暗殺されたことに依つて、一層不朽の名を輝かし、マッキンレーの如きも暗殺されたるが爲に、世界の人に今尚ほ記憶せられて居るのである。亞米利加の大統領は隨分多いのであるが、平凡に其生涯を送つた所の人物は多く忘れられて居る。例へばペルリを派遣して日本の通商を求めしめたる大統領ブツカナーンの如きは、少くも日本人からは記憶せらるべき人物であるけれども、日本人で記憶するものは甚だ少い。然るにマッキンレーは日本との交渉に於ても、間接には何等かのことはしてゐるであらうけれども、暗殺せられたるが爲に名高くなつて居るのである。歐羅巴でも南歐諸國には往々にして刺客があつた。現に世界戰亂の勃發は墺太利の皇太子及皇太子妃が塞爾維の一青年に依つて暗殺せられたことが原因になつてゐる。又世界大戰の初め佛蘭西の平和論者であつたジョーレーの如きも暗殺されてゐる。又戰爭後クレマンソーが危ふく命を取止めたこともある。露西亞に於ては暗殺も掠奪も總てが行はれてゐる。唯英國では、愛蘭は別であるけれども、英蘭、ウエールス、蘇格蘭に於ては刺客のことは近頃殆ど實例がないといふて宜いのである。ロイド・ヂョーヂの如きは大戰前既に大藏尚書の位置に在つた時に、人民豫算案なるものを提出して、貴族、富豪、大地主の階級に重税を課して、此等の人々より隨分酷く攻擊をされたのであつたけれども、彼の一身に危害を加へ、若は暗殺を企んだことはなかつたのである。大戰後もロイド・ヂョーヂに對しては隨分非難が多いのであるけれども、之に代るべき人物が無いことをも英國の輿論が承認して居るから、此人に對する兇暴たる計畫が企てられて居らないと看做すべき理由がある。然るに日本には折々暗殺者が現れる。維新前後に於ては所謂思想、新舊制度の移變る過渡時代であつたから、種々なる異變が多かつたのである。或は大久保甲東、或は森有禮、或は星亨皆た兇手に殪れた。或は大隈侯の遭難といひ、殆ど重なる公人は一身を危うしたやうな事情は割合に多いのである。是は日本人全體ではないけれども、日本人の中に感情が餘りに興奮し過ぎて、理性の力を以て之を支配し切れない人が少くないと思ふのである。日本人は藝術的國民であつて、孰れかといへば情の國民である。打算的の國民でなくして衝動と本能に驅られて、深く慮らずして事を斷行するが如きことがある。是は長所にして同時に短所である。關東地方などに於ては低氣壓の襲來が頻

繁で、地震時風火事の如きものが度々起り、中世紀に於ては長い間殺伐と踵を接して、始終爭鬪を事とし、戰爭を事として居つたらうが故に、多少人氣も荒くなつてゐるやうな點もあつて、理智に長けた人よりも、一氣呵成に事を斷行しやうとする熱血男子を多く産んでゐるやうである。斯かる人々の間より自らを顧みずして、他に向つて多きを望むやうな種類の人が現はれるのは當然であるかも知れないのである。是等の人々は或は時事に慨し、大問題に出遭して興奮する時には飛んでもない事を仕出かすのである。

斯かる人々を如何にして豫防することが出來るか、是は將來の問題でなければならないのである。一體理想の政治を徹底的に考察すれば、苟も國民として衣食をして相當の正業にあるものであれば、其政治を謳歌し、滿足して生活を爲し得るやうな境遇を與へなければならないのである。日給一圓二十六錢を頂戴して居る轉轍手が一國の總理大臣を僅か三圓の安刄物を以て命を奪つたことには、實に皮肉の甚だしいものであつて、殆ど是は常識ある者の想像することも出來ないことである。併ながら眞の理想の政治は斯かる下層階級に在つて日夜營々として働いて居る者に對しても、何等かノンビリとした餘裕(ゆとり)を與へて、欣んで和氣藹々たる氣分の裡に職業に從事することが出來るやうな手配が必要ではあるまいかと思ふ。斯かる政治は眞の理想の政治であつて、誰に向つても之を要求することは困難であるけれども、此所迄行かなければ眞の政治と稱することは出來ないのである。政友會内閣は滿鐵問題や、阿片事件其他色々失敗はあるが、物價問題の如き中流以下の國民に取つて最も重大なる問題に對しては餘り熱心が足らないやうに思はれる。勿論是は容易ならざる問題であつて、如何なる内閣が出來ても容易に物價の低落を實現することは困難であるかも知れない。併し困難なるが故に着手しない譯には行かない。現に甚困難であつて、理想的の解決は六ケ敷いかも知れないが、やつて見る精神と態度を示して貰ひたいのである。政友會内閣は此方面に對する熱心は餘りなく、努力はどうも足らないやうに思はれるのである。斯かることが下々の人々をして現政府に對して不滿の念を懷かしめてゐる一の原因であるまいかと察せられるのである。例へば家賃が上る一方で、敷金に多くなる一方であつて、米が高くなるばかりでない、野菜類其他一切の物が高くなり、呉服反物の如きも安くなるべくして餘り安くならないでゐるやうなことは、一般の人々に何等かの不安の氣分を與へしめてゐるのである。

啻に經濟上の問題ばかりでなく、一國の風敎を維持する爲に

は、單に規則づくめの訓示とか命令とかで行くものではないから、遊戯娛樂の方面で以て其感情をノンビリさせることが必要である。卽ち藝術の氣分、或は目より訴へ、耳より訴ふる所の審美的敎育に依つて、人心の緩和を圖ることが必要ではあるまいかと思ふのである。然るに日本の民衆娛樂も或程度迄は、此方面に於て何等かの貢献はして居るに違ひない。例へば落語講談の如きは、確に民衆娛樂の有力なる要素であると思ふのである。併ながら講釋師の中には敵討を演るものが多いから、人心をノンビリさせなくて、却て人心を惡い意味に於て緊張させしむやうな傾向がありはしないかと思ふのである。浪花節の如きも節廻は甚だ良いものがあり、一種の藝術としての價値は十分認むるけれども、其語り物は大抵敵討ものである。而して浪花節の最も人を喜ばしむるものは四十七士の物語である。斯の如く是等のものは悉く復讐の物語であつて、君の爲に仇は必ず取らなければならないやうな、壯烈人を泣かしむるが如きことはあるけれども、此悠々たる所の泰平の氣分を漂はしめて、人生を樂しんで、平和な國民として、愉快に生活するやうな情緒を養ひ損ねて居るのではあるまいかと思はれる。この點に就いては坪内逍遙博士等によりて文化協會が唱導されてゐるので、私はその事業の進捗を祈るものである。

又民衆娛樂の外に必要なものは矢張宗教である。宗教を政府が保護することになれば、色々弊害も生ずるのであるが、現在のやうに物質の勢力が非常に強くて、殊に世界大戰以來、物質缺乏が世界共通の問題となり、殊に住宅問題の如きが最も大なる問題となつたのであるから、多くの人々は衣食住の爲にのみ屈托しなければならない。故に勢ひ心靈の事物を等閑にする傾向が大にある。或は生活の壓迫に堪へずして、男女の關係の如きが餘程弛んで來てゐるやうな傾向も認められる。それには色々なる方法があるが、健全なる人生觀、愉快たる人生觀を中流以下の階級の人々に迄も及ぼすことが必要であると考へる。政府は或は大本敎を攻擊し、或は邪敎取締といふけれども、それなら邪敎を取締つて正敎は何であるかといへば、是は少しも示して居らない。邪敎があるならば一方に正敎がなければならぬのであるから、正敎の標準がなければ邪敎といふことは出來ない。然るに今日は邪敎のみを指摘して、何れが正敎であるか之に對して根本的の方針が確立して居らぬやうに思ふ。勿論敎育勅語は實踐倫理の標準としては非常に貴重なるものである。併ながら一般民衆を動かす力として、其以外のものが並行的に存在して居つても差支ないと考へるのである。謂する所、社會敎育が有ゆる方面に行亘つて、或は學校に於て、或は學校以外

に於て、或は遊戲娛樂を通して、或は新聞雜誌を通して、悠々として何等問題を有つて居るやうな、ノンビリした氣分が一般の社會に溢るゝやうにして置くことが必要であると思ふのである。之を爲すことが實は最も困難な事業である。困難なる事業なればこそ政府當局者は一層此方面の爲に考を煩はさなくてはならならぬのである。

原總理大臣が兇手の爲に殪れたといふ報道を聞いた人は何と思つたであらう。或は社會主義者、或は無政府主義者、所謂危險人物と稱へられる者がやつたのではあるまいかと思はれたかも知れない。併し中岡某なる者は必ずしも斯かる團體に關係ある者とは思はれない。當局者が危險人物なりと看做して居るやうな人々は、單に一總理大臣を暗殺したからとて、一國の政策が變るべきものでない位なことは百も承知してゐるから、決してそんな無謀なことはしないだらうと思ふ。其意味に於ては寧ろ取扱易いと思ふのである。然るに中岡某の如き感情一方に逸やる者は、殊に血氣定まらざる所の春青時代に於ては、最も之を取扱ふことが六敷しいのである。愈々以て社會一般の氣風を今少しくノンビリさして、日本國民をして眞の大國民である所の實を擧げしむることが大切であるまいかと思ふのである。

五　個人及び公人としての原氏

偖、原氏は如何なる政治家であるか。私が始めて原氏を見たのは、山本內閣の內務大臣をして居られた時に私は議會を傍聽したことがある。傍聽席より大臣席に和服を着て、片手を以て頰を押へて、机に倚つて居られたる白頭內相を見た時には、色々なる聯想もあつたかも知れないが、非常に剛腹な人であるとのやうに考へた。私は未だ不幸にして議會に於ける原氏の演說等は討論を聞いたことはない。大正七年の八月半ば私は岩手縣紫波郡の教育會の夏期講習會に出た。其時盛岡の岩手日報社から八月十六日（一月後れの盆）劇場で商家徒弟慰安會をやるから、私に講演をして吳れとの依賴があつたので盛岡に寄つた。其時政友會大會が札幌に開かれんとして、原氏は總裁として特に同地に向はれんとして居つた。床次氏も盛岡に來て居られたといふことである。然るに俄に米騷動が突發して、其旅行が中止となつたことを聞いた。私は原氏と個人として面會したことはないから、面會したいと思ふて、新聞社の高橋社長に話をして、高橋氏に原邸に案內され、其所で床次氏に會ひ、又床次氏に紹介されて原氏に會つた。十分ばかり會つて他にも來客が居るし唯だ雜談をしただけであつた。庭には水々しい紅葉や楓の木が

て非常に氣持が良いと思つた。應接間の壁に陸奥宗光伯の頌徳碑を原氏が建てた碑の石摺が掛物になつて居つた。原氏は陸奥宗光伯に非常に引立てられたので、自ら其恩を忘れないでゐる方だと氣が付いた。二階の大廣間には佐久間鐵園の原氏の腰越別莊を描いた南畫の掛物が掛けてあつた。私は別に話題がなかつたから絹の話を持出して、南部藩の職工は誰が名高かつたのかといふやうなことを話したと記憶するのである。會見は十分位であつたらうと思ふが、非常に個人としての魅力のある人で、會つた者に對して良い氣分を與へる人だと思つた。前に議會で傍聽席より大臣席に座を占めて居る原氏を眺めた時とは大違ひのものだといふ感を抱いた。其後私は再び原氏に會つたこともなければ、又演說を聞いたこともない。唯だ何時か原氏が總理大臣に就任して間もないことであつたが、早稻田の大隈邸に挨拶をしに來られたのであつたらう、自動車から降りて玄關の所に這入らるゝスラリとした洋服姿の背後を一寸見たことがある。私は原氏とは斯の如くに一寸會見した位に過ぎないから、原氏の人物評は遠慮しなければならない。

併し個人的會見に於てあれだけの魅力を有して居る人が、日本國民の多數に對しては、卽ち直接原氏の謦咳に接　兼ねたる者に對しては、どうも其樣な魅力を及ぼすことが出來なかつたことを甚だ遺憾に思ふ。一體原氏の政治家としての長所は總ての人々か認めてあるが如くに、第一統御の才である、又自ら奉ずること極めて薄くして、部下の者をして大に利益を獲得せしめた。又議會に於ても自ら馬を進めて難戰苦鬪されたるが如き、或は何時刺客に襲はるゝやも知れずと覺悟しながら、一身の警戒の如きに餘り意を用ゐて居られなかつたこと、又對支政策の如きも所謂白紙主義にして、北方も助けない代りに南方にも無關係であつたので、今日の如く混沌たる支那に對する方法としては萬全の策であつて　干渉されない代り支那の方でも比較的原氏の政策を歡迎して居つたかも知れない。又原氏の心事に立入つて想像することは出來ないけれども、何とかして軍閥の勢力を抑へやうといふ下心はあつたかも知れない。又此前の議會に於て尾崎行雄、島田三郎兩氏が軍備制限案を提出した時に野黨も政府も共に之を虐待したのであるが、米國政府より華盛頓の軍備制限會議に案内が來ると、直に欣然として之に贊意を表現するが如きは、甚だ不見識なやうであるが、そこは實際家としての原氏が、刹那々々の事情に順應して行くの長所を發揮したものと見ればよいかも知れぬ。現に今世界各國は原氏を認めて孰れかといへば、平和主義の政治家であるが如く認めたかも知れない、今日のやうな時世に於ては平和主義者が日本を指

導してゐるやうに世界各國が見て居ることは、日本の爲に決して損ではない、幾分有利な事であつたらうと思ふ。又原氏は爵位勳等に重きを措かなかつたことも大に志ある人々の同情を惹くのである。併し、惟ふに原氏は理想主義より此見地に到着したのではなくして、現實主義から到着したのではあるまいか。察する所原氏は貴族階級や富豪階級の生活に精通し、又之を観察されてゐるだらうから、爵位勳等の如きは實に子供めいた、一向價値を措かざるものである位のことに氣が付かれて居つたので、斯かる子供ダマシのや な物を貰つて滿足するには、餘りに實際主義的傾向の著しい人ではなかつたかと思ふ。そこで結局理想主義者と同じやうな結論に達したのではあるまいかと思ふのである。又原氏の乾分が餘り利益を追求して疑獄事件を多く出したことは、確に政友會の一大失敗であつて、國民の怨府となり、或は其爲に中岡某を激せしめたかも知れないが、是も原氏一個の心事から考へたならば、何等かの口實があるかも知れない。何となれば薩 藩閥は明治維新の大事に可なりの犠牲を拂つて居るけれども、多くの生殘つた人々が儲け得たる所の利益は甚だ莫大なものである。それに較ぶれば政友會の代議士連中が多少の儲けをする位のことは、別に不思議はないと思つたかも知れない。原氏は實際家であるから、政治は力である、力の爭ひである、力の遣取であるやうに考へて居つたかも知れないから、力には金が要る、其金を得る爲には多少の不正手段をも默認するより外はないといふ位の考に達したかも知れない。併ながら法網に觸れた者は、事實なるが故に法律を以て罰するも可なりといふやうな結論にも達して居るかも知れないのである。

何れにしても原氏が或は一黨 統御者として、或は手腕家として、近頃稀に見る政治家であることに就ては世論が一致して居るだらうと思ふ。兎に角政黨内閣の指導者、政黨内閣の中心人物として、組織者としては近頃にない成功を奏したことは認めなければならぬ。惜若氏の弱點若に短所は何れにあつたかといへば、原氏は論客であつて、若い時より盛に議論をしたといふことであるから、議會に於ても重要なる問題の答辯は殆ど身を以て引受けて、他の大臣達をして伴食の觀を呈せしめたのである。併し一國の總理大臣としての論法としては、往々にして揚足取、小跨掬ひ、或は逆襲戰などをやつた傾向があつて、もう一層寛容なる鷹揚的態度があつて欲しいと思はしむる點もある。併し意思の非常 強い、權力慾の強かつた自我主義の人であるかも知れないから、斯かる鷹揚的態度を要求するのは無理かも知れないけれども、原氏がもう少し寛容なる精神態度を示すこと

との出來なかつたことは甚だ遺憾とする所である。又原氏の缺點は議論は重んじ、討論は尊敬したけれども、公開の席上に於て國民を指導することに餘り重きを措かず、自分も其必要なることを認めて居らなかつたのであるまいかと思ふ。前にも言つたるが如く原氏は實際家である、リアリストである。實際家たる立場から見るならば演說の如きは空論に過ぎない、演說は投票を支配することは出來ない、演說の如きはするもせざるも可なりで、投票の結果が勝てば宜いといつたやうな考を有つて居りはしないかと思ふ。それは原氏も政友會の總會、或は地方の大會に臨んで極めて簡單なる演說をされたやうであるが、用意周到にして揚足を取らるゝやうな散漫たる演說はしなかつたけれども、假に黨員だけの前の演說としても餘りに簡潔に過ぎて居るのではあるまいかと思ふ。公衆の前に於て演說をしないことに於ては憲政會の加藤總裁も原氏と同樣であるけれども、其憲政會大會などに於ける加藤總裁の演說は中々詳細に亘つて居るものであつて、それを見て略々加藤總裁の政見が窺はるゝ程度のものであるが、原氏の演說は餘りに簡潔にして一般國民に深い印象を與ふることが出來ないのではあるまいかと思ふ。勿論國民は多數であつて、東京市のやうな大公會堂すら無い所に於て國民に向つて意思を發表することは甚だ困難である。それにしても苟も政黨內閣の首領であるならば、折々は國民全體の前に現はれて、時には野外演說なり、或は靑年會館に出で、政見を發表するなり、國是を發表するなりして、國民の前に總理大臣たる、又政黨首領たる所の赤裸々たる人格と抱負を示さなければならないと思ふ。若し斯かる事があれば國民も非常に總理大臣に信頼し、又一種の親しみを持つが故に、多少新聞雜誌などに於ける反對黨の攻擊が手酷くあつても、それを自ら緩和して、割引して讀むやうなことがあり得ると思ふ。然るに原氏の合場に於ては、靑年會館などに於て演說することは心の中では餘程可笑しいことと考へて居られたかも知れない。又實際政治の運用に於て其樣な廻遠い方法は無いと確信せられて居つたに違ひないのであるが、何れにしても是は政黨政治の總裁としての一大缺點であるまいかと思ふ。單に口舌の雄にして經綸なく手腕の伴はないものは眞の政治家といふことは出來ない、然しながら手腕が幾らあつても其經綸若は抱負を、或は筆に依りて、或は口に因つて國民の大多數に深き印象を與ふるに成功しない人も、亦眞の理想の政治家といふことは出來ないと思ふ。ロイド・ヂョーヂの如きは臨機應變の天分があつて、往く所として可ならざるはなく、爲す所として成功せざるはないといふ人であるが、同時に又口舌の雄にして、而も彼れが大學教育な

どを受けなかつたことが、彼れの爲には一種の特色を與へて、最も卑近なる簡潔なる力強い言葉を以て、又巧妙なる比喩を以て民衆に徹底するやうな演説が出來ることは、ロイド・ヂョーヂの大なる强味である。アスキスは大學の教育を受けて天下亦重の抽貴門閥を以て仰がれたのであるけれども、民衆に對する演説に於てはロイド・ヂョーヂの足下にも及ばなかつたのである。原氏の手腕は或はロイド・ヂョーヂの一面に似て居るかも知れないけれども、原氏の門地、風采、教育は寧ろアスキスに似て居る點があると思ふ。原氏は官僚の畑に育つた人であつて、辯論を修練する機會も少く、又精力絶倫であつたに拘らず、聲量が比較的少い人であつたが爲に、公開演説に臨むことは自分でも欲せず、人も亦之を認めなかつたかも知れないけれども、若し原氏にしてロイド・ヂョーヂの如くに、度々社會公衆の面前に立つて意見を發表するの習慣を有して居つたならば、或は幾多の中岡某なる者をして心より敬服せしめて、寧ろ其崇拜者たらしむるに至つたかも知れない。勿論原氏が演説をしない爲に暗殺されたといふ結論には達しないのであるけれども、苟も政黨政治の指導者を以て任ずる所の政治家であるならば、其位のことは行つて置くことが一の義務ではあるまいか。而して其義務を果して居れば多少の緩和力となつて、人の言葉に煽動せられて暗殺する者などをも豫防し得たかも知れないと思ふ。

六　警視廳に對する希望

次に警視廳の取締方針に就ても私達は國民としても小言ひたいことがある。原氏は暗殺の目的物となるかも知れないといふ覺悟を極めて居つたことは見上げたものであるが、但し警視廳としては何所迄も一國の總理大臣を保護しなければならないと思ふ。然るに警視廳は勞働運動とか、危險思想などに對しては隨分人と金と時を費して取締を嚴重にしてゐるが、原氏の身邊に對しては比較的遺漏があつたことは、少し辻褄が合はないやうに思はれる。若し原氏が非常なる進歩的政治家であつて、普通選擧でも斷行して民衆の信頼を得てゐる所の政治家であるならば、民衆の中に混つても何等危險はなかつたのであらうけれども、普通選擧は時期尚早論を唱へて居つた方であるし、總選擧の時などに於ても自ら陣頭に立つて意見を述べない政治家であつて、物價政策の如き問題に對しては十分の努力を示して居らなかつたのであるから、民衆の一部分には多少の誤解あり、隔りあることを警視廳當局者は知つて居るべきである。而して華盛頓會議の開會に先んじて、總理大臣の位置は國際的に非常な重きを成してゐる場合であるから、一層注意して其身邊を

しなければならなかつたのである。中岡某なる青年は原總理大臣を或は上野停車場に、或は甲府に於ても狙ふたといふが、遂に其機會を逸したるは、其場合には多少警固が行屆いてゐた爲めである。東京驛などに於ても警固が行屆いて居つたとしたならば、中岡は手を出す機會は無かつたかも知れない。併し中岡某のやうな者に熱心附纏はれて居れば何時かは隙に乘ぜらるるかも知れないが、併ながら警衞が嚴密に行はれてゐるならば、彼をして手出をなさしめずして濟んだかも知れない。原氏自らは平民宰相を以て任じ、あのやうな立派なる遺狀を認めてあるのであるから、國民の前に立つて何等自ら護衞せしむる必要はなかつたかも知れないが、其政治は必ずしも平民政治を斷行したといふことは出來ないのであつて、急進主義にあらずして漸進主義、石橋を叩いて渡るといふが如き地味な方針を執られたのである。されば一身上の護衞の如きも矢張漸進主義の石橋を叩いて渡るやうな警戒を加へた方が、單に一身の安全ばかりではない、不慮の災難の爲に世間を騷がし、或は國際的影響をも及ぼすことを豫防し得たかも知れないのである。其點に於て原氏の態度に多少の矛盾がある。個人としては頗る平民的の心持を有して居られたのであるが、其政策は必ずしも平民主義を貫くことが出來なかつたのは遺憾とする所である。もう十年も時を借したたらば或は實現し得た人であるかも知れない。

七　後繼内閣は延長内閣たれ

原氏一度斃れたるが故に後繼内閣の問題が大分世間の注目を惹いて居る。又政友會の總裁に誰がなるかといふことも問題である。今日迄の模樣では西園寺公が起つかも知れない、或は起たぬかも知れない。此感想が印刷されて諸君の手に這入る時には、全く豫想外の人が首相の印綬を帶びて居られるかも知れない。此場合兎に角政友會内閣を繼續することが必要であると思ふ。既に日本が三全權大使を華盛頓會議へ送つたのであるから、今にして内地の内閣が變つたとしたならば、全權も大に迷惑するに違ひないから、少くとも華盛頓會議が濟んで全權大使が報告を齎らす迄は矢張現内閣系統のものが繼續すべきであると思ふ。然らば誰を以て總裁とするか、誰を以て總理大臣とするかといふ問題が起るが、其頃迄には西園寺公が首相となるかも知れない、或は其他の人がそれに代るかも知れない。私一個としては政友會の今の幹部の中より適當な人を總裁と仰ぎ、其人を總理大臣として、來らんとする議會に臨んで然るべきではあるまいかと思ふ。原氏が最初西園寺公に推薦されて總裁になつた時、續て總理大臣となりたる時は多少非難を提はれたけれ

ども、次第に其名聲を顯かして來たのである。それと同じやうに今日政友會の幹部の人々の中で、是れぞと思ふ人を選んで總裁に戴き、其人を中心として內閣を組織するならば、又其人も一生懸命に努力したならば、確かに相當なる成績を擧げることが出來るだらうと思ふ。今世間では政友會が結束して居るのは原敬氏といふ中心人物が居つたからである、此中心人物が一度去つたのであるから、政友會は瓦解するかも知れないといふ觀測がある。若し原氏が圓滿辭職をして、老病で此世を去つたといふやうなことであつたとしたならば、或はさう云ふことが起るかも知れないが、私は別樣に觀察して居るのである。一黨一派の首領が血の犧牲を拂へば、確かに其黨派、或は關係者に冷感を與ふるものである。それで一般の或人々が見て居るやうに、原總理大臣暗殺の爲に政友會が土崩瓦解するとか、結束が出來ないやうになると認むることは出來ない。或は却て原氏の橫死に感奮して一層結束の度を強むることになるかも知れない。此意味に於ても反對派の首領を暗殺したことは、何等意味をなさいのである。中岡某なるものは彼れ自らの意思の發露に依つて、無益なる、亂暴なる殺傷を試みたのであるけれども、それが一面に於ては原敬氏なるものを、歷史的人物の列に擧げ、同時に政友會の結束をも固くして、却て日本國民の間に地盤を固くせし

むるやうなことにならぬとも限らぬ。

愼しむべきは斯かる輕擧妄動である。吾々は此輕擧妄動を國民の有ゆる階級の人々に向つて警告を與ふるの必要がある。殊に血氣定まらざる靑年をして、愼重に、周到に事物を觀察するやうな習慣を養はしむるには、如何なることを爲すべきか。是は靑年團などに於ても最も責任がある。靑年團の指導宜しきを得て居れば、或は斯かる事も豫防し得たかも知れないのである。內務省では一面には巨資を集めて、靑年會館を建設せんとする運動を開始して居る矢先、其靑年の一人が總理大臣に對して無謀の企てをすることも、一種のアイロニイーの例があるのである。又鐵道五十年祭をやつたばかりの今日、鐵道の一轍手、ポイントマンをして居る所の傭人が、一國の總理大臣に對して、而も東京驛に於て、斯かる思慮なき亂暴狼藉を敢てしたるが如きも、是に一種のアイロニイーと見なければならないのである。

是に於て政府當局は云ふ迄もなく、政友會員も大に反省しなければならぬ。政友會が餘りに傍若無人の振舞をしたるが爲に、國民多數の反感を買ひ、其反感が新聞雜誌に現はれ、暗殺者は其記事に依つて刺激されて居るかも知れない。又在野黨たる憲政會國民黨も大に反省しなければならぬ。野黨の勢力

振はざるが故に、政友會をして我儘勝手を爲さしめ、其結果が今日あるのかも知れない。故に野黨自らも大に奮發して、正義公道の精神を以て頽勢を挽回して、國民をして嚮ふ所を知らしめなければならないのである。又一面に於ては近頃思想問題、文化運動が非常にやかましく言はれて居る時に、斯かる事とは全く反對の兇行が續いて二度も繰返さるゝに至つては、文化運動なるものも甚だ徹底しない、思想研究なるのも甚だ徹底しないのであつて、唯だ一部分の人が享樂的に、或は遊戲半分的に思想問題を唱へ、文化運動を唱へて居るのであつて、思想の價値、文化の內容なるものが中流階級以下の有ゆる人々に向つても理解せられ、味はれるやうに、思想問題も文化運動も更に一層民衆化することが必要ではあるまいかと思ふのである。斯く考へ來れば原總理大臣の死は種々なる問題を吾々に與へ、種々なる暗示を吾々に與へるのであつて、故人に對しては吾々心の底より哀悼の意を表し、其遺族に對し、親戚に對して殊に同情の誠を表するのであるが、同時に是は國民の連帶責任であるといふ感じが、吾々日本國民の一人々々の心の中に強く自覺せられたいものである。

斯の如くして原氏の不幸なる犧牲に依つて日本の政治の問題、外交の問題、或は文化の問題、思想の問題、人生觀の問題が、眞の進步發達をすることの出來るやうに導いて行かなければならぬと思ふのである。此意味に於て原氏を失うたることは非常な損失であるけれども、此偉大なる損失に對しては是が埋合せをしなければならないのであつて、縱んば後繼內閣が定つて、現內閣が辭職して、他の內閣が組織せらるゝにしても、然らざる所の大なる問題を解決する爲に吾々は努力しなければならないと思ふ。（大正十年十一月八日）

高橋內閣成立經過

無名氏

原氏が兇刄に斃るゝや、直ぐに宮中から京都の西園寺公、小田原の山縣公に御召の電報があり、山縣、松方、西園寺の三元老に對して後任首相人選の御諮問が下つた。

然るに山縣公は原氏の兇變を聞くと同時に發熱して出京出來ないので、西園寺公は小田原に出向き、山縣公と會見した所が、山縣公は西園寺公に出馬を乞ひ、若し公自身に出馬が出來なければ、他に適當の候補者を選定して貰ひたい。現に此場

合全部西園寺公に一任すると言つた。松方公も同樣であつた。そして山縣公は平田子を代理として西園寺公の返答を待たしめた。

一九內閣は原氏の遭難當夜、永田町首相官舍に閣議を開きて臨時總理大臣を定めて之を奏請し、同時に閣員全部辭表を捧呈した。それは唯だ形式上の事として、扨て善後策を伺うしやうと云ふ話となり、山本農相が先づ總退却說を持ち出したが、之は他の關係から一言の下に排斥された。その理由としては、衆議院に絕對多數を有し、政界の中心勢力たる政友會が總裁の死去のために政權を拋棄する理由はないと云ふ事、又た首相が暗殺された結果として內閣が倒れると云ふ例を作るのは將來のため最も寒心すべきことであると云ふことが力說された。

されば と言つて、誰れを首相にするかと云ふ具體的の話となれば、差し當り名案も出ないので、政友會から西園寺公に向つてその出馬を哀願することゝなつた。之に對し西園寺公は考へては見るが、政友會自身何とか方策を立てるのが當然だと言つて彼等の勇氣を鼓舞した。

併し政友會領袖等は自ら進んで首相候補者を選定するの勇氣はなかつた。道理から申せば、此際政友會は直ちに新總裁を定め、大命の新總裁に下るのを待つべきであつたが、彼等には其の勇氣もなく、又た容易に纏まりやうもなかつたのである。彼等が凡てを西園寺公の裁きに一任したのは事情止むを得なかつたのであるが、彼等は此際一步を誤まれば官僚派から內閣を盜まれるであらうことを恐れた。

寺內々閣の倒れた時も、彼等は原總裁を差し置いて西園寺公に出馬を哀願したが、之は若し原氏を押し立つれば、山縣公が原氏では不滿足だと言つて他に持つて行くかも知れぬ。現に山本內閣瓦解後、政友會が淸浦內閣に反對したので大隈內閣の出現となつたではないか。西園寺公を押し立てさへすれば山縣公は反對のしやうがないと言ふのであつたが、此度も亦た此筆法での西園寺公引つ張り出しでもあつた。

山縣公は最初から西園寺公の出ないことを豫期して居た。山縣公の意中は忖度するに難いが、官僚派では政友會が結局後任首相を作り得ないで投出すに違ひないと思つて居る者が多かつた。政友會の方でも此際西園寺公を除いて政友會內閣の首相となるべき器はない。西園寺公は政友會を見殺しにする人ではないから、必ず出馬するに違ひないと信じて居た者もあつた。併し野田卯太郎氏の如く大局の見へる連中は、結局黨內から誰れかを押し立てるより外に道はないと覺悟して居た。西園寺公は駿河臺の邸に政友會領袖の誰れ彼れを呼び寄せて意見を聽取し

たり、又た寄しかけて行つて公の出馬を哀願する者に向つても意見を述べさせたりした。

政友會内には山本氏の總退却説に贊成する者もあつた。その理由は此際强いて政權を維持しやうとすれば、色々の無理が出て、遂には恥を曝らして野垂死をしなければならぬことになるかも知れぬ。寧ろ屑よく退却して、妥協内閣の出現を圖り、除ろに捲土重來の策を講ずるのが賢明の處置だと云ふのである。

又た一方には、清浦なり誰れなり、首だけ借りて來ては何うかと云ふ説もあつたが、首だけ借りても到底圓滿に行くべき筈がなく、假令此方は借らうとしても、貸す人が容易にあるまい。又た貸す人があるとして誰れを借りるか。清浦子か後藤男か田男か、此の三人に比し高橋なり山本なり床次なりが如何に劣つて居るか、優ることはないとしても、少くとも同等であると云ふ反對説のために忽ち打消されて了つた。此首借り説は恐官僚病の發作から出たのである。

斯くて段々と高橋押立説が多くなつた。所が少壯派に床次押立説が頭を擡げた。閣僚では山本達雄氏が總退却か床次内閣か二つに一つだと主張し、床次内閣説を西園寺公に進言したさうであるが、西園寺公は自分は床次を充分に知らぬと答へたさうである。

西園寺公は十日午前正式に自ら出馬が出來ないと云ふことを告げた。若しその夜大臣連や領袖連が原氏の葬式に參列するため盛岡に赴くことなく、十二日中に決定しなかつたなら、猛烈なる暗闘が起つて醜状を暴露するかも知れなかつた。少くとも床次内閣説は、非常の速力を以て强大となつたであらう。床次内閣説の理由は、黨内廓清の必要あること、人心を一新するとの二大根本方針のために、床次内閣を適當であると云ふので少壯派は翕然として此説に加担した。若し代議士會の投票で決めたなら大多數で床次内閣説が通過したであらう。

西園寺公が十二日午前中に、疾風迅雷の如く高橋子を推薦したのは、實に大英斷であつた。此際高橋内閣が一番無理がなかつた。若し公が床次氏を推薦したなら更に大英断であつたらうが、それには多少の無理がある。但し次の首相總裁が床次氏であるべきことは今度確定したものと私は觀るのである

偶像崇拜から出た騷ぎ

大山郁夫

一

安田翁や原敬氏が暗殺せられた事件は、現在の社會的不安の一つの現はれであるといふことは、承認しない譯には行かない。そしてこの社會的不安は大戰後の世界に共通のものであるところから見れば、あゝした事件は、世界の上を強く流れてゐる或る潮流が、偶然に我國の社會の一隅で小さき波瀾を起したものだといふことも出來よう。

が、あゝした事件は、一つの世界的傾向から派生したものだとはいふものゝ、矢張り我國の社會の一隅に於て起つたことだけにそれは、我國の社會の特殊相をも反映してゐるのである。殊に、それは封建貴族の專制の治下からブルジョアジーの支配の下への變遷が急激に行はれた我國の社會狀態の必然的產物であるやうに、私には考へられるのである。

概括的にいへば、現在の我國の社會の混亂狀態は、いづれとして皆封建的社會組織から資本主義的社會組織への急激なる變遷といふことに交渉を持つてゐないものはないのである。今それに關して一つ二つの實例を擧げてみれば、第一に我國の政界に於ける混亂狀態が、最もよくそれを說明して居る。すなはち、そこには、舊來の封建貴族の政治的勢力を代表して居る官僚軍閥もあれば、新興のブルジョアジーの政治的勢力を代表してゐる諸政黨もある。それだけなら、まだしも問題は簡單であるが、しかしながら、事實上に於ては、一方では、ブルジョアジーの實勢力の急激なる增進と共に、官僚軍閥も段々とブルジョアジー化する傾向があると同時に、他方では、封建的精神が一つの傳統として我國の社會の各層に於て尙ほ力強く働いてゐるところから、政黨政治家仲間も、少くとも表面上に於ては、尙ほ依然として官僚式優越氣取りの態度を發揮して居るのである。かういふ原因から來た政治上の紛糾關係は、原氏遭難後の政界に於ても尙ほ、昔ながらの姿の儘で經驗せられてゐるのである。

所謂綱紀頹廢の暴露から生じた政界並びに一般社會の混亂も、矢張り過渡期に於て見られる一現象である。黨人と官吏と實業家との間の腐れ緣から醱酵する醜關係は、資本主義的社會に於ける政黨政治に對して、影の形に於けるやうに、必然的に

附隨つて起るものである。それは獨り我國に限つてのことではなく、世界のどの立憲國にも共通して居ることである。アメリカに於て、富豪の勢力が如何に多數の政治家達を腐敗せしめてゐるかは、一般に熟知せられてゐることであるが、所謂模範的立憲國といはれてゐるイギリスも、この點にかけては、決して例外をなしてゐないのである。ヒレアー・ベロックの新著『下院と君主制』(Hilaire Belloc: The House of Commons and Monarchy, London,1920)の如きは、この方面に關して、また一つの新たなる文獻を加へたものであると言つていい。かういふ風に、議會政治家といへば、必ず自ら或る金錢上の惡事をして居るものか、若しくは少くとも仲間の惡事をよそ目に見て素知らぬ振りをしてゐるものかであるといふ疑ひを受けて居るのは、世界の立憲國に共通してゐる現象であつて、そしてそれが我國に於ても同じ樣に現はれて來たのは、別に不思議でも何でもないことである。唯我國に於ては、かういふ事實に對する公衆の態度なり批判なりが、まだ封建的氣風を脫し切らないで居るところが相異してゐるのである。

いふまでもなく、かういふ事實は、現在の社會制度と不可分の關係にあるものであるから、それは現在の社會制度そのものを根本的に改めることに依つて除去するよりは、外にどうしようもないものである。ところが、我國の公衆は一般に、或る道德的手段でそれを根絕することが出來るものであるといふ樣なことを、縱し漠然としてにでもせよ、考へてゐるらしいのである。彼等はこの際官界の規律や秩序を立て直ほしたり、民間の道德意識を覺醒したりなどすれば、かうした弊害は譯もなく退散するものだ、と信じてゐるらしいのである。かういふ思想なり信念なりは、封建時代の爲政者や道學者やが、『移風易俗』などゝいつたやうな文句で盛んに被治者間に鼓吹したものであつたのだが、それがまだ我國の公衆の人生觀の上に根を張つてゐるのである。所謂綱紀肅正運動などは、さういふところを附け目にして提起されたものである。

綱紀肅正運動の矛盾は、それが、政府反對黨に依つてとは言ひ條、矢張り政黨者流に依つて起され導かれてゐることである。一般に政黨といふものは、政府黨であると在野黨であるとを問はず、問題の腐敗事件のやうなものゝ發生を不可抗のものとならしめた全組織の中に於て呼吸して居るものである。それ故に、憲政會の黨首も珍品問題の當事者となつて居たし、國民黨の領袖も矢張り或る成金との醜關係が世間で問題にされて居たのである。かういふところから見ると、この方面に於ける政府黨と在野黨との相異は、たゞ程度の相異であるにすぎないの

である。それ故に、今日綱紀粛正を絶叫してゐる在野黨も、他日どうかした機ずみで政府黨にでもならうものなら、彼等もまた矢張り綱紀頽廢で責めつけられる運命に陷ることは、判り切つてゐるのである。實は彼等はさういふ運命が彼等の上に違つて來るのを待ち望んでゐるのに、運命の方が要らぬ、遠慮立てをして彼等から段々と遠退いて居るのを怨んで居るのかも知れないのである。兎に角、眞面目に考へれば考へる程滑稽千萬な綱紀粛正運動が幾分でも尤もらしく見えたのは、我國の公衆の思想の基底に於て、封建時代の遺物である所謂『移風易俗』の哲學に立脚する人生觀が根を張つて居るからである。

二

かういふ情態の下に於て、一種の英雄崇拜的氣風が、今日でも尚ほ、我國の治者側にも被治者側にも殘存してゐるのは、決して偶然ではないのである。『乃公出でずんば天下を奈何せん』といつたやうな誇張的文句は、今日の我國の政治家の頭腦から全然拭ひ去られてゐないのである。しかも事實上に於ては、如何なる政治家も、社會的及び經濟的實勢力の分布を無視しては、手も足も出ないことになつて來てゐるのである。原敬氏の偉大は、政友會の勢力を背景としての偉大であつて、彼の個人的勢力の偉大ではなかつた。無論、彼の個人的素質も幾分それに手傳つてゐたであらうが、しかし、それだけが單獨に働いて居たのでは、何程のこともなかつたに違ひない。また政友會の勢力にしたところで、實はその背後にある資本階級の勢力に頼つてゐるから偉大なのであつて、決してその單獨の力で偉大なのではないのである。それ故に、今若し政友會の背後の支柱となつてゐる物質力を除き去つたら、それはその儘に打捨てゝ置いても、自然と土崩瓦解するに決まつてゐるのである。

原氏歿後の政友會が少からず混亂狀態に陷つたので、原氏の個人的偉大が今更らに證明されたやうに見えないではなく、從つて人物中心主義的人生觀にも多少の根據があるやうに見えないではないが、しかし、私達は全然それに承服することが出來ないのである。原氏はその境遇上、政友會に依つて偶像化されて崇拜されてゐたのであつた。それは、我國の現在の各政黨が、まだ偶像なしに生活し得る程度にまで達してゐないからである。そして、集團が大きくなればなるほど、偶像の必要を痛切に感じるのであり、且つまた、集團の結束が固くなればなる程、その偶像の地位も不動になるのである。憲政會の偶像が、ともすれば幾分の動搖を見せてゐるのは、この政黨の結束が十分鞏固でないためである。これに反して、國民黨の偶像が比較

的安固な地位を占めてゐるのは、この政黨が小さいながらも、よく結束してゐるためでないとはいへない。原氏の如きは、最も鞏固に結束してゐる最も大なる政黨の偶像として光彩を發揮してゐたのであつた。しかも彼は、政友會そのものゝシンボルと見られたまでに、その偶像になり切つてゐたのであつた。それ故に、一朝不慮の出來事でこの偶像が倒れると、それが政友會そのものが倒れた程の騷ぎを惹き起したのは、決して無理ではなかつたのである。しかも實際上に於ては、それは政友會の偶像が倒れたのであつて、政友會そのものが倒れたのではなかつた。もつとも、この偶像が倒れたために政友會に幾らかヒビが入らなかつたとも限らないが、それは後日になつてから判明する問題である。兎に角今の分では、政友會はその跡に依然として殘つて居て、暫らくの間は、新たなる偶像を選擇するに餘念がなかつたのである。原氏歿後の政友會内の混亂狀態とは、つまりその新たなる偶像の選擇に必要なる論議立てに伴つて生じたものである。それは、當然至極の沙汰である。しかし、政友會は一日も偶像なしで居る譯にゆかないから、差しづめ高橋子に白羽の箭を立てたのである。そして、すべての偶像は多少サビがつかなければ權威がない通りに、この新たなる偶像も、何だかその點に缺けて居るやうに見えるのである。しかしながら、若し政友會の結束が今後いつまでもこれまで通りに續くものなら、高橋子であれ、但しは外の何誰であれ、苟くも偶像に祭り上げられたなりで納まつて居る限りは、時日の經過するうちに、次第に一廉偶像らしき偶像になり切るやうになるに違ひないのである。

三

偶像崇拜——もしくは英雄崇拜は、現在の社會に於ても何ほ多少の程度に於て存在する餘地を持つてゐるものであるが、それは或る意味に於て封建時代の遺物である。殊に我國の社會に流布してゐるそれは、封建時代的色彩の濃厚なものである。すなはち、我國に於ては、治者側の人々も、如何にも一廉の英雄氣取りの態度を以て行動して、一人で天下を背負つて居るといつたやうな、事實上ありもしないことを、さもあることのやうに見せ掛ける手品をやつてゐるのである。が、被治者側もまた、恰度それに相應して、まだ中々英雄崇拜的氣分を脫し切らないで居るのである。それ故に、彼等の間からは、反抗階級を代表した『英雄』が、一再ならず飛び出すといふやうな騷ぎも起るのである。そして、一般民衆は、時としては治者側の『英雄』に氣を吞まれてゐるかと思ふと、時としては反抗階級を代

表する『英雄』を讃歎するといつたやうな、いつの時代の群衆でも遣つて來たことを、今でも繰り返して遣つてゐるのである。

かういふところから見れば、反抗階級を代表する『英雄』が動もすれば、我國の封建時代に於ける町奴などに關する仁俠傳中に於て見られる樣な行動に出でる傾向のあるのは、極めて自然なことゝである。かういふ傳說は、今日に於ても尙ほ、或は市井に於ける寄席に於て、或は新聞紙上の講談に於て、語り傳へられ聞き傳へられて、或る見えざる感化力を民衆の上に及ぼしてゐるのである。かういふ傳說の感化力を直接間接に受けた反抗階級側の『英雄』たちは、恰度幡隨院長兵衛が水野なにがしを向ふに廻はして戰つたやうに、反對側の大物にぶつつかつて行くといふことの裡に感激の泉を發見してゐるに違ひないのである。私は安田翁や原氏の遭難事件中に於て、幡隨院式の傳說の感化力の名殘りを發見するのである。

初めに言つた通りに、安田翁や原氏の遭難事件は、現代に於ける社會的不安の產物である。それ故に、反抗階級側の『英雄』たちの行動の犧牲となるものが、大富豪であつたり、富豪政治の巨魁であつたりするのである。しかしながら、反抗階級側の『英雄』たちが『暗殺』といつたやうな個人的行動に出でるのは、前にも言つた通りに、封建時代の遺習であつて、斷じて新社會思想の影響ではない。新社會思想に於ては、富豪なり富豪政治なりの横暴が行はれるのは、或る制度の結果であり、或る制度から必然的に到來する時勢の結果であると見做されてゐるのである。それ故に、新社會思想を吸收した人々は、さうした制度や時勢を代表する個人を重く見ないで、直ちにさうした制度や時勢を正面から見つめるのである。ところが、さうした制度や、さうした時勢は個人的行動で改革が出來るものではない。そのためには團體的行動が必要である。この必要が、たとへば階級闘爭觀の如きものを產むのである。がしかし、英雄主義的個人的行動は、假しそれがどんな新思想らしき外觀で裝はれて居るにせよ、煎じ詰めれば封建時代の遺習である。我國の官憲が、かうした事件が起るたびに、所謂新社會思想の刺激に依つて行動して居る人々や集團の上に辛辣な壓迫を新たに加へて居るのは、飛んだ見當違ひである。しかも、それが見當違ひだけで濟めばまだしもだが、その結果は却て世間の風潮を險惡にして、舊式個人的行動主義の『英雄』たちを續々と飛び出させる危險性を十分に含んでゐるものである。

想華

佛蘭西を中心にして（續稿）

柳澤健

○

二月の初に伯林を指して巴里のギャルール・デュ・ノールを立つた。車中自分は鞄のなかからデーリー・ニュースの主筆エー・ジー・ガーヂナーが書いた『獨逸見聞記（ホワット・アイ・ソー・イン・ジャーマニー）』を取り出してこれから這入つて行かうとする國のことを少しでも多く知らうと思つた。この見聞記は昨年の四月、この著者が獨逸の各地を遍歴しつゝその土地々々で書いたもので、大戰終了當時の獨逸の姿がありのまゝに描かれてゐる。それが書かれてから恰度一年近く經つた譯だ。この一年の間に獨逸が如何に變つて行つたか、『破滅へ！』か『復興へ！』か、朧ろげでもあらうがこれを詳しく究めることも能きやう。斯う考へながら自分はこの知名な英國の視察者の書いた記錄を讀み辿つて行つた。

彼は先づカイゼリズムの沒落を書いてゐた。彼はホーヘンツォルレン家の復辟を不可能のことと見做してゐる許りではなく、如何なる人を以てする帝政も實現し得ないものと見てゐる。わけて工業地方に於ては『たとへそれがどんな[illegible]

守的な町であつても帝政論者に對して些かの同情も持つてゐぬし、またホーヘンツォルレン家に對して親しみのある言葉を口にしたやうなものは曾て自分は見たことがなかつた』とまで言つてゐる。『一言にして言へば、帝政なるものは軍事獨裁と一緒に死んで仕舞つたのだ。軍國主義（ミリタリズム）が復活せぬ限りは、帝政には何等の未來がない』斯う結論してゐる。

若しこの著者の觀察に間違いがなければ、自分達は獨逸に期待するに、千八百七十年奈破翁三世の失脚とともに帝政の最後の幕を完全に下し切つてしまつた當時の佛蘭西の狀態を以てしてもいい譯である。果して其處に完全に帝政の幕は下り切つたであらうか？　あれ程美事に數千萬の獨逸國民の物心兩面を統轄してゐたその帝政が『蒼白き希望』も無きまでに一擧に倒壞し盡して、これに代る強大なる新共和政が忽ちの間に樹立したといふことであつて見れば、從來鈍重保守容易に動くことがないと目せられてゐた獨逸人もその實は頗る俊敏機敏、時と倶に縱橫に囘轉する國民性の所有者であることを世界に示したことになる。果して著者の言の如く獨逸は今國を擧つて若き共和制の健やかなる生長をのみ希つてゐるのであらうか？

自分が獨逸入りに當つての興味ある疑問の一つはこれであつた。

ゼーヂナーが特に詳しく描いてゐるのは獨逸の『饑餓』であつた。食物や衣服や薪や炭やさては酒精やに窮し切つてゐる一般の國民の生活狀態に就いてであつた。殊に幼ない子供の憐れな狀態の記述は、そうした子供が戰爭の勃發・存續に就いて何等の責任も無いものであるだけに、今更ながら戰爭の害惡の甚しいことを思つて深き歎息無しに讀むことは能きなかつた。

獨逸はこゝに描かれたやうな狀態を示してから一年經つた。然も、今尚依然として斯かる狀態を續けてゐるであらうか？　若し左樣であつたならば、近來頻りに耳にする獨逸の經濟力恢復の聲がよし事實であるにしても、それは獨逸全

體としては一種の變態的な活氣に過ぎぬと見なければならない。獨逸が眞に健康恢復に向ひつゝあるか否かを知るには、そうした計數の上の判斷とともに、親しく一般の生活狀態を觀察することを必要とする。一年の間を隔てて、この著者の見た所と自分の見た所とに差異があれば、それだけ獨逸一般が前か後かいづれかに向つて動いたこととなる。これが亦自分が獨逸入りに當つて抱いた興味ある問題の一つであつた。

○

ガーヂナーのカイゼリズム沒落の文章を讀んで伯林の土地を踏んだ自分は、着く早々興味ある二つの事實にぶつつかつた。その一つは、數日前に六十一回目の誕生日を迎えた和蘭アーメロンゲンに佗住居をしてゐる前帝ウイルヘルムに對して、獨逸各地の大學の學生が夫々電報を發して彼の誕生日を祝したといふことである。『よし王政が復活されるにしても前帝は全然問題にならない。彼が國難の日に當つて一身の安全の爲に和蘭へ逃亡したこと、殊に飛行機を用ゐて逃亡したことは一般獨逸人の頭に最惡な印象を殘してゐるから』と書いてゐるガーヂナーの記事を思ひ出しながら、自分はこの著者の判斷が最初から誤つてゐたのか、それともこの一個年間に獨逸人の帝政に對する心理狀態が急激に變化し來つたのか、何れにしても『若き共和國』獨逸ライヒが、決して千八百七十年當時の『若き共和國』佛蘭西とは同一視するを得ないことを感じたのであつた。

もう一つの事實といふのは、矢張自分の入獨と前後して公布された大統領エーベルトの獨逸國民に當てた教書であつた。彼は劈頭國民が共和政體に對して頗る冷淡なことを責め、その冷淡は要するに事實の認識を缺く所に出でるとて現在の物資の窮乏・生活の逼迫等は決して共和政の罪では無く一に舊帝政の生むだ所にかゝる、然るに國民の大半は却つて其責めをば鋭意舊帝政府の失政の跡を整理しつゝある現政府に科せんとしてゐるのは、事物の原因・結果を混淆す

ること甚しと言はざるを得ないと、猶々その立場を擁護してゐるのであつた。この大統領の教書は、單に獨逸の大學生のみに限らず國民一般もよしカイゼルには祝電を發する迄には到らずとも共和政體の維持に就いて決して熱心を持つてゐぬことを白晝の下に暴露したものであつた。

自分は伯林に着いてから諸方の町に點在する數多い繪葉書屋のまへに立つ毎に、必ずカイゼルの肖像が幾種類となく並んでゐるのを見ないとはないのに氣が付いた。殊に最も駭いたのは、かの賑やかなフリードリツヒストラーセにある大きな繪葉書屋の店頭にカイゼルに關する繪葉書が四十幾種類ほども綺麗に並べてあつたのを見たことであつた。全くエーベルトやシャイデマンやの繪葉書を眼にすることは無かつたが、カイゼルとかヒンデンブルグとかルーデンドルフとかの繪葉書ならば什麼小さな店にも必ずあつた。また其後獨逸國內の旅行を續けてゐる時でも、カイゼルの肖像畫を所在の旅館等で見ることが能きた。ガーチナーが、わけて工業地方はカイゼルを冷眼視してゐるといふやうなことを言つてゐたけれども、自分は漢堡のある大きなホテルの食堂で油で描かれたカイゼルの肖像畫が麗々と正面に飾られてあるのを見た。

恰度自分が伯林に滯在してゐた時の出來事だつたらしい。ウンター・デン・リンデンからチアーガルテンへ續く凱（ブランデ）旋門（ブルクトール）を、ある一人の佛蘭西人が馬車を馳つて通り拔けやうとした。折柄一臺のタクシーが走つて來て、一寸その馬車の進路を塞ぐ形になつたので、馬車は今通り拔けやうとした小門を避けて空いてゐる中央の大門に馬を向けた。すると附近を警衛してゐた巡査が慌ててその馬車のまへに立ち塞り、大きな聲で斯う言つたといふ。

「その門はカイゼル陛下の通御のために殘（フォルベヘルテン）じてあるのだから、普通の者が通つてはいかん！」

驚ろいた佛蘭西人はこの出來事を態々巴里の「ル・タン」紙に書いたのを、後になつて自分は讀んだ。ありさうな事だ

と思つた。

斯くの如き現象・事件を書き出せば切りが無い。兎に角自分の眼に映ずる所、耳に傳へらるる所、この國の民がホーヘンツオルレン家に對して依然たる忠誠の念の所有者であることを恥としないことを知るのみであつた。當然帝政を排診して共和政を擁護すべき立場にある勞働者側ですら、兎もすれば從來自己の地位が帝國の隆盛に伴ふて向上せることに想到して、必ずしも共和政の讃美者でもないといふでにないか。一般の人心の歸趨はこれを以ても推察能きるわけである。

この文章を書きつゝある際偶々墺太利の社會主義者エフ・アウステルリッツが維納發行の『アルパイチルツアイツング』に載せた一文を讀むの機會を得た。彼は獨逸の民主化を以て一のユートピアに過ぎずとなして斯く言つてゐる。――『民主主義なるものは制度の如何に存するよりもむしろ精神の如何に存する。ある國を民主主義の國となすことなくして然もその國に民主主義的制度を布くことさへ能きる。……由來獨逸は自己の良心よりもむしろ秩序と訓練とを喜ぶ國であることは歴史が證明してゐる。獨逸政策の本義は結局する所帝政的觀念である』

この序でに最近『民主黨』誌上に現はれたエドワルド・スチルゲバウエル博士の言葉をも引かして貰はう。彼も亦墺太利の社會主義者である。

『共和政なるものは今日に於ては獨逸人の眼に滑稽なる制度と映じてゐる。獨逸人は今尚民主主義なるものは危險であるといふ考を捨ててゐないのである。この考へ方は實に老帝ウイルヘルム一世の持つてゐた感情であつたが、その感情に對して今日も尚人々は多大の愛着を有してゐるのだ。同時にこの考へ方はまた『獨逸國民は骨の髓までも帝政主義者である』と言つたかのビスマルクの意見でもあるのである』

兎に角自分の眼に映じた『獨逸共和國』は、かの耳目に觸るる總ての帝政の徴表を塗りつぶしてその上に自由(リベルテ)・博愛(フラテルニテ)・平等(エガリテ)の三語を染め出した五十年前の佛蘭西新共和國の上に思ひくらべると、實に奇怪な姿を持つた共和國であることが感じられる。町を通るとカイゼルの肖像はさらに目に付く。『宮内省御用(ホフリエフエラント)』の黄金文字は諸方の看板に光つてゐる。諸官廳にはホーヘンツオルレン家の鷲の紋章が依然として嚴めしく飾られてゐる。『獨逸は世界に冠たり(ドイチュラント・ウベー・アレス)』の國歌は從から響き渡る、上は大臣から下は小役人まで何れも舊政府當時の官吏であることから、大學生がカイゼルの誕生日に祝電を打つたり、小學校では矢張り『我が不運なるカイゼル陛下』の話を先生がしたりするところまで、一體何處が共和政であるかを訊ねたい程である。この夏の初めに現首相ウイルトが佛蘭西の首相ブリアンに送つた通牒のなかに、『獨逸は未だ極めて若い共和國なのだ、成年になつてゐる佛蘭西共和國から見たら目まだるい事も多からうが、生れて未だ三年にしかならぬことを考に置いて呉れないか』といふやうな言葉を述べてゐた。然し、それは單に極めて若いといふ許りではなく、隨分と片輪に生れ落ちたものと見ざるを得ない。

然しながら自分は、近き將來に於て復辟運動が起り、瀰漫し、成功することを豫言しやうとするものではない。否むしろ自分は曲りなりにも共和政が持續されざるを得まいと見てゐる。それは第一には聯合國の武力的の監視があるからであり、第二には少數乍ら實力ある政治上、産業上、學問上の識者が復辟を以て眞に世界の大勢に逆行するものであることを信じてゐるからであり、第三には矢張り大部分の勞働者は主義としては帝政に反對であること等を主として擧げることが能きやう。たゞ形質共眞の共和國に落く付くまでには仲々その前途も杳かであり、またその間に幾多の波瀾の湧起することをも豫期しなければなるまいと思はれる。

○

獨逸の疲弊の烈しいことを先刻ガーヂナーの筆を通して今更のやうに感じてゐたこの自分の眼に、伯林の町は如何映つたであらうか？　自分は茲でも亦彼の記載を信ずることが能きぬほどの感想を得たのであつた。道を行く人の顔色、その衣裳、品物を充たしてゐる店々の飾窓（ショーウィンドー）、そこに出入する數多い顧客、キャフェ・レストランの溢るるやうな人數それから芝居やシネマや音樂會やの滿員――一體何處に疲弊があるのだらう、敗殘の國らしい徴があるのだらう、斯う訝かるほかは無かつたのである。殊に行人の衣裳なぞを仔細に見て行くと、寧ろ巴里の町で見るやうな物よりは優れてゐることを感じるのであつた。充分の食物も與へられず、着る着物もない上に、靴さへ無いので跣足のまゝ街を歩いてゐる――斯うまで書かれてゐる子供を一人位は貧い伯林の町で探し得るかと氣を配つて歩いたが、自分の見た子供は何れも温かさうな着物をつけ、顔色も美しく、無論靴はちやんと穿いてゐるもの許りであつた。それは單に伯林許りではなかつた。自分の歩いた方々の都市に於ても、自分は矢張り元氣なよく手入れされた子供を見るのみであつた。自分はかうした子供を眺めながら、昨年の秋のはじめヴェルダンの戰跡見物に出掛けた折のことをよく思ひ出した。夥しい人々が未だに板構ひのバラック住居をしてゐた。鷄なぞを相手にしていたいけな幼兒が何人も跣足のまゝで遊んでゐるのであつた。あの人々はこの冬もそのまゝ、板構ひの家のなかで送るのに違ひはない。さうした慘めな冬を送る子供達と較べると、この獨逸の子供たちは何と言つても幸であることを思はずにはゐられなかつた。

自分は其後墺太利に這入つたが、流石にこゝの國の子供は憐れな慘めな日を過し勝ちであることを知つた。然し乍らそれでも温く寢る家を持つてゐるだけ、佛蘭西の荒廢地方の子供と較べれば幸であらう。北の寒い國で家屋と稱し得る住居も無く、もてあそぶ玩具も無く佗しい慘めな冬を送つてゐる子供たちのうへを思ひ遣ると、この獨逸の子供なぞは全く幸過ぎるとまで言つていいであらうと思つた。（數ケ月經つて自分は日本の新聞で、ある團體が獨逸兒童救濟の企てを

爲してゐることを知つた。その主催者の精神には感じながらも、その見當違ひを不滿とせぬ譯には行かなかつた。)

兎に角、耳目に觸るる限りは一般の生活狀態は他の聯合國、例へば佛蘭西・伊太利等の諸國と較べても、決して劣るやうのことは無かつた。無論中産階級に屬する人達は可成りに苦しい日を送り勝ちのやうであつたが、これとても他の諸國の夫と較べて特に苦しいといふ譯でも無かつた。勞働者階級に屬する人達ぞは、物價の昂騰率よりも賃銀の增加率が多少高いので、他の諸國の勞働者階級の者に較べて遙かに餘裕の多い生活を送り得るやうな有樣であつた。

大戰終了當時の獨逸の生活狀態は全くガーヂナーが描いてゐたやうに「饑餓」そのものであつたらしいが、それから一年經つた今日これを見ると既に美事なる健康恢復期に進んでゐることを感ぜしめる。これと倶に、世人も知る如く獨逸の經濟的恢復は諸般の數字の上に明らかに見るを得る狀態になつてゐる。殊に、從來政治・軍事の方面にあつて偉大なる貢獻を爲し遂げた組織（オルガニザチオン）の精神・制度が爾後は主として産業一般の上に現はれんとしてゐる。斯かる狀態の持續は取りも直さず新獨逸の復興（ルネッサンス）である。

自分は斯くの如き意味に於て獨逸の再起を信ぜざるを得ないが、他の方面に於ては些かその再起に就いて危惧の念を持たせられる。それは廣い意味での德義の頽廢である。精神力（メンタル・パワー）の弛緩である。『人は麵麭のみにて生くる者にあらず』といふが、獨逸は今麵麭だけで生きやうとしてゐる傾がある。

試みに伯林の町を漫歩して見る。所謂プロフエショナル・ビユウチーの夥しさには一驚を喫する。聽くと店（オフィス）へでも通つてゐる婦人は多く貰ふ人でも月に七八百馬克。邦貨に直して二十円前後にしかならぬといふ。どうやら食べて行かれるにしても、到底着物といふ譯には行かない。着物を作るためにも、定つた職業以外に手を出さざるを得ぬことになる。況んや定つた職業を持たぬ婦人にとつては問題はもつと端的である筈である。

レストランに這入る。三鞭酒なぞを拔かせながら景氣よく飲食してゐる連中が夥しく眼につく。成金（シーベー）である。供給制限で一般の者の需用が充分滿たされぬのを利用して、秘かに密輸入とか買占とかを行つて不正の利益を獲た連中である。この大小成金の數は大したものである。一般の者も機會さへあれば俺も――といふ者でゐるといふ。

芝居・寄席等に這入つて見る。人氣のある出物と言へばもう極り切つて淫蕩なものか、下品な探りからできてゐる。我々が以前獨逸といふ名で連想したあの清純な理想、堅硬な精神によつて書かれたやうなものは容易に見る事が能きなくなつてゐる。

その他、外國人と見れば金を搾り取らうとしてゐることや、旅行中兎もすれば盜みに逢ひ勝ちであることや、舉げて行けば切りが無い。伊太利邊の旅行の不安や不愉快やをよく人は口にするが、獨逸の今日の旅行も決して伊太利に勝ることはない。

斯くの如き人氣の惡化、德義の頽廢と並んで、一般學藝の研究等が生活逼迫の影響を受けて甚しい打撃を受けてゐること等を考へ合すれば、よし獨逸の『麵麭』の問題は樂觀するを許されても、それが同時に新獨逸そのものの樂觀になるかどうかは頗る疑はしいと見ねばなるまい。獨逸の眞の禍根は、賠償金にも、上シレジアにも、また復辟運動にもあるのではなくて、實はこの精神力の弛緩にあるのではないかとまでに、自分は思ふのである。

○

伯林を立つてワイマーに赴いた。朝になつて外を眺めると思ひがけなく雪が降つてゐた。そのなかをゲエテの家やシーラーの家やを訪ねて歩いた。靜かな、爽やかな文化の光に充ちてゐたその頃の獨逸が、眼のまへに泛ぶ氣がした。そこから、チューリンゲンの森を汽車の窓から眺めつゝ古いフランクフルト・アム・マインの町に赴いた。こゝにはゲエテの

生れた家がある。それをまた自分は訪ねた。

獨逸人でありながら佛蘭西の文化を絕えず愛し續けて來たゲエテ、——彼には常に國といふものを超えてその彼方を眺め得る博い心地があつた。彼は愛國心よりも先づ人道のことを考へるのを常とした。そうした彼が、恰かも惡い宿命がさせることのやうにこのラインの兩岸の國が飽きずに血を流し續けてゐる歷史の頁を如何樣の眼光をもて睹てゐるであらうか、自分は今更らしい感慨を抱きながら、彼の住むだといふ家のなかに立つたのであつた。

全く佛蘭西獨逸の邊を旅する時ほど、愛國心といふものに就いて深く考へさせられることは無い。何百萬といふ人を殺しながら尙更に殺し合ふ日を待つてゐるのもこの激しい愛國心の爲めだ。勝つた者も負けた者も均しく饑餓の苦痛に面接し合つてゐるのにも拘はらず、再びその經驗をするのを厭はないらしく見えるのもこの熾んなる愛國心の爲めだ。愛國心の働きがこれ程までに强烈なものであらうとは今迄信じ得なかつた所のものである。同時にまた、この愛國心は必しも國民を興す役割をのみつとめるのではなくて、國民を亡ぼす役割をも亦つとめるものであるといふことを今更に知つたのであつた。

斯うした感想を抱いてゐた自分は、ゲエテの家のなかに立つに及んで、今更にこの偉人の睹んでゐた道の廣さを考へさせられたのであつた。奈破翁が大軍を率ゐてこの獨逸の町に入つて來た時、微笑とともに奈破翁に握手を求めて差し出した彼の柔らかな手に含まれてゐた意味を深い思ひなしでは考へることが能きない。彼の心は、國と國との諍ひ、人と人との殺戮を超えて、その上にある靜和なる世界を望んでゐたのであつた。愛國心以外の規範をもつて動いてゐる世界、國と國との差別よりも寧ろその共通なところに意味を持たした世界、それを彼は望んでゐたのであつた。併しながら斯くも明らかに說き示された世界の意味をも知らうとしないで人々は常に新らしい殺戮を次から次へと用意してゆく、

自分は深い嘆息をとゞめることが能きなかつた。

戰爭は痛ましい。わけて佛蘭西と獨逸との間の戰爭はそれが絶えず繰り返されるものだけに一層その感が深い。加へてこの兩國の持つ光輝ある文化は夫々に世界文明の上に最も大なる寄與を爲しつゝあるものであるから、これが戰爭の爲めに其都度荒されるといふことは全く堪え難い氣を起さす。この兩國の提携・握手は遂に人力を以てしては及び難いものなのであらうか。

然し佛蘭西に對する復讐の念で充ち滿ちてゐるやうな現在の獨逸でも、少数ながらこの隣佛蘭西との心からの握手を提唱してゐる識者がないでもない。無論其等の人々の意見は純粋なる政治論の外には出ないのであつて、佛獨相爭へば何れが勝つにしても其結果は英米等の第三國を富ますことに歸着する。若し兩國相提携すれば歐洲大陸は全然佛獨のみの舞臺となり得て、初めて奸詐横暴なる英米等に對抗することが能きやう、と言ふやうなことを主張してゐるのである。是等の新勢力均衡論には自分は大して興味を持たない。併しながら、斯かる點からでも出發して、結局に於て兩國の間に戰爭の機會を滅ぼし得ることとでもなるならば、この上も無いことと思はれる。——

○

フランクフルトからハイデルベルヒ、カルルスルーへを遍歴してミユンヘンに出で、やがて獨逸の國境を越えて墺太利に這入つた。あちこちに未だ雪があつた。スチーム管の冷え切つた汽車のなかを寒さに顫へながら維納の町に着いた。

中歐の巴里とも言はれ、優雅と魅力とに溢れた藝術的な都とも言はれた維納、モツアルトとベートーヴエンとを持つた維納。あの優しいシユニツツラーやリルケやさてはホフマンスタールやを持つてゐる維納——それが何といふ變り様

が！ 自分は歐羅巴の各地の旅に於てこれほど不安と不愉快とを感じた所は他になかつた。自分は僅か三日ほどの滯在でこの町を去つてしまつた。

富と貧との間の激しい對照が先づこの町を訪ねた旅人の心を暗いものにする。一流のホテルは勿論、一流のレストラント、それからオペラ、芝居等は何時も札びらを切つて豪奢を競ふ客で一杯であると言つていい。通りなぞでも白粉臭いかがはしい女なぞを連れて横行してゐる堂々たる服裝の持主が頻りである。これは伯林邊でも頻りに見た一般の物資缺乏に依つて不自然に富を爲した成金の連中と、目下の墺太利の極度に下落した爲替關係を利用して廉價に贅澤しやうといふ外國人とである。然しながら、この絢爛な渦卷のなかから一歩出て、眞の維納市民の生活が什麼ものであるかを仔細に見るがいい。彼等は着るものは愚か、食べる物にさへ事缺き勝ちである。いくら働いたとて止め度なく昂騰する物價には到底追從することが能きぬ。スープ一杯でも二三十クローネ、靴一足でも二千クローネもするといふ有樣である。彼等は全く他の援助救濟のお庇でやつと生きて行けるだけである。言つて見れば、米國の救濟委員會の手や政府の借金政策（當時、政府は國内にあつた數萬枚の絨毯を秘密に賣つて食糧品を買つたといふことも聽いた）やで辛うじて口を糊して行つてゐる譯である。まるで人工呼吸である。從つて文字通り飢餓の爲めに命を落す者も尠くなく、生産率の如き死亡率の恰度半ばにしか當らぬので、このまゝに行けば十五年のうちに維納の町は全然無人の廢趾になるといふ。

貨幣の價格の極度に下落してゐること――換言すればこの國の人々が物價の昂騰に苦しめられるのに反して我々日本人なぞにとつてはその物價が驚ろく程廉いことは、また初めての旅人の心を言ひやうなく不安にする。自分は三日間旅館にゐてその部屋代として七百クローネほど拂つた。然しその多額の墺貨も當時の邦貨に換算すると二圓とすこしにしか當らないのであつた。食事だつて一圓もあれば佳い葡萄酒を一本拔かせてしたためることが能きた。物資が極度に不

足な國へ來て、斯う廉價で飲食が能き起臥が能きるといふことは、何と言つても不自然なことに思ひたかつた。自分に屬してゐるものを飲食してゐるとしか思へなかつた。また事實その通りでもあつた。——

ドナウ河の鐵橋を汽車で渡りながら、後にした維納の町の方を深き思ひをもつて眺めやつた。戰爭の悲慘が、人間の暗愚が苦汁のごとく胸に集つて來た。

○

キールの運河の近くの畑道を歩いてゐたら雲雀が啼いてゐた。あゝもう春だなと思つた。それから數日後、約一月振りで巴里へ戻つた。リユクサムブールの公園なぞを歩くと、リラの柔らかな芽が背く萌え出てゐるのが眼に映つた。春はもうそこまで來てゐるのだつた。

温かな日が續く。樹の芽が一日一日大きくなる。眞黑な堅硬な感じのする幹枝に柔らかな青いろの芽が寶石をかざつたやうに附きはじめる、女の着物などにもやゝ派出な色が現れてくる。空はいつもあまい薄荷酒のやうに軟らかに融けこんでゐる。

La douce France(優しい佛蘭西！)それから Le ciel daux de la France(佛蘭西の優しい空！)これは好んでこゝの國の人の用ゐる言葉だ。その言葉も、初春の頃から初夏にかけての巴里の姿を言ひ現はす以上に適はしい時は無いと言つても宜いであらう。何といふ優しさ、甘やかさ、軟かさ、空も樹も風も人もすべては香料のやうな光と色との間に揺れてゐるだけだ。羽のやうに輕く痺れるやうに優しいこの國の春を呼吸して見て、自分ははじめてこゝに生れた藝術の數々の持つ香氣をはつきりと悟ることが能きた氣がした。

アルベエル・サマン。近頃になつてわけて佛蘭西人の間に愛せられるやうになつて來たこの靜かで仄かな心を持つた詩

人、この人の作に現はれた『羽のごと魂の微かにも觸れゆく』唄の微妙なる趣は、決して彼の優雅なる想像からのみ生れ出でたものではなかつた。實にそれは佛蘭西の自然の持つ性格（カラクテール）に他ならないことを自分は目の當りに知ることが能きた氣がした。このサマンの詩は延いて自分に現代の樂匠ギヤブリエル・フオーレの音樂を思ひ出させる。この人の作品も亦實に靜かで仄かで匂やかな色彩に充ちてゐる。『流るる水の燦びやかなる光、その透き通る色合』を何よりも想ひ出させるとある評家は言つてゐる。それは取りも直さず佛蘭西の自然の持つ性格だ。そして、サマンの詩や、フオーレの音樂やが、到底『ラインの彼方の人達』には判らぬものと言はれてゐると同じやうに、こゝの自然の持つこの Douceur (優しさ)も亦ラインの彼方計りではなく、何國の國にも見ることを得ないところのものであると思ふ。

が、それだけまたこの優しい女性的な愛撫は、人の心に兎もすれば危險と冒險とへのノスタルジーを惹き起さす。それは過度までの優しさである、それが却つてそれに反逆の心をさへ目覺めさすのである。自分は、この巴里を捨てて遠く南洋の孤島タイチに走つた畫家ポール・ゴーギヤンの心持も、ありありと判るやうな氣がした。また今阿弗利加のアルジエリアに老ひの日を送つてゐる樂人サン・サンスの心持も思ひやることが能きると思つた。芝居に歌劇に小說にあんなにも頻りに現はれてくる異國情調（エグゾチズム）も亦、この佛蘭西の自然と結びつけてはじめて充分會得が能きるとまで思ふ。——藝術はその土地に育つた樹木だ。やつぱりそこに行つて見なければ。——とつくづく思つた。

○

四月、もう巴里はすつかり夏らしくなつた。プラターヌやマロニエやの若葉で、町々は仄暗いまでになつた。そうした巴里を後にして自分は畫家の太田三郎氏と二人で端西・伊太利への旅にのぼつた。

『ミラノの人スタンダール』——この言葉を故上田敏博士の文章から教つてからもう十年にもならう。アルプスの峠を

越えてそのミラノへ着いた晩に、自分はこの町を斯くも溺愛した佛蘭西人のことをすこしでも知りたいと思つて、アンドレ・モレルの書いた彼の評傳をとり出して讀みはじめた。彼の五十九年の生涯のうちで十七年程伊太利にゐ、先づ斯う書いてゐる。回數にしたら十度ほども來てゐる。そしてこの町には續けて七個年も滯在してゐたことがある。――

彼の最初の旅は十七歳の時だつた。『熱情(パッシォン)の伊太利』はすつかり彼を魅した。彼は再びその國を見たさに、日頃の小遣ひを儉約してその旅を企てることにした。――斯うした叙述は先づ自分の心を動かした。それと同時に、日頃の小遣を儉約すれば容易にそうした旅の費用を生み出すことが能きる國をそゞろに極東に偏在する我日本の國に思い較べぬわけには行かなかつた。

歐羅巴と日本と、せめてこの距離がもうすこし近いものであつたら、我々はもつと容易にもつと氣輕に旅をし合ふことが能きる。最も早い路で四十日ほど、その爲めの往くだけの船賃でも千圓ほど、これを考へても仲々日頃の小遣ひを儉約するだけでは實行が難かしいと言はなければならない。從つて、我々の大半といふものは、幼ない頃からかくまでも屢々聽かされたミケランジエロも、ラツフアエロも、さてはヴエネチアの水も羅馬のコロセオも親しく見る機を得ないでそのまゝに逝かねばならぬものと思はなければならぬ。

然しながらそれを今誰に恨まう、たゞ親しくその地を踏み得た欣びにも拘はらず、自分の心にはなほ大きな悩みがあつた。それは、恨む當的(あて)のないものではない、當的(あて)の確かに存在するものであつた。

如何にその土地を愛する人でも、また如何に時と金とに餘裕のつく人でも、日本に生れた限りは、到底スタンダールが爲したやうに一生に十度もその土地を踏むといふ譯に行かぬのは知れ切つたことである。從つて、幸に外遊の機會を得た人でも限りある日の間に能きるだけ多くの見聞を得ることに努めなければならない。例へばスタンダールが十度で

得たところのものを、我々は一度で得ることをも心掛けなければならないのだ。

然るに我々がこの伊太利を訪ねたとして、この國に存在する學問・美術其他一切の秀れたるモニュメント――それは實に歐羅巴文明の源泉を形作るものである――を探究しやうとする。我々は限られたる日數を持つ者なるが故に非常を探究するには能きるだけあらゆる冗費(むだ)を防ぐとを何よりも必要とする。同時に能きるだけあらゆる懇切な指導をも必要とする。然るに我々はその探究に當つて實に何から何まで自分一人で遣らねばならないのである。誰も彼もが、エー・ビー・シー・から始めなければならぬ。一人の遣つたことがそのまゝ他の人の經驗の基礎となるといふ譯には行かぬ。言はゞ、荒蕪地を割當てら　てそれをばら〳〵に耕すやうなものだ。樹の根を除き、草を刈り取るのに皆が苦しまなければならない。さうした結果漸くのことで耕作地の形を備へた頃には、もう種を蒔く餘裕もなくそこを立ち去らねばならない。全く世のなかにこれ程心殘りのことがあるであらうか？

フイレンツエとか羅馬とか、斯うした土地には必ず諸外國のアカデミーが存在する。この常設の機關は、一方絶えずこの國の光輝ある文物の研鑽を努めてゐると同時に、自國から訪ねて來た研究者等に能きるだけ研究上の便宜を與ふることを目的としてゐる。思へ、それが僅かに『日頃の小遣を儉約』すれば容易に來られる土地なのだ。一生の間に十回も訪ねて來ることが能きる土地なのだ。それにも拘はらず夫々の國家は根抵ある文化の涵養に資せんが爲めに巨資を割いて斯くの如き機關を設置してゐる。然るに、上にくだ〳〵と叙述した樣な慘めなる狀態にある日本の研究者は、斯かる機關が他より比較して一層重要であるにも拘はらず、何等持つを得ないのである。唯一つの日本大使館を訪ねても、我々は遂に參考とすべき一冊の本の書名すらこれを指示して貰へぬのである。

或者は言はん、歐米諸國の伊太利に對する關係を以て日本を律するのは穩當と言ふを得まいと。それならば自分は、

古來日本と最も緊密なる文化的關係を有してゐた支那・印度に於ては如何樣である乎と尋ねたい。自分は曾て是等の土地に日本のアカデミーを設置しようと言ふが如きは單純なる私人の意見としても餘り耳にした事が無いと言つてよかつた。更に或者は言はん、餘裕無き國家の豫算はかゝる企ての有用なることは認むるも直ちに實行することは認むるを得まいと。併し自分が歐洲旅行中耳にした所に依ると、少尉位でバルカン邊を旅行してゐる者に對して日本政府は月額千圓程を支給するといふことであるし、また矢張り在歐の某佐官が、月々の給料のうちから常に千圓づゝ日本の家族に送つてゐるといふことであつた。現に斯くの如き地位にある軍人が陸軍だけでも巴里に七十人程ゐやうとい　話なのである。自分はアカデミーを置く位の金が豫算に計上し得ないとはどうしても考へることが能きない。

日本が軍國主義じやないと言つてゐる人々が大分にある。自分も左樣信じたい。然し上のやうなことを我々は何と說明すべきであらうか？

スタンダールから話がえらい方に飛んで仕舞つた。然しスタンダールは奈破翁麾下の龍騎兵將校であつたといふから軍人の話で終つても左樣不自然でもないかも知れぬ――

○

優しい佛蘭西を見て今更に殖民地へ渡つたポール・ゴーギャンの心持を思ひ遣ることが能きた、と前に書いたが、伊太利を步いてまた今更に未來派の運動がこゝに生れたことの無理がないのを感じさせられたのであつた。

何とい　夥しい豐饒な過去！　誰しもこの國を旅しながら『この熾んな過去をまあ見て呉れ』といふ聲を建築から繪から彫刻から町から山から、聽かぬものはないであらう。ゲエテが子供の折よくその父親から『諸國を見終つてから伊太利を訪ねるがいい。何故といふに伊太利こそは世界の國々のうちで最も美くしい國だから』と言ひ聽かせられたとい

ふ。全くこれだけ美くしく豊かな過去をそのまゝに持つてゐる國は到底他にありはしない。

この過去のまへに立つて我々は痛い程耳に強く『この燦んな過去をまあ見て呉れ！』といふ聲を聽いたのであるが、それと俱に、かゝる聲のなかにあればこそ衷心から『未來に生れるものをまあ見て呉れ！』と叫ばざるを得ない未來派の魂の聲を、ありくと感じることが能きる氣がしたのである。

『ルーヴルを燒いて仕舞へ！』『サン・ジユリアンの寺院を壞して仕舞へ！』斯うした烈しい言葉を用ゐてゐるダダの新藝術運動を、巴里にゐる間こそ微笑をもつて聽いてゐたのであつたが、この伊太利に渡つて見て、それに類した未來派の主張を耳にしても、もう笑ふことは能きなかつた。それは決して單純な思付きから生れたものでもなく、徒らに新奇な企てと言ふべきものでもなかつた。壓し潰さうとする『過去』を押し除ける必死の姿であつた。

伊太利の花やかな文藝復興（ルネツサンス）の歴史も、今から見れば、矢張り壓し潰さうとする重い『中世』を跳ね除けて生れ出でた必死の姿に他ならなかつた。あゝも夥しい天才が一時に續出したといふことは不思議な氣さへ起るが、またそれを生れさせずには措かなかつたのは實にその重く暗い中世が遂に人々をして自由か死か何れかを選ばせずに措かなかつた爲めであると言へるのである。その歴史が今また新しい姿をもつて現はれて來たのだ。——

これは單純に藝術の方面計りではない。伊太利全體が斯うした問題を抱き込んでゐると思ふ。ダヌンチオがこの戰爭中、『伊太利は從來觀光客のために存在してゐたやうなものだつた。まるで骨董店のやうなものだつた。然し今後の伊太利は過去から眼覺めて、新らしい世界に突進しなければならぬ』といふ意味の言葉を述べてゐた。全く、このまゝの伊太利だつたら、彼は完全に『過去』のために壓し潰されてしまつたことになる。この『過去』を勇敢に押し除けて、眞に伊太利の懐かしい新生を見ることが能きるか如何か、これは一に將來にかゝつた問題であらう。

○

北伊太利の各地を歩いて漸く『永遠の都』羅馬に着いた。十日程そこに滞在してから更にナポリに赴いた。ブリンデシから希臘の雅典に渡らうとした計劃は、船便の都合で如何しても實行能きぬことになつて仕舞つたので、その希臘の本土よりもいつと『希臘』があると言はれてゐるシシリアの島を巡らうといふことにして、このナポリから船に乘つた。

アルプスを越えて伊太利の土地に足を踏み入れてからもう一個月近くの日が過ぎた。その間、繪と彫刻と建築、――そうしたもの許りを見て歩いた。ミケランジエロの偉大は今更らしく言ふまでもない、レオナルド、ラツフアエロ、ボテチエリ、ジヨツト、リユイニ、ベネゾ・コソリ、チチアノ、チントレツト、ドナテルロ斯う名を並べるだけでも目まぐるしいまでに夥しい不朽な藝術家の作品を、貪るやうに見て歩いたのだつた。自分はそのまへに立つて興奮し感激し涙さへも感じた。『世界で最も美くしい國』――ゲエテの父親の言葉が、何時も頭に浮ぶのであつた。

然しながら、やがて自分は餘りに貪ぼり過ぎたことを感じるやうになつた。否それとも斯うした伊太利名匠の作品が餘りに華麗で豐富で多錯であり過ぎたためかも知れなかつた。自分はこの燦びやかな空氣から一歩出て別種な――爽やかな飾りのない微風にでも吹かれたい氣持を起すやうになつた。そうした心をもつて、ナポリからシシリアのパレルモ行の船に乘つたのであつた。――

パレルモの港から數時間の汽車で行けるセジエスタ、この寂しい山野に孤立してゐる希臘の殿堂を初めて見た時の自分の感動は！ 壞れかけてはゐるものの、その氣高く靜かな單純な美は、あらゆる生命、あらゆる品質、あらゆる優美をつゝんでゐるのであつた。自分はしばらくは息をすることを忘れたやうに、その殿堂のまへに立ち續けた。今更に古代希臘の偉大に想到した。『伊太利もいいが矢張り何と言つても希臘だ！』自分は幾度も口のなかでそれを言つた。

ジルジエンタといふのは、地中海に向いた方の海岸にある。こゝにはシシリア全島を通じて最も多くの『希臘』が殘つてゐる。それを片つ端から見て歩いてゐるうちに薄暮になつてしまつた。その折の印象を、當時の日記のなかから引く。――

『……コンコルディアの殿堂からジユノー・リユシナの殿堂は更にすこし坂上になる。この靜かな道を、ジユノーの殿堂にたどりついて、今更にあたりの野と山と海と空の夕日とを眺めたとき、たゞたゞわれは嘆息をもらすのみであつた。何といふこの境！　自分はいつしか希臘のなかに生くるものの如くに感じた。ニムフが、フオーンが、そこにありありと生きてゐた。希臘の船が、その薔薇いろの夕日に霞むエムポリウムの港にはいつてくるのをも自分は現のなかに見るのであつた――

驢馬の哀音ははるか下の白い道の方に起つた。岩を攀ぢくる山羊もあつた。羊の群を追ふてゆく牧者の影もむかうに見えた。再びコンコルディアに佇んだ時には、夕日が月のやうに白くかなたの山にかゝつてゐた。大きな石の柱に手をかけながら、この情景は一生忘れまじと自分は眺め入つたのであつた……』

このコンコルディアの殿堂は建築家バージルをして『希臘建築に於ける線のカーヴに就いて』と言ふ有名な論文を書かしめたと言ふ。まことにその建築美が人の心に與へる感動は大きい。然し、自分はそれとともに、この建築をつゝむ自然の美くしさをも亦感ぜざるを得ない。その建築に斯かる自然を背景とすることに依つて、その美しさを倍加する。單にそれはこのコンコルディアの殿堂許りではなく、自分の見た限りの希臘建築は皆夫れであつた。其後に於ける歐羅巴の如何なる建築樣式らも、到底この希臘建築のごとく、自然と完全に抱き合つたものは無かつた。かゝる意味合からしても、希臘建築美はわけて、寫眞版等に依つては到底飜譯し得ないことを感ぜしめられる。自分は本當にこゝまで來て

よかつた、とつく\/\思つた。

　ジルジエンテからシラキユサ、それからタオルミナ、斯うした古代希臘の匂いの殘つてゐる土地々々を、イオニアの海越しに吹いてくる希臘の風に當りながら旅を續けた日は、自分の歐羅巴の旅のなかでもわけて樂しい時であつた。

○

一個月半を伊太利の土地に費やして、五月の末に巴里に戻つて來た。日本を指して歐羅巴を立つ日はもう二個月位の先に迫つてゐた。それなのに見たいもの聽きたいもの知りたいものが數へ切れぬほど前に横はつてゐた。然しながらそんなことを言つてゐれば何日まで立つても切りのないことも考へた。兎に角一通りは見たのだ。大體の樣子だけは判つたのだ、これで一應日本へ戻つて、更に距離を隔てて是等のものを見直すことにしやう、——斯う思つて自分は靜かに日本へ歸る支度などにかゝつた。

　歐羅巴の一個年を振り返つて考へて見た。五個年の戰爭の痕跡は、あらゆるものゝ上にあり\/\と見る事が能きた。それを見ずには一日でも送り得なかつたと言つてよかつた。殊に自分が最も永く滯在した佛蘭西に於て、其感じは特に强かつた。然しながらそうした蕩揺した状態のなかにあつても、容易に動かない堅硬な方面のあることを感じない譯には行かなかつた。それは、言はゞ文明の根强さとでも言へるものであつた。古い文明の堆積が現在の社會を頑丈に支持してゐるといふその力であつた。表面の動揺は容易にその土臺までには傳はらないといふその力であつた。從つて、戰爭の惨禍はあらゆる方面に擴く行き亘つてゐるのにも拘はらず、それが思つた程深くへは滲み込んでゐない樣に思はせるのである。この底力は、全く死よりも强いものゝ樣に思はれた。自分は今更のやうに過去の文明の力を、歴史の力を、傳統の精神の力を考へさせられたのであつた。洋行して『新らしいもの』を捉むかはりに、自分は『古いもの』を捉ん

で來た。オーギュスト・コムトが『人は生ける者に依つてよりも死せるものに依つて生存する』と言つたその『死せるもの』の力をまさ〳〵と見て來たのである。——

七月の最后の日に自分の乘る船は馬耳塞を離れた。自分の行手は、『若き』日本であつた。古きもの、死せるものの力が殆んど滅びかけてゐる『新らしき』日本であつた。……

時論

法學博士 吉野作造

原首相の兇變に就て 當局の一官人に與ふるの書

原首相の意外の兇變につき、直接取締の局にある君は嘸ぞ心勞を極めて居ることであらう。原首相の政見に對しては兎角の批評もあつて、僕自身も服し得ざる多くの點を有つて居る。が稀に見る偉才として不時の兇變を愛惜するの情に於ては、僕と雖も人後に落ちるものではない。併しこんな事は今更云つても返らない。只斯の如き不祥事は今後絶對に繰り返させたくないものだ。人心の險悄に趨きつゝある今日に於て特に此感を深うする。此點に於て僕は特に君の手腕に期待する所甚だ多からざるを得ない。

先達は安田翁が殺された。今度復た首相の兇變があると、世間は何となく同じやうな事がまた繰り返さるゝことがなからうかと心配する。取締の局に當るものが、更に一層の熱心を以て將來を警戒すると云ふ態度に出づるのは怪むに足らない。當の犯人を捉まへて之を嚴重に取調べるに手落ちがないばかりでなく、更に其周圍の八方に手を入れて少しでも怪しいものならば之を見逃すまいとして居るのも將來を警戒すると云ふ懸念から見れば首肯かれる。僕等から考へても近頃の人氣は可なり荒いやうだ。人心變を思ふと云つては大袈裟だが、今度の兇變を見ても之を單純な突發孤立の事件と見る譯に行かないやうな氣がする。從つて僕等も亦君等と同じやうに之について相當の對策法を講ずる必要を認めて居るのだが、之については正確なる診斷が先決問題だ。而して君達は昨今の社會の病状をどんな風に診斷して居られるのだらうか。

詳しい事は分らない。が新聞の報ずる所によつて、君達や君達の仲間の遣られて居る所を見ると、正確なる診斷をするのに必要な條件を萬遍なく突き止めて居るかどうかが疑はれねで

ない。病菌の伏在すと認めた所に大清潔法を完全に遣らうとする誠意と熱心とは認める。併し、傳染病の蔓延を防がうとして、脚氣で死んだものまで始末する必要はあるまいし、又同じく傳染病で死んだものでも、此等豫防の方式を以てしては天然痘は防げない。世の中が進むと病氣にもいろ〳〵のものが出て來る。此頃のやうな變轉期に於ては格別愼重な研究を積まないと往々にして誤ることがあるぞ。聰明な君には疾くにこんな事は分つて居る筈だ。

之は直接君達の遣つて居る仕事を批評するのではないが、新聞などでは今度の兇變を大久保利通、森有禮や近くは星亨の暗殺と比較する議論がある。大久保、森の暗殺は一面誤解と狂躁との結果ではあるが、主としては政治上の理由に基く。星の暗殺に至つては彼の政治的行動に對する不滿が殆んど唯一の原因で、純政治的暗殺たることと一點の疑を容れない。要するに政治家の暗殺は其原因專ら政治的であつた所から、今度のも亦政治的性質を帶ぶるものであらうと頭から極めてかゝる議論が多いやうだ。だから一方には原氏の政策を極力非難した反對黨の議論が、自ら無垢の少年を煽動したと云ふ風に觀るものもあるし、他方には原内閣の誤つた政策其物が畢竟自ら禍を招いた事になると說くものもある。密かに聞く所によれば、君達の仲間では、此際原氏の人物及び政見を主題とする非難攻擊は新聞雜誌に書かすまいと云ふ評議があつたとやら。其眞僞は分らないが孰れにしても兇變の動機を專ら政治的方面に求めんとする點は同一だ。併し我輩の觀る所によれば、之が果して唯一の、又は少くとも主要なる理由であらうか、甚だ疑ひなきを得ない。

尤も右のやうな政治的理由も眼中に措かないでいゝとは云はない。疫病で惱んで居つた時に、不幸にも亦風邪を引いて死期を早めたと云つたやうな助成因にはなるかも知れない。或は風邪を引かなかつたなら死なずに濟んだと云つたやうに重い働をを此場合爲したとも見られやう。けれども根本の病源は政治的方面に求むべきものでないやうな氣がするので、そこで僕は態々此手紙を君に書く氣になつたのだ。僕も亦昨今の社會狀態に對しては深き憂を抱いて居るのだから。

尙僕の密かに考ふる所によると、今度の兇變の原因が、主として政治的であり、又此方面の外に憂ふべき何物もないとするなら、原首相の兇變其事は夫自身極めて重大の問題であるけれども、之を一つの傳播性を有するものとして怖るべき理由はないと思ふ。癌は恐るべき病氣だけれども傳染性はない。伊庭想太郎や西野文太郎やはさう澤山あるものではない。絕對にない

とは云はないがコレラやペストを恐るゝやうな態度で臨む必要はなかりさうに思ふ。

考へても見るがいゝ。大久保の殺されたのは幕末の餘勢尚去り遣らず、打つたり切つたりを何とも思はなかつた時代の事だ。些かの政見の相違があゝした結果を産むと云ふ事はあの當時には怪しむに足らない。況んや大久保の傲岸は當時最も強く反對黨の惡感を喚つたにおいてをや。今日は時勢が違ふ。どんな傲岸な政治家でも、朝鮮にでも行つたら格別、內地に居つて大久保と同じ制裁を受くる氣遣はあるまい。森有禮や星亨の暗殺は假令其間に幾多の誤解があつたにせよ、相當の人が相當に考へた結果の行動で、中にも後者の場合に至つては深思熟慮の後の斷行であつた。斯う云ふ事は決して澤山あるものではない。社會全體が指彈きをするやうなものでも、社會の爲に進んで之を抑へつけると云ふやうな所謂義人は滅多にあるものではない。我々は寧ろ其乏しきを嘆ずるもので、社會の道德的制裁力の弱いのも、畢竟勸善懲惡の熱が足りない所にあると考へる。從つて社會の爲めに害惡を除かうとて進んで自ら殺人的行爲に出づると云ふやうな事は容易にあるものではない。少くとも斯う云ふ風は段々少くなりつゝあることは疑を容れぬ。尤も人によつては名の爲めに斯んな事を遣るものもあらうなどゝ云ふ人もある。殊に今度のやうな兇變があると、彼は名の爲めに遣つたなどゝ說くものもあるが、如何に名の爲めとは云ひながら、自分の生命をまで捨てゝかゝる程の無謀の者はさう多くある筈はない。假令偶々あつたとしても之が傳染性を有すると觀るのは斷じて誤りである。今日の人間は假令年少氣銳の士と雖も、生命に對する執着は寧ろ強過ぎる位だ。故に今度の兇變の如きも若し之が大久保や星の暗殺と同じやうな種類のものであるとするなら、之を病氣に譬へば癌のやうなもので、ペストやコレラと同一視すべきものではないと思ふ。

之も新聞の報ずる所によつての話であるが、今度の兇變が起ると直ぐに、所謂社會主義者の方面に探偵の眼を放つたと云ふ事である。當局としては當然の所置でもあらうが、之も少し見當は違ひはしないか。所謂社會主義者の仲間の中には平素可なり粗暴過激な言論を縱まにするものはある。併ながら社會主義は決して大臣の暗殺などを鼓吹するものではない。西洋では斯う云ふ仲間から虛無黨のやうなものが事實起つて居るから、主義の理論的詮索を離れてテロリストの發生を警戒すべく、此等の仲間を監視するの必要はあらうが、日本に此等のものが起つて居るか、或は起らんとしつゝあるかは尚一層愼重なる講究を要

すると思ふ。此點については何折を見て親しく會つて君と話さう。君達の仲間は餘りに最近の社會主義者の動靜に通じて居ないやうだ。彼等の間は昨今中々複雜で、局外の者にはなか〳〵分らない。下級の刑事なぞの報告のみにたよつては大變な間違だと云ふ事を意に留めて呉れ給へ。勿論放任していゝとは云はない。けれども又取締りが肯綮に中らないと却つて穩健なものまでも驅つて過激なものたらしむる惧れがある。此點が實に此種取締方策の最も愼重な態度を必要とする特色だ。欺僞や泥棒の不逞の徒を取締ると同じ心持でやつては飛んでもない結果になる。昨今の形勢を眞に憂ふるなら、どうか僕の此忠言をよく嚙み分けて貰ひたい。

どうも僕の考へでは、今度の兇變は專ら政治的動機から來るものではないやうだ。無政府主義的冥想から來るとも見難い。只何んとなく社會の何處かに暗雲が棚曳き、それが年と共に濃厚な低氣壓を作りつゝあるやうに思はれてならない。果してさうだとすると、其低氣壓が何時勃發して雨となるか風となるか分らない。茲に君達が今回の兇變を傳染性を有するかの如く見て大いに心を惱まして居る所以があるのだ。若し之が無政府主義的の考に動かされて遣るのなら、やりさうな連中は大抵分つて居る。誰が遣るか分らないと云ふ所に深く考ふべき點があるのではなからうか。彼れほど警戒を嚴にして居りながら、あゝした結果を見たとて警視廳邊では恐懼措く所を知らずと云ふ有樣なさうだが、併し僕から觀れば、そこに何等の不思議はない。豫め警戒すると云へば、社會主義者のどの仲間とか、政府反對のどの仲間とか、大抵眼の着け所は定まつて居る。其以外に眼の着けやうがない。而して此等の連中は口では隨分亂暴な事を云はうが、滅多に之を實行するものではない。豈に圖らん哉實行は意外の所から來た。之ではどんなに警視廳が要心しても氣の附けやうがないではないか。空氣傳染の疫病に對して現代の醫學が、殆んど爲すなきと同樣の感がある。そこで僕はこう云ふ不安の狀態を來たしたその源が何處にあるかを、も少し立ち入つて君方に考へて貰ひたいと思ふのだ。今度の兇變は取調べの結果或は意外にも僕の心配するやうなものでなかつたかも知れない。それならそれでいゝが、併しそれと別にして僕の次に述ぶる點は、樞要の地位にある君達に是非共愼重に考へて貰ひたいのである。それは何かと云ふに、現代社會に對する勞働階級の心理と云ふ事である。

勞働者の心理などと云へば君達は、何の事だ、そんな事なら

改めて聽くまでもない、と云ふだらう。そこだ。問題は君が遂勞働者の問題に一通り通じて居る積りで居る所にある。勞働問題の事は僕も專門でないからよくは知らないが、之まで多少注意はして來た、少くとも君達の程度には通じて居つた積りだ。所が此頃になつて僕達の知識は意外に淺薄なものであつた事を發見して居る。否、我々は勞働者の心理が今日此處まで深刻になつて居る事を見て驚いたのである。君達には分るまい、と云つては失禮のやうだが、僕達すらが分らなかつたのだから、君達に分らないのが當然だ、言葉の不遜を尤めずして先づ事實を正當に見て呉れ給へ。

勞働爭議などの起る度毎に、君達はよく勞働者は二三矯激の思想家に煽動されたと云ふ。勞働爭議の中には煽動の結果として起るものも無論少くはないだらう。併し君達は今尚此等の煽動がなければ勞働爭議は起らないと考へて居るか。最近ふとした事から少し突き込んで此等の事情を研究して見て僕の驚いたのは、勞働者が問題を自分の問題として生命(いのち)懸けでやつて居る其眞劍味の濃厚な事である。君達は思想家が勞働者を煽動して居ると見るが、煽動どころか、勞働者の眞劍の運動に引張られて思想家の方が手も足も出ない狀況にあることを念頭に置いて貰ひたい。熱のない勞働者を結束する爲めに困つたと云ふのは二三年も前の話だ。今日僕達の友人の勞働運動に從事して居るものゝ最も苦心して居る點は、如何にして勞働者の生一本の突擊的態度を適當に指導すべきかと云ふ點にある。こんな事は殿上人には容易に分るまいが、流石に君丈けは略ぼ諒解が出來るだらう。

も一つ考へて貰ひたいのは、勞働者の眞劍になつて居る結果昨今の對勞働政策をどう觀るかと云ふ事である。表面の理窟は抜きにしよう。勞働者の氣分を今問題として居るのだから、步退いて勞働者が今日の資本家なり政府なりの態度をどう觀て居るかを研究しよう。勞働者と資本家との對抗戰に於て、勞働者は曾て一方の活路を開かれた事があるか。勞働者の根本主張がいゝかわるいかは別問題として、政府は曾て彼等の運動に一方の活路を開いてやつた事があるか。國際問題でも最後の勝利に因る平和の解決は根本的の解決ではないと云ふ思想の瀰漫する今日の時代に於て、何事でも獨り勞働問題に對し、最後の勝利に因つて之を解決せんとする態度の、政府及び資本家に濃厚なることや。最後の勝利に因る平和は敗者をして臥薪嘗膽の復讐を準備せしむるが如く、昨今の勞働界の狀況は一問題が起る毎に勞働者の復讐心を非常に濃厚ならしめる惧はないか。君は最近勞働爭議が勞働者の無條件降伏に終つた例が屢々繰り返さ

れたのを何と觀て居るか。

人によつては勞働者がさう云ふ風に考へるのが間違ひだと云ふ。或はさうかも知れない。併し、間違であつてもなくても、さうした考を日に日に深くして居ると云ふ事實の前には我々篤と眼を刮く必要はないか。而して之は勞働者の誰彼、又勞働運動指導の任に當る誰彼の問題ではない。一般の空氣が斯くして段々陰欝になつて行くことが見逃すべからざる現象だと考へるのである。

斯うした氣分は、勞働者と共に所謂勞働運動の指導を事として居る階級も共に有つ所だ。が、併しどんなに彼等が煽動者として政府や資本家からイヂメられたとしても勞働者のやうな氣分にはなれない。此處に僕は特に君の注意を惹きたいと思ふ。所謂指導階級も其立場になつて考へて見れば、隨分イヂメられては居る。世間からは惡口を云はれる。牢屋にも打ち込まれる。夫れでも彼等は大學を卒業したとか、相當の教育を受けたとか云ふ丈けで、兎も角も飯丈けは喰へる。彼等が呪つて居る現社會は焉んぞ知らん矢張り彼等を特遇して居るのだ。どんな底まで苦しめられてはゐない。其處に我々は彼等の呪咀的態度にも若干の餘裕あるを見ると共に、彼等が自分の死活問題として專心一意勞働問題の解決に熱中し得ざる事情を察することが出來る。斯うなると、本當の筋肉勞働者は憐れなものだ。彼等自らの腕の外何の賴みとする所はない。即ち勞働問題が彼等の死活問題の全部なのだ。賃銀の値上げといひ、解雇手當の増額といひ、之が彼並びに彼の家族の死活に係るのである。眞劍にならずして居られようか。

今の賃銀では喰へないとする。値上げの運動をすれば頸切られる。一度頸切らるれば容易に他に職業を求むることは出來ない。仲間を作つて氣勢を揚げようとすれば茲に法の制裁が來る。進んでかゝる窮境に陥る責任の何れにあるかの議論は止さう。兎に角斯う云ふ境遇に居るものが、段々自覺しつゝある今日の彼等の氣分は我々決して輕卒に考へてはいけない。此等に關聯して僕の君達にいひたい點は澤山あるが、それは他日の機會に讓らう。當面の問題について特に君の諒解を得たいのは、斯うした境遇にある勞働者が、當局大臣などの機に應じて發する言論を如何に迎へるかと云ふ點である。概して勞働者は單純な頭腦の持主だ。原さんが何を云はうが、床次さんが何をいはうが、我々は時としていゝ加減な事を言つて御坐ると一笑に附すこともあるが、勞働者にはさうは行かない。大人同志が戯談を云つて居ることでも、傍に聽いてる小兒が眞に受けて怒り出すと云ふ事もあるやうに、勞働者に對する響き方は我々とは違

ふ。彼等は自分の境遇を省みて苦しくつて苦しくつて堪らない。政府の今迄の態度にも可なり不滿がある。それでも大臣などをエライ人だと信じて、其中にはどうかして呉れるだらうと一縷の望を掛けて居つた際、若し當局者が皮肉な、刺のある、同情のない言論を勞働運動について發したとすれば、どれ丈け勞働者の憤激を挑發するか。此點をよく〳〵君に察して貰ひたいと思ふ。我々には笑つて濟ませる事だからとて輕々に附しては大變な間違だ。

神戸の勞働爭議以來の勞働界の狀況、之に關する當局大臣の言論、理否の何れにあるは姑く別問題として、此等が勞働者を如何に自暴自棄の境に導いたか、又如何に彼等の憤激を昂らしめたか。之と併せて指導者階級が如何に其緩和に骨折つて居るかに想到して貰ひたい。君はよく諒解して呉れるが、君達の仲間の目して以て憎むべき煽動者となすものが、何人よりも一番熱心に民情惡化の抑止に骨折つて居ると云ふ事實をも考へて貰ひたい。自分が附けた火に困つて居るのだらうなどと冷笑すべき場合ではないのだ。今はどうして此陰鬱なる空氣に光明を注ぐべきかと云ふ問題の研究が必要だ。

何れにしても勞働者界を中心とする昨今の社會狀態には非常に陰鬱な暗雲が棚曳いて居る。丸で毒瓦斯の蔓つて居るやうなもので、何時誰が其毒を受けるか分らない。偶々甲なるものが其毒に罹つたからとて、其周圍の乙、丙を檢擧するが如きは抑も末だ。僕は今度の事件に對する君達の措置に反對だと云ふのではない。只頗る時勢に憂ふる所あるが故に、も少し研究の範圍を廣くして君達と共に根本解決に協力したいと思つて此手紙を書いたのだ。

今度の事件の眞相が分つた上で、假令ば僕の考へて居たやうな意味のものでなかつたとしても、僕の心配は相當に理由あるものとして是非共君の講究を待たねばならぬが、序に一つ君に考へて貰ひたいのは、今度のやうな事件については、政府に於てもつと事件の眞相を社會に明かにして貰ひたい事だ。早い話が今度の問題にしても、政治的の意味のものか、或は勞働問題などに關聯するものか、之を明かにしないと我々は社會の何處に矢を放つていゝか分らない。此點は安田翁の暗殺についても同じだ。僕等は動機の何れにあるにせよ、斯くの如き行動の絕對に排斥すべきを唱道するに於て決して人後に落ちるものではない。此點に於て大いに社會の一部に存する惡思想と戰ひたいのだが、偖其何物と戰ふべきかゞ今の儘では分らない。普通の詐欺や泥棒なら、天下何人も惡いと云ふ事を認めて居るし、

當の本人も亦いゝと思つてやつてるのではないから、之は單純に惡い惡いと非難する丈けでもいゝ。併し今度のやうなのは一部にはそれ程惡いとも思つても居ず、時としては斯くする事が社會の爲めだと考へて居るものもある。斯う云ふものに對しては單純に惡い惡いと云ふ丈けでは收らない。理論として大いに戰ふの必要がある。而して之と戰ふに最も適當な地位にあるものは、或點まで此種兇暴な連中の主義主張に理解と同情とを有するものである。政府當局には此等の人々をも引くるめて危險視するの嫌ひはないか。言葉は適當ではないが、政府はもつと所謂危險人物を利用したらどうか。危險思想の取締りに一番有効な方法は、危險人物を利用することである。政府なんぞに利用されるものかと大言はするだらうが、君のやうな聰明な役人にはさう大して難しい事ではない。

最後に一つ君に諮りたいのは、遺書の發表といふ事である。安田事件についても同樣だが、治安に防害ありとして發表を禁止して居るにも相當の理由あるが、併し之では何の動機であんな事をやつたのか分らない。從つて我々は社會の如何なる敵と戰ふべきかを判斷するに苦しむ。絕對に發表せよと云ふのではないが、發表禁止の爲めに飛んでもない想像說が世間に流布するやうでは、二重三重に社會の損害である。我々は疫病の流行を怖れて居る。病菌の存在をも略ぼ疑はない。其病菌の如何なる種類のものであるか、又如何なる方面に伏在するかについて判斷の材料を供給せられて居ない。斯う云ふ方面の診斷に於て政府を最も適當と信じてゐない我々は、此點に多少の遺憾を感ぜずに居られない。

君は今此等の問題の取扱に於て樞要の地位に居る。が、併し未だ自己の判斷を政府其物の政策たらしむる地位に居ない。幸にして君の獻策が上司の容るゝ所となればよし、否らずんば少くとも同僚部下の間に勸說して、他日の備へをなされんことを希望する。僕は切に君の聰明を恃みとするものである。

兇變より新內閣の成立まで

原氏の兇變に狼狽して閣員は先きに總辭職の決議を表し、此稿を草する時まで新內閣の詮議に猶ほ五里霧中の裡にある。此際例に依つて又しても吾人の眼を刺戟する常套現象は、憲政の常道を履み外づす可らずとの民間の要求が盛である事と、內閣組織の實際の相談は這の要求を裏切つて、全然二三者の暗裏に進められつゝある事實とである。理想と現實との相隔離せこと、蓋し我國今日の政界の如く甚しきはない。

以上の現象は、言ふ迄もなく今日我國には元老閥族の勢力の尙ほ無視す可らざるものあるを語るものである。之を計算の外に置いては政局の進行を滑かならしめ得さるが故に、流石の大政黨も從進を遲疑して居るのだ。どうせ御鉢が自分に廻つて來るに極つては居るものゝ、内閣製造の容名は之を閥族に歸して、只管後日無用の防礙を蒙らさらんとするは、今日の政黨としては最も悧怜な遣口に相違ない。

併し閥族には進んで自ら内閣を組織する丈けの勇氣はない。是れ一つには政黨の勢力にも因るが、主としては輿論の支持を缺くに由ると觀るべきであらう。閥族は最早今日となつては、僅に政黨政治に對する消極的牽制力たるに過ぎぬもの となつた。而かも彼は此れ丈けの勢力を利用して、せめても彼等の所謂大權内閣論の容名を護らんとして居る。政黨を差し措いて内閣は作れぬ情勢ではあるが、政黨が政黨の資格に於て内閣を作るに非ず、凡ての内閣は必す大命降下を辱くしたる政治家の作る所たるべしとの見解をば、曲りなりにも元老會議の惰性的慣例に由つて維持して居るのである。併せて彼等は出來る丈け自分達の畑に近い人を頭に推して政黨を操縦させようと欲して居るのだらうが、左うばかりは世間が許さぬものと見へる。政黨に意氣地がないから閥族も相當にはびこつては居るが、閥族の野心家とて今日はさう輕く政黨を視ることも出來ない樣になつた。

斯んな所に彷徨して居るのが恰度昨今の狀況だ。此際双方の面目と希望とを立て、併せて双方を十二分に安心せしむる解決は西園寺公の奮起であらうが、之は恐らく出來ぬ相談だらう。元老連は極力同公の起立を促して熄まず、政友會は無條件で一切を陛下に捧呈すると迫つて居るが、之れで動く西園寺なら、彼は寺内内閣の倒壞の際既に起つた筈だ。今や凡ての解決の鍵は同公に托され居るといへば、是れ正に原内閣成立當時の政情其儘だ。然らば自然の順序は嘗の如く高橋野田の邊に來るのではあるまいか。原はあの時既に總裁であつた。高橋野田に然らずなどゝ言ふ勿れ。人物に貫祿を缺くと謂はゞ、原の時だつて世間はさう氣遣つた。遣らして見たら存外相當にやるだらうと思ふ。

西園寺公の起つといふ事も夫れ程考へ得べからさる事ではない。高橋野田の孰れかゞ出るにしても、之は一個人の彼れに大命の降るので、新内閣は假令同じ人々を以て作られるとしても前とは別のものだと云ふ解釋は飽くまで固執さるるだらう。變な話だが、日本の今日としては已むを得まい。憲政會は頻りに憲政常道論を振り翳して居るが、之は主として政友會の投げ出

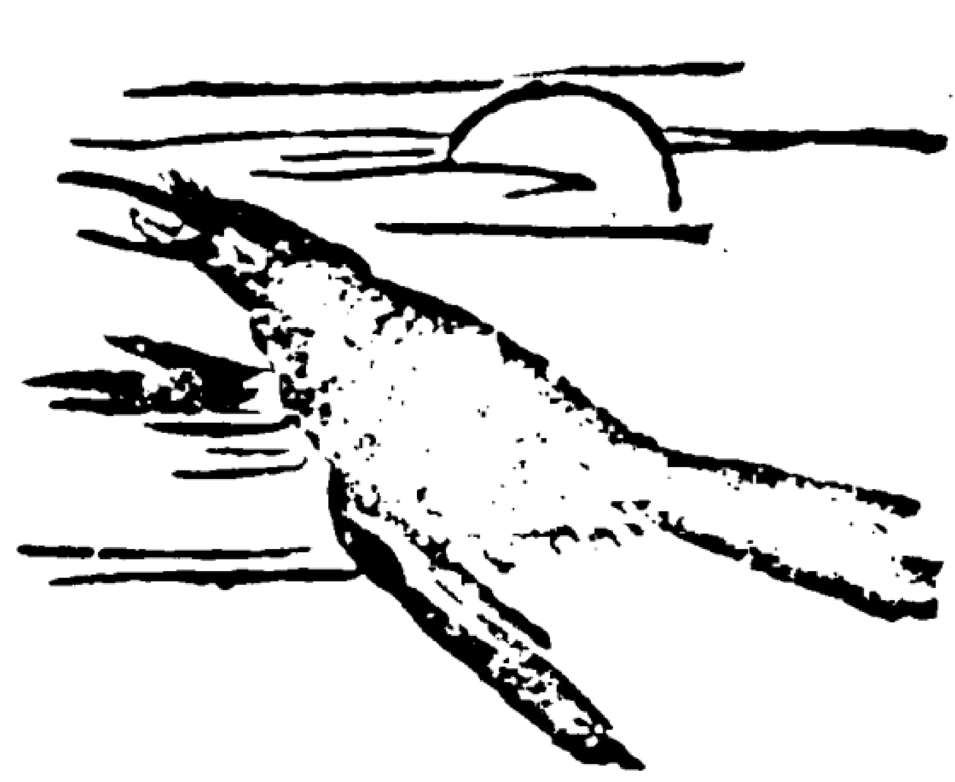
しの結果、官僚内閣の出現を見飽て政黨官僚の慣れ合ひの現象を繰り返す場合を考へての反對であらう。

どの道政黨者流が内閣を作るのだから、少し位の元老閥族の容喙は已むを得ずとしよう。之を良いといふのではないが、事實勢力を有つて居るのだから致方はない。只之にも拘らず、政黨を外にして内閣を作ることは殆んど不可能になつたといふ時代の潮流が面白いと思ふ。

此潮流は段々年と共に固まりつゝある様だ。が、併し近年の様に政友會のみが常に多數黨であつては頗る心元ない。何となれば、彼は何時官僚と相通ずるか分らないから、之には同じ流儀は他の政黨にも做はれるといふ事が必要だ。色々の人が同し事を繰り返すことに依て、始めて慣例は法規となるものである。此點に於て吾人はまた翻て憲政會の奮發を望まざるを得ない。

誰が内閣を組織するにしろ、時代は今や多くの新しき問題を提供して其解決を迫つて居る。從來の政治家は之等の方面に餘りに無理解であつた。今後の政治家にも果して何れ丈け期待し得るか甚だ怪しい。政變に際し若干光明ある解決に一歩を進めたるを悦ぶと共に、國民として爲すべき仕事のまだ〳〵非常に多いことを想うて、我々は益々緊褌一番するの必要を痛感する

のみである。



お小姓兒太郎　ほか二篇

室生犀星

一

髪結彌吉は、朝のうちのお呼びで、明るい下り屋敷の詰所で、稚兒小姓兒太郎の朝髮のみだれを撫でつけてゐた。快よい髮弄りで睡不足の疲れが出て、うとうとと折柄膝がしらを暖める日ざしに誘はれながら、ゐ睡りをつづけてゐた。

頸すぢが女のやうに白くたははになり、梳き手の搖れをつたへるごとに、彌吉の手ごたへを重くした。彌吉は、飽かずそれを眺めてゐたが、いかにも疲れ込んでゐるらしい兒太郎の樣子が、それとなくお宿直の、さまざまな取沙汰を思ひ出させた上、このやうに正體もなく居睡りをつづけてゐることが、輕い憎しみをさへ感じ出させた。生白い手をきちんと膝の上にかさね、それすら、ぐつたりと、累ね手の重みで感覺もないやうに見えた。お弓藏近くの櫻が白く晒されはじめ、詰所詰所では、うす睡い碁將棋の音も途絶えてゐた。

——或日、ちやうど彌吉が奉公してから一と月ほどあと、兒太郎は、自分の部屋へ彌吉を呼んだ。

「無聊だから盃をとらす……」

さう言はれて始めて彌吉は、詰所結ひを望んで、兒太郎の屋敷へ勤めたこと、鷹狩の、駿ケ岳の池で始めて兒太郎を見たことなどを話した。そのことも、何時の間にか兒太郎にはわかつてゐたらしかつた。行燈のかげで、靜かに微笑つてみせ、自分でわざと酒をついでやつたりした。さういふ情事になれてゐる兒太郎は、高びしやに彌吉を眺め下ろしてゐた。「爪を剪つてくれい。」さう主人の命令を酔つた手つきで、白脛の投げ出されたときは、實際からだが震へるほど、ぞつと嬉しかつた。「下手だの。お前ののをお出し。」さういふ主人を、彌吉は、あはてて手で遮ぎつた。

「勿體ない。」

「いや關はぬ。指を出せ。」

兒太郎は、自分の白い手の上に、若者の指を乘せ、ボツンと深爪を剪つてゐたが、みな肉が切られ、あかいものが滲んで出た。彌吉は指頭をしたたる血と、それの痛みを怺へるため顔を歪めてゐた。

兒太郎は、彌吉の苦しさうにしてゐる樣子をみると、慘酷にちかい微笑をうかべながら、しまひに興もなささうに手をつき放した。——主君利治公の御寢所で、ある晩、肩揉みをしてゐて、爪があたつていけない、どの爪だと、これも血のにじむ深爪を切られたことを思ひ出したのである。その自分が彌吉をかうするのは、べつに惡いことだとは思はなかつた。

「彌吉、肩をあたれ。」

「はい。」

彌吉は、日頃思つてゐる主人の、優肩に手を觸れる快適さに身をふるはせ、肩につかまつたが、爪さきが痛んで、指頭が立たなかつた。「どうした、利かないぢやないか。」兒太郎はさう叫ぶと、煩さゝうに肩さきを振つて、彌吉の手を拂つた。

「指さきが痛むといふのか、これしきのことがなんだ。」

兒太郎は、手を叩いて近侍を呼び、鞭を持たさせた。近侍がびくびくさし出した三尺なめしの鞭は、彌吉の、背すぢに向つて激しく打ちのめされた。彌吉は、絶え入るやうな聲で、あたりをのた打ち廻つた。ふゆーと鳴る音がすると、からだぢやうの肉地が一どきに裂けるやうな痛みを感じた。怨めしげに兒太郎を見あげると、その眞赤な顏は、百萬石の主君の寵愛をほしいまゝにしてゐるだけ、わけても上逆氣味で美しかつた。振り上げられた二の腕の鮮かな白さが、うめき聲を上げながらも、なほ執念く目に殘つた。

「彌吉、いたむか。」

鞭を投げ出した兒太郎は、さういふと、彌吉を抱き起した。ふしぎな發作のあとの、さらりとした兒太郎の顏は、やや蒼褪め、凄艶として震えて見えた。

「お怨しうございます。」

彌吉は、あまりと云へば無理な主人だ。いつそ飛び蒐つて白い咽笛を食ひ切つてやらうかとまで、劇しい忿怒にかられてゐた。

「彌吉、これを見い。」

兒太郎は、くるつと背後向きになると、肌を脱いでみせた。美しいふた峯の背すぢに、幾すぢとない紫色を帶びた、

の痕が、逡巡としてまざまざと殘つてゐた。

彌吉は、一と目みるなり身ぶるひを感じた。そしてうつ向いて泪ぐんだ。兒太郎は昂奮してゐたが、こんどは落ちついてゐた。しばらくしてから、彌吉は、顔をあげると、

「もつとお打ち遊ばせ。」

さう微笑んで言つた。兒太郎は、頭を振つて、きふに女のやうに笑ふと、強う、彌吉の目をさし覗いた。

「予がからだを自由にせい。よいか。」

兒太郎は、寂しげな、しかも慣れた目付をしながら、それが常も女のやうな姿をしつらへてゐるやうに、立つて彌吉の肩をそつと打叩いた。彌吉は靜かに女性にみることのできない、いはば面がゆいやうな凜とした美しい顔をみあげた。

「ついて來い。」

兒太郎は、そのまま部屋へはいつた。間もなく彌吉は、主人の××××のである。

――彌吉は、それからそれへと考へてゐるうち、兒太郎の殘忍な性情が日增しに募つてゐることが感じられた。鞭打ちなどより、髮毛の立つやうな恐ろしい目に會つたりした。が、彌吉には、それが又不思議に、さうされることに、却つて兒太郎の美しさを滲み込むやうに體内に感じるのだつた。さういふ不思議な發作のあるごとに、兒太郎の上氣した。さつと鮮紅を帶びた頬は、いつも彌吉を恍惚とさせた。それに何時の間にか慣れてしまつたせいか、靜かにしてゐるときの主人より、凶暴なときの兒太郎がかれの總てを刺戟したからである。

彌吉は、裳のほつれをすつかり仕あげると、居睡りをしてゐた兒太郎はうつとり目をさました。

「つい睡つて了つた。ご苦勞だつた。」

彌吉は、髮道具を前に、きちんと隔つて座つて、優しう疲れてゐる兒太郎の、それゆゑなほ美しく見える目をみつめてゐた。いつになく兒太郎は上機嫌であつた。さういふ日は殿背の首尾もそれと察せられ、彌吉は、とうてい容れられない妬ましさに、じりじり心を苛立ててゐた。

「今宵參つても苦しくないぞ。」

兒太郎は、機嫌にまかせ、どうしたら彼いふ目になるだらうと思はれるくらゐ、艶やかな光をうるませ、微笑んで自分でうなづいて見せた。が、彌吉は、對手のさういふ好意のあり過ぎるときに、ちよいと氣持ちが沈んでならなかつた。

「いゝえ、今宵は參りませぬ。ゆるりとお休みあそばせ。」

兒太郎は、すぐ顏色を變へ、聲を尖らせたのである。

「なぜ參れないといふのだ。匹夫のくせに口が過ぎるぞ。」

「いゝえ、お疲れでございませうと存じますので。」

彌吉は、恐る恐る、一つには兒太郎を休ませるつもりだつた。が、兒太郎は、すぐ眞赤になつて怒り出した。

「無禮なことを云ふ奴だ。殿づとめするのを嫉きをるか、たはけ。」

彌吉は、さうでない意味を言ひあらはさうとすると、額口を扇子でぴしつと打叩かれ、卷きかへし打すえられた。彌吉は、そのまゝ椽側に手をついたなり、俯向いてしまつた。磨きをかけた椽板に、兒太郎の小姓袴の銀縫ひの影がちらついてゐた。口が過ぎたのだ。言はなければよかつたと、後悔が正直一圖な彼れを流涙させた。

「汝等ごとき蛆蟲が分に過ぎた言ひ分だ。彌吉、面を擡げい。」

「はい。」

兒太郞は、そのとき故意と聲を低め、やや微笑をふくんだ眼眸を彌吉にそそいで言つた。

「そちにも予が殿づとめするのを苦しく思ふか。」

彌吉は、揶揄ふつもりで左ういふ兒太郞であるか、それとも本氣でいふのか、確めやうと眼をさしのぞいたまま、急には返事をしなかつた。

「返事をせい。」

彌吉は、しかたなしに

「左樣にございます。」

さう答へた。兒太郞は、彌吉の苦しさうにしてゐる眼を、自分が難題を持ちかけたためだと思ひ、興がつた。

「嫉妬の情は人間にあるものだ。そちもそれに驅られて居るのだらう、包まず言ふたらよいぞ。」

「いえ、そのやうなことは御座いません。」

「では予をそちは思はぬのか。」

兒太郞は、また嬲として睨まへた。彌吉はどう言つていいか分らなかつた。どう言つても歪げられて了ふのが何時もの言葉癖ゆゑ、默つてうつ向いた。そして低い聲で、うつ向いたまま答へた。

「左樣なことはございません。御主人樣を束の間も忘れたことはございません。」

兒太郞は、それきり奥の間へ默って這入つてしまつた。彌吉はぼんやり坐つて、このごろは唯苛責と折檻よりしか兒太郞から受けない彼れは、なほそこから脫け切れない自分を自分で呪ふてゐた。ときには思ひ切つて屋敷をぬけ出さう

とも拵えしても、やはり未練があつた。さう言つても、これ以上勤めることは彼れにとつて日夜耐えがたい苦痛であつたのである。彌吉は、檻詰めにされた優しいけだものゝやうに、馴れるに從つて卑屈になつてゐた。

二

夏が過ぎ、水の澄み工合がきまると、町の諸方から刀研師が呼び出され、腰の物お手入れが始まりかけてゐた。兒太郎の屋敷でも、あぶら引きを済ましておさめられた刀劍類のなかに、兒太郎は、主馬表にゐる父親がするやうに、十八歳のかれにしては老人くさいやうな坐り方をして、燒きと光とから玉走る刃がしらの匂ひをかいでゐた。

彌吉は、鍛檯のほこりを鳥毛さいはいで、ばたばた拂つてゐた。丸腰の、武家には珍らしい町人腰に前垂れをしめ、新しい手拭をあたまに着けてゐる姿は、どこか、意氣で、なよらしげに兒太郎にはながめられた。實際、いつも女役のかれにとつては、ふしぎに對手に、××××××最中は、かへつて快感が多かつた。彌吉の、何んでもない後姿が、習慣のせいか、兒太郎を刺戟した。重い刀劍類を朝からいじくり廻したため、手の平のあぶらが柄糸に吸ひ取られ、かさかさしてゐるほど、目も疲れ込んでゐた。

兒太郎は、鋭い一本の、研ぎの入つた小柄に似たやうなものの手入をすましかかつたが、その薄手の刃がしらは、ナイフのやうに、ものの内部に刺し徹される味ひを、しらずしらず刺戟してゐた。

「彌吉。これは何か知つてゐるか。」

兒太郎は、その小柄やうなものを差し出して見せた。

「馬刺劍でございませう。そのやうに思はれます。」

「戦場で用立てるものかの。知つてゐるか何うぢや。」
「馬斃れんとするとき、それを馬の尻につき立てて氣附するものでせう。」
彌吉は、さう答へたとき、なぜか、しまつたといふ氣がした。それは、兒太郎の目のいろが粗笨な荒れ方をしながら、がちがち震えてゐたからである。
「よく知つてゐるの。」
さう言つて、凝然として見成つてゐる兒太郎は、しだいに、その眼底に奔騰する焦燥をありありと燃え立てさせた。
彌吉は、からだの竦みを感じた。――三角に削り立てられた銳利な馬刺劍は、四寸くらゐの長さで、きらりとキツ先を、疊の上に向けられ、いまにもぶつつりと疊目にさし徹されるやうな氣がした。
「彌吉、これへ來い。」
その目いろは最早や疑ひもなかつたため、彌吉は、鎧櫃に、にはかにさいはいを入れはじめた。
「これを済ましてから參ることにいたしたうございます。最早、日脚もあの通りでございますから……。」
庭後の、植込みのあたまにうすら日がちらついたまま、間もなくその影をおさめようとしてゐ、踏石のまはりの土、いくらか夕濕りを催しかけ、褐色に沈んで見えた。
「いや、ならん。これへ來いと申したら來い。」
彌吉は、震えた。が、つぎの瞬間には、兒太郎は、大きな彌吉のからだを掬ひ責めに抱きすくめ、馬刺劍は、その××××××られた。彌吉が、少さい叫び聲をあげたときには、兒太郎は、馬刺劍を拭きながら立つてゐた。
彌吉は、つツ伏してゐたが、控え部屋へ手當をしに立つて行つた。一言も言はなかつた。

兒太郎は、蒼ざめた顏をゆがめ、惡いことをしたときの卑屈な冷笑をうかべながら、馬刺劍を庭木の肌を目がけ投げつけた。李のいらいらした肌にぴいんと立ち、蜻蛉のやうに震え、やがて停つた。兒太郎は、病的にちかい目と手つきとから靜まつて、冷たい椽側にぺたりと座つた。彌吉は、とうたう來なかつた。蟲がひいひい啼いてゐ、あたりは暮れかけはじめてゐた。

「なぜ其方は逃げ出したのだ。それほど痛むか。」

兒太郎は、ふたたび彌吉が部屋へはいつてきたとき、さう言ひながら、顏を歪めてゐる彌吉を見戍つた。その顏は卑屈にしびれ切つて、眼底に微かな反抗がうづまいてゐた。

「無調法をお目に停らせると恐れ入りまするので、あちらへ參りましたのでございます。」

「ふむ。」

兒太郎は、それきり何にも言はなかつた。頭が靜まると、次第に自分のしたことに、いつものやうな後悔が募り出すのを感じたのである。

「痛むか。」

「いえ。」

彌吉は、わざと元氣に立ち働いて、部屋ぢゆうに散らばつた物を片附けはじめた。が、ときどき苦しそうに腰部をさすりながら、兒太郎を偷み見た。その目の底に燃えるやうな憎念がたぎりぎらついてゐた。

「其方、斯樣な目に遭つて無念に思はぬかな。」

「すこしも思ひませぬ、よく御存じ上げて居りますから。」

「では、予が居ることゝを先き以つて存じてゐると言ふのだな。」
「何となく感づくことがございます。」
さういふ彌吉の目には、測り知れない例の憎念が、微笑んでゐるに拘はらず、兒太郎の目に紛らぬ程度で現はれてゐたのである。とうてい叶はない諦めもあつたが、それにしては消えがたい底強い光が潜んでゐたのである。
「彌吉、殿勤めはつらいぞ。」
兒太郎は、左ういふと後悔の念ひを今はハッキリと面にあらはした。彌吉は、默つてうつむいてゐた。

三

そのうち不思議にも、兒太郎の亂行は、ぱたりと止んだ。そのかはり殿宵の勤め泊りの際も、おかみからは下りなかつた。夜は、ほの暗い行燈と塗壁の狭い屋敷うちに、兒太郎は悄然と寂しく座つてゐた。彌吉は、それを知つてから、なるべく兒太郎に顏を合さぬやうにした。
彌吉は、賤ヶ岳の池のまはりで、そよりと立つた鷹狩の、兒太郎の可憐な姿を、いまは何處にもみることができないのに氣が附いた。ふしぎにお小姓は、長くて三年の務貴といはれてゐるだけ、もう兒太郎の顏容は、その目つきばかりでなく、コワさうなうす青い髭の芽生えからも落ちかかつてゐた。その何よりも荒れ沈んだ眼底には、しほらしう匂ふ色艶がいつの間にか掻き消されてゐたのである。彌吉は、さういふ兒太郎の沈んだ姿を、下座敷のなかに、夜はいつも何ごとをか考へ込んでゐるのも見た。それと同時にふしぎに彌吉の心にも、何となく兒太郎を慕ふ氣が起らなくなつてゐた。苛責と折檻とから放されたやうな彼れにとつて、思ひしづんでゐる主人を時にはこころ宜いまで復讐的な氣分でな

がめてゐたのである。

或る晩、髮を上げてくれるやうとのことで、彌吉は、そのうしろに立ち、鏡立てをした兒太郎が靜かに心沈むといふ風に、それを覗き込んでゐるのを、例によつて、むしろ投げ遣りな氣もちでながめた。

「お上からのお召しも、遠いやうでございますのは、心がかりに思ひます。」

彌吉は、さう多少皮肉な氣分で言つて、しづかに髮の地に櫛をいれた。

「いや、そのうちにあらう。上は忙しくあらせられるからの。」

兒太郎は、新參の大隅といふ、二つ年下の、鶯のやうな聲音をしてゐる小姓仲間を思ひ出した。それの出仕と同時に自分への沙汰のなくなつたことを考へると、なよらしう立働いてゐる大隅が憎くてならなかつた。

「彌吉、そちは大隅をみたことがあるかどうだ。」

彌吉は、瘠せてはゐるが、今小姓仲間の孔雀といはれてゐる大隅を、さう言はれて急に思ひ出した。なぜか兒太郎とくらべものにならない氣がした。

「ぞんぢて居ります。」

「予といづれが際立ち居るか。つつまず申して見れ。」

彌吉は、すぐ返事ができなかつた。そのため、立鏡にうつる自分の顏をわざと鏡の外側へずらせた。が、そのとき兒太郎はそれを素早く見つけた。

「どうぢや。」

「はい。」

兒太郎は、その隙間にぐさりと突き込んで言ひ放つた。

「予の方が劣るか。」

彌吉は、かう言ひ乘せられると、益々あはてて吃つて、あひにく、喉絡まりをした聲がかすれて出なかつた。

兒太郎は、立鏡を足で蹴り上げた。裏切りものめ、さう叫んだ兒太郎は、髷にかけた彌吉の手をとると、いきなり膝さきへ叩きつけた。起上らうとするのを上から乘り寄せ、丁々と頬を打つた。彌吉は、唇を噛みしだきながらも、手向ひをしなかつた。そして正面から兒太郎の顔をゆつくり凝視め、冷えわたるやうな笑みを漏らした。

「兒太郎様にくらべると、大隅さまはずつと立派に居られます。」

兒太郎は、身うごきもせず、さう大膽に言ひ退ける彌吉の顔をむしろ呆然とながめた。その口惜しは一どきに頭を混亂させ逆上させた。が、はんたいに氣持ちは落ちつき返つてゐた。

「そちでも左う思ふか。」

「はい。」

彌吉は、そのときどういふ痛い目に逢ふかわからないと思つたが、却つて冷然としてゐる主人をみると、自分があまり急所を衝きすぎたやうな氣もした、一面から溺れてゐる兒太郎にたいする日頃の鬱憤がいくらかづつ晴れてゆくのを快よく感じた。

「部屋へ下つてようございますか。」

曾つて然う言ひ出したことのない彌吉を、兒太郎は自身にひきあてて、悲しげに打棄るやうな調子でしりぞけた

——彌吉は、部屋へかると、通しをかけてあつた大隅への奉公口の返事を、口入業のある町家をさして出かけて聞き

に行つた。どうせ浮いた髪結渠だ。それにこの屋敷にゐる氣がしなかつたからであつた。

翌朝、彌吉が暇乞ひに出かけると、兒太郎は、默つて、それを許した。そのとき主人は最早や稚兒袴を着けずに、わざとらしく鐵扇を持ち、座敷に座り込んでゐた。彌吉は、冷笑をふくんで、兒太郎の屋敷を立ち出でた。

大象圖

青いラムネの玉のやうなものが、七八階もある支那風な塔の階段を一つづつ廻つて、しまひに鉞刀のせんだく板のやうに刻み目をつけた盤の上にかちんと停つた。停つた刻み目ごとにさまざまな形をした玻璃瓶がならび、玻璃瓶のなかに青いいろをした激しい刺戟を含んだ肉桂水が、日に透いて、うつくしい虹のやうに光つて見えた。瓶のかたちには、鶴のやうなのや、普通の尻ひろがりや、極めて小さいのや、また特別に柔らかいスワンの首のやうなものが、瓶のからだに巻ついてゐるのなぞあつた。

青い玉は、おのがじじ、くらい宿命を負はされ、一人づつの心をたづさへ、絶え間なく階段のラセンを豆鐵砲のやうな音を立て、目まぐるしく走つてゐたのである。一人づつの心は、その最後にかちんと停つたところで、ひとつづつの肉桂水をつめた瓶をあたへられた。どれもこれも小さく、みすぼらしい哀れな瓶だつた。目さしてゐる大きい、ゆっ

りと揃えてゐるコップのやうな瓶のそばへは、決して玉は走らなかつた。玉が階段ごとにある小さい部屋部屋を廻るときに、そこに何かの仕掛けがありはしないかと覗き込んだものの、所詮そこもあたりまへのラセン階段になつてゐるに過ぎなかつた。

かれのそばに、うようよ黒い頭がうごいてゐた。かれも黒い頭をして、ふしぎな肉桂水の這入つた壺から汲みかへる皺枯れた手つきをながめてゐた。空氣は特別ないい匂ひをこもらし、肉桂は虹のやうにすばらしくあたりの黒い頭をしてゐる肌をちくちく刺戟してゐた。それにしても彼の青い玉が決してあの大きい瓶のそばへ行かないことはない。きりと數多くころがして行くうちに、かちんと停るにきまつてゐる。それだのに誰もまだあてたものがゐない。かれは堅からと横からと階段をのぞきのぞき、ふしぎな重い氣もちになつて、皺枯れた手つきでゐる老媼の齒くその臭ひを、ずつと先刻から酸つぱく瞬ぎなれてゐた。

老媼のゐる屋臺の上には、汚ない赭い色をした錢がたくさん置かれ、鐚のやうに工合よく重なつてゐたのである。黒い頭から手が出るごとにその赭い色をした一枚づつの鐚が奥ごとになほ一層いかめしく累なつて行つた。しかし黒い頭はどれもこれも目高のやうな小さい瓶をあたへられ、立つたまま、そのなかの劇しい液體を啜つてゐた。頭がさつぱりしていい氣もちだつた。しばらくでもそれを休めるわけにゆかないほど、舌なれがきびしく、腹の都合もよかつた。それゆえ、みんな其處で立ちつづけ、秋の日をあびながら、動くことができなかつた。斑點だらけになつた肉桂水は髮のなかからも漂ふてゐた。そこでは鐚のうちの一枚を欲しがつた。みんなの持つてゐた鐚のいく枚かがだんだん老媼の手もとに投げ出されたため、みんなは茫然とその五重の塔のやうな不思議な（それは何んでも外國から渡來したもののやうに、かれらの意識が何人の説明もなく、しかく左う決定してゐたゞものを眺めるだけだつた。もし假りにあたらし

い錢をもつた黒いあたまが蝿のやうに近づくとかれらは皆くちぐちに説明と批評とを加へ、うようよ、そのまはりを取り卷き、ぱちぱちした花火線香のやうな言葉がへねるんだつたが、それにしても、すぐ、れいの目高瓶の前だけにしか例の青い玉がとまらなかつたから、その新しい黒いあたまは、その塔の前から消えてしまはなければならなかつた。その殆當りつこのない暗い宿命は、さういふ風に必然的に當らないことを知りながらも、なほその宿命にたいする疑惑は決して解けるものではなかつたのである。

必らずその目刻みのある盤上に、しばらく舞ひ舞ひをした青玉が、右へか左へか、または例の大瓶の方へへか轉がらねばならなかつたゆえ、さうして轉がり得る決定を目の前にながめてゐるだけ、そのくらい宿命を宿命として信じられなかつたのである。

しばしば黒い頭から手を出して、假りに青い玉がすべり落ちやうとしたときに、それを大瓶の方へ指さきでぽんと突いても、ふしぎにその玉は、そのきざみ目へ落ちようとしなかつた。いくらか馴れ氣味で、却つて勢ひよく、退屈な、さもしい目高瓶の方へ、實にたまらなく口惜しく轉がり込むのだつた。老媼は、泥龜のやうに居睡りばかりしつづけてゐたが、ふしぎに垢じみた耳だけはちやんと目をさまし、きまつて小瓶を差し出すのであつた。決してスワンのやうな大瓶に青玉が飛びつくことなどあらうわけがない。さういふ異例が曾てなかつたやうに、睡りながらかれはかれの心で刷つた新聞紙を、しかもいつまで讀んでも讀みつくせない新聞紙から、ちよいと目を放したきり、黒い頭を前にをき、さて、とうとうと仕始めるのである。

だが、どうしても其處にあるだけの心は、さういふ退屈な居睡りをつづけるわけにゆかない。やはり青玉がいかにして大瓶にとびつくだらうかと云ふ考へをしつこく繰り返へさなければならなかつた。

かますといふ魚のとれる秋のことで、砂は老媼のまはりに乾きかけ、瓶のかげもやはりのびのびと映つてゐたのである。何かの仕かけに違ひない。それに決つてゐると言つたものの、誰もそれを知らずじまひになつてゐたのである。皆はしかたなしに、はじめのやうにぼんやり松の根もとにあつまつて青玉を見つめてゐたのである。

すぐそばにのろのろと一頭の象が、うす桃色の脊なかをそびやかして、その白い砂の上をあるいてゐたのである。なぜ其處に象が歩いてゐたかも、さういふ事があり得べきことだかも、どうか誰も知らない。ただ、ただ、のろのろと歩き廻つてゐたのである。脊なかに、刺繍のある支那緞子様なちやんちやんを着、鼻のさきに黄金の彫刻のある環をはめながら、ちらつく秋の日にかがやかしてゐた。もちろん影はうすいながらも妙に寂しいゴツゴツしたこの大きな動物の形をそつくり白々しい砂上に印してゐて、柔らかい鼻さきが絶えず胴巻きにくるくる捲き上げられてゐた。すべてがうすい藍と鼠の色あいで、動く速度は、のろい映畫のやうだつた。なぜあのやうに優しい鼻さきが、ああも自由にのびたりちぢんだりするのだらうと、ほん物よりも却つて影の方へ氣をとられ、影にそふて、ふしぎな眼つきがくらがりで時計をさぐり見るやうに、動かず靜乎として停つてゐた。

わたしは大きな女の脊中の上で、まんまるくなつて、やはり紫と鼠いろの影をあかず眺めてゐた。鼻はふしぎなSのかたちから、動かずになめくぢのやうにもなり、ちぢみ、しいんとその儘になつてゐた。それから例の黒い頭のむれや、肉桂水店の大日傘と老媼の影も、みな一色をもつて白砂の上にうつすりと影をおとしてゐた。幟や旗にはくろぐろした、すこし頭痛を感じるやうな重い肥つた文字が、葭簀のかげにそふて、印度深山大蛇大象といふ意味で映つてゐた。そのとき尻の方にあてられた女の手が退けられたので、わたしはうすら寒さを感じ、感じたと同時に、女の手がすうと老媼の屋臺の上の、れいの鐙のやうな銅錢の上を蜻蛉のやうにすみやかに通り過ぎたのを眺めた。こころ持ち老媼の居ね

むりが醒めたかと思はれたが、目たたきしただけで、依然、煙草のヤニのやうな黒ずんだ顔を一ところに凝り固まらせたやうに、深い、けれども醒めやすい眠りをつづけてゐたのである。

手はふたたびわたしの尻のところに戻り、戻つた手のひらは冷やりした一滴の水をかんじた。錢だな、左うわたしは尻をうごめかしたが、しだいに錢の冷たさが、感じられなくなつた。女はなかなか去らうとしなかつた。同じやうな手段で、幾枚もわたしの尻の方にぢやりぢやり重ねられ、乘りかけたわたしは、女の手と老媼のねむりとの繼ぎ目ごとに心臟を怯々させ、息ぎれがし、ひろい背中が狹くなり胸ぐるしくて仕樣がなかつた。足を蹈みつけると、女はやつとのろのろと歩き出したのである。

歩き出したところに、ドラ鐵ががんかん火のやうに叩かれ、靑や赤や黃金色や暗色の幕が一杯に垂れさがつてゐた。火はいたるところに燃えはじき、どろどろ太鼓は、海の底のやうな暗綠色の小屋掛けのなかに渦卷いてゐた。

そこに一杯の靑や赤の惡鬼がむらがつて、あるものは臼を搗き、鋸引きを始め、淺猿しい人間どもを追ひ散らし、げらげら嗤つてゐたりしてゐた。巍峩たる山脈の峻嶮をよじ登らなければならない美しい裸の女が、白い脛を露き出しにしながら、白魚のやうな列をつくつて、可哀相によはよはしく歩いてゐた。いちばんあとに歩き遲れたものは、惡鬼のために火の鞭をもつて打擲れてゐた。山脈の至るところに靑いどろんとした、深さうな池があり、池のまはりに一杯の靑蛇が繩のやうに小波をつくり、天幕をもれた日のいろを浴び、うようよ蠢めいてゐたのである。さうして池の中心には頭を半分剃られた人間がぶくぶく沈みながら、あるものは蛇の尾につかまつて苦しさうに藻掻いてゐるのもあつた。第一その水の暗色と靑黑い色が、どのくらゐ深さがあるか分らないほど、どろどろしたあぶらのやうに肌(きめ)こまかく沈ん

でゐた。

石ころばかりの磧に、髑髏のやうなお婆さんが座つて、さもしく、乾いた鉦鼓を叩いてゐた。バネ仕掛けのそれはコツンコツンと一定の時間を置いては大方の鋸引のそれのやうに、鉦鼓を叩いてゐたのである。そこには、さまざまなげぢげぢ蟲やむかでやさそりや蜥蜴や蛙や貝をかむつた蟲などが、草の根ごとにうづを巻いて、美しい女の足をなめたり吸つたり嚙つたりしてゐた。女の足のなかからも、異體のわからない蟲るゐがちくちく痛さうに意地惡くにたにた笑ひながら、こちらの方へ差し覗いてゐた。へんに濁つたやうな色が地圖のやうに小屋がけ一杯に充ち、ぐるぐる廻りをした通路はしだいに暗い方へ向き、あるところにはすこしの光線のないところがあつた。さうしてその通路には默つた人人が群れては、恐ろしさうにそれらの世界を見てあるいてゐた。

火はいたるところに燃え立つてゐた。みな青い色をおびてゐた。ところどころに美しい坊さんが座つてゐて、そこへみな錢を置いてゆかなければならなかつた。惡鬼が舞ふてゐるあたりに、この坊さんはさつぱりした顔いろをしてゐたから――それでも、私の乘りかけてゐた女は、つかんだ錢を放さうとしなかつた。ありやみんなうそだよ。うそを作りごとにしたものだから、そのつもりで見てゐろと云つた。が、或るところで大きな俎の上でごりごり手首ばかりを切られてゐる人間が、なまなましい首のない手をあげて泣き叫んでゐるのをみると、女はそこをさつさと通りぬけ、だいぶ過ぎたときに又ていねいに振りかへつて眺めてゐた。そして矢張りあれもうそなんだ。どれもこれもうそだと言つてわたしの尻の方で手首を自分でしきりに振ひさすつてゐた。うそぢやないよ、きつと極樂ところがあるんだとわたしは言ひかけたが、いやありやみんな、ほら、木戸口にゐる爺さんたちが考へ出して作つた證據には、あのひとだちはみな本氣でゐるだろう。さう言つて私の言葉をうち消した。そして最後に小屋かけを出やうとしたときに、女は、はばかりへ

行くやうな振りをして、はばかりの裏口から、何食はぬ顔をして、ぷいと小屋かけのうしろへ辷り出た。そこは人通りもなく、祭の過んだあとには何時もわけても寂しく見える、青苔のはえた石燈籠が一本立つてゐるだけだつた。錢を拂はんのかと言つたら、あゝいふ嘘だらけなものには拂はんでもいいのだと答へ、ぎんなんの落葉の上をかさかさ踏んで、またもとの、のろのろした象のゐるそばへ、ぽつかりと賑やかしくわたしどもは浮び出たのである。

象のかげは最う白い砂のうへになかつた。藍と鼠いろの影がちぢんで、こんどは、象のうしろの方に歪んだなりに、どこの國のか知れない三角旗を背中にのせたまま、しづかに動いてゐるのが見えただけだつた。

走馬燈

三度目の結婚式を濟した兄の政行は、式場で折柄お酌にきてゐた藝者などを對手に、はやり唄をうたひ、手を叩いたりして、里方の親達を驚かせた。しまひに醉ひ潰れた政行を皆で車に乘せなければならなかつた。妹にあたる慶子は、里方の親達をなだめたり、顔をあかめながら俯向いてゐる花嫁をいたはつたりするのに忙しかつた。

四五日過ぎると、花嫁は、日あたりのよい臺所で、豆がらの豆を撰りぬきしてゐた。二度目の嫁も、やはり同じい手拭で、髮をつつみ、日あたりで仕事をしてゐた。慶子は、よく空似してゐる花嫁を、張物板の糊付をしながらながめた。

だが四度目の花嫁は、すぐ町から近い村落の教員をしてゐるため、晩でなければかへらなかつた。四度目のときは、

慶子が反對したにかかはらず、やはり話はすぐ纒まつて了つた。花嫁は、日曜の朝なぞ、れいの臺所の石段の上で、秋は、さきの花嫁がしたやうに白い手付で豆がらを摸りぬいてゐた。なだらかに次から次へと、あたらしい花嫁がきては歸へり、酒さへのまなければ、政行は人がらがよかつた。

出て行つた嫁は、誰一人として政行を怨むものがなかつた。さう言つても姉をもべつに惡くいふものがないのである。

四度目の花嫁も、默つてちよいと里まで行くと言つたきり、もう臺所へ姿をみせなかつた。學校へは通つてゐるらしく、慶子は、世間の外聞もあるから是非かへつてくれるやうに言つたが、曖昧な返事をしてかへらうとしなかつた。そのとき女は、小使部屋の暗い隅で、濕つた目をして、お兄樣には何とも濟まないけれどどうか諦めてくれるやうにと言つた。慶子も、つい貰ひ泣きをして、この前別れた嫁と同じやうに悲しかつた。

「もうこれで嫁なんぞ貰はないさ。貰つたつて出て行つてしまふんだもの。」

政行の、その心持ちは、慶子にもよく分つてゐたので、やはり當分貰はない方がよからうと言つてゐた。慶子が同じ政行の勤めてゐる役所の同僚の新島研一から別れてから、もう四年も經つてゐた。研一の家は、多人數で臺所だけでも一日かかつても働きつくせなかつた。その他のごたごたで、こちらから出てきてしまつた。研一は、よく遊びに來、むかしよりからだを樂にしてゐるため、柔らかい肥りをみせてゐる、低い聲で懷しげにもの言ふ慶子を心では好いてゐた。が、ふしぎに別れてから友達つきあひのやうになつて了ひ、どうせ家で許して與れない上、本人にその氣のないのを懷かしがつた。

政行のゐないときでも、研一は、家へ這入るやうな習慣をつけてゐて、慶子も、研一のくるごとに、いそいそとした

氣振りを、兄の目にもそれらしく映らせたのである。研一は、臺所に居れば臺所へ、庭に居れば庭へ、茶の間の明るい日南に居れば、そこへ心安げに坐り込むのがつねだつた。

「兄さんは仕合せがわるいの。へいぜいは女みたいな人だしするのに――わたし、どうしてあんなにみんなが出て行くのかわからないわ。」

研一は、慶子と一しよに、やはりその原因がわからなかつた。

「兄さんも仕合せがよくないが、おれもわるいよ。お前がかへつてくれはしないしさ。」

「あたしだつて不幸よ。」

慶子は、同じことを言つて微笑ひ出した。いつも慶子のすることと爲すことに跟いて廻るやうな大勢な家の人人さへ居なければ、はじめの約束通り研一とさし向ひに家をもたせてくれれば、何時でもかへるやうな氣になつてゐた。むしろ左ういふ時期が來はしないかと思つてゐるうち、兄の結婚式や別れ話にばかり飛び歩かされ、そのため少しの閑暇さへ毎日の隙間に見ることができなかつた。それに研一にしても何時も別家するといひながら、ぐずりぐずりして居て一向埒のあかないのも、その心根の優柔しいことを知つてゐながらも齒がゆいことの一つだつた。

「お前はどこへも行きはしないんだね。それが氣がかりなんだ。すぐ女は氣がかはるんだから。」

「わたしそんなことを考へたこともないわ。どこへも行きたくないし、それに――。」

研一は、かういふ話しになると、いつも胸元へ、優しい白さを覗かせながら片手をつき込んで、思案に餘るといふ風姿になる慶子を好いてゐた。

「それに……どうしたの。」

「それに……。」寂しく微笑つて「厭、くち眞似なんぞして。」

だいぶ經つてから左う言つて

「兄さんのことで懲りてゐるんですから……もうそんなお話はやめて頂戴。頭がいたくなるんですもの。」

研一は、慶子のいつも左うする頭のまげ方が、弱いが沁み方の深い印象をあたへられてゐた。逢つてゐると、すぐにでも戻つてもらひたい慶子だつたが、別れてゐると、うつすりと影のさすやうな懐しみがかんじられてゐた。それはなかなか消えない影をもつてゐたのである。

「僕もね。どうかしてそのうちに別家するつもりだから、慶さんの方でもその氣になつてほしいんだよ。」

「ですから早くさうなさいましな、あたしの方は大丈夫なんですから。」

毎時も一時に昂奮してさう言ひながら、ずるずるに四年にもなつてゐるので、慶子は、心で的のない手賴りない味氣なさを繰り返すばかりだつた。けれどもあたしがそんな事を數へたやうに思はれると困るから、又いつかのやうにそればかり言つてお家を騷がせないやうにして下さいと言ふと、研一は、そんなことなぞしないと明斷と言つて

「もうだいぶ慣れてしまつたから落ちついてやるよ。」

それも慶子には危ないやうな氣がした。そして一緒になれるやうになつたら……と、さまざまな明るい空想めいた暮しのことなぞ話されると、頭がへんに昂奮しながらも心のそこでは皆それがこの場きりの話で、家へかへるとすぐ默らせられて了ふことや、意氣地ない坊ちやん風な研一の、ぷいと、懐手をして自分の部屋へとつてかへす姿が目に見えるやうな氣がして仕方がなかつた。對手がハシヤグほど慶子は沈んだ氣になつた。

そこへ政行が外からかへつてきて、坐り込むと、慶子は、そつと坐を外した。政行は、べつにいつもの通り氣にもし

ないでゐた。改まつて慶子の話をし出すと、政行は、聞き慣れてゐるので

「あれの氣次第だ。お人善しだからね、君の家には向かないやうな氣がするよ。」

「別居すればいいんだ。僕がいつも愚圖ついてゐるもんだから――」

「さあ――。」

政行は、自分一人の考へから言つても、女の氣心がわかり兼ねてゐた。ことに研一の曖昧などつちつかずにゐるのも、腹の底では物足りなかつた。

「君はいつもさう言ふんだが、其場きりだからね。君もよく考へて呉れたまへ――。」

さう言ひながら「僕にしても變に世間に誤解されるやうな破目になつてゐるから、最う慶子だけ片づけたら當分獨りでゐるつもりなんだよ。」

政行は、蒼白い顔を沈ませ、どういふところが自分の悪いところか、しよつちう、女の出てゆくごとに其考へがしぶとく付き纏つてゐたが、やはり自分にはわかり兼ねてゐた。單に縁の無いものとしか考へられなかつた。それより外に考へ様がなかつたのである。

「こんどはしつかり話をつけたいと思つてゐるんだ。君にも心配をかけて本當に濟まないが……。」

「よく考へてね。一時にかつとしない方がいいね。」

政行は、その話に餘り觸れたくないやうな氣詰りを感じ、自分と同じいやうな研一、慶子の宿命を考へることが、晝の仕事の疲れも手傳つて懶いやうな氣がしてゐた。

政行は、絶えず起つてくる緣談に憟毛立つて、話を深入りさせないやうにしてゐた。慶子も同じい腹だつたが、口へ出しては言はなかつた。酒もあまり用ゐず、勸めからかへると、家のなかをあち往きこち行きしてゐる兄を、毎晩のやうに見出した。

ひとりになると、政行は、茶の間の時計の下や、二階の居間や、臺所なぞ、いたるところに彼れを佇立させる、忘られぬ、さまざまな姿態が柔しげに目にうつりくることを感じた。さきに別れた三人とも最う緣談があつて片づいてゐたが、町の郊外の學校にゐる女はまだそのままになつてゐることが、かれの頭によくまつはりついてゐた。慶子も、その女に縋つてゆくより、兄と、世間とを調和させるものがないことを考へてゐた。

「兄さん、あたし最う一度行つてみようと思つてゐるの。行つてわるいか知ら、どう思つて――。」

政行は、その癖その話を進めたい腹の底をおさへるやうにして、考へ考へ、慶子の目から逸れるやうにしてゐた。

「さういふ風になればいいんだが、ああして一度出て行つたものだし、その事ばかりにお前を奔队れさせるのも實際氣の毒だしな。」

「いいえ、あたしならどうでもいいわ。兄さんの方がうまく行つてくれるとあたし嬉しいの。」

慶子は、こんな話になると、いつも昂奮してくるのを自分ながら知つてゐたが、又話をつないで

「もう一度行つて見ますわ。いいんでせう。兄さんは。」

「さうね。お前にまかしてをいてもいいよ。兄さんは何とも言ひやうがないから。」

こんな話が出ると、政行は、人任せをしてゐてはつきりと自分の考へをあらはさないのをいつもの事ながら出足を挫かれたやうな氣がした。が、やはり自分でその話をつけてしまはなければならない氣がしてゐた。

「ぢやあたし行つて見るわ。できるだけ頼んで見るわ。」
「さうか。何分よろしく。」
政行は、微笑つて胡魔化しながら、きまり惡さうにしてゐた。慶子もさういふものの、うまく行けばいいがと、兄の額をみいみい不安な身にあまる重みを感じた。
「研さんがね。」
兄がさう言ひ出すと、慶子はすこし額をあからめ、いくらか苦しさうに眉を柔しくしがめ
「そのはなしは止して頂戴。」
「どうして。」
「どうしてもよ。」
「お前の考へがききたいんだ。兄さんも骨折つてみたいと思つてゐるんだから。正直にお前の考へてゐることを話してごらん。」
さういふ話の常例として、慶子は、感傷みやすくならうとする氣もちをおし隱し、落ち着きを兄の前に見せることに骨を折つてゐた。
「あたし研さんのことなぞ、本當にあてにしてゐないんですの。」
「さう、お前もさう考へてゐるのかね。もうすこし研さんがしつかりしてゐて呉れるといいんだが。」
慶子は、しかし心の中で、兄のその言葉を自分があてにしてゐないと言つたに拘はらず、物足りない、存外さつしてくれぬ兄のやうに思はれて仕方がなかつた。

「どうでもいいのよ。兄さんの方さへうまくまとまればね。」

慶子は、兄がそれ以上研一のことを言ひ出さないので、坐を立ち、流しの方にある仕事をしに行つた。冬近く水は冷たく、しびれを感じるやうになつてゐ、考へてゐるうち、兄も研一もみな厭みにならないやうな氣がし、いつの間にか電燈の方へ向かないで、仕ごとのあとも、兄に腫れた目をみせないやうにしてゐた。

慶子は、言ひにくさうに、纏まり兼ねる女のことを、わざわざ學校まで行つてして見たが、やはりあれだけの緣にして置いて呉れと言つたことを話しだした。

「べつに兄さんにどうといふ考へを持つてゐないやうですわ。わたし全くわからないの。どうして來て下さらないのか——。」

實際、慶子には、女が兄のどんなところが氣に入らないのかわからなかつた。

「僕にも分らないさ。どうにもならなきや仕方がないさ。」

政行は、火鉢の上に手を翳し、かさかさ掌を揉みながら火氣を避けるために外らせた顏を慶子の方へ向けた。へんに寂しく瘦せた頰のあたりが目に殘つた。

「あたしが居るせいか知ら……」

慶子は、しらず知らず左ういふと、何か思ひ出して紅くなつて了つた。

「そんな事はないよ。お前が居たつて別にその——何といふことはないんだ。」

兄も、わざと強辯するので、慶子は、益益コヂれた。

「いえ、あたしもときどきさう考へることがあるの。」

慶子は、寂くなるまいと思つても、頰照りがして仕方なかつた。政行は、默り込んで何か考へ、きうに口を切らなかつた。慶子も、知らず知らずその後腦の重くなるやうな默んまりに、完全に引ずり込まれ、珍らしく雨のない晩の靜かなあたりに相對してゐた。

「研さんぢやない？」

二人は、同時に息窒るやうな窮屈な空氣から拾ひ出され、耳を峙てた。表から新島研一がぶらりと這入つてきた。

「君だつたか、どうも君だと思つた。」

さう政行は言つたきり、又默り込んで了つた。

「通りかかつたものだから。」

きまり惡さうにしてゐる研一は、慶子のよこへ窮屈さうに割り込んで、火に手をかざした。慶子は、ちよいと挨拶したきりで、そとはすこし寒いでせうと言つただけだつた。研一は、すぐさま此のへんに重い空氣を感じ出した。

政行は、獨り言のやうなことを言ひ、座を立つて、小用にでも行くふりをして次の間へ行つた。あとでも二人はさきから續いてゐる空氣にじつと身をひそめてゐるやうにしてゐた。

「どうかしたの。」

「いいえ。」

「默つて向ひ合つてゐるから何かあつたのかと思つたんだ。」

「なんでもないの。」

研一は、地につかない話を浮いたなりでつゞけてゐたが、慶子も、うはの空で返事ばかりしてゐた。欠伸をしながら出てきた政行は、一言二言いふと、また元どほり默つてしまつた。睡い物憂いお互の顔をみんなが外らし合ふやうにしてゐた。その上、かへらうとしながらその隙間をねらへないでぐずぐずしてゐる研一の苛ついた腰つきが、しぜんに政行にも慶子にも感じられた。慶子は、その重苦しさがこめかみをずきずき痛ませてくるやうで耐らなかつた。

「ぢや又、そのうち。」

やつと立ちかけた研一が土間へ立ちかけたときまで、慶子は此間の話が出るのかと、其ればかり空頼みにしてゐたがその話を一つもしないで出て行つた。慶子は、その足音を聞き、沈み込んでゐた。政行も默つてゐた。



靜かなる朝

塚原健二郎

（一）

「何といふ無責任さだ！」健作はＨ病院の玄關口の三和土を腹立しげに蹴つて、轉がるやうに西小川町の街路へ出た。眞晝に入らうとする日の、正午下りの太陽は蒼白く昂奮した彼の顏にかつと照りつけた。彼の顏は急に熱して、蒼黑く一際の凄味をさへ呈した。血走つた彼の双眼の膜の中を、額から流れ落ちる汗がぬら〳〵と露した。「醫者迄が共謀になつてゐるのだ！」もう一度彼は誰に言ふともなく、嚙みつくやうに叫んだ。そして駈け出した。彼は危ふく、向ふから走つて來る自轉車ボーイに打突らうとしたが。が、其都度彼は辛じて身を躱はした。彼の帽子も被らず、ワイシヤツもネクタイもなしで上着を引かけてゐる風姿は、どう見ても狂人だつた。路傍の人も並外れた彼の風采に好奇の瞳を瞠つた。と此時彼の頭に、いやに陰氣臭ひ、ある病院の長い樓下の場面が映つて來た。青ぶくれの心臟病患者の顏や、腕を白い布で胸から肩へ吊した外科患者の顏やが往つたり、來たりしてゐる光景がである。健作が產後の肥立

の悪い姿を伴つて、神田橋近くの共施療所の門を潜つたのは一昨日の午後であつた。其處の內科と記された診察所で受持の醫員から一通り診て貰つて、共時控室に待つてゐた健作の許へ歸つて來た時の、妻の兩眼に一杯に溜つた淚の今にも零れ落ちさうな、哀れつぽい顔が又しても彼の眼の前を掠めた。

「あなたが一度醫員の方に會つた上でよく訊いて下さると心强いんですがね、でないと何んだか私安心能きないんですもの」こんなことを言つてぐつたりと傍の椅子に腰を下ろした。

「でも何んとか言つたらう、何處が惡いとかつて」

「え丶何でも肺尖に、腹膜に、心臟に。それから肋膜の痕がまだ治つてないんですつて、それで田舍か、海岸へ轉地した方が好いつて言ふのよ、そしてもう一人の醫員と顔を見合せてクス〲笑つてゐるのよ」

「腹膜に、肺尖に、心臟に、肋膜に、冗談じやないね、病氣の問屋じやあるまいし」

から健作は苦笑しながら內科の診察室へ入つて行つた。其處の汚れた診察台の上に仰向けになつた勞働者風の男を打診してゐた、四十格好の貧相な醫員に彼女の容態を訊ねると、矢張り彼女の言つた四ツの病名を數へたのであつた。そして赤坊に母乳を絕對に吞せては不可ないといふ注意をも付け足した。

腹部の塗布藥と、水藥とを貰つて診療所の門を出て、××公使館裏の長い板塀の處まで、二人共既つと押し默つて、お互に心に祕してゐる、恐ろしく危險なものゝ爆發を氣遣ひながら、そして成可くそれに觸れまいと力めながら步いたのだつた。醫員の數へた四ツの病名が一つ一つ檢する時、たとへ致命的なものでないにしても、彼女の脆弱な肉體は、その四種の疾患を一時に支へ切れるものとは思へなかつた。此場合轉地といふ方法が最も優れたものであつたとしても差當つての藥價すら支拂ふことの不可能である彼であつた。

「妻は死ぬかも知れない。一瞬の間も忘れたことのないほど愛し切つてゐる淳一をも自分の手に殘して、是が遲い西の園迄自分の事業を助ける爲に走つて來て、暴君のやうな自分の一年近い月日の間の、從順なる僕であり、母でもあつた彼女の受ける正しい報酬だらうか、」彼はかう思つて立止つて、背後から引きづるやうな步調で跛いて來る妻を振返つて見た。其處は大きな梁を擴げた碧梧桐の葉影になつてゐた。

「お前步けるかい……」かう勞はるやうに言つて、彼は妻の瘦せ細つた手を不氣味なものゝ如に輕く握つて見た。妻は洋傘を杖にして、右の手を健作の肩に置いた。

「私。もう駄目なんだわね」

「莫迦な、そんなことがあつて堪るものか」彼は力強く否定した。そして又步き出した。が其時、彼は妻の恢復を信じてはゐなかつた。が、もう一度彼は死力を盡して彼女を以前の健康體に復さうと心に誓つた。彼は其の爲めに非常に大膽になつた。彼はS氏といふ先輩に宛てゝ窮狀を訴へて、合力を得たいといふ手紙をも書いた。そして彼女に關する一切のことに他人の手を煩さなかつた。彼女の病氣に就いて必要なもの、たとへば氷囊だとか、搾乳器だとか、檢溫器だとか、彼の力で支辨することの不可能なやうなものまで、稍馴染になつてゐる表の藥品屋から取り寄せた。二日經つた。彼女の容態は急變した。彼女は全身に非常な痙攣を引き起した。唇は紫色に變つた。兩足は死人のやうに冷却した。體溫は四十度を越へた。妻の母親は大急ぎで芥子を水で溶いて病人の足の裏に貼りつけたり、表の氷屋からブツカキを買つて來たりした。赤坊は弟の米吉の手に抱かれて、馴染の薄い哺乳器の乳首を吸はなければならなかつた。健作は表に飛び出した。醫者を迎へに行く爲めであつた。西小川町から、神保町へかけて三四軒の醫院の扉を叩いたのだが、折惡く不在であつたり、手が塞つてゐたりした。日病院は其附近でも著名な病院だつた。其處では奥に聞きに行つた取次の

看護婦の、十分近くも顏を出さないのに腹を立て、そのまゝ表へ飛び出したのだつた。

健作は西小川町の角の交番の前迄走つて來た時、立ち止つて箱の中を覗いた。警官に醫院の心當りを訊く爲めであつた。箱の中に警官は椅子に腰を下ろしたまゝ、時折街路へ退屈な瞳を放げてゐた。

「醫者は在りませんかしら、內科の、病人が非常に惡いんです」健作がかう出し拔けに言つて近寄つて行つた時、警官は、大きなあくびを一ツ嚙み潰した。そして、

「君は何處に住んでゐるんです、職業は、誰が惡いです、」健作の取り亂した服裝から何か嗅ぎ出さうとするやうに鼻をうごめかした。

「醫者は在りませんか、病院でも好いんです」

彼は急き立つて苛々した。

「誰が惡いんです、君はこの近くに住んでゐるんですか……。」警官は繰返した。

「もう宜しい……」健作は到頭腹を立てた。血がぐつと頭に上つて來るのを感じた。彼は駈け出した。神保町の電車通りの方へである。

清心堂醫院！　右側の通りから僅か入つた所に吊された此看板を見出した時、彼は救はれたやうに思つた。彼は入つて行て、扉を押した。玄關口から、見透かされるやうになつてゐる診察所に、其日の新聞を讀んでゐた。若い、艶の佳い顏色の、頭髮を綺麗に分けた醫員は、一通り彼の來意を訊いた後ち「それでは、ご一緒に伺ひませう」と答へた。暫らくして、白パナマの帽子を被つた醫者が彼の前に現れた。健作は途々病人を一昨日××診療所に伴れて行つたこと、それから其處の醫員の奬めた轉地說など事細かに說明した。家に入る時、彼は

「お醫者さんだよ……」と褥の上の妻に注意した。

勝手で氷を碎いてゐた母親が手を拭き拭き出て來た。病人は輕く首肯いて、血の上つた顏に感謝の色を表した。醫者は病人に近づいた。最初に體溫を見た。それから聽診器をあてた。腹部を診た。そして診察の全く終つた時、醫者は病人から少し離れて、

「もう少しで」と言つた。

「人を一人殺す所でした……」眞面目な取り澄した顏を健作に向けた。

「轉地なんて飛んでもないことです、一昨日××診療所にいらつしやつた丈けでも大打擊です。」其時母親の運んで來た洗面器に手を浸しながら醫者は嘲笑ふやうに言つた。

「助かりませうか？」病人は泣き聲になつた。

「大丈夫ですとも」醫者は自信ありげに答へた。

「然し、腹膜が進んでゐなさるから、暫く絶對安靜です、自家血清注射なら早いのですが、如何です、血を少し取りますか、ほんの一寸で良いんですよ」醫者は笑ひながら、老人が子供をすかす時のやうな態度で、病人の心を動かさうと努めた。病人は初めは强硬に拒んだ、が結局、必らず癒ると云ふ條件でそれを承諾した。醫者は明日の往診の時に、其用意をして來ると言つて歸つて行つた。送りに出た健作　耳に今夜にも、もう一度容態が變れば危險だといふ注意を囁くのを忘れなかつた。

健作は××診療所の醫員の無責任を限りなく腹立てた。併も昨日診察を受けた時、クスクス笑つたといふ妻の言葉を思ひ返へして、それが明らかに誤診ではなくて、彼等は何も、彼も知つてゐたのだと思つた。そしてそれは、殆ど故

的な重患に陷つてゐるにも拘らず、無謀にも俥にも乘らずに診察を乞ひに出かけた、自分たち夫婦の、病氣に關する無知を嘲笑つたのに外ならないのだと思つた。併も親切らしく轉地を奬めて病人を迴避しやうとしたのは、彼等の無責任を二重にするものだと思つた。そして此事は彼等の良心が何れほど習慣に依つて痲痺してゐるかを十分に證據立てゝゐるとも思つた。加之其診療所がある新社會の建設を理想とする一部の××主義者の經營になるものだと思ひ到つた時健作は何かのカリケチアを想像しないではゐられなかつた。注意を受けた第一夜は、妻の容態は殆ど平穩に過ぎた。彼女は絕へずうと〳〵と眠りと現との間を往來してゐた。健作は徹夜して間斷なく腹部の氷囊を取り換へた。赤坊は病人の傍らに寢かされて小さな鼾を立てた。妻は眞夜中に時折、ぱつちりと大きく眼をみひらくことがあつた。そんな時枕許にぱつねんと坐つてゐる彼の手を輕く、おもちやか何かのやうに握つて、

「あなに苦勞ばかり掛けるわね、私弱いものですから……」こんなことを言ふのであつた。そして又間を措いて、

「淳ちやんは！」かう言つて赤坊の寢顏を覗くやうにして、

「あなた私癒るかしら、死ぬやうなこと無いわね」

「そんなことといふと癒らないよ、病氣は一つは信仰で癒るんだから」

と彼女は又思ひ出したやうに、

「仙さんが此頃ちつとも來ないわね」かう健作の女友のことを言つた。

「仙さんは入院してゐるんだらう。手術を受けるんだから」

「あなた私死んだら、淳一と二人切りで暮して行けて？　でも仙さんと一緒になるやうなことはないでしよ」

「莫迦だねお前は」かう窘めるやう言つた健作は、是が日頃嫉妬らしいことを、おくびにも出したことのない妻の言葉

であるだけ、それだけ彼には意外にも、又可憐くも思はれるのであつた。暫らくの間、薄い紅絹の布で被つた電燈の光りの中に、凄いほどげつそりと肉が落ちて、どげとげしく見える妻の顔を、眤つと瞶めてゐた健作は、瞬間衝動的に自分の顔を、熱臭ひ妻の頬に押しつけるやうにして、泪の一杯溜つた両の瞼を、美味しい西洋果物の汁でも吸ひ取るやうにぺろりと舌の尖きで舐めてやつた。

（二）

「あの頃」と健作は心に強い自責を感じて言つた「だが！」彼は強くそれを否定するやうに叫んだ。「僕は貧しかつたのだ、たとへあの頃の彼女の生活に無理があつたとしても」

健作の妻は其年の五月産をした。其頃彼等は小石川音羽八丁目のある荒物店の二階に間借してゐた。彼は其處から日本橋の××書店の雑誌編輯所に通つてゐた。極めて薄給だつた。其二階は彼等夫妻の、都市生活のきつかけともいふべき、九世山の上の生活が全く行き詰つた時、偶然に見出した假住居だつた、夕方散歩の歸りに其二階を見付けて來た時、

「五十圓の敷金が浮く譯だからね、お前が少しの不便さへ忍んで呉れたら」と健作は妻に向つて言つた。

「だけど二階でお産をするのは大變ですわ」容易に肯んじない妻を、「都會に於ける敷金の要らない借家法は間借り以外にないこと、不便や、屈辱は一時的のものであること」を說いて、漸う承諾させたのだつた。其二階で彼女は初めて産をしたのだ。凡てが不完全の間に行はれた、

五月初旬のある日であつた。夕飯を濟して、一時間近く經つた頃妻が俄に腹痛を訴へ出した。最も一番最後に診察を受けた時、三十日か一日と産婆の言つた豫定日はもうとうに過ぎてゐるのであつたから、或は産氣づいたのかも知れな

い。健作は思はないでもなかつたが、父となるといふ感じが、何うもピツタリと頭に來ない健作は、此出産といふ事實が是ほど近く迫つてゐるのにも拘らず、一方全くあり得べからざることいやうに考へられてゐるのであつた。然し、事實は儼然と、刻々彼の前に迫つて來るやうに見えた。傍の疊の上に突伏しになつて、痛苦を忍んでゐた妻は、其時机に向つて創作の筆を執つてゐた健作の手を持つて、自分の腰の邊りを押さへさせた。

「此處、えゝ其處よ、もつとぐつと押へて頂戴」

から言つて顏を顰め、口をふくらませて、自分でも下腹部を兩手にぐつと力を罩めて押へた。それにしても成可くならば、宵の中に、凡てのことが終つて欲しいと健作は心の裡に願つたのである。一寸の出入りにも階下の人の神經に觸れまいと、氣を遣はなければならない二階住居で、若し深夜にでも及ばうものなら餘りに慘めであつた。産婆を呼びに行くにしても、彼女の母親の許へ電話を掛けるにしても、其都度表の木戸の開け閉て、階段の上り下り、凡ての動作に細心な注意を以つて當らなければならなかつた。

とにかく健作は、四疊の方に褥を取つて妻の體を運ぶようにして、寢かしてやつた。痛みは間歇的に十分間位間を隔いて來た。

「痛い……痛い、あなた……エ、其處を押へて……もつと！」健作は時折襲つてくる睡魔を追拂ふやうにして、彼女の腰部から下腹部へかけてを押さへ押さへした。

十一時を過ぎた頃であつた。急に彼女の容態が變つたと健作には思へた。著しく呼吸が迫つて來た。心臟が波打つて髮の毛の亂れた額には、薄く血が上つてゐるのであつた。痛苦を訴へる聲も、先刻ほど高くはなく、たゞ唸るやうに微かに唇を泄れた。

「若しか？」から思つて、彼は衝動的に立ちにつたのであつた。

「お前、しつかりしてね、少し耐へておいで、急いでお産婆さんを迎へに行つて來るからね！」妻は首肯いて見せた。

足音を忍ばせて階下へ下りた健作は、裏木戸を開けて裏の通りへ出ると、築地に江戸川の停留所近くの産婆の家に驅けつけた。彼は直ぐにお後からといふ産婆の返事を齎して引返して來て、二階に上つて見ると、矢張り嚴肅な緊張した場面が其處に在つた。此刻、長い陣痛の苦みに疲れ切つて、根こそぎ力といふものが拔け失せたやうに見えた彼女は、其時、もう一度勇猛心を振るひ起して、一つ大きく呻いて健作の體に確りと抱きついた。十分、廿分、手古摺り切つた健作は、街路に面した窓を開けて、産婆を待つことに苛立つた。寂然として眠つてゐる兩側の建物に反響する下駄の音の一ツ一ツにも注意を拂つた。彼は、其凡てに裏切られた。

「馬鹿な奴だつ！　無責任な奴だ」健作はいら〱く感情を吐き出すやうに言ひ言ひした。それから産婆の來たのは小一時間の後であつた。産婆は好人物らしい女だつた。妻から容態を聽き取つた後、腹部を診て、産期の近づいたことを告げた。彼女は白い仕事着を着けて、藥品や便器の用意をした。健作は恐ろしく、嚴肅な瞬間が近づいて來ることを感じた。が、とう〱黎明迄彼女の同じいやうな狀態が續いた。そして健作は妻の分娩する刹那の苦みと、狀態とを知らなかつた。何故なら、彼は其時妻の母親の許へ電話を掛ける爲に自働電話迄行つた留守であつたから。だが其時、彼女が何れほどの苦痛を經驗したかといふことは、彼女の足を當ててゐた壁土が二尺ほどの間崩れ落ちてゐたことと、足部の側の押入の襖の三四尺はひ上つた處迄、彼女の血液の混つた破水の爲に濡れてゐたことに依つて、容易に想像された。二階の上り口で、最初に赤ん坊の泣き聲を聞いた時、健作は異常な昂奮を覺えずにゐられなかつた。産婆は緊張した顔をしてゐた。額には玉のやうな汗がにじんでゐた。彼女は何か汚れたものを形付けてた。そして健作を見ると、

「男の赤ちやんですよ」と言つた。極度の心の疲れから脱け切つてゐないのか、につこりともしないで言つた。健作は此説明を聴く迄もなく強烈な消毒藥の臭氣のプンとする室の中へ一歩踏み込んだ時、其處の小さな蒲團の上に、不氣味な肉の塊のやうなものが、仰向けて轉がされてあるのを見た。赤いぶよ〳〵な全身に柔い産毛が密生して、顔は老人のやうに醜く皺が出來てゐた。薄い頭髪は格好の惡い、頭のてつぺんに粘りついてゐた。健作は駈け寄つて行つて、それを本能的に抱き上げやうとした。そして産婆にそれを止められた。

「あつ、赤ちやんに抱き癖が付くと不可ませんよ」と、妻は想像したよりは平氣な顔をしてゐた。健作を見ると紅らんだ頬に、微笑を浮せて、感謝と、安心とを示した。彼は限りなく妻に愛情を感じた。極度の感激が彼を泪ぐませた。彼は彼女の枕許へ近寄つて行つて、其時盥の中の湯加減をしてゐた産婆の方へ背後を向けるやうにして、彼女の額に接吻した。

淳一――それは彼夫妻が、其嬰兒の爲に選んだ名であつた。夫婦は初め種々な名を選んで見た。健作の頭字を取らうといふことが二人の間に略定つた時、健作は自分たち二人の結婚に就いて、全く無條件的に骨折つて與れた岡村を思ひ浮べた。

「淳さんの淳の字を取らうかね。」と健作が妻の同意を求めるやうに言つた、

「淳太郎、淳吉、淳平だと淳さんと同じだし何んだか可笑しいわ」

「淳！　好い字だよ！　第一淳さんの友情を紀念する爲にもね、淳！　淳！　とあゝお前淳一が好いよ、ね、さうしよう」珍らしく燥いで健作は漢和辭林を持ち出して、字義を調べたりした。

妻は月末に褥を離れた。然し、出産の際出血の多量だつた爲めと、普段さう壯健でなかつたためとで、彼女は非常に衰弱して見えた。お七夜の濟んで四五日は、母親も毎日神田から通つて來て、赤坊の爲に湯を使つてやつたり、娘のために粥を炊いたりしたが、そのうち遠いので億劫になつたかして、三日に一度位より來なくなつた。梅雨に入つて間もない頃で、漸う褥を離れたばかりの妻は毎日のおむつ洗ひに追はれてゐた。赤ん坊は一日湯を使はせないで置くと、太股の邊りが一面に赤く爛れて目も當てられなくなるのであつた。それで健作は時折、かんしやくを破裂させなければならなかつた。

「お前のお母さんのやうな人は澤山無いね。他人に對して冷淡なのや、薄情なのは例があるとしても自分の子や孫に對して愛情が起らないといふのは。」と健作は始終言ひ言ひした。

「お前暫らく實家へ行つて居たらどう、僕はパンでも何んでも喰べてゐるから、第一赤坊が可愛さうだ、如何にお母さんでも眼の先きにゐたらお湯位使はせて與れないこともなからう」

「えゝ、私もその方が好いわ　ほんとうに二階の上り下りが大變なんですもの」

何時も定つて此處まで話が運ばれるのであつたが、偖てそれから一歩先きへ、實行といふ點になると、何方からともなく、いつの間にか話が消滅して又二三日は過ぎるのであつた。それは、たとへ健作が妻の神田行を建議した處で、實際心の裡で、彼がそれを望んでゐるのでないことは、餘りに彼女には見透いた事實であつたからである。又健作自身もそれ以上話を進めるにしては、餘りに過去の記憶が生々しく、且つ悲慘であつた。神田の妻の實家！　其處で經驗した三ケ月近い時日の思ひ出は、健作に取つて決して快よいものではなかつた。それを心の裡に描く度に、彼の心は嚙まれるやうに痛んだ。其處には眞裸のまゝで引きづり出された一個の無宿者としての自分があつた。足蹴にされて、引ばつた

かれて、尙且つクン〱と鼻を鳴らして、跟いて行かとうする、慘めな捨犬のやうな自分があつた。妻―それを完全に自分の所有とする爲めには、彼がそれ迄に、彼女の心臟を掴むために拂つた血税だけではまた充分ではなかつた。彼女の母親は、彼に社會的地位と、名譽と、それに附隨する富とを要求した。それが娘を所有すべきものの資格だと信じた。健作は其一つをすら具備してゐなかつた。母親は極度に失望した。健作を一個の略奪者として眺めない譯には行かなかつた。が事實は、娘の所有權は完全に此無資格者の手に移つてゐたと言へるのであつた。何故なら……娘はとつくに心臟を此無資格者の手に渡してゐたから。そればかりではなく、母親が其娘にのみ傳へたと信じた血は、其無資格者の血と混り合つて、今生れ出ようとする一つの獨立した生命をも創造してゐたから……是を知つた時、母親は自分の娘の略奪者は、自分の全生涯に取つて、單なる路傍の逢遇者ではなく、其處に働いてゐる必然的な何物かの力を承認しないではゐられなかつた。が、さう思ふことが、直に健作に對する態度を變へさせるにしては、彼女は餘りに片意地であつた。加之彼女は若くして良人に先き立たれた女に共通な、へんに愚痴ぽい性格の所有者であつたから――。出拔けに彼女の家に轉り込んだまゝ、是と言つて定つた職業もなく、食事の時、機械のやうに食卓へ向ふ外、一日中默りこくつて机に向つてペンを動かしてゐる健作の態度は、母親の神經をいら〱させるに充分であつた。彼女の不機嫌は露骨に、時としてひねくれた、當てこすりのやうな形を取つて、健作と、そして妻とに當つて來た。女親だと思つて各自に好きたことを仕てゐるとか、子供が幾人あつても若しかの時の力になる子は一人もないとか、誰は株で何の位ゐ儲けたとか、米が高いとか、自家は陰氣臭くてゐられないとか、そして又彼女は實際家に止つてゐることが極めて稀になつた。二月の初旬に健作は日本橋の××書店の雜誌編輯所に就職した。そして其月の中旬にいよ〱健作が新に見出した九世山の高臺の家へ妻と共に引移らうとする時には、母親は急に、一向きな若いもの丶することを危ぶむ親切な老人らしい態度に

變つて、今日は佛滅で日が惡いとか、足下から鳥の立つやうに引越さなくても可いとか言つて、强ひて一日延させることにした。引越の日は朝早く母親も、妻と共に丘の家へ箒や、馬穴を提げて出かけて行つた。その時から僅か三ケ月の時日より經つてはゐなかつた。そして今又、たとへ僅かの間でも妻を預けることは、自分の受けた屈辱を二重にするものだと健作は思つた。

ある日、健作は出勤前の僅かの時間を盜んで創作の筆を執つてゐた。筆は澁り勝ちだつた。彼はいら〳〵した。此頃いつも定つて襲はれる絶望が彼の胸を刺した。赤ん坊がベツトの上で眼を醒して劇しく泣いた。彼は其時階下で洗濯をしてゐた妻を呼んだ。妻は容易に上つて來なかつた。もう一度赤坊が劇しく泣いた時、彼は机を離れてそれを抱き上げた。そして裏の障子を開けた。水道端に妻の洗濯をしてゐる姿が見出された。

「おい來ないか」彼はかつとして、聲を荒く叫んだ。赤ん坊は續けさまに泣き喚めいた。彼は室の中を歩き廻つた。自分の仕事が頭の中で滅茶苦茶に打ち壞れて行くやうに感じた。彼は泣き出しさうになつた。洗濯物を抱いて妻が氣だるさうに上つて來た。それで彼のかんしやくは破裂した。

「馬鹿つ！」彼は怒鳴つた。

妻はいきなり健作に飛びついた。

「私が抱きますわ！。」彼女は赤坊を健作の手から奪つた。

「子供を五月蠅がるつてありやしない。あなたはちつとも子供になんか觸らないのね」

健作は默つた。そして机の前に返つた。赤坊は母親の乳房を啣むことによつて泣き止んだ。

「あなたは」妻は續けた。」

「仕事さへしてゐらつしやれば可いのね、私や淳一はどんなに顏が黑くなつても!!」

健作は悲みがじつと心を嚙むのを感じた。永久に理會しあへない二人の心の内部の光景を、彼は心の眼で見たからである。

「お前に僕の仕事をもつと尊敬して吳れなければ、第一お前が僕達の運命が何によつて開拓されるか、それを少しでも考へたら――」と彼は言つた。

「だけど、あなたのやうな方は結婚なさるのは間違つてゐますわ、一人でゐらつしやれば!」

「又か」と彼は言つた。そして此問題は彼がいつも打ちつかる牆壁だつた。が彼は藝術家が家庭を持つことが間違つてゐると思ひ切ることは出來なかつた。然し、事實は家庭が彼の藝術家であることを背んじなかつた。彼は新しく突きあげて來る悲みをじつと堪らへた。彼は三四月ケ前から一つの創作に取りかゝてゐた、筆が少しも進まなかつた。彼は苛立つた。絕望が彼を厭世的にさへした。彼は家庭を呪つた。妻と衝突した。妻と、そーて淳一との生命を斷つて、自分も死んで行く場面を幾度が彼は心に描いた。そしていつも最後に力が足りないのだと思つた。自分はどんな理由の下に妻と爭はなくてはならなかつたとしても、貧しさの爲にだけは爭ひたくないと思つた。それは餘りに傷しい場面だから。たとへどれほど啀み合ふやうなことがあつても、それが、さぐり合ひや、嫉妬に原因してゐるとかのものであつたらまだ可い。さうした場合の夫婦喧嘩はお愛嬌とも言ひうるから。がそれが若し貧しさの爲めであつたら、より固く結び合はされなくてはたらない貧しさの爲であつたら、貧しさから起るいさかひは自信をぐらつかせ、希望を失はせる。厭世的になる、爭ふことを止めよう――彼は其度心に誓つた。

「私神田へ行つてゐようかしら、體がだるくてしようがないんですもの。さうしたらあなたも思ふように仕事が出來る

し」暫らくして妻が言つた。

健作は顔を顰めた。が打算が彼にそれを肯定させた。彼は此機會に二三日打通して仕事をして見ようと思つた。

「あゝ、さうして呉れ、長い間ではなくとも好いから」彼はかう言つて妻を促した。

正午頃妻は大きなおむつの包みを抱いて、赤ん坊を背負つて神田の家へ移つて行つた。健作も丁度出勤時間だつたので、一緒に電車に乘つた。

「あなた、社の歸りに一日に一度は屹度寄つて下さいね！」九段下で電車を捨てる時、妻は先刻の喧嘩のことなどまるで忘れたやうに、こんなことを言つて、電車の中を見い見い俎橋の方へ歩いて行つた。

それから三日目の正午頃であつた。××書店の二階で、健作は洋服の上着を脫いで、額ににじみ出る汗の滴を拭き〳〵各地から集つて來る投書の整理をしてゐた。階下の帳場の傍に在る箱の中に、毎日溢れるほど詰め込まれてゐる、封書や、私製はがきや、官製のや、いろんな投書を二階に持ち上げて、其處の砂のほこりでさら〳〵してゐる疊の上に、一杯に押しひろげて、和歌、俳句、散文、コマ繪、といふやうに、一種類づゝそれを區別するのである。是は健作の不快な一日の中で最も興味ある數十分であつた。そして全く空頼みに終つたとしても、未だ現れずにゐるものゝ芽を見出すと云ふことの興味もあつた。又其處には多くは獨斷であり、無節制な感激であつたとしても、生きた人間の心が動いてゐた。

其時、階下から店員のRの聲で、

「××さん電話ですよ――」と呼ぶのが聞えた。彼は周章てゝ上着を引かけたなり、階下へ下りて卓上電話の受話器を耳に當てた。ヂヂヂ……と何時迄經つても相手が出なかつた。

「どなた――エ、私、健作です――エーエー」そして漸う其聲が神田の母親だと知つた時、健作はドキンと一つこづかれたやうに感じた。

「あ、千鶴子が――さう――では直ぐ、エヽようございます」電話を切つて二階に上つて來た健作は、昨日一日彼女の許を見舞はずに過ごしたことを、ひどく責められた。是非一度醫者に診て貰ひたいから來て欲しいといふ母親の言葉の裏に、何んとなく自分の無責任を責めつけてゐるものがあるやうに思つた。それで彼は組橋近くの妻の家に驅けつけた茶の間にゐた母親に、

「昨日は忙しかつたものですからつい！」からぬらつく體の汗を拭き拭き、言譯らしく言つて、椽側の處に赤坊を抱いてゐた妻に、

「どう、體の具合は」と、勞はるやうに視線を放げて近寄つて行つた。

「ご飯が不味くつて、それに水ばかり呑みたくつてしようがないのよ」妻は元氣のない聲で言つて、目尻の邊りに泪をにじませた。

「熱のせいだよ」と、何氣なく言つて、妻の顔を覗くやうにした健作は、僅か一日見ない裡に、頬の肉のげつそりと落ちて、氣の故か眼球迄がひどく落窪んで了つたやうに思つた。彼は心の裡に、ぎよつとしたが、強いて顔色を動かさないやうに力めた。まだ二ケ月と僅かより經たない赤ん坊は、妻の懐に安らかな眠りに陷ちてゐた。

「此處へ來てから、夜と晝とを取つ違ひて皆を困らせてゐますわ」妻はから目くばせしながら言つて、それとなく母親の五月蠅がつてゐることを示した。××診療所に出かけたのは其日の午後であつた。

「あの頃」と健作は再び心に繰返した。二階の階段の昇り下りが彼女の病氣の原因をなしたといふ母親の說を、無條件

で肯定しなければならないと彼は心に思つた。若しあのまゝ丘の上の家で、彼女が出産を済まし得たとしたら、そして又産後、せめて二週間の間でも、看護婦か、女中を雇ふ資力が自分にあつたとしたら、かう思ふことによつて、彼の心は再び暗く沈んだ。それは現在の彼が思ひ悩んでゐるそれと一致してゐたからである。金——それは此場合の妻に對する愛や、誠意やの一切を表示する原動力だつた。彼は次の日の午前、彼に取つて初めての經驗である金策の爲めに市内の古い知己や、親戚を二三個所歩いたのだつた。が、夕方彼は無一物で歸つて來た。電氣の點く頃であつた。母親は勝手で夕飯の仕度をしてゐた。病室へ入つて行つた時、赤ん坊は空の哺乳器を吸はされて睡つてゐた。妻は待ち兼ねたやうに彼を見て、につこりと微笑んだ。痩せた彼女の顔は微かな安心と喜びとに輝いた。

「暑かつたでせう。」

「ああ、今日は熱は何う、醫者が來たかね」彼は帽子を脱いで彼女の枕許に坐つて額に手をやつた。氷嚢は生温かくなつてゐた。

「血は採らなくとも可いんですつて、もう此んなに病氣が良いんですもの」彼女はつけ元氣らしく笑つた。

「さう良かつたね、痛い思ひをしなくつて濟んだ譯だね」健作は冗談らしく言つた。が彼は内心助かつたと思つた。彼は自家血清注射と云ふものを非常な高價に見積つてゐたから。二人は默つた。そしてお互に言うべきことを言はずにゐることを意識してゐた。

「僕がねお前、面白いものを買つて來たよ」

彼は立ち上つて、入口に在つた新聞紙の包みを提げて來た。

「何に？　當てごらん」彼は包みを妻の位置から少し離して置いた。

「バナゝ？　貴方の買つて來るものはバナナ、位だわ」

「違ふよ、ハンモックさ、淳ちやんをのつけるんだよ！」

「まあ」彼女は驚いたやうに健作の顏を見た。

健作は包みを解いた。其處へ小兒用のハンモックが取り出された。健作はそれを飯田町邊を歩いてゐる時、フト餘り流行さうもない洋服店の店先きで見付けたのだつた。店晒らしだと言つて、正札より三十錢値切つて買つて來たのだつた。

其處へ妻の弟の米吉が外から歸つて來た。そして傍から口を挾んだ。

「ハンモック、何處から買つて來たの、白木？　三越？　あゝ何んだいこりあお古だ、お古だ。」少年はかう言つて一度取り上げたのを其處へ輕侮するやうに放げ出した。

健作は默つて顏を顰めた。妻が目を怒らした。

「お古じやないわね、これごらんなさい、ちやんと正札が付いてゐるぢやありませんか。」躍氣となつて、妻は手垢のついた正札を弟の前につきつけた。

「へん、こんた新があるかい、第一汚れてゐるじやないか――」米吉も負けてはゐなかつた。

勝手から母親が顏を出した。

「何んです米ちやんは」母親は目に角を立てた。そしてそれを手に取つた。

「まあ、ほんとに汚れてゐること、でも肺病の使つたものでさへなければね」母親は皮肉らしく言つた。健作は唇を嚙んだ。

「お母さん迄お古だつて仰言るの、買つて來た本人に訊いたら一ばんよく解るでせう」妻は憤然として、褥の中から顏を乘り出すやうにして言つた。

「お止し馬鹿っ」健作が呶鳴つた。

「お前達のために買つて來たんじやない、淳一のためにだよ、淳一はちよつとも不平なんか言つてやしないじやないか」

母親と、米吉とは立つて勝手の方へ行つた。健作は妻と顏を見合せた。

室の裡は暫らく沈默が領した。

「今日は何うだつたの、お友達の方にお逢ひ出來て?」妻が氣遣はしさうに良人の顏を覗き込んだ。彼は默つて首を振つた。そして又暫らく默り合つてゐた。

「お藥りを戴いて來て下さいね」妻が思ひ出したやうに言つた。

「あゝ」それで彼は立ち上つた。其時赤ん坊が泣き出した。

「米ちやん」と妻が弟を呼んだ。子供を見て貰ふためである。米吉は答へなかつた。

「米ちやんてば、嫌やな兒ね」彼女は泣き聲を立てた。

「よし、僕が抱いて行かう」健作は戻つて來て言つた。彼は赤ん坊を抱いて外へ出た。外は暗くなつてゐた。赤坊は泣き止まなかつた。

彼は電車通りへ出た、明るい飾窓の前に出る度に、立ち止つては電燈の光りで赤ん坊を泣き止まさうとした。赤坊は劇しくヒツヒツと泣いた。彼はかうして赤坊と二人取り殘された時のことを想像した。彼は恐ろしく絶望的になつた。

ある書店の前に來た、新刊の雜誌や、書籍が棚の上に一杯に並んでゐた、此恐ろしい試錬がもう一二年後に來たらと思つた。彼は強い仕事に對する焦燥を感じた。力が欲しいと思つた。この屈辱も、貧窮も、下らない周圍とのいきさつも、凡てを解決するものは仕事だと思つた。彼は強い創作慾を感じた。力がつき上げて來た。がその力を、彼はどうすることも出來ない自分であることに想到した時、彼の心はひつぱたかれたやうに痛んだ。

(三)

翌日彼はもう一日勤めを休んだ。妻の經過は非常に良好だつた。朝、彼は座敷の柱から柱へハンモツクを吊つた。そして赤坊をそれに載せて泣く度に搖つた。赤坊は動搖につれて泣き止んだ。米吉は面白がつて亂暴に搖つた。褥の上で妻がそれを止めた。米吉は肯んじなかつた。それで姉弟はよく喧嘩した。

正午頃、健作は麻布のS氏から速達便を受け取つた。S氏——彼はその人の名を心に呼ぶ時、強い愧と、責めとを覺えずにはゐられなかつた。S氏と彼との交渉はもう五六年越續いて來たのだつた。其頃彼は北國の火山の麓街に住んでゐた。其處で初めて彼はS氏を知つたのだつた。S氏は小說家であつた。そしてS氏も若い頃、その火山の麓町に住んだ記憶を持つてゐた。彼はその麓町でS氏の著作を熟讀した、當時健作は廿歳前後の青年であつた。彼自身まだ文學で起たうとも、別な方面に走らうとも心の定らない時代であつた。彼が文學で起たうといふ考へを持つて上京したのはそれから一二年の後であつた。北國から彼はS氏の家庭に出入するやうになつた。有形無形に彼はS氏から並外れを厚意を受けた。最近二三年間彼はS氏の著作からも、S氏其人からも遠ざかつた。彼は過激な思想を盛つた多くの著作を貪り讀んだ。自ら日向の山深く逃走つて、ある新社會の建設にも携つた。が、かうした彼が、時として全く衝動的にS氏

の著作を展げるやうなことがあつた。彼が獨り靜かに自分の心の内部の聲に耳を傾ける時である。それは異邦人が遠い郷國を慕ふ心情にも似てゐた。其處には夕暮の如き靜けさがあつた。たとへばシャバンヌの綺麗に見る如き高い氣品と平明と、靜謐とがあつた。だが――彼はそれだけの思慕と愛着とをS氏の藝術に對して把持してゐるといふことが、既に二年近く接近しないS氏の愛情に甘へて好いといふ理由にはならなかつた。此場合甘へるといふことは、魂を――媚を――賣ることと、同意味に取れるやうに思はれた。それよりも彼はS氏に自分が狡猾い奴と評價されることは堪らないと思つた。それほど彼は自分を下劣な人間として考へたくなかつた。が事實は、彼はS氏に宛てゝ合力を得たいといふ手紙を書いてゐた。それはあの場合の彼に取つて唯一の取る可き道ではあつたが――そして今、それに對してS氏から「一寸立ち寄つて欲しい」といふ手紙を受け取つたのだつた。彼は聰明なS氏のあの底光りのする眼が、自分の心の内部を見拔いてゐない理由はないと思つた。

夕方彼は九段下で青山行の電車に乘つた。指定された時間にS氏を訪ねる爲であつた。六本木で下車すると、彼は見覺えのある道坂を下つて行つた。折惡くS氏は留守であつた。取次ぎに出た女中が、「お見えになりましたら是を差し上げるやうにお申しつけでございました」かう言つてS氏の著作の一部を健作の前に差し出した。彼はそれを受け取るとひどくちぐはぐな思ひをして其處を辭した。彼は解き難い謎をかけられた時のやうに感じた。彼は夕暮近い電車道を六本木の停留所の方へ歩きながら、其時、S氏が自分のために選んで與れた、著者自身に取つて、恐ろしい危機であつた最初の家庭生活の記錄とも云ふべきその著作の頁を繰つた。其時彼は、頁と、頁との間に白い紙片の折り疊まれて挾んであるのを見た。そしてその中から、十圓紙幣が四五枚頁の上に亂れた。彼は周章てゝそれを拾ひ集めた。彼はひどく昂奮した。それから紙幣の挾んであつた紙片に瞳を凝らした。鉛筆の走り書きで、

「艱難の多い日が早くも君達の新しい家庭にやつて來たことを知りました。こゝに僅かばかり有りますから使つて下さい」と簡明に書きつけてあつた。彼は二三度それを默讀してゐるうちに、じつと瞼の中が熱して來るのを感じた。態と逢はずに誠意だけ相手に徹底させようとするS氏の心遣ひが、彼に感謝の念を一層強めさせた。彼は助 たと思つた。妙に氣が彈んで駈け出したい氣さへした。彼はそのまゝ銀座を廻つて、藥用葡萄酒と、肉エキスとを病人の爲に買つた。

其晩家に歸つた時健作は、

「お前安心おし、もう大丈夫だから」と妻に言つた。

「ほんとうに良かつたわね、私癒つたらきつとお禮に行きますわ」妻は一晩中言ひ言ひした。

(四)

二三日經つた。妻は危險狀態を通り越した。醫者は小量の粥を攝ることを許した。赤坊はハンモックの上で終日過さなければならなかつた。健作は正午頃勤めを早退きにして歸つて來た。珍らしく妻は褥の上に起きてゐた。褥の位置もいつもとは反對に、頭の方を明るい庭の方へ向け敷いてあつた。

暑い陽は重り合つた隣家のトタン板の屋根庇に碎けて、その照り反しで家の中は一層蒸し暑かつた。

「顏色が大へん良いようだ――」妻の枕許に坐つた時、健作が言つた。

「今日はもう熱がすつかりありませんの」妻は、急に出の細くなつた乳房を訝らなさうに弄びながら言つた。薄白い汁は、乳首の頭から二三滴にじむやうに垂れた。

「晝飯は？」健作が訊ねた。病氣になつてから、彼女は食事を凡て健作の命令のまゝに攝つてゐた。

「鯛の煮たのを是れつぽつち」と彼女は量を示すために指で輪を作つて見せた
その時健作は彼女の枕許に彌れた二寸程のみご束のやうなものの轉がされてあるを發見した。
「是は？」と彼が訊いた。
「今日お隣りの叔母さんが、榎町のお釋迦さまから態々戴いて來て下すつたの、是でお念佛を唱へながらお腹の上を何んべんもこするんですつて、隨分可笑しいわね」妻が笑ひながら說明した。
「それでお前はこすつたのかね」彼も苦笑しながら妻の顏を覗くやうにした。
「えゝ、でも折角遠くまでお參りに行つて來て下すつたのですもの」彼女は顏を赧くして言譯らしく答へた。
「御もあの叔母さんが敷を換へて與れたのよ。北枕は緣起が惡いんですつて」
「さう」彼は言つた。
「お隣りの叔母さんがあなたを褒めてゐたわ、お宅ではよくお仕になるつて」彼は、妻の媚びるやうな瞳を避けるやうにして、
「それから」と追求するやう言つた。
「あなたは奥さん孝行ですつて、それで私は幸福者だつて皆の前で言ふのよ」彼女は滿足さうに笑つた。そして其笑ひには愛情と、感謝とが含まれてゐた。
此場合のお隣りの叔母さんの言葉は、單なる噂さ話ではなかつた。彼女自身の心を健作の前に表示するために引用されたものだつた。彼はそれを感じた。そして心から滿足した。
ハンモックの上で赤坊が泣いたので彼は立つて行つた。哺乳器は空だつた。彼は新しく乳を作る爲に勝手許に行つた。

其處で米吉の周章てゝ出て來るのに出會した。米吉は逃げるやうに妻の病室へ入つて行つた。ミルクの垂れた痕で、板の間はベト〳〵してゐた。彼はミルクを瓶に移さうとした。昨日蓋を開けた罐が半分ほどに減つてゐるのを發見した。彼は顔を曇らせた。彼は乳を薄めてそれを赤坊に啣ませた。そして輕く揺つてやつた。

彼はチラと次の室を見た。妻の褥の後に置いて在る火鉢の傍に米吉が檢溫器を弄んでゐた。少年は健作の見てゐることを氣附かなかつた。それでそれを火の上に翳した。初めは遠火にして。だんだん火に近く翳した。水銀はぐん〳〵と昇騰した。健作は驚いた。

「米ちやん！」と彼が叫んだ。其時ガラスはピンと輕い音をたてゝ碎けた。

「おや」と妻が眼を瞠つた。少年は椽側の方へ逃げ出した。が、それを隱し蔽へないと思つた時、單衣の襟に敏速に押し込んだ。妻がそれを見てゐた。そして

「米ちやん、駄目ですよ、そんな狡猾いことと」と褥の上から咎めた。

二階にゐた母親が降りて來た。健作は口を噤んだ。

「お母さん。米ちやんが檢溫器を碎いたんですよ」妻が挑戰的に言つた。

「嘘だい！」少年は捨鉢らしく否定して、言ひ付けるときかないぞと言ふやうに剝いた白い眼を姉に向けた。

「何んです他人樣の大切なものを」母親が皮肉つた。そして米吉を睨んだ。

「嘘だい、以前から碎けてゐたんだい」少年は强情に言ひ張つた。そして一度襟の間へ押し込んだ檢溫器を漸り抜き取つて妻の褥の上に投げた。

「要らないわね、ちやんと以前の通りに直して頂戴！」妻の手によつて、尖端の碎けた胴身の三分計か、一片のガラス

の破片として椽側に放り出された。陽光がキラ〳〵と砕けた。
「さあ、母さんにお言ひなさい、お前が砕いたのか何うか」
「母さんは私達が嘘を言つてゐると思つてゐらしやるの」妻は憤然とした。
「お止しお前は病人じやないか」健作が堪り兼ねて呶鳴つた。
「私が新しく買つて來ますから。」母親は立ち上つた。
「直ぐあゝだ、嫌やな母さんね」妻は泣き出しさうな顔を健作に向けた。
健作は押默つた。そして不幸な母親の背後姿を見送つた。彼は矢張り不可なかつたと思つた。彼はあの朝、妻を此處へ移らせる時、感じた豫感が適中したことを思つた。二度と彼は此恥かしい場面を繰り返すまいと心に誓つた。
「仕事をしよう、總てを解決して呉れるものはそれ以外に何物もない」と思つた。彼は妻を見た。妻も彼を見た。其眼は許しを乞ふてゐるやうに見えた。
「僕は」と彼は言つた。
「急に仕事をしたくなつたから、音羽へ歸るよ。淋しくつても明日の朝迄我慢しておいで、今度こそあれを書き上げるからね」
「あなた、母さんを宥して上げてね」妻は泪ぐんだ。
「お前のお母さんは、お前を生んだ人だ、僕はその人を憎む氣にはなれない。然し今は、ひどく僕達も、お母さんも皆の境遇が悪いんだ。僕は何んとも思つてやしない。たゞ仕事がしたいんだ。力ではり切れるやうな仕事をね」
彼は立つて行つて、赤ん坊を見た。赤坊は眠りかかつてゐた。汗が額一面に、にじんでゐた。彼はそつとそれを拭い

てやつた。

(五)

夕方、健作は久振りで音羽の家の二階に上つて行つた。彼は戸障子を全部開け放つた。むせ返るやうな青葉の匂が窓近く迫つてゐた。家の中は砂ほこりが厚く溜てゐた。書棚や机の上も白くなつてゐた。床の花瓶の花がガサ〳〵に枯れ朽ちてゐた。一通りはたきを當てた後で、彼は机の位置を目白臺に面した小窓近く移した。其處で彼は書きかけの草稿を展げた。それは妻を知つた前后を取り扱つた彼の自傳的のものだつた。彼は紙を繰つて書き溜めて置いた分を二三枚讀み返して見た。そして彼はこれから書き進んで行くべき事象を心に描いた。彼は急に嚴粛な感激に搏たれた。彼は泣き出しさうになつた。妻と、そして淳一とのことを思つたからである。彼は其小說に書きつけようとする時代から、今日迄に妻と共に歩んで來た道を思ひ返した。寂しい、然し涙含まれるやうな力強い道だつた。全く愛されてゐると彼は思つた。そして同時に二人の運命は全部的に自分に負されてゐるのだ。自分はそれを狂はしてはならないと思つた。さう思ふことによつて、彼は力と滿足とを感じた。彼はペンを執つた。

其年の春、妻に會見するために信濃から上京した時のことを書いた。その頃彼女の周圍には彼に取つての幾人もの競爭者を見出さない譯には行かなかつた。そして又其競爭者は彼よりは數倍優秀な社會的位置を具備してゐた。彼の持つてゐるものは白熱的な愛情以外には何物もなかつた。彼女も又、習慣と、周圍の輿論とを踏みにじるにしては餘りに弱い女性であつた。彼は數日間逢ひ續けたにも關らず、遂に彼女の心臓を掴むことが出來なかつた。彼は失望者の悲痛な心情を抱いて信濃へ歸つた。彼は當時經驗した惱ましい心の狀態を如實に書きつけようとした。彼は冒頭に書いたのを

知らなかつた、夕飯に彼はパンを喰つた。九時頃彼は疲れたので著物のまゝ横になつた。彼は眠つた。眠りから覺めたのは二時であつた。四邊は森としてゐた。時折、階下の人の寢返りを打つのが聞えた。彼は肌寒を覺えたので着物の上に洋服の上着を引つかけた。頭が冴へて總ての物の象が明瞭と映つて來るのを感じた。彼は再びペンを執つた。彼は最後の一節にペンを落す時、一度書き上げられた紙數を算へて見た。それがまるで愛撫するかのやりに見えた。六十五枚――それがその紙數であつた。彼は全部で七十二三枚に書き上げようと思つた。

愛するものに呪ひを送つては不可ない――と彼はその一節の冒頭に書きつけた。實際その時迄、此簡明な一章ほど彼は權威ある文字に出會さなかつた。彼は彼女の態度の不徹底さゝ限りなく憤つた。衝き上げて來る劇しい怒りと、呪咀とを盛つた手紙を間斷なく書いた。が怯懦がそれを投函させなかつた。愛する者に呪ひを送つては不可ないといふのが彼の信條であつたからである。彼は自分の信條の破綻に苦しまずにはゐられなかつた。もう一歩で彼が、彼の標榜する愛と、信條とが概念の幽靈に外ならないといふ皮肉な現實暴露の前に面接しようとした時、彼は、彼女の姉から、彼女の高い發熱を知らせる手紙を受け取つた。彼の腹立は此事實の前に消散した。彼は初めて嚴肅なものゝ前に立 たことを感じた。彼は自分の愛情を徹底させる爲に周圍と、習慣とを無視した。彼は、彼女を自分の愛する者として、積極的に打ち突かつて行つた。彼は何物を恐れなかつた。自分が彼女の肉親の何人よりも彼女に近いものだといふことをも露骨に宣言した。此處迄來て初めて、彼の信條は槪念の衣を脱いだ。權威を生じた。愛する者に呪ひを送つては不可ないといふ言葉は、彼の血税によつて贖はれた權威ある信條となつた。そして彼のこの眞摯な態度は偉大な効果を齎した。何故なら彼がその四月の中旬に、彼の同志が西の國に起さうとしてゐる理想鄕へ旅立たうとする時迄には、完全に彼女の心臟を摑んでゐたから――彼は此最後に贏ち得た愛の勝利を強く力說してペンを擱いた。

彼は最後のペンを擱くと、ぽかんとした。暫らくして昂奮が彼を去つた彼は立ち上つた。窓の障子を開けた。靜かな黎明だつた。薄い乳色の霧が目白臺一帶の青葉の丘をやんはりと包んでゐた。ヒタヒタと肌に觸れて來る大氣は素絹のやうにひやつこく、且つ魅力的であつた。雲のない淺黄色の空に星屑は夢のやうに淡く溶けかゝつてゐた。昵つと耳を澄してゐると、何處からともなく呻るやうな、吼へるやうな、濤の立ち騒ぐやうな一種底力ある響音が傳つて來た。それは目覺めて行く大都會の聲であつた。健作はその時、神田の家の六疊で、窓の小障子から流れ込む薄明りの中に靜かに眠つてゐる、淋しい、それでゐて何處か幸福さうな微笑を浮べた妻と淳一との寢顔を想像した。彼は暫らくの間、浴びるやうな彼等の愛情の裡に昵つと立ち盡してゐた。（完）

——一九二一、九、四——脱稿



金貨

上司小剣

一

『死んだ。……』といふ聲には、春田の身體がビクリとして、冷水を浴せかけられたやうに、慄然と毛孔の粟がるのを覺えた。

棟梁も若い大工も、煙管を持つたまゝで立ち上つて、大工部屋から飛び出した。孕んだ牝猫が足に絡まるのを、どうした機みか蹈んづけて、『ぎやうん』と痛さうな叫びを立てさせたのに狼狽しつゝ、棟梁は『どうした、どうした。御免よ、御免よ。』と猫にあやまつて、周章てた手つきで猫を抱き上げ、突つかけ草履の足元もしどろに、新館の普請場の方へ行つた。春田も其のあとから、小走りにつゞいた。

行員の食堂の裏を少し行くと、だら〳〵と土地が低くなつて、其の先きに半ば竣工した新館の地下室は、鐵筋コンクリートの壁の巍然と聳えたのに、深く蓋をされたやうになつてゐた。此處にもまた自分たち機關夫の働くべき地下室が造られたのかと、寂しく痛ましい思ひで胸を胞きながら、春田は棟梁の背後から伸べ首をして眞つ黑

に人だかりのした外側の足場の前を覗き込んだ。黒い人だかりの中には、白服のコツクや、襦衣一枚の人夫なども混つて、自然に鯨幕を引き廻はしたやうな色どりになつてゐた。其の人だかりの中に、無慙な怪我人が倒れてゐるのだといふことを知つた春田は、また胸がいつぱいに塞がつた。其の塞つた胸の上へ、棟梁は默つて孕んだ牝猫を突き付けるなりだら／＼坂を下りて、人垣を搔き分けつゝ、白服のコツクと、黒い印袢纏の人夫との間へ潜り込んでしまつた。

棟梁から孕み猫を預けられた春田は、少し困つた。元來動物のさう嫌ひでない春田、殊に猫と犬との好きた春田であるけれど、この場合暢氣さうに猫なぞを抱いてゐるところを、監督や同輩の機關夫に見られやしないかと氣づかはれたのだ。それでなくとも昨夜のことがあるので、監督は難かしい顏をして、何か知ら自分の落度を探し出さうとしてゐるらしいのに、自分が地下室からこんなところへ、ふら／＼、と彷徨ふて來て、猫を抱いて遊んでゐるのを見付けたらどんな顏をするであらう。

昨夜はどうもあんなにして、監督にスカを食はすには及ばなかつたのだ。門衞の兒島爺さんの娘と見合ひをするだけのことなら、何もさう恐ろしいわけもないのだ。亡き愛人濱江の母親の貧しい家で、濱江のあられもない姿の寫眞を見せられてから、俄に氣がわるくなるとゝもに、また亡き人を慕ふ心が一層募つて來て、他の女と見合ひなぞをすることが重い罪を犯すやうにも考へられたので、自分より一足先きに門衞の兒島爺さんの今川小路の家へ行つてゐた監督にも、御馳走を拵へて待つてゐた筈の兒島爺さん父娘にも、スツカリ待ちぼけを食はして、同じ神田の母親の家から、郊外の父親の家へ逃げ歸つた自分の動作は、何んと言つても、行き屆いた仕打ちでない。今日からやつてよくものこ／＼と銀行へ出て來られたものだ。

そんなことを考へてゐる春田の胸へ、猫は頻りに爪を立てゝ踠いた。淺黄色の作業服の下は白地の洗ひ晒らした單衣で、其の下はもう親から貰つた皮だ。其の皮にまで、猫の鋭い爪は、チク／＼と屆いた。

『あツ痛ツ、畜生ツ。』

さう叫んで、春田は馬でも乘り靜めようとする風に、全身の力を籠めつゝ、腰を捻り、足を踏ん張つて、この小さな動物を逃がすまいとした。棟梁からの大切な預りものだと思ふと、どうしてもそれを土の上に放ち去ることも、また元の大工部屋へ連れて行くことも出來なかつた。そんなことをして、若しや行方が分らなくなつてしまつたら、棟梁に申し譯がないと、春田はひどく責任を感じた。全く棟梁はこの牝猫を自分の子のやうに大事にしてゐる。普請場の足場から落ちて死んだものがあるのを、自分の弟子かさうでないかと確かめに行く場合にも、抱いてゐた猫を土の上に放り出すことは出來ないのだ。棟梁の心では、弟子よりも猫の方が大事なのかも知れない。

猫はどうもまだ馴染の薄い春田の胸に、頻りと爪を立てて、踠き狂ふた。『ニヤアゴ、ニヤアゴ』と苦しさうな聲さへ立てゝ隙さへあらば逃げ出さうとした。春田は不圖亡き濱江からは敎つた猫の機嫌の取りかたを思ひ出した。それは耳の後を掻いてやることであつた。濱江の說に據ると、猫はいろ／＼の動物の中で、一番怜悧なもので、狗を除いては猫と智慧くらべの出來る動物はないが、其の怜悧な猫も、耳の後を掻いてやると、恍惚として我れを忘れてしまふ。猫の機嫌を取るのはそれに限るといふことであつた。それを濱江から敎はつたのは、濱江の亡くなる少し前だつたので、春田はまだ一度もそれを實際に試むる折りがなかつた。今は丁度幸ひだ、濱江の遺訓(?)をこゝに應用してやれと思つて、片手では工合のわるいのを、漸く逃げ出させないやうに猫を抱き締めて、片手の食指で耳の後を少しづゝ掻いてやると、成るほど成るほど、猫は忽ち踠くのを止めて、うつとりと、眼を細くしながら、頸も身體も柔かくして、ゴロ／＼と咽

喉を鳴らし始めた。

これなら大丈夫と、春田の油斷してゐるところへ、近くの町に、内外科小兒科花柳病科と慾張つた看板を掲げてゐる肥つた開業醫が、小使に導かれて、疾風の如く急いで來たのを、猫は何か怖いものが轉げ込んで自分に襲ひかゝるとでも思つたのか、忽ち春田の胸から飛び出して、左の手の甲に細い掻き疵を殘したまゝ、何處へか逃げ込んでしまつた。春田はあつと叫んで、猫の行方を見送つたが、大工部屋の前を通り越して、運轉手部屋の方へ行つた其の早さは眼にもとまらぬほどであつた。左の手の甲を見ると、猫の爪の痕は赤い絹絲がくつ付いたやうに、血が滲み出してゐた。其の傷を舐めつゝ、春田はだら／＼坂を對館の普請場の方へ下りて、人垣の後から覗いたが、無惨な怪我人を見ることは出來なかつた。何んとなく、寂しく痛ましい氣持ちが、春田の胸を襲つた。

二

『死んだ。……』と、噂されてゐる人間よりも、春田には逃げた猫の方が大事になつた。若しこのまゝ猫が戻つて來なかつたら、棟梁に申し譯がない。なアに猫のことだもの、少々遠方へ來てゝも必らず歸つて來る。それが同じ銀行の構内の馴れた場所を飛び歩いてゐるのだから、迷子になる筈はないと、分り切つたことを考へながらも、なほ何んだか不安であつた、棟梁が大工部屋へ戻つて來た時、自分に預けられた猫を自分が抱いてゐないといふことは、猫好きの棟梁に對して工合のわるいことである。地下室の方で監督に惡く思はれ、大工部屋で棟梁の機嫌を損じたら、自分の行くべき場所がなくなる。さう思つて、春田はトボ／＼と、運轉手部屋の前から、小使室の脇を通つて、病室の側へ出た。この内へでも入つてゐやしないかと思つて、入口から覗いて見ると、六疊ばかりの板敷きの上に、寢臺（ベツト）が二つ、白壁に沿

ふて八の字形に置かれあつた。其の一ツは空であつたが、他の一つには黒い事務服其のまゝの婦人が横はつてゐた。よく見ると、昨日二階の女事務員休憩室で、朋輩と演劇の眞似をしてゐたあのアイダであつた。アイダの成れの果、そんな氣持ちで、春田は寢臺の上を見てゐた。

歌劇女優の下廻りをしたことのあるものなぞも、この銀行の女事務員にだいぶ入り込んで來てゐるといふことだ。昔通り事務室の方には、この銀行の事務員といふのを名譽の肩書のやうに思つて、他に比べては安過ぎる月給に足し前までして、美しくお嬢さん風に着飾つて通つてゐる婦人もあるさうだけれど、發行女子室や國債女子室にうじよ〳〵してゐる四百人もあらうといふ連中は、いづれも女工のやうなもので、男を男くさいとも思はぬたぐひであつた。

『おはいんなさい。』

こんな聲が、寢臺(ベット)の上から聞えたのには、春田も流石に少し面くらつて、後の方を見廻はしたが、誰れも見てゐるものはなかつた。

『おはいんなさいよ。』と、白いクションの上に動いた白い手は、少しばかり手招きの形さへ見せた

『何處がおわるいんですか。』

春田は無言のまゝでも立ち去り兼ねて、こんなことを言つた。

『えゝ、發行女子室で、お紙幣(さつ)を勘定してたら、ふら〳〵して氣が遠くなりかけたのよ。お紙幣の中毒よ。よく皆さんやられるの。でもわたしのは、いつもひどいの。このまんま死んじまふのぢやないかと思つてよ。』と桃色の脚肉を露はしつゝ、其の女は懇(ねんご)ろな間柄でもあるかのやうに、馴々しくベラ〳〵と、春田に喋舌つた。

『もういゝんですか。』

『もう大抵いゝんだけど、怠けてるの。』

『隨分横着なアイダさんですね。』と、うつかり戯れを言つてしまつて、春田はハツと口を押さへたくなつた。

『あらツ、よく覺えてゝね。あたしの顔、そんなに特徴があるんですか。』と、丁度アイダのやうな表情をして、起き上りかけた。春田は自分の仕事の電氣にでもかゝつたやうになつて、三度目の『おはいんなさい。』に引かれつゝ、白い寢床の枕頭に立つてゐた。

『醫者に診て貰つたんですか。』

春田はほかに言ふことがないので、こんなことを言つた。さうして、郊外の病院で溺死の濱江の寢臺に寄り添ふて立つてゐた時のことが想ひ出されて、妙にこの寢臺が懐かしくなつた。

『お醫者さまは來たんですけれども、いつものあの先生が。……するとね、新館の普請場で誰れか怪我をしたと言つてそつちへ行つちまつたのよ。また落ちたんですか、足場から。』と、何處までもアイダの表情の附き纏ふ彼女は、眉を顰めつゝ、桃色の齒肉を見せて言つた。

『中川さん、いかゞ。』

病室の入口に鈴を振るやうな聲がしたので、振りかへつて見ると、それは昨日のラダメスであつた。ラダメスは思ひがけぬ春田の姿にハツとした風で、入り兼ねる様子を見せたが、また思ひなほして、つか／＼とアイダの枕頭に進んだ。

『わしの手に抱かれて死ぬといふのか。こんな清い美しいそなたを、……』と、ラダメスの聲色を作つて、健康な女は病める女の枕頭に摺り寄つた。

『ほゝゝゝ。』

『ほゝゝゝ。』

氣樂さうな、さうして些か卑しく猥らな氣味を含んだ笑聲が交換された。

『宮谷さん、また足場から墜ちたんですか。旅館の普請場の。』と、病める女は眉を顰めつゝ、健康な女に問ひかけた。

『えゝさうよ、厭やね。これで二人目ぢやありませんか。』と、健康な女も眉を顰めた。

『どうしてゝあんな大きな普請になると、二人や三人は死なゝければならないつて言ふのよ。犧牲ね、長柄の人柱よ。』

と、病める女の方が却つて元氣のよい言葉になつた。

『あゝ、駄目〳〵。』と言ひ〳〵、肥つた醫者が急ぎ足に入つて來て、じろりと春田を尻目にかけた。

三

春田は醫者に追ひ出されたといふ形で、病室を出て來たが、其のまゝ入口に立つて、内部の話し聲に耳を傾けてゐた。

『先生、どうしたんですの。』と訊いてゐるのは、アイダの聲であつた。

『いやア、どうしたもかうしたもない、見事に碎けてるよ、額が。』と、モリエエルの喜劇の中に現はれさうな風で、醫者は場所柄も構はずに大きな聲を出した。

『可哀さうに先生、死んだんですか。』と、痛まし氣な、臺詞のやうな聲をして問ふたのは、ラダメスであつた。

『六階から落ちたんだもの。足場を蹈みはづしたんだね。馬鹿な奴だ。眼の玉が飛び出すなんて言ふが。あれは嘘だ

ね。眼の玉も一緒に潰れてるよ、額の骨が碎けて。』と、醫者の聲は稍低くなつた。

『大工ですか先生。』

『いや、人夫だよ。大工はまだ用がないんだ。この前に墜ちたのは鍛冶屋だつたが、今度は人夫だ。昔しは普請と言や大工が入つたものだが、今は鍛冶屋が入るんだね、鍛冶屋が入つて左官が入つて、大工は一番後だ。……どうだ、あの人夫の死骸をこの病室へ擔いで來させようか。』

『厭やですよ先生。』と、アイダは魂消るやうな聲をした。

『嘘だよ、女事務員と人夫ぢや身分が違ふから、この病室へは入れない。僕が入れようと思つたつて、銀行で許さないよ。なか／＼身分がやかましいからな、女事務員だつて、これで、行員の食堂で食事は出來ないんだらう。』と、醫者の聲はまた少し高くなつた。

『女事務員は猫と同格ですよ。』と、アイダは何を考へたか、こんなことを言つた。

春田はいつまでこんな下らない話を立ち聽きしてゐても仕樣がないので、また大工部屋の方へ戻つて來ると、猫はちやんと棟梁に抱かれて、其處の前に棟梁は立つてゐた。

『春田さん、まア一度見て來るんだね、人間の死にざまにもいろ／＼あるが、あの高いところから落ちて、コンクリで額を破つたのも、なか／＼見事ですぜ。名譽の戰死といふところだね。……中途で足場へ手がかゝらなかつたもんかな。大工ならあんなヘマはやらないがね。何んしろかう一つ、足場を踏みはづした時に、しまつたと思つて、氣拔けをしちまふから駄目なんだ。あの足場の間を潜るやうにして落ちて來るんだもの、氣拔けさへしなけれや、何處へでも手を引つかけるところにドッサリありますよ。ねえマル、貴さまだつて、あんなヘマはやらないね。』と、棟梁に猫の頭を撫で

てゐた。春田は窃ッと、先刻この猫に引つ掻かれた左の手の甲を見ると、細い傷が蚯蚓腫れになつてゐた。

『あゝ、來た、來た。』と、呼ぶ誰れ彼れの聲が聞えて、三十七八でもあらうかと思はるゝおかみさんが、背中に眠つた子を負つて、七歳ぐらゐの男の子の手を引き〳〵、小使に導かれつゝ、ひよろ〳〵と、今にも躓き倒れさうな、危つかしい歩きかたをしてやつて來た。沈み切つた其の顏には、殆んど生きた色がなかつた。手を引かれた男の子が、大事さうに玩具の電車を抱へてゐるのも哀はれであつた。母も子も小ざツぱりとした單衣を着てゐるが、手足や頸筋は垢だらけであつた。櫛卷きにしたおかみさんの頭にも、三分刈りが七分ぐらゐに伸びた男の子の頭にも、自動車に浴せかけられたらしい町の埃りが白く附いてゐた。

『可哀さうだね。』と、獨言をした棟梁の眼には、涙が浮びかけてゐた。春田はどうもこの後をば續けて見てゐるに堪へないので、惜しい幕切れに背中を向けるやうな心持ちにもなりながら、行員の食堂の横を通つて、自分の地下室の方へ行かうとすると、丁度食事時で、食堂はがや〳〵と賑つてゐた。一汁一菜の其の献立を横目で、硝子戸越しに睨んで、コツク室の脇を逃げるやうに地下室へおりると、自分の机の上には、案の通り南瓜に油揚げの一皿を添へた丼飯が擱かれてあつた。もう丼も皿も空にして、襟に挿してゐる爪楊枝で亂杭齒をほじつてゐた監督は、じろりと春田を見て横を向いてしまた。同僚の機關夫相木は、空になつた丼や皿を片脇に寄せながら、

『春田君、飯が濟んだら、出納係の卓上がいけないさうだから、直してやつて來てくれたまへ。』と、監督の方を見い見い言つた。

『さうですか、直ぐ行つて來ます。』と言ふなり、春田はニツパを手にして立ち上らうとした。

『まア君、飯を食つてからでいゝよ。』と、相木は周章てゝ春田を引き留めようとした。

『いゝえ、僕喰べたくないんです。何んだか胸がいつぱいで。……』
『胸がいつぱい？　どうしたんだね。』と、相木は意味あり氣にニヤ〳〵笑つた。
『新館で人夫が足場から墜ちて死んださうですね。其のおかみさんが、背中に一人負(おぶ)つて、一人手を引いて、二人の子供を連れて來たのを見たもんですから、可哀さうになつて來て。……』と、春田は胸を押さへた。
『あゝあのおかみさんを君は見たのか。あの人夫をよく知つてる小使に僕は先刻聞いたんだが、腹の中にも、もう一人居るといふ話だよ。あの人夫は四十二の厄年だから、生れた子を一石橋の迷子石の前へ棄てゝ、其の小使が拾ひに行つてやる約束を、昨日あの人夫としたんださうだ。厄年に生れた子はさうするんだつてね。それが今日はあれだ、人の生命(いのち)ツて分らないものだと言つてたぜ。』と言つた相木の言葉に、春田はまた涙を誘はれかけた。『死』といふことを思ひ浮べる時、『死』といふ詞を聞く度、春田の描き出す幻影は、必ず愛人濱江の冷たい死面であつた。

四

普通の商店ならば、店の間ともいふべき表の出納係の室へ仕事に行くのは、春田に取つて厭やなとの一つであつた。其處　儼然と卓子を前にして控へてゐる出納局長や、調査役の面がまへが、先づ氣に入らない。資本主義の走狗――とまでは行かずに、鼠ぐらゐのところ――と言つたやうな人間も、此處ではお山の大將といふ風をして、齊服の機關夫なんぞは、人間の屑とも思つてゐないらしい様子である。
『おい君ツ、もツと早く來てくれなくツちや困るぢやないか。』
給仕（この銀行では事務見習といふ）あがりの若い事務員は、ニツパを手にした春田の青い顔を見るなり、今一汁一

菜の晝飯に有り付いたばかりの口を尖らして、叱り付けるやうに言つた。

『えゝどうもおそくなりました。食事をしてたもんですから。』と、春田は冷かに言つて、直ぐ出納係の卓上電話の介解にかゝつた。

『さうか、これからは電話をかけたら直ぐ來てくれたまへ、一刻を爭ふんだから。』と、若い事務員は派手な襟飾(ネクタイ)の曲つたのをなほしながら、調査役の前の卓子の女事務員の一列に横目を使つて、如何にも機關夫の癖に食事なんぞするのは生意氣だとでも言ひたげな風であつた。春田も卓上の機械を解きつゝ、横目でちよい〱女事務員の方を見ると、此處のは、發行女子室や國債の子室の女工のやうなのとは違つて、上品に約ましく事務を執つてゐた。あの口で燒芋を齧ることもあるのかなアなぞと、春田は考へ〱仕事にかゝつた。局長は大きな椅子にどつしりと腰をおろして、機關夫づれに直々言葉をかける人間ではないぞよといふやうな顏をしてゐた。

表の八角(龜甲形に石を敷いた八角形の廣間で、內部のものは皆かう呼んでゐる)から、朴齒の音を立てゝ、飛白の單衣に小倉の袴を穿いた若い書生が、勢ひよく飛び込んで來て、眞ん中に突つ立つてゐる守衛長に突き當りかけながら、右へ曲つて、窓口へかゝつた。

『君ッ、これを金貨に取り換へてくれたまへッ。』

さう叫んで窓の中へ投げ込んだのは、古びた五圓紙幣であつた。

若い書記が、白い背廣のすらりとした後姿を見せて、それに應接した。

『五圓の金貨は今ありません。』

『無いのに何故(なぜ)、此券引換に金貨五圓相渡可申候、と書くんだ。東京の眞ん中に大きな店を張つてゝ嘘を吐くのか、こ

れは詐僞か。』と、初めから喧嘩でも吹つかけに來たやうに、書生體の男は居丈高になつた。

『都合で五圓金貨を鑄造しないんですから 五圓がないんです。』と、白い背廣の書記は、冷かに洒落でも言つてゐるといふ風であつた。

『それぢや、都合により鑄造せざる節は引き換へません、と何故書いとかない。』と、窓口を睨み詰めた書生體の男の顏は、物凄いほどであつた。

『そんなこと、わたしには分りません。』

『ぢや十圓金貨ならあるんだね。これで十圓金貨と取り換へてくれたまへ。』と、書生體の男は今一枚汚なくなつた五圓紙幣を窓口に放り込んだ。

『紙幣を金貨に換へて、どうなさるんです。』と、若い書記は、落ちつき拂つて、書生體の男の窓口に投げ込んだ二枚の紙幣に手を觸れようともしなかつた。口元の微笑が背中にまで透き通つて見えてゐるやうなのを、春田は後から眺めて分解した卓上電話機をいぢつてゐた。

『どうしようと、かうしようと、君の關係したことぢやないぢやないか。必要があるから取り換へに來たんだ。此券引かへに銀貨……これは銀貨となつてゐるが。』と言ひ〳〵、書生體の男は、蟇口に唯一枚殘つてゐるらしい一圓紙幣を取り出して、皺を伸ばしつゝ、小さく細く印刷された文字を讀んで、『そつちの五圓紙幣には確かに、金貨五圓相渡可申候としてあるぢやないか。引換への理由を示せとも何んとも書いてないぢやないか。』と稍言葉をおとなしくしながらも、鋭い眼は屹と窓口から奥を覗き込んでゐた。若い書記は、さも〳〵汚ないものでも摘まむやうにして、書生體の男の投げ込んだ二枚の五圓紙幣を窓の外に出した。

『これが金貨か。』

書生體の男は、チロリと其の五圓紙幣を見やつて、洋杖でも持つてゐたら、金網の中を擲り付け兼ねない様子をした。守衛長の目くばせで、守衛が二人、左右から書生體の男を圍むやうにして立つた。白服帶劍の人も國庫分室の前の方から、コツ〳〵と靴音を立てゝ、さながら軍艦が海上を遊弋するといふ工合ひに、書生體の男を警戒しつゝ、右から左に、左から右に、同じところを往きつ戻りつした。

『取り換へてくれないのか君ツ。この紙幣の表に書いてある、金貨五圓相渡可申候、といふ字は嘘か、詐僞か。』と、書生體の男は血涙の浸染むやうな高聲を出して、窓口に襲ひかゝる勢ひを見せた。何事が起つたのかと、來合せてゐる客はもとより、遠く離れた國債係りの書記までが、物に驚いた鷄のやうに伸べ首をして、今にもコカツコツコと叫びさうであつた。局長だけは流石に、何處吹く風かといふ様子をして、ゆつたりと椅子に凭れてゐた。

『是非金貨が必要だといふ理由が分りますれば、お取り換へしますが、さうでないとどうも困ります。』と、若い書記は相變らず微笑をもつて、書生體の男に對してゐるやうであつた。

『それぢやこの、此券引換に金貨五圓相渡可申候、といふ字を消してしまひたまへ、それでないと、僕は金貨と引き換へてくれるまで此處を動かない。さア早く其の、金貨五圓相渡可申候、といふ字を消してくれたまへ。』と、書生體の男はいツかな動きさうもなかつた。

『そんな亂暴なことを言つたつて、あなた仕様がありません。』と、若い書記はまた冷笑を背中にまで浸染み出させてゐた。

『何が亂暴だね、君の方が餘つぽど亂暴ぢやないか。取り換へてやると書いてあるから取り換へに來たんだ。取り換へ

てくれないんなら取り換へるといふ字を消してくれ……と。かう言ふんだ。これほど當然の話はないぢやないか。取り換へてもくれないし、取り換へるといふ字も消さないんだから、君の方が亂暴ぢやないか。』

『理窟を言つたつて困ります。お取り換へをしないといふんぢやありません。……お取り換へをなさる必要はないぢやありませんか。五圓はちやんと五圓で通用するんですから。』

『必要の有無を君に訊かれる必要はないんだ。……どうしても取り換へてくれないなら仕方がない。』と言ふなり、書生體の男は、いきなり窓口にあつた二枚の五圓紙幣を引ツ攫んだが、稍躊躇した末に、狼狽と決心とを額の筋に稻妻の如く、ちらりと見せて、二枚の五圓紙幣をビリ／＼引き裂くと、紙礫のやうに丸めて、窓の中へ打ち付けた。

『何を亂暴するか。』

じり／＼する風で見兼ねてゐた白服帶劍の人は、得たりとばかり躍りかゝつて、書生體の男の腕を捉へた。守衛長も守衛も折其處に集つて、書生體の男を暴漢扱にしてしまつた。

應接してゐた若い書記の此方を振り向いた白い顏には、背中まで浸染み出したやうに見えてゐた冷笑とゝもに、勝利を誇るらしい色がいツぱい浮んだ。彼れは床の上に落ちた五圓紙幣二枚の紙礫を拾ひ取つて、窓口から外へ、白服帶劍の人に腕を抑へられてゐる書生體の男を目がけて投げ返した。

疾くに卓上電話の修繕を終つて、ぼんやりと先刻からの光景を見てゐた森田は、もうこれから先きを見るに忍びないといふ氣がした。

強者が勝つて弱者が負ける。……それは當然過ぎるほど當然なことだ。一本調子の道理は、曲折した道理に敵はない。——

『馬鹿な奴だ。』

冷笑を浮べた白面の書記の口からは、この一言が出た。今まで書生體の男の下らない言分に窓口を妨げられてゐた多くの客も、白面の書記に和して、『馬鹿な奴だ』と口の裡で言ひつゝ、白服帶劍の人と守衛とに拉られて表の八角へ出されようとする書生體の男を見送つてゐた。

『何をするんだ。……暴力を用ゐるのか。……僕は何も惡いことをしやせんぞ。……』と、喘きながら叫んで、書生體の男は、まるで刑場にでも連れ込まれる風にして、飛白に小倉袴の姿を八角に消した。

春田は言ひ知れぬ寂しい心持ちになつて、自分の地下室へ歸らうとしながら、古紙幣を扱ふ窓口の側を通ると、今書生體の男が金貨に取り換へようとして持つて來たやうな汚ない紙幣が、山と積まれて、エレヴエーターに載せられるところであつた。

五

また無性に怖い目つきをされるのも嫌やであつたから、春田は行くともなしに小使室の方へぶら／＼と行つてみた。其の横にある病室に引き付けられて、アイダやラダメスの様子を覗いて見ようと思ふ氣がないでもなかつた。

小使室は、珍らしく無人であつた。唯一人の小使が向ふむきに、腰掛けから、粗末な大卓子の上へ汚ない身體をのしかけるやうにして、何かやつてゐる其の胡麻鹽頭が、ゼンマイ仕掛けか何かのやうに、コックリ／＼と動いてゐた。居睡りをしてゐるのでもないらしいしと、春田は物好きにコンクリートの床の上へ足を踏み込んで、茶色の絲で銀行のマークを縫ひ付けた印し袢纏の背後から覗からとする途端、老いた小使の手元でチーンと鳴つた金の音が、如何にもよく冴

えて、耳の奥にまで細い針を突つ込まれたやうに響いた。

それは黄金の音であつた。人の來た氣色をば、胡麻鹽の髮の毛へ電氣の如くに感じたらしい老小使は、驚いて振り向くなり、印し袢纏の胸のところで、粗末な卓子の上を掩い隱さうとした。しかし森田の眼は、其處に眩しく並んだ大小十數個の金貨を見遁さなかつた。それは今出納局の窓口で、書生體の男が唯一枚を得ようとして、喧嘩までしても、手にすることの出來なかつた貴いものであつた。

汚ない粗末な卓子の上に、昔しなら山吹色と言はるゝものが、『いつ見てもわるくねえな』舞臺の上の惡黨の臺詞を想ひ出させるやうにして。紺の褪めた印し袢纏の端から、燦とした光輝を放つてゐるのに眼をそむけつゝ、何にも知らぬ森田は、惡いところへ足を蹈み入れたと思ひながら、氣の毒さうにして、小使室を出ようとすると、折柄歸つて來た稍若い小使は、につこりして、老いた小使の方に、三角の眼を向けつゝ、

『父つあん、また小判の勘定か。あんまり大事にしてると、木の葉になつちまふぜ。』と、老いた小使の肩越しに汚ない大卓子を覗き込んだ。さうして吸ひさしのバットを、火の乏しい大圍爐裡へ投げ込んだ。吸ひ口の蠟の焦げる烟とゝもに、老小使は漸くむつくりと頭をあげて、子供が親の前でめんこでも隱してゐるやうに、茶色の絲で銀行の名を縫ひ出した印し袢纏の胸の下に掩ふてゐた金貨をば、勿體なさうに一つ／＼腹掛けのドンブリへ入れた。入口に立つた森田はそれを遠くから數へてゐたが、丁度十圓金貨が十枚と、二十圓金貨が五枚とあつた。生れて初めてこれだけの正貨を見た森田は、それが見る影もない老小使の懷中に納められるのに、いよ／＼奇異の思ひをしないわけに行かなかつた。

『勝爺さんも、郷里へ歸つたら、金貨大盡だね。村長だらうが、地主だらうが、それだけの金貨を持つてるものはあるめえ。いゝ土産だ。この銀行に勤めてたから、それだけの金貨も手に入つたんだ。表から行つてみねえ、一枚だつて

なか〱取り換へてくれッこなしだ。』

いつの間にか、且の席に戻つてゐた小使の監督は、自分の恩を着せるやうにさう言つた。森田は初めてこの老小使が五十五歳の退職年限に達して、三百圓の下賞金の中を二百圓だけ正貨にして貰つたのだといふ仔細を知つた。さうして、其の幾十年間の血・膏とから成り立つたやうな老小使の勞力・黄色い結晶をば、何か不正品でもあるかのやうに一度は疑つた自分の心が恥かしかつた。

『父つあん、もう一度勘定してみな。今度は一つぐれえ殖えてるかも知れねえぜ。』と、若い小使は調弄ふやうに言つた。

『廢しねえ、廢しねえ。』と、小使の監督はそれを止めた。追々に出先きから引きあげて來て、室内には茶色の絲で胸に銀行の名を現はした連中が、十四五人もたまつた。大小十五個の金貨を腹掛けのドンブリに納めた老小使のちゝむさい髯ツ面には、たまらないやうな嬉しさが漲つてゐた。

六

其の時、齋服に冠の人が、狩衣に風折烏帽子の人を二人連れて、白い姿の三人が、笏を正しつゝ、沓音を鳴らして、小使室の前から運轉手室の角を、そろり〱と練つて曲つた。場所柄が場所柄だけに、其の光景は、兎ても四邊との調和が取れなかつた。

『神主だ、神主だ。』

『何んしに來やがつたんだらう。』

小使等は、白い姿の三人が行き過ぎた後を、ぼんやりと、夢のやうに見送りつゝ、こんなことを言つてゐた。まことに夢のやうな景色であると、春田は思つた。石と鐵とに壓し付けられた人間が、石炭と電氣とに捏ねかへされつゝ、近世式に火花を散らして働いてゐる眞ん中へ、太古の世界を想はせるやうな、衣冠の人と、狩衣に烏帽子の人とが、木製の塗り沓を、カラリカラリと悠長に鳴らして、石階の笏を持つて入り込んで來るアナクロニズムの後から、春田の足に好奇心に引き摺られて跟いて行つた。

淺沓の音は、カラリカラリと、昔し大極殿の甃を鳴らしたやうに、コンクリートの床上を引き摺つて、新館の普請場の地下室になるところへと下りて行つた。

『源公も死に花が咲いたよ。神主が三人も來て、祀りをしてくれるんぢやね。……あいつは神道かい。』

『馬鹿言へ、神道てた贅澤な宗旨に、貧乏人が入れるかい。神道だと、法事に生魚が要るぞ。』

『源公の宗旨は禪宗だとよ。』

『さうか、でも神主が來たぢやねえか。』

『はゝゝア。あれはお門違ひだ。……源公の死んだ跡を淨めるんだとよ。三人がゝりで。穢れを祓ふんだとよ。』

『はゝん。源公のともらひにしちや、立派過ぎると思つた。』

『馬鹿言へ、ともらひを此處から出すかい。ともらひは貧乏長屋から出らい。途中葬列を廢し、ッてやつでな。長崎諏吉俵柄氣のところ……ぢやねえ、……足場から落つこちて死亡致し候に付此段生前の辱知諸君に謹告仕候……か、友人總代中央銀行建築現場某吉……か。はゝゝゝゝ。』

『ふざけてやがるな。仲間が一人變死したのに。……陽氣なもんだ。』

『それはさうと、死骸はどうしたかな、まだ持つて行かねえんか。』

『まだ彼處に轉がしてあるよ、眞晝間に銀行の門から早や桶を擔ぎ出されちや困るツて、言やがるんださうだ。だからかみさんが夕方まであゝやつて死骸の番をして、日が暮れてから家へ持つて歸るツて話だよ。』

『なアに、それや嘘だ。もう直ぐ死骸を持つて歸るだらう。あんなとこへいつまでも置いてかれちや、困つちまうからな。』

『源公のかみさん泣いてたかね。』

『泣かないでどうする。今朝辨當を持つて、機嫌よく家を出たのに、もう見るも無慙な死骸になつてるんだもの。こんなことなら、辨當のお菜にもつと可味えものを入れとけや好かつた。梅干に澤庵ぢや、あんまりひどかつたつて、泣きくづれてたぜ。』

『またこいつがいゝ加減なことをほざきやがつて、打つぞ。』

『人事ぢやねえや。ほんとに、こちとらだツて、また何ん日源公の後を追はないとも限らねえからなア、足場仕事は全く險のんで、命がけだよ。何んでも蹈み外したと思つた時、あツしまつたと氣を拔いちやいけねえんだ。何糞ツと一つ元氣を出せば、足場なら屹と何處かへ手が引ツかゝるさうだよ。この前の留公のやうに、鐵骨の上から落ちたんぢや仕樣がねえけど。』

『鐵骨は滑るからな。』

『滑ると思つて用心するから、却つて大丈夫なんだよ。』

『世の中はさうしたもんだ。』

『尤も鍛冶屋で無えから、こちとらは滅多に鐵骨に用は無えが。』

『おい源公は辨當を食はずに死んだかなア。』

『飯だよう。……と誰れかゞ下から呼んだ時、ひよいと見おろしやがつた機みに、滑りやがつたんだとよ。』

『さうか、そいつは可哀さうだな。……呼んだ奴は誰れだ。』

『そんなことを言ふなよ、別に惡氣で呼んだんぢやねえや。』

『手前だな莊公、呼んだのは。……だうれで、先刻から悄氣てると思つたよ。』

『悄氣てる理由は別にある。』

『高慢なことを言ふなよ。』

『源公のかみさんの連れて來た子ね、六歳か七歳ぐれえの、源公によく似てる、……あの子がお前、源公の死骸の側で可味さうに、源公の辨當を食つてるぢやねえか。俺アほんとに胸がいツぺえになつたぜ。』

『其の時に見たんだな、源公の辨當のお菜を。……親の片身の辨當だな。貧乏だから、片身と言や辨當ぐれえなもんだらう。』

源公の變死によつて、思ひ設けぬ休憩の時間を得た人夫どもは、いろ〳〵なことを言つて、口々に安煙草の烟りを立てゝゐたが話のうちに子役が出て來ると、いづれも鼻を詰まらして、憐れな源公の遺兒の身の上を考へるらしかつた。

春田も身につまされて、哀はれを催すとゝもに、父を喪つた子と、愛人を先き立たせた自分とを引きくらべつつ、人夫どもの雜談の渦から遁れて、新館の普請場の方へ行つて見た。

堅く冷たいコンクリートの上に横たはつた源公の死骸には、ズック製の大きな袋のやうなものが被せてあつて、其の

側に成るほどもう臨月に間近いらしい腹をしたおかみさんが、背中に一人負つたまゝ、眼を泣き腫らして蹲踞んでゐた。

男の子は父の死骸の傍でブリキ製の玩具の電車を走らして、滑りのよいコンクリートの上に、電車の車輪のよく廻はるのを喜んでゐた。

玩具の電車は、源公の死體の廻はりを、屢々一週した。

七

大麻の行事が濟んだのか、三人の神主が、またカラリ〱と淺沓の音を立てつゝ引き揚げて行くのを見送りながら、人夫どもは、

『暢氣さうな面してやがるぢやねえか。米の價を知らねえといふ面がまへだな。』

『さうでもねえだらう。お公卿さまの化物みてえな、眞ツ白な装束着けてやがるが、腹の中ちや、利息の踊りでも考へてやがるか知れねえぜ。』なぞと、毒のない悪口を、冠や烏帽子の後から、聞えるのも構はないで、大聲に浴せかけてゐた。

『もう濟んだのか、お秡ひは。……早いな。』と、大工部屋から出て來た若い大工は、春田に訊いた。

『まだゝよ、今のは檢分といふところなんだ。これから源公の死骸を片付けてしまはなけれや、ほんとのお秡ひは出來ないんだとよ。』と、心得顔をした小使が出て來て、横合ひから口を出した。

『もうこれで今日はどうせ休みだらう、有りがてえ。毎日一人づゝ死んでくれるといゝな。』と、人夫のうちの稍心利い

たらしい一人が其處へ來て、寂しさうな顏をしながら戲れた。

源公の死。——唯一人の貧しい人夫の死ではあるけれど、この大きな石の館に働いてゐる多くの人間の心を、さまざまに搖り動かしたのを疑ふことは出來なかつた。烟德利のやうな、一種變てこな恰好をした烟突から吐き出す紙幣を燒く煙も、今日のは何んだか勢ひがなくて、無常を觀じさせる種になつた。

春田はくるりと横へ廻はつて、工事中の新館の内部を覗いて見ると、地下室になるコンクリートの眞ん中に、新菰を敷き神籬を立てゝ、淸らかな祭場が設らはれてあつた。其處には花火屋と經師屋と、魚屋の親方とが三人、腕組みをして立つてゐた。

『どうだね花火屋さん、一つ二尺玉でもドンと揚げて、景氣を附けようぢやないか。何んだか銀行中が滅入り込んでるぜ。』と、大きな聲で言つたのは、魚屋の親方であつた。

『あはゝゝゝ。二尺玉は△△殿下の歡迎だ。此處ぢや八分玉よ。珊瑚樹と間違へるやつさ。』と、花火屋はどういふわけか、春田の顏ばかり見つゝ言つた。紙幣を燒く時、電氣のコードの先きに小さな花火を附けて、それを竈の中に引ツ込み、外からスヰッチを切つて、花火に點火させるのが、紙幣に燃え付くといふ子供染みた仕掛けをば、春田はこの大銀行の重要な設備の一としては、少し貧弱過ぎると思つて、腹の中で笑つてゐたが、それも今工事中の紙幣を煮る鍋が出來上れば、あの煉瓦の臺の上に兩方の軸を載せて、くる〴〵と廻轉するらしい仕掛けの大きな鐵製の器が、古紙幣をぐつ〴〵と煮立てゝ、現在の竈も花火屋も用がなくなるであらう。花火屋がこの銀行に出入するのも今暫くだ。……と。そんなことを考へると、春田はまた何んだか滅入り込むやうな氣持ちになりかけた。

『火の點きがわるいと言つて、始終呼び付けられて叱られるんだからたまらないよ。』と、股引きに靴を穿いた甲斐〴〵

しい足元の花火屋は、花火のやうな勢ひのよい言葉で言つた。

『俺の方はまた、債券を入れる紙袋を拵へるんだが、此處の仕事は割りに合はないな。ほんの內職だよ。世の中が不景氣になつて、仕事が暇で困つてるところへ、此處からの話で、何んしろ名前がいゝから、こいつはうまいと思つて、入つてみると、案に相違だ。これで魚屋さんなんざ、いゝ方だらう。』と、經師屋は糊を溶くやうな口調で、ねち〳〵と喋舌りながら、魚屋の方へ水を向けた。

『駄目だよ、それやね、月々の勘定は八百兩ぐらゐあるが、イキのいゝ手の切れるやうな、紙幣で貰ふといふだけだよ。有りがたいのは。……其の勘定も先月なんか、百兩足りなくつて、彈丸が上つたり下がつたりよ。電話で聞くと、意地がわるいや。ちやんと分つてるのに、分らないから、來て見ろだツて、靑くなつてやつて來ると、ほらツて、百兩放り出すんだ、全體生意氣だよ、自宅ぢや目ざし一尾滿足に食へねえ安月給取りが、此處ぢや吸物に煮魚か、さし身ぐれえは、晝飯に附くんだが、……尤も上等のものは附けないが、……それでも安月給ぢや喰ひ切れないぐらゐのものは附く。それを一箸突ついたゞけで、こんなもの喰へるかツて、其のまゝ皿の中に、惜しいのを我慢して殘しとくんだから笑はせやがる。全く下らねえ見えツ坊が多いんだぜ、此處にや。』と、魚屋は心知よく滑る舌で、たんかを切つた。

『ほんとに、二尺玉でも一つ、ドーンと、大砲か爆裂彈のやうな音をさして、眠つてる奴や、氣取つてる奴や、欲張つてる奴の、膽ツ玉を宿がへさしてやりてえな。』と、花火屋も何か知ら、小癪に障つてたまらないといふ顔をした。

『芝浦で二尺玉揚げるのは、何處の花火屋だね。』と、經師屋はまたねち〳〵、糊を溶くやうな口調で言つた。

『あゝや長野縣ぢやさア、花火ぢや今は長野縣だからね。大きいのはまだ新潟縣に、三尺玉といふのがありますが。……あゝア、一つ三尺玉でも揚げて、驚かしてやりてえな』と花火屋は、むづ〳〵してゐるやうであつた。

『俺ア、今日はいゝ鯛を持つて來たぜ、神さまに供へるんだッていふから、本場のいゝのを持つて來たんだが、あんないゝ鯛がこの銀行の門を潜つたのは、今日が初めだらう。あれは誰れの口へ入るかなア。』と魚屋は氣がゝりになるらしく、首を傾けた。

横手の方がざわ〳〵するので、春田は三人の立ち話を棄てゝ置いて、そつちへ廻はつて見ると、早や桶に入つた人夫の死骸が、多くの朋輩には送られて、出て行くところであつた。大きな腹をしたおかみさんは、太い首を俛れて、早や桶に引き添ふてゐた。背中の子は眼をさまして、誰れが與へたのか、顔中を餡だらけにして、お團子をしやぶつてゐた。おかみさんに手を引かれた男の子の手には、矢張り玩具の電車があつた。

『ドーンと一つ、三尺玉でも破裂さしてやりてえな。』と、いつの間にか此處へやつて來てゐた花火屋は、本館の方を睨ながら言つた。

八

其の翌日は日曜日であつた。

春田は愛人濱江の死、人夫源公の死と、頻りに人間の『死』といふことばかりを考へて、づき〳〵と痛くなつた頭を抱へつゝ、目黒の森の中の濱江の父の家へ、夜が更けてから歸つて來て、日曜日の朝まで、殆んど一睡も出來なかつた。

日曜日でも、機關夫に早朝から出勤しなければならなかつた。一ケ月に二回だけ同僚の相木と代り合つて休めることになつてはゐるが、三階の根屋裏で、九十六本の電話線を握つてゐて、睡氣を起して死にはぐつた時、一週間ばかり休んだので、日曜を休みたいとは一寸言ひ出しにくかつた。それに今日は監督も來てゐないから、門衞の兒島爺さんの娘

との見合ひをスッポ抜かした咎めもあるまいと思つて、まだ少し頭の痛むのを忍びながら、定刻ぎり〳〵に銀行の門を入ると、いつも賑かな廣い館が、今日は深山の石室のやうに靜かで、全く人氣のない地下室には、瘴氣が籠つてゐるやうに見えた。

『お早やう。』

さう言つたのは釜焚きの男であつた。この男ばかりは、如何な日でも休むことが出來ないのであつた。祝日でも祭日でも元日でも、ボイラーの火を絕やすことの出來ない限り、この釜焚きの男ばかりは、必ず出てゐなければならないのであつた。

『總裁は十日が一と月休んでも構はないが、俺が半日休んだら、この銀行に蒸汽が通はなくなるんだからな。』と、この男は威張つてゐる。

『お早やう、トーマスさん。』と、春田は頭の痛いのも忘れて、輕い氣分になりながら言つた。或る時活動寫眞で見たトーマスといふ滑稽な人物が、この釜焚き男によく似てゐるのを思ひ出したからであつた。

『えゝツ、たうなすがどうしたんです。南瓜に油揚げも今日はないよ。日曜は料理場が休みだから。……』と、釜焚き男は笑ひながら言つて、さツさと行つてしまつた。

無人の寂しさに、春田はまた大工部屋の前を通つて、新館の普請場の方へ行つて見た。普請場は昨日の悲慘事の痕を殘りなく拭ひ去つて、人夫どもは皆勢ひよく働いてゐた。此處にも日曜日なんぞはないのであつた。

『おい、繁公、手前も五十兩になれよ、早く。……其の方がおツ母は喜ぶか知れねえぜ。』

『緣起でもないことを言ふなよ、これでも百兩ぐれえの値うちはあるつもりなんだが、源公め、五十兩の弔慰料ちや浮

ぱれめえ。』

こんなことを言ひ〳〵、二人の若い人夫は、猿のやうにすら〳〵と足場を登つて行つた。

春田はまた昨日墜死した人夫のことや、其の妻子のことを考へながら、死骸の横たへてあつた跡や、玩具の電車の走つてゐたところを見廻はした。

『おなじ高いところから墜ちるにしても、足場からぢや駄目だよ。墜ちるんなら飛行機だぜ、一萬兩ぐれえにはなるといふぜ。』

『幾らになつたつて、死んぢや詰まらない。俺ア何んだか源公が呼ぶやうな氣がして、今日は足が慄へらア。』

『氣の弱い奴だな。』

別の人夫がまた二人、こんなことを言ひながら行き過ぎた。

幾ら淨めても、秡つても掃いても拭いても、なほ此處には、『死』の影が可なり色濃く漂つてゐるやうであつた。

この日は銀行から出る晝飯がないので、普請場の人夫と同じやうに辨當を持つて來なければならないのをスッカリ忘れてゐた春田は、午後一時頃に、近くの大きな七階の白煉瓦のデパートメントストアに入つて、其の食堂で、好きな紅茶と菓子とを取つた。

女給仕の持つて來た彩色した木札を、喰べるものかと思つて、嚙んでみたのには、流石に自分の零落を恥ぢなければならなかつた。愛人濱江の世に在る頃は、一流のレストオランにも出入した身體でありながら。——

——長編『東京』第二部『勞働篇』の第七節及第八節——

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本鄉區本富士町	誠春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價 金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十年十一月三十日印刷納本
大正十年十二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區本鄉三丁目六番地　中央公論社
電話 小石川一四四　電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工

中央公論　十二月號

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

m. 6.